

変化の連鎖は、10年前のあの日から

七人の母

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧タイトル「ちょっとした、変化の連鎖」

原作開始前にライザがオリ主に惚れてたらどうなるかつていうところから始めてみたら色々原作ブレイクしました。そんな感じのお話。

・短編から連載へ変更しました。続きを読むあきまぐれで書いていきます。

・書き溜めは多分しません。思いついたら書いて、書いたら投稿する感じです。

・後書きのQ&Aは、投稿後に追加される可能性があります。

目 次

原作開始前

アルムとライザ

アルムとレント

アルムとタオ

アルムと島の人達

原作開始

いつもの日常から、一步踏み出す

新たなる出会い、少女と戦士と鍊金術士

少年少女への承認、そして夢への次なる一步

若い男女が二人きりで外出、これ即ち

それぞれの形で、それぞれの進歩

少女は友を得て、そして勇気を得る

新たな仲間、新たな真実

場所も道具も、次のステージへ

笑顔は底抜けで良いが、床は勘弁

築き始める、信頼とアトリエ

完成したアトリエ、出現した悪魔

浮上する脅威、沈みゆく危惧

少女と少年の、大きな一步

炎が吹き上がる山、不穏に包まれる平原

轟く竜の咆哮、定まる対策の方針

大人達は危急を知り、少年少女は飛竜を目指す

目の当たりにする、少年少女の成長と鍊金術の産物、そして古城の

賢しき翼竜の戦、穿つ流星の一撃

休息をとる少年、続々と来るお見舞い

立ち行かなくなる漁師、香り立つ楓の森

大人達は事情を語り、子供達は偶然を演じる

疲れた少年、前向きな少女達、焦る少年

力を望んだ少年の、最も望まぬ結果

友を救うため、門の先へ

王国の罪と、それがもたらしたものは

心配されるのは、子供も大人も同じ

少年と少女の、それぞれの「想い」

鍊金術士の誓い、少年戦士の目標

推理と危機感の共有、そしてまさかの遭遇×2

彼らと遭遇した竜は、どうも碌な目に合わない

新たなる道具と友？を得て、夢と希望の聖塔へ

王国の絶望、覚悟、後悔、未練、そして最期の成果を知る

真実への扉が、遂に開く

やるべきことが解つたのなら、後は

理由は有る、決意もした、準備はこれから

お互いに準備完了、決戦の時は近い

決戦前日、思い思ひに過ごす戦士たち

戻りたい空を眼に、戻したい空を心に

侵略者に侵掠すること、爆炎の如し

常闇の崩御

短編とか番外編とか色々

オリキヤラ紹介

旅立ちよりも前の時期の、ちょっとしたお話
これと言つて取り留めのない、アトリエでの話

原作開始前

アルムとライザ

「さて、とりあえず親父に頼まれた分は終わつたな」

ある晴れた日の朝、クーケン島にある島外れの農場で俺、アルム・レウス・レーベンは農作物を収穫する親父の手伝いをしていた。俺達が担当する区画の規模は、少なくとも午前中に1人でやれなんて言い出したら周りから総スカンを食らうであろうくらいには大きい。

元々家族の手伝いは日頃の感謝もかねてするべきものだと考えているものもあるが、40も半ばを過ぎてそろそろ腰の調子が怪しくなつてきたらしい親父に、この規模の畑を1人で作業をさせる、というのはかなり不安だという事情もある。

「エル、そつちはどうだ?」

「こつちも終わったよー、アルム兄」

同じく収穫の手伝いをしていた妹、エルに声をかける。フルネームはエルマリア・レーベン。濃い目の水色のショートヘアに大きめのぱつちりとした眼、11歳という年齢相応の幼い顔立ちと小柄さをしている。ちょっとお転婆なところもあるが家族想いで要領が良い。家の手伝いもお使いから農作業まで自主的にやるので、周りの大人からも評判がいい。そのおかげでお使いでもちよつとだけ値段をまけて貰えたり、余つたお釣りをちゃんと母さんに確認を取つたうえで自分の小遣いにしていたりする。まあ、自慢の妹である。ちなみに近所に住んでいるシユタウトさん家のミオおばさん曰く「うちの娘にももつと見習つてほしい」だそうだ。

：俺の名前について「物語の重要な敵役にいそう」なんて言い出されたときは、流石にちよつとだけムツときたが。溜めた小遣いで最近嵌っている騎士道物語系の本を買い集めているせいか、そういう考えが偶に浮かんでくるらしい。因みにその時何か言い返そうと思つたが、妹は敵どころかヒロインのような名前な気がしたのでやめた。「そうか、なら…親父ー、そつちは大丈夫かー？」

「ああ、心配はいらん。終わってるぞ」

「なら良かつた。最近母さんが心配してたからな。腰を庇うような動きが多くなってきたつてな」

「気を付けてよお父さん。ぎっくり腰はシャレにならないつておじいちゃんたちみんな言つてたし」

「解つている。…いい腰巻とかあればいいんだが」

そしてこの全方位から腰の心配をされているのが俺達の親父、ウエイン・レーゼン。黒っぽい藍色のちょっとツンツン氣味な短髪、少し皴があるものの精悍な顔つきに、190cm以上の長身を持つ。普段は穏やかで、子供たちには優しいおじさんとして人気があるが、農業には一家言あり、弟子が結構いる。…そこは普通先生と生徒とかじやないのか?と思わなくもないが、指導するときは結構厳しかつたらしく、師匠と弟子、といった方が表現としてしつくりくる状態だつたそ
うだ。

因みに一番弟子とされているのがカールさん。ミオおばさんの旦那さんである。

「…よし、では帰るか」

「はーい」

「ああ。…ん?」

帰り際、ふと横を見てみると普段農場で見かけない人物がいた。さつき言つたカールさんと話している…ライザリン・シユタウト、愛称はライザ。白い帽子と黒いリボンを身に着けた、栗色の髪の少女。カールさんとミオおばさんの娘である。外の世界に大きな興味を持ち、面白いことを探して日々色々画策している、自称何の特徴も無い普通の女の子である。…エルはこの前、「あんなにばいーんとしてて特徴が無いとか…」と言つていたが、まあノーコメントで。

そもそも、個人的には見た目を抜きにしても特徴が無いとは言い難いと思つてゐる。この島であれば外に興味がある人間はほとんどいないし、屋根裏を部屋を改造して秘密基地なんて作るし、いきなり魔法を使いだし。魔法に関しては、なんとなく思い付きでやつた「炎出ろ」で本当に出した俺も人の事は言えないが。

…ついでに言うと、俺の初恋の相手もある。理由は…まあ、笑顔が眩しかった、とだけ。

しかし、農業に興味が無く、何かと理由を付けて逃げていたライザがなぜここにいるのか？疑問に思つた俺は話しかけてみることにした。

「おはようライザ。珍しいな、農場にいるなんて」

「え？ あ、アルム。おはよー」

「おはようアルム君。そつちはもう終わつたのかい？」

「ええ。…で、ライザが遂に農業にやる気を出したんですか？」

「…えーっと」

そう聞いたら、ライザは顔を少し赤くして目をそらした。…なにか恥ずかしい理由でもあるのか？だとしたら聞かない方が良かつただろうか。

「ああ、なんでもアルム君とエルちゃんが眞面目に手伝つているのを見て、自分もそうした方がいいんじゃないかと思つたそうだよ」

「お父さん！」

「嘘は言つてないだろう？」

「いや、うん、無いけど！」

…意外と普通の理由だった。まあ、確かに切つ掛けとなつた本人に聞かれるのは少し恥ずかしい理由だろ？が…今まであの手この手でサボつてきたあのライザが、それだけでいきなり農業の手伝いをしようなんて思うか？というのが正直な感想である。俺は勿論、エルも手伝い始めたのは去年のちょうど今頃だし、それを今まで知らなかつたということは無いだろう。何故、今更になつて？

まあ、そこを突つ込んで急にへそを曲げられても困るので、追及はしないが。

「きつかけが何であれ、ライザが農業を手伝つてくれるのは凄く嬉しいよ。そしてここからどんどん農業を興味を持ち、自分が畑の一部に感覚を好きになつてもらつて、この農地を継いでくれれば…」

「いや、そこまでは流石にちょっと…」

「…カールさんつて、農業のお話しするときなんか凄いよね」

「ああ…言いようのない圧が滲み出ているというか」

「…正直、ここまでになるとは思つていなかつた」

カールさんの農業キ：じやない、農業大好きつぶりは本当に凄まじい。元々好きではあつたらしいが、親父の指導を受けてから土の声がどうとか畠の表情がどうとか言い出すレベルでのめりこむようになつたそうだ。…どういう教え方をしたのか聞きたかつたが、ここまでになつているのがカールさんくらいの為、たぶんこの人にそういう素質があつただけなんだろう。いやどういう素質だ。

というか、ライザが農業から逃げてた理由、この農業トーキの圧力も何割かは占めていると思う。興味を持つてもらうなら初歩の初歩から一步ずつの方がいいのに、カールさんはいきなりこれぞ真髓！つてレベルの感覚の話をしてくるのである。いきなり言われても訳が解らないだろうし、押しが強すぎて色々引けてしまうだろう。勿論、ライザ自身の性格とか感覚とか、そつちの割合の方が大きいだろうが。

「つと、これ以上仕事の邪魔するのも悪いですし、俺たちはこれで」

「うん。これからライザと仲良くしてくれると嬉しいよ」

「お父さん！…あーもう、またねアルム！エルちゃん！」

「うん！お昼過ぎたら一緒に遊ぼーね！」

「言われるまでもないだろうが、しつかりやれよ。カール」

そうして、ライザたちと別れ家に戻つた。さて、昼からは何をするか。エルはライザと遊ぶつもりみたいだし…レントの奴の特訓にでも付き合うか？それともタオの本を読み解くための資料探し？いや、島の周りを改めて探索してみるのもいいだろうか。もしかしたら新たな発見とか変化があるかもしれないしな。

こういう島だからこそ、変化に出会うのが面白い。自分から見つけるのはなお面白い。それでも満足できなくなつたら…島の外にでも、出てみようか。

「…ふー」

アルムたちと別れたあたしは、心を落ち着かせるように息を吐いた。：正直、周りからはバレバレな態度じやなかつたかな。もしそうだつたらすぐ恥ずかしい。特にアルムには今知られたくない。まだあたし覚悟できてない。

「どうしたんだい？既にかなり疲れてるみたいだけど」

「何割かはお父さんのせいだよ…いきなりバラさなくたつていいじやん」

「ん、肝心なところは伏せたつもりだつたけど…」

「そりだけどさー…」

肝心などころ、つていうのは…まあ、なんというか、うん。気が付いたら特定の異性…私の場合、男の子のことを考えるようになつてたり、声が聞こえたり顔が見れるだけで嬉しくなつたり、でも覚悟ができるまでは知られたくないつてなるアレのこと。…要するに、恋である。

あたしは、あのアルムレウス・レーゼンという男の子に恋をしている。年はあたしの1つ上。後ろで束ねた藍色の長髪、レントのお父さんのザムエルさんと同じくらいの身長に、細く見えるけど結構鍛えらてる体。顔は：男前つて言えばいいかな。鼻は少し高めで、眉毛は濃い目で目つきもちよつと鋭い。普段は落ち着いていて家族想いで、だけど時々あたしたちの想像を遥かに超えることをしてくる、彼に。

切つ掛けは10年近く前、私がレントとタオ、そして島の水源を押さえてるブルネン家の息子、ボオスの4人で水没区画を探検していた時に、あたしが足を滑らせて湖に落ちてしまつた時の事だ。あたしは辛うじてレントに引っ掛かり、そのままレントがあたしを、タオがレントを引っ張つて流されないように3人で踏ん張つていたんだけど、そこに偶々近くにいて、あたしが落ちる音を聞いたアルムが駆け付けた。アルムは自分が流れに飲まれないギリギリまで湖に近づいて、あたしの体を持ち上げるように引っ張り上げて助けてくれた。
…これだけなら、まだ惚れるところまではいかなかつたと思う。助

けてくれたつていうなら、レントとタオもいたし。肝心なのはここからだ。何とか救出されたあたしは、湖に落ちて体が冷えたことと、溺れそうになつた恐怖で頭の中がぐちゃぐちゃになつてた。多分、顔にもすごく出てたと思う。そんなあたしを、アルムは、ぎゅっと抱きしめた。そして、優しい声で言つてくれた。

『だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだよ』

その言葉にあたしは安心しきつて、緊張の糸が切れて、わんわん泣いた。怖かった、死んじやうかと思つたつて、全部吐き出した。その間も、アルムは私を抱きしめながら、優しく背中をトントン、と叩き続けてくれた。その時は、自覚は無かつたけど。そこから、あの優しさと温かさから。あたしの恋は始まつた。

：因みにこの後、アガーテ姉さんを呼んできてくれてたボオスに、逃げたと勘違いしてひどい言葉を投げかけそうになつちやつたけど、アルムが『ボオス？ アガーテさんをよんできてくれてたの？ ありがとう』って言つて落ち着かせてくれたのでボオスにも素直にありがとうございましたと言つた。多分アルムがいなかつたら、あそこで「なんで逃げたの」とか言つて、私たちの関係は凄く拗れてたと思う。そういう意味でも、助けて貰つた。

そして、なんでその恋心が農業を手伝う理由になるのかというと…アルムとエルちゃんは、農業の手伝いをやるべきこととして捉える。で、あたしはそれを一切やつてない。…つまり、あの2人からすると、あたしはやるべきこともせず好き勝手やつてるだけの女の子に見えてしまうんじゃないかなっていう危機感からだ。…見えてしまつていうか、実際そなんだけど。

そしてあたしは思つた。そんなことで嫌われる可能性があるなら、大人しく農業手伝つた方がいい、と。…まあ、あの2人がそれであたしを嫌うことは無いと思うけど、いきなり不安になつちやつたんだから仕方ない。絶対ヤダ。もし嫌われたら最悪引きこもるかもしけない。それくらいショック受ける、確実に。

：因みにこの理由、いきなり手伝う気になつたことをお母さんに不審がられたのでアルムに惚れてるところから全部話した。感想は「前々から思つてたけど、やっぱリアンタにはあの子しかいないみたいだね」だった。…うう、お母さんにもバレてた。

「それじゃ、そろそろ始めようか」

「うん。…て、あ。鎌つてここにあるつけ？」

「あるよ。予備はやりすぎなくらい用意しておけ、つていつもウエイ

ンさんに言われているしね」

「…そうかもだけど、流石にそれは多すぎない？」

その心構え自体は農業以外にも役立ちそうだけど：一家で20本はいらないでしょ。やっぱりこう、農業の事になるとなんかタガが外れるなあ。

そこまでになるつてことは、やり続けると意外と楽しくなるのかな。アルムは「つまらないとは言わないが、カールさんは流石に何かが違う」なんて言つてたから、結局お父さんがちょっと特殊だつてことで終わりそうだけど。

まあ、そんなわけで心機一転、家の手伝いもそこそこ頑張つてみることにしたわけだけど…

「さーて、じゃあ今までサボつてた分張り切つていきますか！」

「そこまでやる気になつてくれているなら、フルーツの品質の見極め方も教えようかな。今日は午後から遊ぶ約束をしたみたいだし、明日からになるけど」

「…うえ、そういうのはちょっと自信ないなあ」

つていうか流石に教えるにはまだ早くないかな、それ？あたしがやる気出したの、昨日の今日なんだけど。まあ何かの役に立ちそうだし、ちゃんと聞いておこう。

：後々、具体的には来年の夏ごろから、むしろ私の人生に一番重要なスキルになるなんて、この時の私には想像なんて欠片もつかなかつたけど。

まあそんな感じで、変わり映えのしない島の日常で、ちょっとだけあたしが変わった。そんなお話だ。

：いつか、アルムとの関係も変えられるといいなあ。もっと良くて、深い関係に。

アルムとレント

「…」

砂浜の上で、俺は一人の男と対峙している。レント・マルスリンク。オレンジ色の短髪と精悍な顔立ちを持つ、がつしりとした体つきの少年。俺の親友の一人だ。

レントは両手剣を正眼に構えている。俺は防刃仕様のブーツを履いた脚を開き、前に出している左脚に力を込める。決闘…とかではなく、俺が気が向いたときによつてる実戦形式の手合わせだ。普段はレントが素振りだけやつていて。

…立会人はエルだ。物語の決闘の場面が好きとかで、どのポジションでもいいから真似事をしたくなつたらしい。

「それでは…始め！」

エルのその言葉と同時に、俺とレントは前に駆け出した。まずはレントが体の捻りと梃子を利用したコンパクトな一文字斬りを放ち、俺がそれをしゃがんで回避。レントはすかさず左袈裟斬りを繰り出すも、それを跳んで躱しながら額に右膝を叩き込もうとする。しかし咄嗟の反応か読まれていたのか、頭を右に傾けるだけで躱された。そこから俺の脚を掴もうと腕を伸ばしてきたので、肩を足場にし蹴り気味に跳躍。レントの間合いのギリギリ1歩外に着地し、すかさず飛び蹴りで距離を詰めつつ攻撃。レントはギリギリで振り向くのが間に合ない、腕でガードしながら剣を構え、真っ向斬りを放つ。

「もらつたあ！」

「ツ！」

俺はすぐさま着地し、右側に軽く跳んで回避。そしてその勢いのままに…：

「シャラアツ！」

「がつ…！」

右足を軸にした回し蹴りを、背中に叩き込んだ。完璧と言つていいくほどのクリーンヒットだった。そのまま体制を崩し、膝をつくレン

ト。そして、そのまま、お手上げと言わんばかりに両手をあげ……

「…参った」

「勝者、アルム兄！」

降参を宣言した。最後のは少しヒヤッとしたが…上手くいったな。

「なんていうか…2人ともよくわかんない動きしてた」

「お互い手の内が大体解ってるからな。初見の相手にあんなことはできないよ」

「しつかし、お前どうやつたらあんなに砂の上で動けるんだよ。特別な訓練でも受けてるとか言わねーよな？」

「小さいころから探検も兼ねて砂浜を結構走り回つたりしてたからな。慣れてる」

「いやでも最後の回し蹴りとかなんだよあれ。普通転ぶか威力出ないかのどつちかだろ。正直吐くかと思つたぞ？」

「流石にあれはちょっとした賭けだつたな。失敗したら負けだつたよ。威力に関してはすまん、手加減できなかつた」

手合わせが終わつてお互いに感想を言い合う俺とレント。ただぶつかり合うだけじゃなく、その後にこうやつてお互いの意見を出し合う方が上達も早くなるからだ。

「…つちとしては、あの時突きが飛んできてたら崩されて、そのまま押し切られてたかもな。多分賭けに出ることすらできなかつた」

「…あー、言われてみりやそつちの方が速く撃てたな。くつそ、いざつて時どうしても力技に頼つちまうな。これじや魔力有りのお前と戦うなんてまだまだ遠いぜ」

「…正直、そつちは手合わせではやりたくないんだがな」「何でだ？」

「例えば最後の回し蹴り。あれに俺が魔力を込めてた場合…多分背骨が折れて脊髄が焼ける」

「いや怖えな!?その辺セーブするとかできねえのかよ!」
「蹴りの威力は兎も角、魔力はまだよつとな。少なくとも人間相手には駄目だ」

俺が扱えるのは炎と風の魔法。10歳の頃に炎を出してから全属性試してみたら風も出たが、体に纏わせることはできたが飛ばすのは何を試しても無理だつた。なので、この2属性を脚に纏い動きを加速させつつ強化した蹴りと炎を同時に叩き込むのが俺の本気の戦い方だ。とはいっても、威力に關してはまだその辺に鎮座してた岩にしか試したことない。一撃で碎け散つたが。

因みに風が出せるようになつたことをライザに教えたときは凄く目をキラキラさせてた。こつちとしては飛ばせるお前やタオの方が羨ましいんだがな…

「ところで気になつたんだけどさアルム兄」

「何だ？」

「掛け声、ちょっと乱暴な感じだつたね。しゃらーつて

「…あー。なんか、テンション上がつてしまつてな」

「お前、普段が普段だからギャップすぎえんだよな。前はタオに立ち会い頼んだんだが、メチャクチャビックリしてたぞ」

「うん、わたしもびっくりした。アルム兄にこういうどこあるんだつて」

普段は落ち着いてるとかよく言われる俺だが、こうしてレントとの立ち合いをすると急に気が昂つて、ちょっと乱暴というか好戦的になつてしまつ。俺をよく知つてゐる人たちがこれを見た時はみんな驚いてたな。…ライザは考えるような仕草をして何か呟いてたが。何を言つてたんだろうか。

「ま、とりあえず改善点も色々見つかつたし、ちょっと休んでから特訓の続きだな。付き合つてくれてありがとよ、二人とも」

「ああ。次も勝たせてもらうぞ」

「それとザムエルさんをやつつけられるように頑張れー！」

「おう！あの糞親父もいつかノしてやる！」

そんな感じで今日の特訓は終わり。まだ家に帰るには早いし、手合わせの振り返りを改めてしつつ、雑貨屋で面白そうな本が無いか見てみるか。

…しかし、エルにすらそういう人だつて見られてるのか、ザムエル

さん。否定できる要素が無いが。

「さて、と…」

近くの岩場に腰を下ろしながら、まずはさつきの手合わせの反省を改めてすることにした。つつても、やつぱりあいつが言つてた通り最後の一撃くらいしか：いや、そもそもあいつも熱くなつて真っ向勝負仕掛けに来たからああなつただけで、あそこで飛び蹴りで脚狙われてたらこつちが崩されて反撃もできず負けてたんじやねえの俺？

そう考えるとあいつも意外と隙があつたりするんだよな。逆に言えば、純粹な力ではまだ差が大きいってことなんだろうが。

「まだ遠いな。あいつも、親父も」

冒険者としてあの山の彼方の塔を攻略して、島の連中に目にもの見せるつていうのが俺の目標だ。その為には、アルムにも親父にも勝てるくらいの力を付けないとけねえ。特に親父は、昔は傭兵として旅してたらしいが今じや飲んだくれの家庭内暴力ヤロウだ。：最近なんか、ちょっと焦り出してるような感じがするが。まあ知つたことじやねえな。

アルムの奴は、あいつも普段何かしら鍛えてるんだろうし、近いうちに間違いなく落ちぶれて鍛え直してもねえ親父より高い壁になる。あいつに勝てるようになるには…まあ、結局のところいつも以上に特訓するしかねえか。

「つし、やるか」

まだちよつと背中が痛むが…これはこれで、体に無理をさせない動きの特訓になる。力は大事だが、それだけであの塔に行けるとは思つてねえ。技も鍛えなきやな。

で、日が暮れてきたからそろそろ切り上げて家に帰ろうとしてたら

…その途中でライザとボオスに会つた。その先には人だかりがある。…まさか、また親父か？

「ライザ、ボオス。なんだこれ？」

「あ、レント！」

「レントか。大体予想はついてるだろう？ザムエルだ」「やつぱりか：また何かやらかしたのか？」

「あー、えつと」

「いや。今回は自業自得ではあるが、やられている方だ。…アルムに」「アルム？あいつが自分から騒ぎを？考えにくしな…」

「アルムって、臭いだけで酔つちゃうくらいお酒に弱いよね？」

「おう」

「で、酔つぱらつちやうと…いつも落ち着いた感じが無くなつて、ちよつと口調が乱暴になるよね？」

「…おう」

「…すつごい家族大好きで、ザムエルさんに良くない感情持つてるのは知つてるよね？」

「…」

なんだ、この物凄い嫌な予感は。あいつ今何してるんだ…？

「…いつも見たいにお酒売れつて怒鳴つてたザムエルさんに、「昼間っからダラダラ酒飲んでんじゃねえよ。子供が見てんだろうがオイコラ」みたいなこといつて、その…そのまま説教してん」「説教！？」

うつかりノしちまつたとかじやなくてか？予想外にもほどがあるだろ！っていうか酔つたアイツやつぱ口悪いな！」

「ザムエルさんも最初は、怒鳴り返してたんだけど…」

「その生活態度のせいで妻に逃げられたことを指摘されたあたりから完全に冷静さを無くし、アルムが主導権を握り出したな。更に「レントがアンタのところから巣立つた後、ここに戻ると考える可能性は低い。そうなつたら本当に1人ぼっちだぞ」と追撃したら狼狽して後ずさつた」

「…やっぱ気にしてたんじやねえか」

つたく、だつたら母ちゃんにはちよつとくらい優しくしきときや良かったんだ。そしたら出て行かれることも無かつただろうによ。

まあ、今更それを知つたところで俺も目的を変える気はねえけど

な。せめて、巣立つ俺の背中を見届けるくらいはしてくれよ？

「まあ、近くには護り手達もいるし、暴れ出しても大事には至らないだろうが…この事態を速く収める為に手を—」

「つрендト！おい、お前のダチだらうがこいつは！なんとかしろ！」

貸してくれ。そう言おうとしたであろうタイミングで親父が俺に気づいた。だが、俺の返答は一つだ。

「できるわけねえだろ！酔っぱらったそいつマジで性質悪いんだよ！」

俺が口で勝てるわけねえだろが！」

「つていうかそもそもレントはアンタみたいにとやかく言われるほど問題ある奴じやねえし、むしろ母親に会えないわ、日頃酒臭さと暴力に見舞われてるわで完全に被害者なんだよ。アンタのせいでは。解つてんのか？」

「ぐつ…！」

アルムがそう言つて親父が怯んだところに、エルが近づいて行つた。…エルが！？いや危ねえから離れる！アルムも流石に酔いが吹つ飛んだのか、慌ててエルを止めるようとするが…エルは左手を腰に当てザムエルさんをビシッと指差した。

「いつもレントさんをいじめてるのに、自分がピンチになつたら辛いことを押し付けようと/orするの…」

「な、何を…」

「みつともない!!」

「!!」

その一言に…親父はもう、何も言えなくなつっていた。流石に、あんな小さな子供に怒られるのは堪えたみたいだな。

「…ある意味最強かもね、エルちゃん」

「アルムの影響か、妙に利口で度胸があるからな。…どうする、レント」

「…俺じやどうしようもねえよ、なんて言えばいいのか解らねえし」

「…あ、父さんと母さん」

カールさんとミオさん？2人も来てたのか。

「やあ、レント。いきなりだけど、ザムエルは私たちに任してくれない

か？」

「ようやくゆっくり話ができるようになったからね。…あの子には感謝しかないよ」

「…わかりました、お願ひします」

「2人に親父を任せて、俺達はアルムとエルのところに向かった。

「ようアルム、さつきぶりだな」

「レントか。ライザとボオスも…変なとこ見せちまつたな」

「あ、レントさん。ライザお姉ちゃん。ボオスさん」

口調からすると、まだアルムは酔いが抜けきってないみたいだな。少し顔も赤いし。

「すまんボオス。騒ぎになつちまつた」

「お前が酒に極端に弱いのは知っている、気にするな。むしろよく暴力沙汰にせず収められたと思うくらいだ」

「そうか。それと…悪いな、レント」

「何がだ？こつちとしてはようやく親父が大人しくなりそうな切っ掛けを作ってくれたんだ。むしろ感謝してるよ」

「そうじやなくてな…ザムエルさん」

「？」

「お前がやる前に、エルがやつつけちまつた」

「すまん、わたしがやつた。むん」

アルムの物言いと、胸を張つてどや顔をするエルに、その場にいた全員が噴出した。俺やライザは勿論、ボオスすらだ。反則だろそれは！？

「つはははははは！…そうだな、言われてみりやそうだ！親父はエルに負けたんだよな！…ははははは！」

「正確には止めだけだが…くつ。エルにしか、刺せなかつただろう、止め、だな、くくつ」

「あははははは！…もう、ホントにエルちゃん最強だよ！」

「むんつ」

「あははははは！…それダメ！…可愛くて面白くてダメ！…あははははは！」

！」

「今後エルの持ちネタになるな、これ」

「流石にそれは親父が不憫になるからやめてやれ！はははは！」

「つーか持ちネタってなんだ何を目指してんだ！気になつてもつと笑えてくるんだが!?ライザとかもうツボに入ってるぞ!?

「さて、と。後はカールさん達が上手くやってくれれば万事収まるか」「おじさんたちなら大丈夫だと思うよ？ザムエルさんの事一番気にしてたもん」

「そうだな。あの人たちなら心配いらないか…で、いつまで笑つてんだみんな？特にライザ」

マイペースだなお前ら!?この大惨事も収めてけよ！

「いや、だつて、なんか、ツボに、入つて、ちょっと、腹筋が」

「アルム兄」

「何だ？」

「なんかライザお姉ちゃんが辛そうだからぎゅつしてあげて?」

「えつ」

唐突にエルから飛び出す爆弾発言。いや、別の意味で収まんなくなるぞこれ？

「…人前でんなことできるか」

「むーん、そつかあ：いい方法だと思つたんだけどなー」

「え、えーっとエルちゃん？なんていきなりそんなこと？」

「ひみつ」

そりやバレてるからだろ、お前がアルムに惚れてんの。…つーからイザの知り合いはアルム以外、親父すら気づいてるし、なんならアルムも薄々感じてんじやねえの？

「だ、大丈夫だから！もう落ち着いたから！ね!..」

「そつかー」

「うん、そうなの！」

「…」

「えつと…」

「む」

「はいストップ」

アレ絶対また笑わそうとしてたよな…色々末恐ろしいゼホント。

まだ111だろ?

「あー、なんだ。笑い疲れただらうし、今日はもう家で休んだらどうだ

？」

「そ、そうだね！じゃあねみんなまた明日！」

「またねー！」

そうして逃げるよう帰つていったライザを見送る俺達。⋮とりあえず、この別の意味で変な空気をどうにかしようとアルムに話しかけようとしたら…

「…人前じやなきや、できるんだがな」

⋮物凄い小さな声だつたが、なんかすげえ発言を聞いた気がする。え、お前も惚れてたの？言っちゃ悪いが、あいつ恋愛に関しては割とヘタレで、お前にアプローチらしいアプローチかけてなかつたよな？何が切っ掛けだ？

「…何でか知つてるか、ボオス？」

「…屈託のない笑顔にやられた、らしい」

「何で知つてんだ…」

「俺はお前たち程あいつとの距離が近くないから、かえつて相談しあすかつたそうだ」

「…そういうもんか」

⋮とりあえずこのことはまだ俺たちの胸の内にしまつておくか。バレバレーのライザは兎も角、まだ表に出せないそれをバラすのは趣味悪いしな。

そしてこの場は、ボオスと当事者であるアルムが号令をかけて一件落着となつた。

その夜、もう寝るかつて時間に親父が家に帰つてきた。⋮あんな消沈した親父、初めて見るぜ。

「…レント」

「…何だよ」

「…」

…何も言わず部屋に入つちまつた。何か言いたかつたのかもしけ
ねえけど…まあ、気にするだけ無駄か。殴られるよりはよっぽどいい
に。
「…セーて」
明日からも特訓頑張るか。俺の夢の為に、そしてアルムに勝つため

アルムとタオ

「……つちはダメだつた。タオ、そつちは？」

「ダメだつたよ…一体、どうすればいいんだろう」

アルムの家にある大きめの机に、本と内容を書き写したメモを置いて、僕たちは悩んでいた。とある日、僕はアルムの提案で二人で島中に聞き込みをしていた。僕の目標である、家の地下にある書庫の本を読み解く為の情報収集だ。元々いくつかの文字列は書き写してたら、それについて見覚えが無いか手分けして聞いて回つてたんだけど

…答えは全て「ノー」だった。

「この島にあるなんてことない家にわざわざ置いてあるんだから、同じところに手掛けりの1つや2つあってもおかしくないんだけど…なんでなんだろう」

「村長も見覚えが無いと言つていたし、ボオスはモリツツさんや一応ランバーにも聞いたそうだが…。普段島民が行かないような場所にあるのか、それとも…そもそも島の外にあるのか」

「島の外…かあ」

確かにそれが一番あるかもしれない。村長やモリツツさんすら知らないのなら、少なくとも纏められた資料としては残つてないのかも。…単純にご先祖様が趣味として集めてたものかもしれないけど、その可能性は一旦排除してる。それだと本当にとつかかりが無いし。だから、クーケン島に残されていることと特殊な文字で書かれていることから「クーケン島にとつて重大な且つ秘密にしておいた方がいい何かが書いてある貴重な資料である」という前提で僕たちは動いてる。

…なんで「重大」つて仮定しているのかというと、エルちゃんが「よくわからないところに眠つてるよくわからない本なら、多分そういうのだと思う！」なんて言つたから、とりあえずそういうことにしどこかつてことになつたからだ。本が好きなのは良い事だけど、影響され過ぎじやないかなあ。

「そうだつたら島の中で手掛けりを探してもしようがないよね…だと

すると、残った手段は…」

「この島に交易に来る船の商人に、ついでで良いから頼んでもらう…か。もつと成長すれば、外に出て探しに行けるかもしれないが」

「…できるかなあ」

前者のほうは、ボオスにお願いすれば頼んでくれるかもしれないけど、見つかるかどうか分からないし、後者は…そもそも、外に出て無事でいられるかどうかがわからない。レントの冒険についていけば大丈夫かもしれないけど、そこまで待つてくれるとも限らないし、僕の都合でレントの気勢を削ぎかねない真似はあまりしたくない。

：逆にライザはもうちょっとくらい気勢を削がれてもいいと思う。少しだけ大人しくも真面目にもなつたけど、相変わらず色々振り回されてるし。：8割くらいレントが。つていうかその行動力アルムにも発揮しようよ。絶対アルムからも脈あるよ、「俺は呼ばれないんだよな…」なんてちよつと寂しそうに洩らしてたし。まあ、アルムのイメージに配慮してるのかもしれないけど…レントの体力にも配慮してあげよう？

「まあ、どつちにせよ今できることじやないな。じゃあどうするか…」「どんな本なのか、もつと考えてみるとか？」

「わ、エルちゃん」

唐突にびよこつと顔を出してそんなことを言うエルちゃん。確かに、今この本についてできそなことはそれくらいかも。

「もつと、か。何がどう重大なのかつてことだよね」

「…あの枯れた噴水から、水が噴き出るようになる方法とかか？」

「生活とブルネン家のあれこれに直結しそうだね。：そもそもこの本、見たことない文字がすごく綺麗に揃って書かれてるんだよね。しかしたら文字の書き方も特殊なのかも」

「文字だけでなく、筆記具もか…だとすると、何かしらの特異な技術についての本かもな」

「何かしらの技術書つてこと?…それ、クーケン島もその特異な技術に関わってるつてことにならない?」

「前提からすべて想像でしかない、この説が正しければな」

…もし本当にそななら、そんな本を地下に保管してた僕の一族つて結構重大な役割があつたりするんじや…だとしたら、尚更資料とかちゃんと残しておいてほしかつたなあ

「特異な技術つて、良く解らないけど凄い技術つてこと？」

「うーん、まあそんな感じかな？」

「じゃあ1個思いついた！」

「なんだ？ エル」

「実は、誰かがつくつたものだつた！」

「…何が、だ？」

「クーケン島！」

「…」

…子供の想像力つて、いや僕も年齢的には子供なんだけど、時々とんでもないことを思いつくよね。つまりエルちゃんは、その特異な技術で何者かがこの島を「建造」したつてことを言いたいみたい。今どんな本読んでるんだろう、この子。

でも、もしそななら、この本は…

「…正直、荒唐無稽が過ぎると思うが」

「…うん」

「もし本当に、今のエルの思い付きが真実だとしたら…」

「…この本は、クーケン島の【歴史書】とか【取扱説明書】かもしけないつてことになる、よね。で、歴史書なら別にみんな読める字で書けばいいから…」

「…説明書の方が可能性がある、か」

…なんかすごい話になつてきた。しかもこれ、そう考えると辻褄が意外と合うんだ。

まず説明書だつていう仮定は、どれだけ凄くても人が作ったものなら、きちんと整備しないといけない。だったら、その方法を書面で残してある可能性は高いから。

特殊な文字は、悪用の防止目的で専門的な技術と知識を持つた人間以外に読み解かせない為。単純に秘匿すべき技術だつたからかもしれないけど。

そしてもし説明書なら…途中にあつた図は、恐らく機能を制御するための作業手順。今思うと部品みたいなものも描いてあつた。

それ以外の挿絵も、機能の説明というか、そんな感じの内容に思えてくる。

そして、そこまで考えが行きつくと…

「…ねえ、アルム。今最悪な想像しちゃつたんだけど」

「…何だ」

「島の、涸れてる噴水さ」

「ああ」

「昔は湧いてた水つて、あそこから出てたかもしれないよね。それが、今出てないってことは…」

「…おい、まさか」

「…クーケン島、壊れかけつてことにならない？それか、燃料不足」

…そんな僕の言葉に、アルムどころかエルちゃんまで絶句してい

た。

「…」

タオの「最悪な想像」を聞いた後…俺は海岸に来ていた。少しでも、クーケン島に関する発見をする為だ。もしクーケン島が人工物なら、どこかにそれらしい痕跡があるはず。そして、それが今まで見つかっていないのなら…

(…湖面の、下)

そこにあるとしか、思えない。今まで何で見ようともしなかつたのか不思議なくらい、発見がありそうなところだ。

(…風の魔法を頭に纏えば、海水が目に入るリスクは減らせる。服が濡れるのは、炎で乾かせばいい。流れが強くなつても、魔力での強化で乗り切れる)

湖に潜る際の懸念事項を、1つ1つ確認する。そして…

「…行くか」

意を決して、飛び込んだ。そして少し潜ると…

「…ツ!!」

目の前の光景に、驚愕した。

島の方を向いていたはずなのに、水中の光景が広がっていたからだ。上を見れば、勿論クーケン島がある。つまり：

（浮いて、いる…！この島は！クーケン島は！湖の、上に!!）

そして、無人ならともかく…あれだけ人が住んでいて、あれだけの建物が建つて、どことも繋がつてない。そんな浮島が、沈んでいないし、そんな気配もない。自然の浮島で、そんなものができるのか？俺にはそうは思えなかつた。ただの知識不足なのかもしれないが：

（だが、人工島だとしても…）

どういった技術があればこんなものができる？少なくとも1個人でこれをやろうとなればどれだけ時間がかかるか：想像もつかない。（あの本、俺たちの想像以上にとんでもない技術が関わってるかもしれない）

これで、ただの良く解らん趣味の本だつたら、ただの肩透かしで終わりだ。だが本当に、人工島の説明書なんでものだつたら？そして、タオの最悪の想像が正解で、それを打開するために本に書いてある情報が必要だとしたら？…今の俺たちにどうこうできる程度の話じゃない。

なにせ、説明書を読み解くノウハウすら無い。なら、技術なんて以ての外だ。

（…友達の手伝いをしてただけ、のはずだつたんだがな）

いくら何でも話が大きくなり過ぎだ。そう思いながら俺は湖から上がる。とりあえず、ボオスには商人への依頼を頼んでおくとして：「…これ、タオに伝えるべきか？」

お前の最悪な想像が少し現実味を帯びてきたなんて、生来臆病なあいつにどう伝えればいいのか。服を乾かしながら、俺は頭を抱えた。

アルムと島の人達

「お早う、母さん」

「あら、お早うアルム！」

朝からこのハキハキした挨拶を返してくれるのは、俺の母親のルーテリア・レーゼン。水色の真っ直ぐな長髪に大きめのタレ目、周りの女性と比べても少し低い身長が特徴だ。いつも一家で一番早く起きて、俺たちの朝食を作っている。

「今日は早く起きたし、手伝おうか？」

「本当？じゃあ、スープお願ひしちゃおつかな」

「了解。…クーケンフルーツ余つてるな、これにするか」

まあ、俺も早めに起きるので、こうして朝手伝うことよくあるのだが。因みに親父は俺より早く起きるが、厨房に立たせると碌にならないので居間に座っている。…母さんが真剣な顔で「ゴメン、こんなこと言いたくないけどアナタは一生料理しちゃダメ！」なんて言つたのは本当に衝撃的だった。多分今までで一番真剣な顔だった。今後更新されるかも怪しくらいに。

まあ、実際そこまで言うレベルだつたが。下手したら指どころか手首が飛ぶところだつたからな。あのまま続けてたらエルのトラウマになつてたな…

「ふあ…おあよ…」

「エル、お早う」

「お早うエル！もうちょっとで出来るから待つてね？」
「うん…お顔洗つてくるね…」

エルも起きてきた。朝は少し弱いからまだ半分寝てるようなものだが、それでもあれくらいの年の子としては早い方だと思う。

「…よし、味はこれくらいでいいか」

「うん、こつちもいい感じ」

作り終わつたので、2人で料理を居間に運ぶ。机に並べ終わつたところで丁度エルが戻つてきたので、そのまま俺達も椅子に座り…

「いただきます！」

「「頂きます」」

全員そろつて朝食を摂る。いつものこの家の朝だ。因みに、いただきますの号令はエルの1日の最初の仕事だ。

「…これなら、もうすぐ収穫できるだろう」

朝食を食べ終わつた俺は親父と一緒に畑まで来ていた。収穫の手伝いは無いが、それならそれで色々勉強ができるいい機会だ。クーベルーツの「摂り頃」とかな。

「どこを見たら解りやすい?」

「まずヘタの際まで見ろ、そこまで赤く染まつていれば採り時だ。それか、ヘタから簡単に外れるものはまず完熟している。実の柔らかさで判断もできるが…それはまだお前には難しいだろう」

「なるほど」

「言われてみると解りやすい特徴だ。一応後でどこかにメモしておくか…」

「さて、他の奴らはしつかり様子を見に来ているだろうか…」

「ウェインさん、アルム君、お早うございます」

「カールか。ああ、お早う」

「お早うございますカールさん。…ところで、ライザは向こうで何を？」

「いくつか並べられたクーベルーツの前でうんうん唸つているが…」

「ああ、ちょっと品質の見極めのテストをね。自分からやつてみた いつて言いだして」

「…あいつが?」

「…本当に、去年から思つていたがどういう心境の変化だ? 別人じゃ ないかつてレベルで農業に積極的だな。」

（…どうやつて乗せた）

（私は何も。ミオが「主婦の必須スキルみたいなものだよ」なんて言つたら物凄く乗り気になりました）

（扱いをよく解つていると言うべきか。で、実際はどうなんだ）

(近所の主婦が集まつて真剣に情報共有するくらいには本気です)

(…そなのか)

(最近エルちゃんが生徒として参加してるそうですよ、お使いの役に立つからって)

(…いらん知識を身につけさせたりしないだろうな、それ)

親父たちが何か話してるみたいだが…そつちはいいか。とりあえ

ずライザの様子を見るか。

「…むむむむむむむむ…」

ガチだ。特に目が真剣通り越して鬼気迫っている。何がお前をそこまで駆り立てるんだ。

「…結婚…結婚した後、役に立つ…いやでも、お母さんいつもこんな苦労…? いや私が知らないだけで…? それとも一瞬で見分けられるようになつてる…? むむむ…」

悩みながらそうブツブツと言つているが、とりあえずうちの母さんは苦労してる側だ、心配しなくともいい。エルは何か直感が働くみたいで、良いのを掴んだうえで割とすぐ終わるみたいだが。

…しかし、結婚か。ライザだつてそういうことは気にするよな、女の子だし。…どんな相手を、想定してるんだろうか。

「…よし、コレ、コレ、コレ、コレ、コレの順! お父さんに答え合わせを…ひあいつ!」

「…あー、ずいぶん真剣だつたな」

考へてる間にライザが答えを決めたらしく顔をあげたが、俺を見た瞬間奇声を上げて顔を赤くした。いや、そんなにビックリすることか…?

「ん、終わつたのかいライザ? どれ…おお、完全正解だよ。しかも5分で。凄いじゃないか」

「品質を見極める才能があるのか。5個同時で順番も当たりならまぐれの線は薄いだろうな」

「え、あ、えつと、ふははー、これがライザちゃんの才能だー!」(聞かれてないよね聞かれてないよね!)頭の中でアルムとの「そういう生活を妄想してたの気づかれてないよね! 声に出てないよね! な

かつたよね!?)

腰に手を当ててどや顔をするライザ。どう見てもなんか無理して
るようなナリアクションだが、そこには突つ込まないでおこう。単純に
気になつたこともあるしな。

「ところで、どうやつて品質を見極めたんだ?」

「えつ!?えつと、いろんな角度から隅々までみたり、実の柔らかさとか
重さとか比べたり、後は…」

「後は?」

「…勘?」

「…勘」

「まあ、結局のところはそこだ。とはいっても、本来は長年の経験を積
み重ねて少しづつ養うものなんだが」

まさか、ライザにそんな才能があるとは。何に役立つか、と言わ
れたら…まあ、料理人か、それこそ主婦かといったところだろうか。
…ライザは料理に関してはどうにも苦手みたいだが。まあ、食えない
レベルではないので練習次第で上達は十分見込めるだろう。
「…凄いな。俺にはそこまで早くはできそうに無い」

「そ、 そうかな。えへへ…」

「つ…」

(…カール、場違いじゃないか私達は?)

(いえ、むしろ近くで見守る特権を得たと思いましょう)

俺に褒められて喜ぶライザ。ああもう、直視できないだろうがそん
な可愛い表情されたら。

後その暖かいのかよく解らん視線、気づいてるぞ親父共。やめてく
れ。

農場での用事も終わり、昼食も済ませ、昼。エルがお使いを済ませ
てからシユタウト家に突撃に行くそうなので俺はいつも通り島中を
練り歩くことに。

因みに例のどや顔は未だにライザに有効らしい。最近はその後抱
きしめという反撃を食らうしがが。

「よう、アルム」

「レント。今日も特訓か？」

「ああ。お前もどうだ？」

「…そうしようか」

いきなりレントと遭遇したので特訓開始。実践形式の手合せ無しなら大体これで2～3時間くらいは経つ。

「二人とも、偶には私もいいか？」

「アガーテさん。…どうだ、レント？」

「願つてもねえ！今の俺の明確な目標2人との訓練なんてよ！」

「ふふ、護り手として、お前達にも遅れば取りたくないからな」

そして近くで聞いていたアガーテさんも参加することに。アガーテさんにも魔力無しでようやく渡り合えるようになつてきただが、まだ足りない。

：外での本の手掛かりを掴むためにも、もつと強くならなければな。

「しかし、最近かなり乗り気だよなアルム。何か目的でもできたのかよ？」

「まあ、そんなところだ。」

「何だ、ライザ絡みか？」

「…違いますよアガーテさん。何でライザが出てくるんですか」

「相場が決まっているだろう？男が強くなろうとする理由は、愛か口

マンか、とな」

「…」

：愛は愛でも故郷愛である。しかも、現状杞憂かもしれない可能性の方が高い危惧が理由とは言えない。

まあ、アガーテさんは「ライザへの」という意味で言つただろうが。「…あまり表に出して自覚無いんですけど。解りやすいですかね、俺

「いや、そう露骨ではないな。ただ…」

「ただ？」

「どれだけお前たちの姉貴分をやつていると思っている？気づくさ」

「…敵わないな」

「どれだけ力で上回つても、この人には敵わないんだろうな、俺たちは。

「どうか思つたんだけどよ、アガーテ姉さんそういうの興味あるんだな。男がどうとかって」

「ああ、エルからおすすめされた本があつてな。中々面白くてついまとめ買いしてしまった」

「…島中で流行らせる気か、エル？この前ボオスも買つてるのを見たぞ。」

「…というかレント。お前まるで驚いてないが、知つてたのか。いつからだ。」

特訓が終わつてもうすぐ日が暮れるといったタイミングで、タオとボオスと遭遇した。…この組み合わせは珍しいな。

「…少なくとも、現状繋ぎがとれる商人たちは全員外れだ。読めそつな人間に心当たりも無いそうだ」

「…そつか。うん、ありがとう」

あの文字についての話か。しかし、ブルネン家の伝手でも空振りか。となると、いよいよ…

「…島の外に出て、直接痕跡や人物を探すしかないな」

「あ、アルム」

「だが、それでも見つかるかどうかわからないぞ。当てもないんだろう」

確かにそうだ。だが、少しでも手を広げた方が見つけやすいだろう。そうなるとやはり、近いうちに外に探しに行くべきかも知れない。

「…いい加減聞かせてくれ。お前たちはあの本に何が書かれていると睨んでる？以前までは「読み解きたい」だつたが…今のお前たちは「読み解かなければ」と考へているように見える」

「…正直、全部は言えないぞ。荒唐無稽すぎて混乱させかねない」

「ああ、今話せそうなところまででいい」

「…もしかしたら、今の僕たちが知らないクーケン島の秘密について書いてあるんじゃないかなって思つてる」

「秘密？」

「例えば、枯れている噴水の事だ。あそこから水を出す方法があるんじゃないかな」

そういうと、ボオスは少し考えるような仕草をした。

「…なぜ、秘密が書いてあると？」

「クーケン島に残されている解らない文字で書かれた本なんて代物、そういうことを書いてあるに決まっている。…と、エルが」

「…アイツか。どう考へても妄想や思い付きの類なのに、否定しきれ

ないのがな」

「実際僕達も最初は「まさか」だつたよ。…今は「多分そうだろうな」くらいまでは思つてる」

「それが何故か…は、言えなさうだな」

「ああ。これ以上は、な」

俺達の推理の過程を少し話せば、多分ボオスならたどり着くだろう。俺達の抱いた最悪な懸念に。…碌な根拠も無しに「実はこの島は人工物で、故障してる疑惑がある」「そう遠くない未来、この島が沈むかも知れない」なんて、伝えられはしない。なんならタオにも、クーケン島が浮島であることは伏せたままだ。

「…もしあの本に書いてある内容が、この島にとつてよほど重大な内容だつたら。絶対に、包み隠さず、話してくれ。約束だ」

「…ああ」

「…分かつたよ」

そういつて俺達はボオスと別れた。…正直、俺達はなんとなく予感していた。その約束は、果たされることになるだろう、と。

もうすぐ日が落ちそくなぐらいになつて、俺は家に戻つた。…よし、エルもちゃんと帰つてきているな。あいつ偶にシユタウト家に泊まりたがるからな。

「アルム」

「何だ、母さん？」

「悩んでるの？それとも、何かを決めたの？もしかして、両方？」

「…正解、だよ。完璧に」

…本当、鋭いな。

「相談できるようになつてからでいいから、ちゃんと私達に話してね。
家族なんだから」

「解った。有難う、母さん」

俺は本当に家族に恵まれた。友達にも。だから、そんなみんなとの日常があるこの島に、危機が迫つてるかもしれないというなら。

俺は、動く。

原作開始

いつもの日常から、一步踏み出す

「…そろそろ、か」

今日の分の手伝いを終わらせ、そう呟く。

(あいつ等に、島の外に出ることを提案する)

退屈な島から飛び出して冒険がしたいライザ。塔を制覇し名を上げたいレント。家の地下にあつた謎の本を解読する手掛けかりを見つけたいタオ。

三者三様、しかし共通して島の外に目的がある。話をすれば乗つてくれるだろう。そして、俺自身の目的。

(クーケン島が人工の浮島なのはほぼ確定とみて良いだろう。この前、島の下側を少し見てみたが…何かは解らなかつたが、どう考えても自然にできるわけがない物質で出来ていた。)

問題は、誰がどうやつて作ったのか。気になつて仕方がない)

元々、変化に出会うのは好きだつた。正確には、変化したことにより生まれる未知との出会いが、だ。疑問と言い換えてもいいかもしない。

「何で?」が「なるほど」に変わることほど、嬉しくて楽しいことも無い。そして…

(あの時俺達が抱いた危惧。それがもし当たつているとしたら…急がなければならぬ)

勿論、あんな最悪な想像は外れてくれた方がいい。だからこそ動く。杞憂なら、少しでも早く安心するため。危急なら、少しでも早く対処するため。

「父さん。母さん。エル」

まず話すべきは…やはり家族だろう。仲間を誘つておいて自分はダメでしたなんて冗談にもならない。

「俺は、島の外に出てみたいと思う」

「えつ？」

「…そ、うか」

「あら…」

驚いたエルと、どこか納得したような表情の父さんと母さん。

「出ると言つても、ずっとじゃない。少なくとも、暫くは余程の事が無い限りは一日で行つて帰つてくるくらいのつもりだ。それがどれくらい続くかは解らないが」

「…もしかして、あの時の本のお話？外に読める人を探しに行くかも、つて」

「ああ。あんな疑惑を持つてしまつた以上、早く解消してしまつた方がいいからな」

「…うん。エルも、もしもつてちょっと不安だつた」

「だから、決心がついた今行くんだ。お前の不安も、払つてやりたいからな」

「…わかつた。大怪我だけはしちゃイヤだよ？」

「勿論」

エルも納得してくれたみたいだ。父さんと母さんは…：

「…その内、外に出ていくだろうとは思つていた。予想より早かつたが」

「どうにかなつたら、またここに戻つてくると思う」「まさか、1人で行くの？」

「ライザとレントとタオを誘うつもりでいる。あいつらも外に目的があるからな。…ライザだけ、親の許可が出るか心配だが」

最近はお使いとかも行つてるらしいとはいえ、ミオおばさんが厳しい人な為に許可をもらうのは困難だろう。ライザの事だから無理やりついてきそうだがら…

「じゃあ、約束。無理はせず、みんな無事でいること。日が落ちるまでには帰つてくること。それが無理そくならできるだけ先に言うこと。良い？」

「ああ、解つた」

「うん。じゃあ行つてきて宜しい！私達が許します！」

そうして、俺は外に出る許可をもらつた。

次に、広場にいたレントとタオに話すことにしてたが…

「いいぜ」

「いいよ」

話が早い。いや、助かるが。

「いきなり塔まで行けるわけねえからな。早めに外に出て冒険がてら修行して、少しずつ近づくのも悪かねえ」

「島の外は怖いけど…それよりも、本の手掛かりを掴めるかもしれないっていうワクワクの方が、今は大きいんだ」

「…レントは兎も角、タオは誰の影響何だか」

「アルムとライザだよ」

「むしろそれ以外誰がいるんだつてレベルだな」

「それもそうか」

さて、後はライザか。本人は兎も角、ミオおばさんとカールさんだ首を縦に振るか…と、その前に。

「誘つておいてなんだが、タオと…一応レントも。このことは家族に話しておいた方がいいんじゃないかな？」

「そうだね。うちは大丈夫だと思うけど…」

「…そうだな、あんなんでも親父だ」

「なら、終わつてからまたここに集合だ」

少しして、タオとレントが戻ってきた。見た感じ大丈夫そうだが…
「どうだつた？」

「アルムとレントが一緒だつて言つたらいいってさ。あまり遅くはなるなとは言われたけど」

「レントは？」

「…どことも知れねえ場所でくたばつたら、探してでも殴りに行く、だとよ」

「…らしいと言えばらしいな」

まあ、二人とも無事で許可を貰えたところで、いよいよ最後。ライ

ザ…というかミオおばさんの説得をしなきやならないわけだ。

どうすればいいか…と考えていたその時。

「アルム!と、レントとタオ? 3人で何話してたの?」

「ライザか。まあ、丁度お前の話というか」

「あたしの?」

「ああ」

「…うぐぐ、冒険は行きたい、凄く行きたい。でもお母さんが許してくれるか解らない。でもそれを無視してついていつたらあたしだけやるべき」とやつてないみたいになる…」

「実際やつてないしな」

「むしろ僕らがあつさり許可貰い過ぎな気もするけど」

まあ、タオの言う通り本来ならミオおばさんの方が普通だ。いきなり島の外に出ようなんてそうそう許可は出してもらえない。

「そういうやタオは、俺とアルムの名前出したらOK貰えたんだよな?」

「うん」

「ライザもそうすればいいんじやねえか?」

「それだ!」

「いや、それでも厳しいんじやないか?」

「どうしてもやるだけやつてみる!お父さーん!お母さーん!話があるのー!」

…本当に行けるのか?

「アルム、ライザをお願いね。無茶しようとしたら絶対止めておくれよ!」

「あ、はい」

「農業の手伝いも続けてくれるなら文句はないよ。でも、できるだけ早く帰つてくるんだよ?心配になるから」

「うん、わかつた!」

…何か上手くいったようだ。何でも、最初は「いきなり何言つてんじゃない！」だつたが、俺に誘われたと言つたあたりで流れが変わつて、最終的にカールさんの「こうなつたら意地でも聞かないだろうし、少しきらい自由にやらせてみよう。アルムもいるし大丈夫だよ」という言葉でミオおばさんが折れたらしい。

というか俺、この夫婦からの信頼度高すぎないか？低いよりはずつといいが：

「それで、冒険は何時から始まるの？」

「3日後。色々準備がしたいからな。傷薬とか、対岸の周辺の詳しい情報とか…」

「武器はどうするよ？俺とアルムは持つてるけどよ」

「えーっと、ちょっと考えてみる」

「ふつふつふ、こんなこともあるうかとコツコツ作つてたものがあるんだよね～」

「…武器の自作までしてたのか」

「元々あたしも言い出そうとしてたからね、冒険に出ようつて。まあ、先を越されちゃつたけど」

…本当、お前のどこが平凡だ？まあ準備してあるのなら問題はあるい。後は…

「ど、そうだ。アガーテさんにも話しておいた方がいいな。何かあつたら真っ先に苦労を掛けるであろう人だし」

「うげ、そうだつた。ある意味一番の強敵が残つてた」

「俺とレントは結構信頼されてるみたいだが、許してもらえるかどうか…」

で、話してみたら…

「上から押さえ続けるより、緩めた方がかえつて安全だろう、お前たちの場合は。アルムとレントがいるなら、近場は問題ないだろうしな」

「…良いんですか？」

「どうせ何を言われても止めるつもりはないんだろう？ちゃんとした

目的もあるみたいだしな。で、お前達、船はあるのか？」

「…応、七色葡萄の林の先の船着き場にあるけど…」

「アレか。相当古かつたと思うが…」

「もし駄目そうなら、相談しても?」

「いいだろう。早めに言えよ」

「有難うござります」

さて、アガーテさんも大丈夫なら、最後に言うべき相手は…

「行くのか」

「ああ」

向こうから来た。無論ボオスだ。

「どれくらい掛かる?」

「解らんな。少なくとも、あの塔を制覇するまでは続くが

「それまでに手掛けりが見つかならなかつたら?」

「探すに決まっている。俺達だけじゃない、エルも不安がついているしな」

「なら、早く終わらせてやれ」

「ああ」

それだけ話して、ボオスは去つていった。

「…えつと、エルちゃんが不安がつてるつて?」

「タオの本に關することで色々あつた。とだけ」

「…いつかちゃんと話してよ?」

「勿論だ」

さて、言うべきは全部言つた。3日後、いよいよか。

そして、その日が來た。各々武器等を準備し、流石に危険そうだったのでアガーテさんに相談して、用意してもらつた船に乗り込む。漕ぐのは俺とレントだ。

「さあ、しゅっぱーつ!」

ライザの号令で俺達は船を漕ぎ始める。各々、目的を胸に抱き。
(待つてろ、大冒険!)

(あの塔のてっぺん、絶対にたどり着く!)

(本を解読する手がかりを見つけて、全て読み解いてみせる!)

(俺は、真実が知りたい。この冒険の中で…掘んで見せる)

いざ、冒険の始まりだ。

新たなる出会い、少女と戦士と鍊金術士

「どうちやーく！」

「遂に来ちまつたな、俺達」

「いよいよ、これからなんだね」

「ああ。俺達の冒険の、始まりだ」

ずっと憧れてた島の外。夢にまで見た大冒険。でも、今本当に、その第一歩を踏み出したんだ！

「今日は旅の商人が来ると聞いたから、もののついでに見られるかと思つたが…まだ来てないみたいだな」

「あー、確かにそれはちょっと残念かも。でも、これからの冒険のワクワクに比べたら…！」

「ウズウズしてんなあ。まあ、俺もだけどよ」

「じゃあ、まずはどこに行こう？僕とライザは訓練 자체殆どしないから、あまり強い魔物がいるところは…」

それでもそうだ。まずあたし達は戦いに慣れなきやいけない。このままじやアルムとレントの足を引っ張っちゃう。

でも、街道を辿るつていうのもなー。アガーテ姉さん以外の護り手に見つかっちゃうとちよつと面倒だし。んー…

「じゃあ、小妖精の森に行つてみない？」

「…大丈夫かな、村の人たちが誰も近づこうとしないって話だけど」

「入口だけちょっと入つてみて、ヤバそ.udだつたら即撤退でどうだ？」

「…そうだな、深入りし過ぎなければ、俺ならライザとタオを抱えて即座に脱出できるだろう」

「…レントは？」

「余程の魔物がいない限りは大丈夫だ。タフだからな、レントは」

「ああ、何かあつても、お前が戻つてくるくらいまでは持たせてやるぜ」

…うーん、凄い信頼関係。レントがちよつと、いやかなり羨ましい

…さて、方針も決まつたことだし、行こうか」

⋮

「うん!」「おう!」「うん」

というわけで、小妖精の森へ！よーし、行くぞー！

「こゝ」が、小妖精の森…

何ていうか、ぱつと見は普通の森つて感じだなあ。名前に妖精つて入つてるし、もうちよつと不思議な感じがするのかと思つてたけど。…もしかして、あたしがそういうの解らないだけだつたりする？

「見た感じはただの森…だな」

「今のところ、危ねえ感じは無えな」

「まあ、村の人達が勝手にそう呼んでるだけらしいし…」
良かつた、みんな一緒だつた。そんなことでほつとしていたら、物音がした。見てみると…

「ま、魔物だ！」

「コイツが…」

「確か青ふに、だつたか」

青いふにふにした魔物が来た。…名前もそのまま「青ふに」なんだ。
魔物じやなかつたら可愛いと思うんだけどそうじやないから、私たちにとつては危険な存在だつてことになる。

「さて、やつてみるか」

「え、えーと、気を付けてね！」

「ああ」

あたしたちは少し下がつて、いつでも動けるよう準備をしつつアルムの戦いを見る。

「…」

その動きは…青ふにが動くまで待つて、攻撃してきたら避けて、それでできた隙をついて攻撃。その繰り返しだつた。

いつもレントとの特訓でやつてるような無茶苦茶な動きじやない。あたし達でも解る、基本的つて感じの動き。

なんていうか、素人の私達にも凄く参考になる動きだつた。…あたし達に何度も動きを見せる為に、手加減されて蹴られ続けた青ふににはちょっと同情したけど。

「こんな感じだな。まあ、遠距離攻撃ができる2人は少し距離を開けて先制攻撃をしてもいいかもしれないな。ただ、一撃では倒せないだろうから、近づかれたときの準備はするようにな」

「おつけー！さあ、近くに魔物は：いた！」

「早速青ふに発見！さあ、初戦闘、張り切つていくぞー！」

「よーし、勝利！」

「なんとか行けたね…」

当然、問題なく勝利！あたしの「コーリングスター」とタオの「闇夜の帳」で同時に先制攻撃して、飛びかかってきたところを躱して攻撃。そこにタオがハンマーを振つて飛ばした魔力が直撃して青ふには倒れた。

うん、初めてにしては上出来なんじやないかな！

「思つたよりは大丈夫そうだな。…よし、もう少し2人で戦つてみてくれ。危なくなつたら俺とレントが助けに入る」

「やべえと思つたら遠慮なく言えよ？」

「了解！」

「わ、解つたよ」

そんな感じで魔物と戦闘しつつ奥に進んでいくあたしたち。青ふに以外にも、オオイタチとか、花の精とかとも戦つたけど：今のところは、アルム達の助けが無くとも大丈夫だつた。これでちよつとずつ、アルムの隣に近づけてるかなあ？

そんなことを考えながら進んでいると、少し開けたところに出た。

「クリント王国の遺跡：だつたか。村の中にもいくつかあるな」

「うん。…見張り小屋だつたのかな、この小屋」

「こんなどこにもあるんだな、遺跡つて」

遺跡かあ。冒険の中でこういうのを見つけるのも楽しみの一つだよね。もつと大きなものが見つかつたら凄く楽しいだろうなあ。

「さて、まだ時間にも余裕はありそうだし、もう少し奥まで行つてみるか」

「うん。もしかしたら、もつと大きな発見があるかもしれないしね！」

さあ、どんどん行くぞー！

というわけで、さらに奥に進むあたし達。あたしもタオも大分戦闘に慣れてきて、先制攻撃無しでも余裕をもつて勝てるようになつてきた。

そうして いるうちに、何か音が聞こえてきた。これは…笛？風の音とかではなさそう。

「…」つちからだな。行つてみるか？』

「誰かいるのかもしけねえな。…迷子とかじやねえよな」

「迷つたから、笛で助けてくれる人を呼んでるつてこと？」

こんなところで迷子になつたら、普通そんな余裕ないとと思うけどなあ。

…この前エルちゃんが読んでるお話にそんな感じの余裕を持ったおバカな人が出てきてたけど、流石にあれば物語の中だけだと思うし。

まあでも、本当に迷子だつた時の為に探してみることにした。すると…

「…ん、そこの裏から聞こえてくるな」

「あそこ？ 丁度仕切りみたいになつてるけど…」

「マジで迷子か…？」

「とにかく、行つてみようよ」

そうして、崩れた建物の裏をのぞき込んでみると…

…すごく綺麗な、女の子がいた。金髪の、身なりがいい…って言えばいいのかな。そんな感じの。

ここで、1人で楽器の練習をしてたみたい。フルート…だつけ。

あたしに、音楽の事はよく解らないけど…音も、綺麗だなつて。そう思つた。

「…」

アルム達も聞き入つてゐるのかな。何も言わはず女の子のことを見て

る。今ここは、ちょっとした演奏会の会場になつてゐる。

そして、女の子の演奏が終わつたと同時に。

「…凄い」

拍手をしながら、そう感想を呟いてた。

「…え？」

凄い。そう後ろから聞こえたから振り向いたら、女の子が拍手していて、隣にいた3人の男の子も少し遅れて拍手してた。…えっと、もしかして…

「聞いてた…の？」

「うん。すつごく、綺麗だつた」

「今まで興味なんて無かつたのに、音楽つて凄えなつて思つちまつた」「なんていうか、目が離せなかつたよ」

「ぐつ！」

は、恥ずかしい…！誰かに見られたくないからこんなところまで来て1人で練習してたのに…！しかも凄く褒められてる！余計に恥ずかしいよ…！

「ほら、アルムも何か感想言つてあげたら？」

「ん、ああ

一際背の高い男の子が口を開こうとしてる。な、何を言われるんだろう…

「後でアンコールしていいか？」

「「そこまで!?」」

「一番すごいこと言われた!?無理だよ、恥ずかしすぎるよ！」

「いや、クーケン島つてこういうの本当足りないからな、色々新鮮だったからもう一度聞きたくなつたというか…すまん」

「あ、うん、大丈夫…」

本当は全然大丈夫じゃないけど…

「えつと…それで、どうしてこんなところで練習してたの？近くに魔物もいて危ないのに」

「ええつと…」

「もしかして言いにくい事だつた？じゃあ深くは聞かないけど…」

うん、言いにくい。お父さんは兎も角、他の人にも聞かれたくない理由が単に恥ずかしいからで、それで練習の為にこんなところまで来てるなんて。

「このままここにいるのも危ないから、一度あの広場に行つてから話をしようよ」

眼鏡をかけた小柄な男の子の提案で、私は4人に付いていくことにした。

「それで…まず自己紹介からだな。俺はアルムレウス・レーゼン。アルムで良い」

「あたしはライザリン・シュタウト。ライザでいいよ」

「レント・マルスリンクだ」

「タオ・モルガンテンだよ」

「えっと、私はクラウディア・バレンツです」

「…バレンツ？」

自己紹介したら、背の高い男の子…アルム君が私の名前に反応した。知ってるの？

「ボオスが言つてたな。今日クーケン島に来る旅の商人達が…確かに、バレンツ商会」

「えっ！」

「バレンツ…つてことは」

「えっ？」

クーケン島つて、お父さんたちの次の行先で…つてことは、この人達はクーケン島の人達なの？

「…アルム、まさかとは思うけどさ」

「そこの商會長さんがどんな人かは知らないが…クラウディアは父親についてきて いるんだろう」

「…うん」

「今頃、娘がいなくなつた！と心配してゐる可能性が高いな」

「じゃあ、早くクーケン島に戻ろう。クラウディアのお父さんを安心させてあげないと！」

…うん、そうだよね。いきなり娘がいなくなつたら普通心配になるよね。

よくこつそり抜け出してるから最近は「またか…」みたいな反応だけど、それでもやっぱり心配させちゃってるのかも。

「さて、それじゃあ戻…ん」

「どうした、アルム…コイツは」

広場から出ようとしてたアルム君とレント君が立ち止まつた。その先には…オオイタチ？ちよつと違うかも…

「…さつきまでの奴とは段違いに強いな」

「そうだな。ちよつと本気出すか…」

そういうてアルム君は構えて、レント君も剣を抜いた。だけど…

「その必要は無いな」

そんな声が後ろから聞こえた。そこにいたのは、片眼鏡の細身の男の人と、髪どころか肌まで白っぽい色の女人。

クーケン島に用事があるからついでに馬車に乗せてほしいつて、お父さんにお願いしてた2人。確か…

「アンペル、あの2人なら、あれくらいは問題ないとと思うが

「何、手早く済ませるに越したことはないだろう、リラ。2人とも、少し離れる。そして全員、目を瞑れ」

そういうつて、2人が魔物から距離を取つた瞬間、アンペルさんから何かが飛んできた。あれは、小さな樽？そして、言われたとおりに目を瞑ると…

——ドオン！

そんな短い爆発音がした。そして、目を開けたら…あの魔物が、吹き飛んでいた。

「…爆弾、か？」

「魔物が、一瞬で…」

「…今のは、一体…」

私も含め、みんな呆然としている。そんな中で…

「…凄い」

ライザだけが、目を輝かせていた。

「今の、凄いっ…！何ですか、今の!?教えてください!!」

「ああ、あれは【鍊金術】だ。簡単なものだがな」

「…鍊金術…！」

…私は、ライザの事は何も知らないし、その鍊金術っていうものの事も解らないけど…そんな私にも、ライザにとつて今のこの瞬間は、凄い転機になつたんだろうなって、そう解つた。

少年少女への承認、そして夢への次なる一步

(錬金術、か)

クラウディアを探しに来ていたらしい2人組…アンペルさんとリラさんと共に、俺達は船着き場に向かっていた。もう夕暮れ時で、クラウディアもクーケン島に送り届けなければいけない。となれば、ここで今日の冒険は終わりにして俺達も島に戻った方がいい。そう判断したからだ。

因みにそれを聞いたライザとクラウディアは、

「うーん、仕方ないか。もうちょっと続けたかっただけどなー」「ごめんね？せっかくの冒険だつたのに、私のせいです：」

「あ、えっと、ごめん！そういうことを言つたんじゃないの！」

なんてやりとりをしていた。ライザが普段関わらないタイプだから、いつもの調子で発言したら軽い失言になってしまったようだ。レントみたいな強気なタイプでもなさそうだから、今後話しかける時は少し気を付けるか。…どう見ても恥ずかしがつていた彼女に、アンコールを要求した俺が言うことではないが。

まあ、クラウディアについては島の大人たちかボオスが対応してくれるだろう。それよりも、今の俺が強く興味を持つた言葉がある。

…錬金術。あの強力な爆弾を作り出したらしい技術。どういったものか、詳しくは説明されていないが…

(気になつて、仕方がない…!)

どうやつて作つた？どうすれば身に付く？爆弾以外には何が作れる？そんな錬金術への興味で、頭がいっぱいだつた。

ライザも気になつてているようだし、後日詳しく聞いてみようか。

暫くして船着き場に付いた。そこにいたのは、アガーテさんと…金髪の真面目そうな壮年くらいの男性。この人が、クラウディアの父親か？

「お前達か。ちょうどいい、聞きたいことが…ん、その子は…？」

「…クラウ」

「お父さん…」

当たりだったようだ。名前はルベルト・バレンツさん。名前からわかるとおり、今クーケン島に来ているバレンツ商会の会長さんだ。

「俺達4人で…まあ、冒険をしていたら偶然見かけましたので」

「そうか…うちの娘を有難う。アンペルさんとリラさんも、頼みを聞いていただいてありがとうございます。」

こうみえてじやじや馬で…時折、ふらりと商隊を抜け出すことがありましたね」

「ごめんなさい…」

「馬車に乗せてもらつた礼だ。構いやしない」

「報酬もすでに別途受け取つて いるしな」

…以前から抜け出しているらしい。ああ見えて意外と行動的というか。

冒険と言つたら羨ましそうな顔をしていたし、今後仲良くなつたら私も連れて行つてほしいとか言いそうだな。

「しかし、そのうち何かやるとは思つていたが、まさか初日からとはな」

「俺も驚いてます。今回は平和に終わりましたけど」

「そうだな。まあ…偶然とはいえ、お手柄だぞお前達。よくやつた」

「…！」

アガーテさんに褒められたその瞬間、ライザは驚いた表情をした。

「どうした？」

「初めて、姉さんに褒められたかも」

「普段が普段だからな。…これからも、頑張れよ」

「うつ、うん！」

激励までされて感激しているな、ライザ。

「へへ、自分の行動が認められるのつていいもんだな」

「…うん。これから冒険、やる気が出てきたよ」

隣を見ると、レントとタオも喜びを露わにしている。そして俺も、顔が綻んでいる自覚がある。

本来の目的とは違うが…冒険を始めて、本当に良かったよ。

さて、ルベルトさんにクラウディアと仲良くしてやつてくれと頼まれ、島に戻る為に船に乗り、クーケン港に着いたわけだが：

「ようこそルベルトさん、ラーゼンボーデン村へ！私が村の世話役を務める、モリツ・ブルネンです！」

声のトーンが大きい。いつもこんな感じだなこの人…

「…ライザ、この人が村長さん？」

「えーっと、村長じやないけどこの村のいろんなところに顔を出してくる、モリツっていうエラそーなおじさんだよ」

「偉そう？ お金持ちなの？」

「そつちもだけど、水源を押さえてるほうが大きいかな。こういう島だと、水を持つてゐる人が一番偉いみたいなどあるし」

「まあ偉そうではあるが、個人的にはそうしていいだけのことはしている人だと思うぞ。今回みたいに、島の外との繋がりを持とうとしてくれるしな。クーケン島だけだと本当に色々乏しいんだ…」

だからこそ変化を見つけるのが楽しいんだが…限度はあるからな。こうやって、外のものを取り入れてくれる人は本当にありがたい。「そうなんだ…キレイで、いい島だと思うんだけどな」

「ありがとう。…俺もそう思つてはいるんだが、流石に何年もずっと同じところにいると、変化に飢えるというか…な」

「だから冒険に出ようつてなつたの、あたし達。そしたらクラウディアとも友達になれたし、やつぱり外に出て正解だつたよ」

「…うん、私もライザ達と友達に慣れて嬉しい。これから、短い間になるかもしれないけど、宜しくね」

「ああ」「うん！」

そうして、クラウディア達と別れた俺は家に帰り、家族に今回の冒険の話をした。

母さんが怪我が無かつたことを喜んでくれたり、エルが鍊金術の話を聞いて目を輝かせたり、父さんが次が楽しみだと言つてくれたり。
…ああ、本当に。冒険を始めて良かつた。

クラウディアと友達になつた次の日、あたし達4人は貯水池の近くに集まつていた。理由は勿論：

「よーし、アンペルさんのところにいって、鍊金術を教えてもらうぞー！」

「それは良いけどよ、場所は知つてんのか？」

「それを今から調べるの！まずは…」

「ああ、さつきボオスから聞いてきたぞ」

「先に言つてよ!? でもありがとう！」

なんでもリラさんと2人で旧市街の民家を借りてるらしい。ついでに、ルベルトさん達が借りてるお屋敷も旧市街にあるみたい。よし、鍊金術を教わつたら早速遊びに行こう！

「で、ライザは鍊金術として…レンントとタオは何か用事があるのか？」
「僕は、もしかしたらこの本が読める人なんじやないかなつて。この島に来たのもクリント王国の遺跡調査が目的みたいだから、何か知つてるかも…」

「俺はあるのリラさんつて人に用がある。…」一目見ただけで解つたぜ、あの人は俺やお前よりもっと強え。だから、鍛えてもらいたくてな」「そうか。俺は…」

アルムが何か言いかけたところで、アンペルさん達が借りてる家の前に着いた。よ、よーし、緊張するけど、こういうのは最初が肝心！
「ごめんください！アンペルさんは居ますかー！」
「ああ、開いているぞ。勝手に入つてこい」

「は、はい！」

うう、いざその時が来たと思うとさつきより緊張する…！で、でも、これも鍊金術を教えてもらうため！

「ん、4人揃つてお出ましか。こつちは丁度最低限片づけを済ませたところだ。それで要件は何だ？」

「「「あ、あの…」」

「リラさん！あんたは俺よりはるかに強い！お願いがある！俺を鍛えてくれ！」

「クリント王国の遺跡調査をしているアンペルさんなら、この本の読み方が解るんじゃないかと思つて来ました！僕に読み解き方を教えてください！」

「あたしに、鍊金術を教えてください！」

「あたしたちは頭を下げてお願ひした。ど、どうかな。聞いてくれるかな…」

「…さて、どうするか。私たちはそこまで暇じゃ…っ！」

「え、えっと…」

「お前さん…この本、どこで？」

「えつと、ずっと家に置いてありました」

「…成程、どうやら「当たり」のようだ」

…当たり？よく解らないけど…アンペルさんの目的に関係あるかもつてこと？

「解った、教えよう」

「有難うございます！」

「…なら、そこのお前。名前は？」

「あ、えつと、レント・マルスリンクです！」

「そうか。レント、この近辺の案内をしてくれるなら、戦士の心得を教えよう。見たところ、まだ未熟だが見どころがあるからな」

「解りました！有難うございます！」

2人のお願ひはトントン拍子に話が進んでく。えつと、あたしは…？

「で、そつちの嬢ちゃんだが…鍊金術は教えてどうにかなるものじゃない」

「え…」

「…根本的に、特別な素質が必要つてことですか？」

「そういうことになるな。…ところで、お前さんは私達に何か用事はないのか？何も言わなかつたが」

そういうえばアルムだけ何も言つてない。アルムが鍊金術みたいな新しくて凄いものに興味持たないはずないんだけどなあ。

「まあ、一番は鍊金術ですが…正直な話、本の内容も気になつてます

し、訓練もお願いしたいです」

「要するに全部か」

「はい」

…アルム、意外と欲張りだ。

「まあ、まずは鍊金術の話だな。さつきお前さんが言つた通り、特別な素質が必要なものでな。努力してどうこうつてものじやないんだが、さてどうするか？」

つまり、できない人は一生できないってこと？もしかたしがそつたら…イヤだなあ。

「それなら、色々言うより実際に調合をやらせるのが一番早いだろう。」

「そうだな、どのみち素質が解らんことには始まらんか。お前さんたち、名前は？」

「はい、ライザリン・シユタウト…ライザです」

「アルムレウス・レーゼン。アルムです」

「よし、ライザとアルム。「ナナシ草」を探つてくるんだ。船着き場の近くの森にあつたはずだ」

ナナシ草…そんなのあつたんだ。早速探してみよう！つと、その前に…

「アンペルさん」

「何だ？」

「できるだけいい奴を選んできた方がいいですか？」

「ん、判るのか？」

「えっと、なんとなくは」

お父さんに作物の品質チェックのテストを何回か出してもらつて以来、それ以外のものに関してはなんとなく品質の良さにあたりが付くようになつてきてる。ウエインさんが言うには「何か天性のものをこじ開けたんじゃないか、カールの奴」だつて。

「まあ、今回は気にしなくていい。まず作れるか否かが大事だからな」「解りました。じゃあ行こつか、アルム」

「ああ。…お前、いつの間にそこまで？」

「…いつの間にか？あたしもよく解らない」

まあそんなことよりも、今は鍊金術の才能の方が大事！お願いだから才能あつてよ、あたし！」

ナナシ草はアツサリ見つかったので、さつそく採取採取つと。…できるだけいい奴がどうとかさつきは言つたけど、ここにあるのは全部似たり寄つたりの品質みたいだから必要な数だけテキトーに採つちやおう。

「にしても、こうしてみると色々面白そうなものがあるんだなー。うにとか、何かに使えそうじゃない？」

「例えば？」

「アンペルさんがあの時使つてた爆弾みたいに、針がドーン！つて飛んでつたり」

「発想がエグいぞ…」

…ちよつと引かれた。悲しい。

まあそんな話もしながら、必要な分採り終えた。アンペルさんのところに戻ろう。

「さて、俺はどつちでもいいが…ライザには、鍊金術の才能が有つてほしいな」

「え、つと…何で？」

「自分の事を「平凡」だとか、「なんてことない」とかよく言つてるだろう。俺はそんなこと思つたこと無いが、結局一番大事なのはお前自身の認識だからな。これを機に…何ていうか、自信を持つてほしい、とでも言うか」

「…そつか」

実際、今のあたしに自信は無い。あたしはアルムの隣に立ちたいけど、まだそれができるだけの何かが無いと思ってるし、鍊金術がその何かになればいいな、とも思つてる。

あたしが鍊金術を覚えた理由は、興味だけじゃなく、願望も入つてる。

「…才能、あるといいなあ」

「ああ。…さて、着いたぞ」

「うん。アンペルさん！ナナシ草採つてきましたー！」

「戻つたか。どうだつた、初めての採取は？」

「はい、楽しかつたです！今まで気づけなかつただけで、身の回りにこんな面白いものがたくさんあるんだなって！」

「…成程。品質の話もそうだが、その感覚が持てるなら、或いは…アルムは？」

「採取そのものは面白いと思いました。ただ、ライザ程の感覚は得られなかつたというか…そんな感じですね」

「そうか。では、早速2人の資質を試してみよう」

そう言つて、アンペルさんは部屋にある釜の前に立つた。鍊金術を使うための「鍊金釜」つていうみたい。

それで、鍊金術による調合の初歩の初歩、緑色の中和剤をあたし達に実際に作つてもらうそうだ。

レシピももらつたけど、素材はナナシ草…というか、植物が3つあれば作れるみたい。あたしたちが採つたナナシ草は…うん、6つある。

「ならまずはアルム。やつてみてくれ」

「解りました」

素材を入れて、レシピを思い浮かべ、釜をかき混ぜれば、才能があればモノができる。…不思議な技術だなあ。

「…」

「どうだ？」

「…駄目ですね。見ての通り、ナナシ草のままです」

「そうか。では次、ライザ。やつてみてくれ」

「あ、はい！」

アルムがさつきやつたみたいに、あたしも釜をかき混ぜ始める。…なんだろう、釜の中で、何かが変わつていくのが感じ取れる。今入れたナナシ草が一つになつていく感覚がする。そして…

「…できた」

「これが中和剤、ですか？」

「ああ、そうだ」

できた。あたしに、できた。鍊金術が……！

「当たり」だな。こつちこそ、本当の。…合格だ。お前さんは今、【鍊

金術士】になつた

「ぐつ！やつたあ！」

今、この瞬間。あたしは、何でもない平凡なライザから、鍊金術士のライザリン・シユタウトになつた。

若い男女が二人きりで外出、これ即ち

「ようこそ、我がアトリエへ！」

「え？」

「は？」

鍊金術士になつて、アンペルさんに鍊金術の入門書を貰つたあたしは、鍊金術に必要な釜を一応お母さんに許可を取つて部屋に運んだ。これであたしのアトリエが完成！これから鍊金術で色々作りまくるぞー！って気合を入れた。因みに鍊金術の説明もお父さんとお母さんにしたら「教えてくれた人に迷惑をかけないようにね」「変なことに使うんじゃないよ！」って言われた。当然気を付けるよ！

で、ついでにレントとタオを呼んで自慢してやろうと思つた。ふつふつふ、どうだ！

「…でかい鍋が増えただけだよね？」

「アトリエって何なんだよ」

「鍊金術の研究室よ！」

「ああ、つまり鍊金術士っぽいこと始めたつてことか」

「…ねえこれ、もしかして自慢の為に呼ばれたつてこと？」

は、反応が鈍いどころか冷めてる…

「自慢してえ気持ちは解るけど、俺らも自分のやることができたからな」

「ちよつと反応割いてる余裕が無いっていうか、今アンペルさんに宿題を出されてるから。…えーと、あれはああであそこは…」

「…それでもさー、もうちよつと、うさー」

リアクションとるだけならタダなんだし、友達なんだから少しくらい何か言つてくれてもいいのに。

「ところでアルムはどこだよ？」

「えーっと、この後対岸に一緒に採取に行く予定だから、ちよつと準備してくれてるっていうか」

「へー」

「ふーん」

「…何よ」

「いや何も」

嘘つけ絶対何か変なこと考えてたでしょ今の！解るんだからね付き合い長いんだから！

「まあ、頑張れよ？色々」

「うん、頑張つてね？色々」

「色々つて何よ!?」

あーもう、絶対凄いもの鍊金してあつと言わせてやるんだからね！待つてなさいよ！

「さて、何が使えるか解らないし、手当たり次第に色々採取するか」「うん。あ、この花良さそう…」

小妖精の森まで来たあたしたちは、大きめの鞄を背負つて鍊金術のための素材集めを始めた。なんかもう、あつちからこつちまで素材だらけ。ここから何が作れるのか、想像するだけでワクワクが止まらない！

「シツ……ん、これもいけるんじゃないかな？」

「いけると思うけど…なにそれ？玉？」

「青ふにを倒したら出てきた。魔物を倒すことでも素材が手に入ると聞いたが、これの事だな」

「あー、じゃあオオイタチとか花の精もいくらか倒しとく？」

「そうするか」

生えてる素材や魔物を倒して手に入る素材、色々集めながら奥に進むと…

「…大きいね」

「…ああ」

大きい青ふにがいた。えーっと、流石にあれはあたしには無理だよね。

「アイツは俺が倒す。少し待つてくれ」

そういつて鞄を置き、大きいふにに向かつていった。意表を付けたみたいで、ふには反応できていない。

「オラアツ！」

目の前で思いつきり踏み込んで、炎を纏つた蹴りを左右で一回ずつ叩き込んだ後、両足ロップで飛び蹴り^{飛び蹴り}で吹っ飛ばした。その後、アルムに気づいたぶにが勢いよく転がつて来たけど、それを思いつきり蹴りで打ち上げ、ジャンプして追いかけた。そして…：

「落ちろ」

かかと落として地面に叩き付け、ぶにの目の前に着地して。

「沈めエ！」

思いつきり踏みつけたと同時に火柱が上がる。それがとどめになつたみたいで、ぶにが動かなくなつた。そこから、アルムがさつきより大きい玉を取り出した。

「随分大きいな。体が大きい分だけ玉も大きくなつてたか。ライザ、終わつたぞ」

「…あ、うん！」

：多分初めて見る、魔力も使つて本氣で戦つてるアルム。レントとの手合わせの時よりも荒っぽくなつてる気がする。

アルムの優しさから恋が始まつたのに、荒っぽいアルムもそれはそれでいいって思つちゃうの、重症かなあ。

「そろそろ鞄も限界だし、このあたりの素材を探つたら終わりにするか」

「おつけー！さーて、戻つたらバリバリ作るぞー！」

まずは緑色以外の中和剤、爆粉うに、グラスビーンズ、そしてあの時アンペルさんが使つてた爆弾【フラム】！どれだけいいものが出来上がるか、楽しみだなー！

：そんなことを考えてたら帰り道でエルちゃんと遭遇した。

「あ、アルム兄！と、こんにちはライザお姉ちゃん！」

「ここにちは、エルちゃん！」

「外に行つてたの？もしかしてデート？」

いきなりそんなことを言われてあたしは固まつた。：鍊金術の素材集めの為に2人きりで島の外まで出かけてつて、言わせてみたらそうじやん、これデートみたいなものじやん!?やつてることに色気がま

るでないけど！つていうかもしかしてレントとタオが言つてた色々
頑張れつてそういうこと!?余計なお世話よ!!

と、とりあえずアルムならこういう時いい感じに切り返してくれる
はず…!

「…そうだな。ついでに言えば、誘つたのは俺だ」

「おー！」

…え、あの、なんか予想外の展開…

「周りにはまだ内緒で頼む」

「うん…良かつたね、お姉ちゃん」

「え、あ、うん…」

今の今までデートみたいなものだつていう意識すら無かつたなんて言えない…

走り去るエルちゃんが見えなくなつてから、アルムが口を開いた。

「…言われてみたら確かにデートだな、これ…」

「あれ!？」

アルムも気づいてなかつたの!?さつき「最初からそのつもりでした
が?」みたいな感じで言つてたよね?!

「…その、なんだ」

「な、何…?」

「…また2人で行くか?」

「…は、はい…」

しかも今度は正真正銘のデートのお誘い!?いや、その、嬉しいけど

それ以上にちょっと恥ずかしいというか混乱するというか!

ああもう、こうなつたら手当たり次第調合してこの恥ずかしさだけ
でも忘れよう!

「一通り作つてきましたあ！」

とりあえずスッキリした!調合中ずっとアルムに隣で見られてて
恥ずかしかつたけど、やつてるうちに調合に集中できるようになつて
きた。

…ある意味調合の訓練になつた気がする。

「なんだ、妙に勢いが良いな。…ほう、入門書に書いてあるものは全部作れたようだな。関心関心。…そうだな、そろそろこれを渡しておこう」

そういうてアンペルさんがくれたのは…なんだろう、宝石…じやないよね?なにか変な模様みたいなのがあるけど…

「コアクリスタル」と言う。戦いで使う物をクリスタルに組み込むと、その力だけを取り出し、使うことができる

「…力だけ?組み込んだものは無くならない、ということですか?」

「何それ、まるで魔法みたいじゃん!」

「ああ。その魔法みたいな力がコアクリスタルという【古式秘具】の力だ」

「古式秘具…?」

「昔の凄い鍊金術の道具の総称みたいなものだ」

「そんなものを俺達が貰つていいんですか?」

「余つたものを分けているだけだ、これは比較的よく見つかるからな。さて、ライザが作ってきた道具を早速組み込んでみると良い」

よーし、早速組み込んでみよう。1つ、2つ…3つ。うん、3つまでできるね。アルムは…同じ3つだ。

「鍊金術で作つた道具は冒険の助けになる。その力をより引き出す為にも、コアクリスタルを存分に活用するといい」
「解りました!」

ふふ、次に対岸に行くときに早速試してみなくちゃ!

…因みに、今日のアルムとのことをレントとタオに話してみたら。
「進展したのは良いけど、結局お前からは動けてねえんだな」
「つていうか大体エルちゃんのお陰だよねこれ」

そんなことを言われた。アンタラも恋してみたら踏み出せない気持ちが解るわよ!

それぞれの形で、それぞれの進歩

「…」

「アルム、レント。大丈夫？」

「…全く」

「見ての通りだよ…」

仰向けて大の字になつている俺と、座り込んでいるアルムに、ライザが声をかけてきた。

今日俺はリラさんに実戦形式で稽古をつけてもらつていた。アルムと時々やつてている手合わせの事を話したら、なら私ともやつてみるか、と。

リラさんが見ただけで強いのは解つたが、実際どれくらいかまでは読めてねえ。俺の師匠になつてくれた人がどれだけ凄いのか体で理解するいい機会だ、と気合を入れて臨んだ。

結果は勿論、いいようにやられまくつた。動きが速すぎて、頭で来ると解つても体が追いつかない。先を読もうにもそんな暇すらない。何もできなかつたとしか言えなかつた。

で、俺が疲労でぶつ倒れかけたタイミングで偶々近くにいたアルムが来て、

『ドライブスク』

コアクリスタルに組み込んだ道具で俺を回復してきた。有難えけど、先に言つてくれよ。微妙な味がするんだよそれ：

そこからはアルムも誘つて、2人でリラさんに稽古をつけてもらつてたんだが、まあボロボロになつた。何度もドライブスクで体力を回復させて挑んだんだが、それでもリラさんには冷や汗1つかせられなかつた。強すぎんだろ…

で、限界にきたタイミングでライザが来た。何か青いものを脇に抱えてるけどなんだそれ？

「それは？」

「これ？　ふにまくら？」

「…ふにまくら？」

「アンペルさんに新しいレシピ貰って、レシピ変化っていうのも教わったんだけど、青ぶに玉から何か作れないかなーって考えてたらふとレシピが浮かんだの。ふにふにしたひんやり枕よ！」

なんか変なもん作つてんな…子供は好きそうだけどよ。

「で、これ今度クラウディアのところに遊びに行くときに持つておこうかなーって思つたから、先に寝心地だけ誰かに聞いてみようかなって。というわけでレント、感想お願ひ！」

「うおいきなり頭持ち上げんな！…やべえ、メチャクチヤ寝心地良いぞこれ。超落ち着く」

「ふふふ、あんたからそんな素直な感想が出るなら成功ね！」

これ結構売れるぞ。暑くなつてる今の時期は特に。すげえもん作つたな…

「…俺には無いのか」

「あー、えつと、1つ分しか素材無かつたから。…代わりつて言つたら、なんだけど…」

そう言つてライザが、アルムの近くで正座した。そして自分の膝をしきりにポンポン叩き出した。…これアレだよな、膝枕だよな。

「…」

驚いてるアルムと、顔を赤くしながら笑顔で「ここだよ！ここだよ！」とも言いたげに膝を叩き続けるライザ。いや、確かに進展させろとは言つたけどよ、少ないけど人いるぞここ？極端から極端に走つてないかお前？

「あー、なんだ。…失礼します」

「うつ！」

観念したアルムと歓喜したライザ。…アルムも最近隠さなくなつてきたつづーか。最近いろんな人から「アルムつてライザの事好きなの？」みたいなこと聞かれるしよ。

「なんだ、あの二人は番か何かなのか」

「今は違うつすけど、将来的には多分」

「つか番つて、リラさんも随分固い言い方するな。

「さて、このまま二人の戦い方について話すが…レントは肉体の頑強

さに頼りすぎている節があるな。そして、反応は良いが動きが大きすぎる。先を読む力を養うことと、可能な限り小さく動くことで体への負荷を減らすことを重視しろ」

「うへ、あれでもまだ大きいのか：気を付けます」

「アルムは…恐らく、受ける事を一切考えていないだろう。相手の攻撃は回避して反撃するかそのまま迎撃するか。とにかく、攻撃するごとに全神経を注いでいる」

「…どちらかと言うと、気が昂りすぎて受けの意識がなくなるというか」

「受けを覚えるか今の戦い方を貫くか、どちらにしろ冷静さは必要だ。感情に振り回され過ぎるなよ」

「…頑張ります」

やつぱりリラさんから見るとアルムでもまだまだなんだな。本当に遠い背中だぜ。

「さて、今日はこれで終わりにしよう」

「分かりました！…で、ライザ、これどうするんだよ？」

「あ、それ？持つて帰つて良いわよ」

「おう。使わせてもらうわ」

コイツがあれば今夜からいつもよりぐつすり眠れそうだぜ。

「…俺達も帰るか」

「うん。…あ、えつと」

「何だ？」

「…どうだつた、かな？あたしの膝枕」

「…黙秘する」

「えー」

…なあ、お前らそれで本当に付き合つてないのか？

次の日、過去最高に近いスッキリした朝を迎えた俺は、いつものメンバーを集め旅人の道に魔物を倒しに行く提案をした。リラさんの教えを形にする為と、4人での連携を覚えるためだ。

まず鍊金術で作ったものは無しで、俺達自身の力だけでやつてみた

んだが…

「このつ！」

「おりやつ！」

「レント！」

「任せろ！ タービュランス！」

アルムが蹴り飛ばしてきた魔物を、俺が止めを刺す。

「アクセルダイブツ！」

「黄昏の炎！」

俺が打ち上げた魔物をタオが炎で追撃、そして同時にとどめの一撃。

「新技！ シヤイニートレイル！」

ライザの範囲攻撃の中に魔物を蹴りこむアルム。

「縛術・影縫い！」

「おおおおおおおおッ！」

タオが動きを止めた魔物に、アルムが風を纏つた百裂蹴りを放つ。

「コーリングスター！ いっぱい持つてけ！」

「ソリッド・ブレイクツ！」

ライザが連続攻撃で相手をひるませ続け、そこに俺が大技を叩き込む。

「…うん」

「なんていうか…」

「…おう」

「ああ…」

「「「連携、できてるな」ね」

実はお前ら打合せしてただろ？ つてレベルで連携取れてたな。連携を意識したの、これが初めてなはずなんだがな。全員アイコンタクトでポジションを入れ替え、その場その場で技を組み合わせて確実に魔物を倒していく。10年来の幼馴染たちの絆はこんなところでも

変わらないってか。

「これなら心配いらないわよね！じゃあ…」

「おう、コアクリスタルも使つていこうぜ」

「ライザがどれだけのものを作つたか、楽しみだ」

「向きとか間違えないようにしないとね…」

俺は一つしかセットできなかつたからあまり活用はできないかも
しれないけどな。ここはアルムとライザの独壇場だろうな。

「さーて、まず…うにつ！」

近づいてきたミニワイバーンに爆粉うにの力を使う。すると、大量の針が凄い勢いで飛び出して、ワイバーンの胴体をハリネズミにし、翼膜をボロボロにした。…えげつねえ。

「…アルムが想像だけで引いちやうわけだよ、こんなの」

「絵面的にはフラムの方が気が楽かもしねないな…」

そつちもそつちで魔物が吹つ飛ぶから、えげつなくないはずはない
んだけどな。

「でも、爆粉うにでミニワイバーン相手にこれだから、もう少し強い魔
物じやないとフラムの効果がわかりづらいんじゃないかな？」

「それなら向こうに大きいオオイタチがいたぞ」

「なら、そいつに試してみようぜ」

「…」
といふわけで見つけたデカいオオイタチ。オオイタチマザーつて
言うらしいな。

「よーし、じゃあ…フラムッ！」

オオイタチマザーを爆発が襲う。相当堪えたみてえだが、まだ倒れ
なさそうだな。

「なら、もう一つ持つて行け」

そこに間髪入れずアルムがフラムを使う。一発目なら流石に満身
創痍、息も絶え絶えつて感じだな。

「次で終わりだな」

「じゃあ、一緒にやろう！せーの、」

「フラム」「フラムツ！」

アルムとライザの同時フラムで、オオイタチマザーは完全に動かな

くなつた。

「ふふん、流石私！」

「かなりの威力だな。これで探索も大分楽になる。…まだ続けるか？」

ならコンバートしておくが」

「頼むぜ。さあ、今度は技も絡めながら行くぜ！」

「そろそろ本の解読を進められそうだから、程々で切り上げてよ？」

この後、クリスタルのエネルギーを使い切るまで続けた。タオからちよつとだけ文句を言われた。悪い悪い。

「…ふむ」

先日、アルムが私のところを訪ねてきた。内容は二つ。1つ目は「読めないなりに例の本の内容について推理したことがあるので、その内容を聞いてほしい」、2つ目は、「クーケン島についてとある秘密を知っている。もしかしたらアンペルさんの目的に関わりのあることかもしれない」。どんな内容なのかと期待して聞いてみたら：成程、かなり興味深い内容だつた。

まず1つ目。「クーケン島に置いてある本だから、クーケン島に関する何かしらが書いてあるかもしれない」「読めない文字で書かれていることから、何かしら秘匿すべき知識ないしは技術に関する本かもしれない」「途中にある図は、何かしらの操作方法や部品のような物が描かれている」。そしてそこにアルムの妹のエルが思い付きで言つた「クーケン島が人工のもの」と、「それなら管理が必要」という予想を組み合わせると「専門的な技術が必要な、クーケン島の説明書の可能性がある」というものだ。

正直、よくそこまで組み立てられるものだと思った。特にいきなり「人工島」という予想を出してきたエル。物語を読んでいて思ついた事らしいが…普通は結びつけないだろう。

因みにエルは少し前1人で私達を訪ねてきている。リラを羨ましきに見ていたが…まあ、そういう年頃か。因みに鍊金術についても少し教えたが、残念ながら才能は無かつた。もし才能が有つたら、その

発想の結びつけの力は大いに生かせただろうに。

：まあ、これだけなら「やけに具体的だが、妄想レベルと本人たちも思っている突飛な推理」ですむ。問題は、2つ目。クーケン島の秘密だ。

それは、クーケン島が本当に人工の島で、しかも浮島であるということ。なんでも実際に潜つて確かめたらしい。

そして、その話を聞いた途端私は確信した。——大当たりだ、と。まず間違いなくこの島は鍊金術で建造されている。そして、島に残されているクリント王国の遺跡の数々。つまりこの島は、「クリント王国の鍊金術で建造された人工の浮島」の可能性が非常に高い：とうか、もうそう断定していいだろう。

そして、この島には【枯れた噴水】がある。何故か形だけあり、水を吹き出さない噴水だ。それが本当は、噴水としての機能を持つものだつたとしたら？ そう問うと、その可能性にはアルムもたどり着いていたらしく、すぐにこう答えた。「この島が故障若しくは燃料不足による機能不全に陥っている可能性がある」。恐らく本来は、海水をくみ上げて濾過したものを噴水から出していたのだろう。ただのオブジェの可能性も否定はできないが、わざわざそんなものを作る必要もないだろう。

ならば、今の水源は？ これはアルムも解らなかつたようだが……アルムには話していないが、私には確信がある。それは恐らく、私たちの目的の一つ。

噴水が一つだけ機能しているなんてことはまずないだろう。ならば、外付けの水源が必要になる。それが可能なものは恐らく古式秘具、それもかなり高度なもの。島1つの水を貯える程の水量を産み出せる古式秘具。私が思いつく限り、それは、リラの……

「随分と考え込んでいるな」

「ああ、あまりにも興味深い話が聞けたからな。……もしかしたら、今回の調査でお前たちの悲願が成るかもしけん」

「……そう、か」

私がそういうと、リラが目を瞑る。恐らく、故郷に想いを馳せてい

るのだろう。：クリント王国の鍊金術士により水を奪われ、そのせい
で「奴ら」の侵攻を許し、荒廃してしまつたという生まれ故郷に。

一鍊金術士として、何度も聞いても腹立たしい話だ。

「もう少しで、我らオーレン族の故郷に、水が：」

：叶えてやらねばな。普段つつけんどんなところがあるが、誰よりも戦い続け、故郷を想う、こいつの願いを。

少女は友を得て、そして勇気を得る

「クラウディアー！遊びに来たよー！」

「…声が大きい。それともう少し遠慮しろ」

俺達は今日、クラウディアの家の前に来ていた。以前ライザがした遊びに行く約束を果たすためだ。

ただ、クラウディア個人とは友人になつたが、バレンツ商会の人達はクーケン島にとつては客人である。なので、あまり無礼なことをしてはいけない。慎重かつ丁寧に事情を説明してお邪魔させてもらおうと思つていたのだが…ライザがいきなり気安さしかない発言をした。しかも中々の大声で。…正直、少し頭を抱えた。

「まあ、ライザにマナーとかは期待してなかつたけど…」「予想はしてたが、マジでやるとはなー」

「ひどいわよアンタら！」

「流石にこれは甘んじて受け入れてくれ」

「うー、アルムまで…」

その辺りはたとえお前相手でも甘くはしないぞ。ルベルトさんは俺達を娘の友人と見てくれているみたいだから、その辺り甘めに対応してもらえるかもしねいが…そういう人達ばかりではないからな。「あ、みんな！来てくれたんだね！…ライザはなんで落ち込んでるの？」

「ああ、少し説教をな」

「お説教？…もしかしてさつきのこと？」

「ああ。幾ら友達相手とはいえ、流石に初めて訪ねる家にあれは少しひな…」

「それは…そうだね」

「クラウディアまでえ…」

流石に商人の娘だからか、その辺りの意識はしつかりしている。…

そのせいでライザがさらに落ち込んだが。

「それじゃあ、こんなところで立ち話もなんだからみんな上がつて？」

「「お邪魔します」「お邪魔します…」

…流石に落ち込み過ぎじゃないか？

「えつと、それじゃあ…ライザ、何か持つてきててくれたみたいだけど、それは？」

「…え？ ああ、これ？」

クラウディアに話を振られ、ライザが持つてきていた包みを解いた。中に入っていたのはぷにを象ったクツーションのような物が2つ。ぷにまくらだ。

「鍊金術で作つたの。ぷにぷにしてひんやりしてゐるから今の時期枕としていいんじゃないかなって思つて。寝心地は保証するわよ！」

「おう、マジですげえぞそれ。もう他の枕使えなくなるレベルだ」

「そなんだ：ありがとう。見た目も凄く可愛いね」

「2つ目の方はルベルトさんに渡してくれ。立場上気苦労とか多いだろうから、こういうもので少しでもストレスを軽減できればと思つてな」

「ルベルトさんみたいな人がこれ使つてるところ、ちよつと想像しづらいけどね」

「ふふつ、そうだね。でも、喜んでくれると思うよ」

「うんうん、それならあたしも作った甲斐があるつてものよ」

とりあえずライザの機嫌は戻つたな、良し。

「ねえ、鍊金術で他にどんなものを作つたの？」

「えーっと、塗り薬とか丸薬とか、あと爆弾とか？あの時アンペルさんが使つてたやつね」

「採取用の斧や鎌もだな」

「うにを爆発させて針を飛ばす奴も作つてたよな」

「ここまでいろいろ作れると、鍊金術に作れないものなんてあるのかなって思うよ」

正直、生き物でなければ大抵のものは作れると思う。当然、鍊金術士の腕次第だろうが。

「なんだ…えつと、鍊金術の素材集めつて、冒険しながら探つてるの？」

「え、聞きたい!? 聞きたいの!?」

「うわ、ライザのテンションがいきなり上がった…」

「勢いあまつて話盛つたりしねえだろうな…」

「…そくなつたら俺が訂正する」

そもそもまだ始めたばかりだし、冒険とまで言えるほど遠出もしてないしな…

「——つて感じで、あたしたちは順調に冒険を進めてるのよ！」

「ふふつ、そうなんだ」

特に変に話を盛ることもなく、始まつたばかりの冒険譚を嬉しそうに話すライザ。それを聞いているクラウディアは嬉しそうなライザにつられて笑っている。

「…いいなあ」

聞こえてるぞ、クラウディア。…やはり羨ましかったみたいだな。

「…あ、そろそろいい時間だね」

「え?…ホントだ。じやあ、今日はここまでかな」

「うん。クラウディア、次はあたしのアトリエに来てみない?」

「いいの?じゃあ:明日早速お邪魔しようかな」

「午前と午後のどつちだ?ついでだし俺の妹も呼びたいんだが」

「えつと、じゃあお昼食べてから行くね」

エルもクラウディアに会いたがつていたしな、いい機会だ。

「ふつふつふ、クラウディア君。我がアトリエにようこそ」

「ようこそ!」

「ご自慢のアトリエにお招きいただきありがとうございます。鍊金術士ライザリン・シユタウト様」

お昼を食べてから、フルートのケースを持って早速約束通りライザのアトリエに向かつた。といつても、ライザが改造した屋根裏部屋に鍊金術のための釜を置いただけのものみたいだけど…いい反応を期待してくれるみたいだし、応えなくつちゃね?

それと、隣で一緒にポーズしてるのがアルム君の妹？すっごく可愛い。

「そうそう、こういう反応が欲しかったのよあたしは！それに比べてレントとタオは…」

「逆に聞きてえんだけどよ、俺らのあんなかしこまつた態度見たいかよ？」

「…違和感すっごいわ」

「っていうか、クラウディアも結構ノリ良いんだね」

「だつて、楽しそうだつたから」

「アルム兄も「楽しいのは良い事だ」ってよく言つてるよね」

「楽しさっていうのは要するにやり甲斐だからな。真面目なことにしろ、こういうノリにしろな」

楽しさはやり甲斐…うん、凄くわかる。私もフルートを吹いてるときは凄く楽しいから。…最近は、ちょっとだけ寂しさとかも混ざつちやつてるけど。

「…つと、エル。自己紹介だ」

「おつと。初めましてクラウディアさん、エルマリア・レーゼンです！エルつて呼んでください！」

「うん、宜しくねエルちゃん」

すっごく元氣でいい子。私もこんな妹欲しかつたなあ。

「えつと、それでクラウディアさん、その箱は？」

「これ？ちょっと待つてね…」

そういうつて私はフルートを取り出す。…うう、知らないうちに演奏を聞かれてた時の恥ずかしさがよみがえってきたよ…

「笛！」

「うん、フルートっていうの」

「おー…」

…すっごく目をキラキラさせて見てる。これ絶対に聞かせてつてお願ひされるよね…

「一回聞いたことがあるけど、すっごく綺麗だったわよー」

「ホント!?」

ライザ!? そういうことと言わないでよ、何かエルちゃんの目のキラキラがこつちに飛んできてるような感じがするし、聞いてみたいですオーラが溢れるよ!?

…うう、こんな目で見られたら断れないよ…

「え、えっと…じゃあ、一曲…」

「おー！」

「お、またあれが聞けんのか」

「違う曲かもよ? どっちでも聞いてみたいけどさ」

「じゃあ皆早速椅子に座つて聞こう! エルちゃんはあたしの膝の上ね?」

「…あー、なんかエルがすまん」

「だ、大丈夫。…すうー…」

すつごく緊張するけど…うん、期待してくれてるみたいだし、頑張つて演奏しよう。折角だし、前とは違う曲。——ちょっと人を寄せ付け難いところがあるけど、優しくて頼りになる「騎士」をイメージしたこの曲で。

「…では」

「…前のとは全然違う曲だつた。こんなのも吹けるんだねクラウディア…凄い」

「なんつうのか、力強いつづうか…やる気が出てくる感じの曲だつたな」

「うん。胸の内が熱くなるつていうか

「キレイなのにカッコよかつた!」

「その内、楽器の1つでも覚えてみたくなつたな」

「なんとか奏で切れた…上手く行つて良かつた。みんなからの絶賛

も、前よりは素直に受け止められそう。…なんか、アルム君だけちょっと方向性が違うような気がするけど。

「もう一曲聞かせてもらつてもいいですか!?」

「エル。…あー、すまんな」

アルム君がエルちゃんを止めようとするけど…なんだろう、みんな

の前で2回も演奏したからかな。恥ずかしさより、演奏したい、期待に応えたいって気持ちの方が強くなつて。吹っ切れたつていうのが一番近いのかな。

「大丈夫だよ。…」の前してくれたアンコールにも応えなくちゃだしね？」

「…あれは忘れてほしかつたんだが」

「無理だよあんなの。それに、最初から聞いてたわけじゃないでしょ？」

「言われてみりや、あの時は途中からだつたな」

「吹いてる人を探しながらだつたから、最後の方以外はちゃんと聞けてないしね」

「うん。だから今度は最初から。聞いていいってね？」

「うん、聞かせて！」

「聞かせて下さい！」

「ありがとう。では…」

友達の期待に応えるのが、友達に褒めてもらえるのが、こんなに嬉しい事なんて知らなかつた。友達といふ時間つて、凄く楽しい。

この素敵な友達と、もつと一緒の時間が欲しい。だから…：

「…すつげえ」

「なんか、ちよつと感動しちゃつたよ」

「…言葉が出ないな」

「妖精さんみたいだつた…」

「…もう、綺麗としか言えないよ、あたし」

「ありがとう。…ねえ、さつきの代わりつてわけじやないんだけど、ちよつとお願ひしたいことがあるんだ」

「なに？」

「私も、冒険に連れて行つてほしいな」

「歩、踏み出そう。お父さんは、もつと心配をさせてしまうけど…みんなと一緒に行きたいって、そう思つたから。

新たな仲間、新たな真実

「失礼します、ルベルトさん」

「ようこそ。：早速だが、話をするとしよう」

俺達は今日、ルベルトさんからバレンツ邸に呼び出された。クラウディアが、俺達と一緒に冒険に行きたいと言いだした件についての話がしたいそうだ。：こちら側は何故か俺が代表としてテーブルについている。恐らく交渉事になるだろうからと任されたが、俺にそういうことが向いているとは思えないんだが…

「はい。まず、俺達の方ですが：ルベルトさんがNOと言わない限り、こちらにクラウディアの提案を断れる理由が無い、というのが結論です」

「ほう、具体的には？」

「危ない」と言えば「それはライザ達も同じだったはず」と返され、「最低限護身はできるのか」と聞けば「魔力なら使えるし、戦い方も考てる。足りなかつたら教えてほしい」と言われました。ライザとタオにも「いざとなつたら助けるから2人でまずやってみてくれ」といつた感じでやつたので…」

〔成程〕

「そして「俺達は一応親の許可を得ている」と言つたら「じゃあ私も許可を貰えれば大丈夫だよね？」と」

「…そうか」

ルベルトさんが目を伏せる。：何を考えているのだろうか。百戦錬磨の商人の内心なんて俺には読めるわけが無いが、気になるものは気になつてしまふ。

「では、こちらの結論を話そう」

「はい」

「クラウの提案を断れる理由が無い」

「…ん？」

…さつきも聞いた言葉だな、俺の口から。「断る」でも「断る理由が無い」でもなく、「断れる理由が無い」？どういうことだろうか。

「クラウガこうもはつきりと我儘を言うのは初めてといつていいくらいのことだ。だから少しくらいは聞いてやりたかったのだが…流石に内容が内容だ。正直、断るべきだと思った」

「…そう、でしようね」

俺達のようにああもあつさり許可がもらえたのは、間違いなくレアケースだろう。

「だが娘の真剣な顔をみれば、生半可な思いでは無いことは解つた。娘にそこまでの顔をさせる君たちはどんな人物なのか？それを詳しく知るべきだと思った。そこで私は、君たちの評判を島中に聞いて回つた」

「…」自分で、ですか

「商人は自分の足で動いてこそだ。受け身では成らん」

…いろんな道に通じそうな言葉だな。覚えておこう。

「それで、聞いてみたが…まずはライザ君」

「あつ、はい」

「以前はどんでもないはねつ返りだつたが、ここ最近は家の事を手伝うようになり、イタズラぶりも鳴りを潜めるようになつたと」

「あー、えつと、そうですね。色々あつて、ちょっと自分の行動を省みようかなと思つて…」

「妙に主婦の皆様の評判が良かつたが…」

「あたし、見ただけで物の品質がなんとなく解るんです。それをお使いの時とかに活かしてたら、コツを教えてほしいって…」

「ほう。興味深い才能だな」

商人としても役立つ才能だろうな。…ああそうだ、一応これも伝えておくか。

「クラウディアから聞いているかもしませんが、پにまくらの制作者です。「友達のお父さんにも何か送つた方がいいよね！」と言つていたので、俺がアレがいいだろうと提案しました」

「聞いているよ、鍊金術というもので作つたということも。…素材が手に入るのなら、冬用もお願ひしたいところだ」

「分かりました！」

気に入つていただけたようで、何よりです。

「次はレント君。以前は父親が原因で濡れ衣の悪評が広まつていたようだが…アガーテさんを始めとした護り手の方たちからの評価が高い。真っ直ぐな性格と、鍛錬を欠かさない眞面目さが理由だそうだ」「一日たりとも無駄にしたくなかっただけつすけどね。俺の目標はある塔なんで」

「アガーテさんが言うには「私が追い抜かれる日もそう遠くはない」だそうだ」

「…言つてくれるぜ、姉さんも。ここまで言われちゃ、期待に応えなきやな」

：レントが一番最初に目標にした人だからな、アガーテさんは。そう言われば嬉しいのは当たり前か。

「タオ君は…主にライザ君たちのストッパーとして認識されていたな」

「止めることができたとは言い難いですけどね…」

「そのようだ。だが、最近の何かに真剣に打ち込んでいる姿に好感を抱いている者もいたな。以前の氣弱そうな姿とは別人のようだ、といふ声もあつた」

「そ、そんなに表に出てたんだ…なんか恥ずかしいや…」

今はちゃんと俺達のストッパーだと思う。危険に対しても敏感だからな。

：しかし、本の解説の真剣さがそこまで滲み出てるのか。長年

の目標だから解らないでもないが。

「そしてアルム君、君だが：幼少期から家族の手伝いを積極的に行つてているそうだな。しかもそれを当たり前と認識しているとか」

「はい。俺にとつて家族はそういうものです」

「そして戦いに関しても、アガーテさんが高く評価していたよ。魔物相手なら、護り手の誰も敵わないだろうと」

「…そうですね、魔物相手なら魔力を抑える必要もないのに、火力で力押しが出来る俺の方が上になるかもしません」

「更に友人たちも大切にしており、彼らの夢の手伝いもしているとか」

「ええ、親友ですから」

「…それと、あんないい子が懷いている兄が悪い奴が訳が無いだろうという声もあつた」

「…それ、どちらかと言えばエルの評価では？」

「凡そ3割ほどの人が言つていたな」

「我が妹ながら凄いな…」

最後は何かが違うような気がしたが：俺に対しても概ね高評価の様だ。

「そういうわけで、周りからの君たちの評価を聞いたわけだが：好評はあつたが、悪評らしい悪評は殆どなかつたな。正確には過去のものになつたというべきか」

「…それを知つた、あなたの判断は？」

「話の流れから、解り切つてはいるけどな。

「もう一度言うが、断れる理由が無い。力も心も申し分ないし、何よりクラウが心から信じているのだ。…クラウを守つてくれると、守り切れるだろうと思つた」

「では…」

「——クラウ」

「うん」

「遅くなるなら、出かける前に先に言いなさい。…それと、怪我だけはしないように」

「くうん！」

…俺達の家族と、同じことを言つてゐるな。…この親も、子供を心配する気持ちは同じなんだろうな。

「なんとなく解つてゐると思うが、見かけの割にお転婆な子だ。無茶をしそうだったらすぐに止めてほしい」

「大丈夫つすよ。そんな感じの奴と10年くらいつるんできてるんで！」

「ちよつと、それあたしの事じやないでしようね？」

「自覚あるんじやん」

「何よー！」

「もう、そんなこと言つちゃ駄目だよ二人とも」

急にいつもの調子で話し始める3人と、レントとタオを注意しながらも楽しそうな顔をしているクラウディア。馴染むのが早いな。

「…すいません、最後に騒がしくして」

「いや、子供たちはそれくらいの方が丁度いいだろう。…娘に、楽しい思い出を。頼んだよ」

「――はい」

こうして、俺達の冒険に新たな仲間が加わった。

「ふむ、笛の音に魔力を乗せて相手に送るのか…面白いな」

「今はまだ難しいだろうが、将来的には敵に囮まれても単独で対処出来得る力になるな」

冒険に連れていくならまず戦い方を覚えてもらおうつてことで、僕たちはクラウディアを連れてアンペルさん達のところに来ている。それで、クラウディアの戦い方を見てもらうことにしてたんだけど…結構高評価みたい。

「やり方次第では味方の強化も出来そうだな。攻撃と支援を同時に見える後衛…お前さんはそれを目指すべきだろうな」

「解りました！」

「よし、アルム、レント。訓練を手伝え。お前達の仲間だ、お前達が面倒を見る」

「はい」「解りました」

「あたしも手伝います！」

「あ、僕はちょっとアンペルさんと話がしたいから」

「ほう、私ど？」

ちよつとずつだけど、この本の内容も解つて來た。アンペルさんの目的に何か関係ありそうだつたし…相談してみよう。

「よーし、じゃあクラウディアと一緒に冒険するためには頑張るわよー！」

「ふふ、お願ひね、みんな」

そう言つてライザ達は外に出て行つた。…うん、何から話そつかな。

「えつと、それでこの本の内容なんんですけど」「どれくらい読み解けた?」

「…表紙と、ところどころに【クーケン】って読めるところがあつたのと、何かの動かし方の説明をしているような箇所がいくつかありました。具体的にはまだ解つてないですけど…」

「…そうか」

「アルムから、僕たちの「推理」についてアンペルさんに話したつて聞きました。…その内容が、本当に合っているんじやないかって思い始めてます」

「だろうな。そこまで情報が揃つていて「クーケン島に何も関係のない何かの説明書です」などというのは考えにくいだろう」

だとしたら、あの時の僕の最悪の想像も、現実のものになつているかもしづれないってことになる。何せ、人工物の説明書が読まれることもなく長い間地下で埃をかぶつていたんだ。整備なんてされてるわけがないし、燃料の補給も出来やしない。自動で補給できたとしても、その機能が壊れている可能性がある。

「…しかし、短期間でそこまで読み解けるようになつてたか」

「はい。ずっと僕の目標だったの、達成にどんどん近づいていることがすごく嬉しいんです」

「そこまで喜んでもらえるなら、私も教えた甲斐があるつてものだ」
ライザも言つてたけど、凄くいい人だよねアンペルさん。

「そうだな…なら、こちらも1つ教えておこう」

「何ですか?」

「クーケン島を作つた技術は、鍊金術である可能性が高い。いや、ほぼ確定だな」

「…え」

クーケン島が、鍊金術で?

「クリント王国は、実は鍊金術で繁栄していた国でな。そんな国の遺跡が大量にある人工島ともなれば…そういう結論にたどり着くだろう」

「…じゃあ、クーケン島はある意味、それそのものがクリント王国の遺

跡つてことになるんでしょうか」

「確かにそう言えなくもないだろうな」

なんか、凄い話になつてきちゃつたなあ。今まで鍊金術の事を知らなかつた僕たちが、実は鍊金術のお陰で生活できてたなんて。この島そのものが、1つの遺跡みたいなものなんて。

：一冊の本を読み解けるようになつてただけで、こんなに凄いことが知れるなんて…！

「…みんなには、僕は先に帰つたつて伝えて下さい」

「他の本も読み解きたくて、いてもいられなくなつたか？」

「はい！」

「そうか。あいつ等にはちゃんと言つておくよ」

「有難うございます！」

楽しい。新しいことを知るのが、そこから新しい知識に繋がるのが、凄く楽しい！さあ、次はどの本にしようかな！

場所も道具も、次のステージへ

「お前達には、この鉱石を探つてきてもらう」

俺達は今日、リラさんに呼び出されて集まつてゐる。なんでも船着き場の近くに手ごろな場所を見つけたから、俺達の腕試しやクラウディアの実戦投入、2人の調査の手伝いができるかどうかのテストをそこでしたいらしい。名前は…水没坑道か。

そしてそのクリア条件として見せられたのが青い鉱石だ。…アマタイト鉱石とは違えな。

「今のお前たちの力、見せてもらうぞ」

そこまで言われてちややる気も出るつてもんだ。絶対にクリアしてやるぜ！

「まず確認するべきは…クラウディア」

「うん。戦いになつたら私は敵から距離をとつてみんなの支援をすればいいんだよね？」

「ああ、それでいい。…ライザ」

「えつと…結構奥に行つたり…後、強い魔物と戦わないと採れないとかあるかも」

「そうだな、可能性はある。コアクリスタルは温存する方向で行こう。
…タオ」

「そこつて確か、魔石の鉱山跡なんだつけ？石の魔物とかいたりしないよね…」

「だとすると俺とレントの攻撃は通りにくいかもな…さつきはコアクリスタルは温存すると言つたが、俺とレントはむしろ積極的に使つていつた方がいいかもな」

「…おう」

「…どうした、なんだその眼は
いや、なんつうか…」

「お前昨日、自分はリーダーとかそういうガラじやないつつってなかつたか」

「ああ」

「このメンツで1番リーダー向いてんの、間違いなくお前だよ…」

「そうか？」

他に向いてんのが精々ライザくらいってのもあるけど、今みたいな確認作業を率先してやれる奴がリーダー向いてねえわけねえだろ。ライザはとりあえず進む奴だし。

「ふふ、じゃあ宜しくね。リーダー」

「揶揄わないでくれ、クラウディア」

「とりあえず僕は魔物に近づかなくていいよねリーダー？」

「近づけと言われても拒否するだろうが、お前は」

「リーダー！うまく行つたら何かご褒美とかありますか！」

「試験官はリラさんだからそつちに言つてくれ。俺も審査される側だ」

「無い」

「だそうだ」

「えー」

「…レント、お前の一言のせいで、みんなが俺を一斉にいじり出したんだが」

ホント、どいつもこいつもノリがいいな。この流れ、俺も乗らなきゃ嘘だぜ。

「悪かったな、リーダー」

「蹴るぞ」

おい俺だけストレートに暴力が飛んでくるんだが!?女子2人は兔も角タオとの差は何だよ!?

「ふむ、チームワークは問題なさそうだな?」

「気が抜けすぎ…いや、こいつらはこれくらいが丁度いいのかもしれんな」

と、とりあえず蹴られる前にさつさと出発だ!

「キレイ…」

「船着き場の近くに、こんな場所があつたんだ…」

水没坑道に着いたら、女子2人が中の光景に見とれていた。確かに

綺麗だとは思うが…感動まではいかねえな。

「魔石の光か。とりあえず、明りの心配はしなくて良さそうだな」「でも、どこかに暗いところもあるかも。そういうところに入り込まないよう、慎重に行こう」

こつち2人は状況確認。そうだな、光が無いところじや戦いも探し物も出来やしねえ。

「よし、新しい鍊金術の素材集めと試験達成のために、行こうか」「おー!」「うん!」「早く終わらせよう」「おうよ!」

やっぱお前、リーダーだつて。

さて、そんな感じでクラウディアを連れた初めての冒険が始まつたわけだが…

「あ、きのこ。採つていいかな?」

「ああ。気を付けろよ」

「うん。…きのこつて、丸っこくてかわいいよね」

…なんか、いつも通りな感じだな。

「…緊張とかしてねえんだな?」

「え?うん。だつて、みんな頼りになるつて解つてるから」

「ふふふー、ありがとね」

信頼されてんなあ、俺達。いや、だとしてもここまで落ち着いてんのはすげえけどよ。結構冒険向けの性格してんだな…

「凄いなあ、クラウディアは。僕は今でも緊張してるよ…」

「お前はむしろそうしてくれ。誰か一人が危機感を持つてくれているだけで大分違うからな」

そういう意味じやタオも大事な役割持つてんだよな。一番早い引き際の提案役つつーのか。

「さて、じゃああのゴーレム達相手に初戦闘と行くか?」

「おう。腕が鳴るぜ!」

「石のゴーレム…剣とか通りにくいかもしれないから、気を付けてよ

？」

「じゃああたしとクラウディアは魔法で攻撃ね!」

「うん。みんなのサポートもするよ！」

じゃあ、戦闘開始だ！

「大分倒したな。目的の鉱石も手に入れた」

「大活躍だったわよ、クラウディア！」

「ライザも凄かつたよ。魔法とフラムでいっぱい倒してたもの」

「俺はクラウディアの支援が無いとキツかつたな：剣がダメになつてねえといいけどな」

「無理やり倒してたもんね、レント…」

とりあえず見かけたゴーレムは粗方倒した。…とりあえず、クラウディアすげえってなつたな。初めての戦闘だつてのに、メチャクチャ落ち着いてた。俺達全員を魔力を乗せた音で強化しつつ、ついでまいに魔物を攻撃してたし、常に魔物と一定の距離を保つことも出来た。

いくら小さいころから商隊に付いて行つてるからって、こんな度胸付くもんか？それとも単に、元々そういう気質つてだけなのか？

「冒険つて楽しいね。どんなところで、何があるのか、みんなと一緒に見つけられるんだもの」

「うんうん、やっぱりそこが一番大事なのよ」

「発見が更なる発見を呼ぶ。これ以上楽しいことは無いな」

「これで安全なら言うことないんだけどね…」

「そもそも言つてられねえから、冒険者つて奴はみんな強くなるんだよ」

それに、困難があつた方が達成したときの喜びも大きいしな。ただ歩いて塔を目指すだけの旅をやつたところで、誰も認めてくれやしねえし、何より俺がつまらねえ。

「さて、指定された素材は入手した。もう帰つても大丈夫だろうが…」

「当然、もうちょっと調査するわよ！」

「ああ。…いつものように、コアクリスタルのエネルギーが無くなるまでにしようか」

「…大きいね」

「…そして、少し奥まで進むと…」

「…大きいね」

「ああ、デカいな」

「青ぶにと言い、上位種はとりあえずそのまま大きくなるのが常なのが…？」

そこらにいるゴーレムより一際デカい奴がいた。：アルムがなんか触れちゃいけないところに触れてる気がするが、気にしないでおくか。

「…どうしようか？」

「今はやめておいた方がいいだろう、無茶をして不合格、なんて情けないからな」

「うん。それに、ここでとれたもので新しいものが作れそうだし…挑むのは次にしよう」

そして、俺達は安全を取り、コアクリスタルのエネルギーがなくなるまで青いゴーレムを倒しまくって、リラさん達のところに戻った。当然、合格判定だつたぜ。

リラさんが出した試験が終わって、早速あたしは鍊金を始めた。まずあの大きいゴーレム。アイツを倒すためにはフラムだけじゃ足りないかもしね。つてことで思いついたレシピ変化！爆紛うにから氷びしに変化、そして坑道で採れたアクア紜を入れて…

「できたっ！氷の爆弾、【レヘルン】よ！」

フラムとレヘルン、どつちもぶつけてみて有効そうな方で集中攻撃！どつちも駄目そうなら撤退！我ながらいいアイデアじゃないかな！

「鍊金術つて、本当に凄いね。素材を入れただけで全く違うもの出来ちゃうんだもの」

「ただの草から中和剤が出来たりするからな。何でもありだ」

ふふふー、その何でもありな鍊金術を習得しているのが私なのです！まあまだまだその領域までは行つてないけどね。

因みに、いま私の鍊金を見てるのはクラウディアとアルムだけ。レントは早速特訓してるし、タオは本の解説をしてる。

「さーて、それじゃあもう一つレシピ変化、試しちゃおつかな！」

インゴットからこれまた坑道で採れたコベリナイトを入れてブロンズアイゼンに変化！これでなんと、みんなの新しい武器を作ることができるのよ！

で、数的には全員分できるんだけど、ブロンズアイゼンをたくさんつぎ込んだ方がいい武器になる予感がしたから、まずここにいる3人の分から！レントとタオのはもう一度コベリナイトを集めてからしつかり作つてあげよう！

「できた！はい、クラウディア！名前は【クレプスクルン】よ！」

「わあ…凄い。有難うライザ」

「ふふーん、音は後で聞かせてね！次はー、あたしの杖！」

同じようにブロンズアイゼンを入れて…できた！名前は【ヘリオップロクス】にしよう！…光が収まつてから、明らかに釜に納まつてない杖が出てくるの、なんかシユールだなあ。

「さて、それじゃあ最後にアルムの武器だよ！」

「ああ、頼む」

さーて、張り切つっていくぞー…どうだつ！

「できたよ、アルム！早速履いてみて！」

「…軽いな。かなり動きやすい」

普段からいろいろなところを歩いてるから、それを邪魔しないようにできるだけ軽くしてみた一品。どんなところでも軽々歩ける便利なブーツ。名付けて…

「【フリーウォーカー】。それがそのブーツの名前よ！」

「ああ、しつかり使わせてもらう。有難うな」

2人とも、あたしにありがとうって言つてくれた。そんなこと言われたら、もつと鍊金術を頑張りたくなっちゃうな！さあ、待つてろ新しい素材とレシピ！この鍊金術師、ライザリン・シユタウトが作り尽くしてやるぞー！…なんてね。

笑顔は底抜けで良いが、床は勘弁

「よーし、それじゃあコベリナイトとついでに色々集めよつか！」

「ついでに新武器とレヘルンも試すか。青い奴はフランでよさそう
だつたから灰色の奴だな」

俺は今、ライザと2人で水没坑道に来ている。目的はレントとタオ
の武器用のコベリナイトの採取と新武器とレヘルンの試運転と…ま
あ、以前の約束の履行だな。

2人で行くと言つたら、クラウディアも付いて行きたがつてていたが
⋮「流石に初冒険で疲れが溜まつてんだろう」で何とか納得しても
らつた。

「今回もあるの大きい奴には手を出さない、で良いな？」

「うん。流石に全員そろつてなきや危ないと思うし」

「だろうな。奴には近づかず、青い奴を優先的に狙うぞ」

「おつけー！いつでもフラン撃てるよう準備しとくね！」

さて、行くか。

「——良いな。こいつら相手なら道具も必要ないくらいだ
「うん、我ながらいい仕事ね！」

幾らか倒してみたが…新しい武器の性能が良すぎた。ここまで2
0体以上ゴーレムを倒してきたが、道具を使つたのが2、3回程度。
魔力こそ使つたが、殆ど俺とライザの攻撃だけで楽に倒すことができ
た。武器が変わるだけでここまで変わるんだな…

まあ一応レヘルンも試せた。灰色の奴は一撃で倒せたから、性能的
には十分だろう。あの大きい奴にも通用するといいが…

「さて、素材も回收回収つと。⋮あ、これ他のより良さそう」

「⋮何というか、もうすっかり鍊金術士だな。初めて一週間くらいし
か経つてない筈なんだが」

「そりやねー。こんなに楽しいこと、知っちゃつたら夢中になつちゃ
うよ」

「ああ、それは見てれば分る。鍊金術を始めてからのお前はずつと笑

顔というか…本当に楽しそうで、嬉しそうだ

「そ、そうかな…なんかちよつと恥ずかしいな」

今まで俺が知っているライザの笑顔は、ただただ純粹な屈託の無い笑顔だつた。だが最近の笑顔は、そこに真剣さというか、本気さが混ざつているように見える。生きがいを見つけたというか、何かに全力で打ち込めることの嬉しさに満ちているというか…以前の笑顔よりも、さらに魅力的に見えた。

今は、鍊金術に打ち込んでいるライザの姿が一番魅力的だと思つてる。活力にあふれている、とでも言うか。…正直、アンペルさんには感謝しかない。ライザがここまで本気になれる物…鍊金術を教えてくれたのだから。

「…さて、後は何を採取する？」

「えーっと、ちょっとアンペルさんに聞いて、試したいことがあるんだけど」

「何だ？」

「…毒物の採集、保管方法」

「…間違えるなよ？ 特に保管方法」

「…後でちゃんとアンペルさんにチェックしてもらうね」

「そうしてくれ」

…鍊金術に必要なんだろうとは思うが、流石に怖いな。しつかりやつてくれよ？ というかこんな綺麗な場所に男女2人で来て毒物採集とかこう、ムードもへつたくれも無いな。元々そういう目的とは言え：

「で、朝早くからライザは俺達を呼んで、何がしたいんだ？」

「まともなことであつてほしいなあ」

「ライザつて普段2人からどう思われてるの…？」

「以前から振り回されてるからな、その感覚が抜けきつてないんだろう。2人とも、まともな内容なのは俺が保証する」

次の日の朝、ライザが俺達を呼び出した。新しく作つたレントとタオの武器を渡すためだろう。

「まあお前がそう言うなら大丈夫か。ライザー。来たぞー」

「上がつて良いわよー！」

ライザがそういったので、俺達はアトリエまで上がる。

「ふつふつふ、待つてたわよー！」

「またそのノリか？」

「今回は違うわよ。2人とも絶対あたしに感謝したくなるわ！」

「ホントかなあ…」

「今日は何と、2人の新しい武器を作ります！」

そういつた瞬間、2人の顔が真剣なものになつた。

「新しい武器？」

「そうよー。コベリナイトから作ったブロンズアイゼンで、今までヨリずっと強い武器が作れちゃうんだから」

「まともどころか、最高の内容じゃねえか。早速頼むぜ」

「任せなさい！」

そう言つて、鍊金を開始するライザ。

「で、お前はもう先に貰つてんのか？」

「クラウディアもな。：お前達に渡す武器の性能を突き詰めようとした結果だ。怒るなよ」

「そういうことなら文句はねえよ」

「つていうか昨日の今日でよくそんなに素材集められたね」

「あの後もう一度坑道に行つたからな」

「3人で？」

「俺とライザの2人でだ。クラウディアは流石に疲労とかあつただろうしな」

「…とか言いつつ、2人で行きたかつただけなんじやないの。約束してたつて聞いたよ」

「え、アルム君とライザって、もしかして…」

「…今は違う、とだけ言つておく。後、クラウディアを心配したのも本心だ」

任されていいる以上、体が冒険に慣れてくるまでは無理はさせられないだろう。次の日に疲れを残し過ぎると、冒険どころじやないから

な。

「よし、できたわよ2人とも……やつぱりシユールねこれ」

「おう、できたか。つて…」

「…明らかに金に納まつてないよね、剣とハンマー」

「鍊金術って、本当に不思議…」

「出来ることも面白いなら、見てるだけでも面白いとか、本当に凄いな

鍊金術

個人的にこういうよく解らない光景は割と好きだ。疑問に思う要素しかないのに不快さが無いからな。不可解ではあるが。まあ今回に関しては、「鍊金術だから」の一言で済ませてしまうがな。

「まあ出来たからいいのよ！ レントの剣が【コロツサルエツジ】、タオのハンマーが【クレアエンパシー】よ！ さあ、受け取りに来なさい！」

「おう。…コイツでまた、塔に一步近づくわけだな」

「前のより扱いやすいといいなあ。アレ、手当たり次第に引っ張つてきただけの奴だし」

ライザが2人に武器を手渡す。…の前に、クレアエンパシーは兎も角コロツサルエツジはかなり重そうだ。俺が手渡そう。

「はい、タオ」

「うん。…前のより軽いね」

「アンタに合わせて調整したのよ。振りにくそうだつたし」

「有難う、ライザ」

「レント」

「おう。…こつちはかなり重いな、今までとは段違いだ」

「幅と厚みが違うからな。いざというときは盾としても扱えそうだ」

「ああ。重いは重いが、今の俺にはちょうどいい重さだ。有り難く使わせてもらうぜ、ライザ」

新しい武器は、2人にも好評だつたようだ。

「さて、それじゃあ早速次の冒険に向かうわよ！」

「そうだな。3人とも早めに実戦で慣らした方が良い」

「うん。今までより魔力が込めやすい感じがするから、もつとサポートできるかも」

「コイツならあのゴーレムも叩つ切れるかもな」

「少しでも早く倒せるならそれに越したことはないよね。…上手く使いこなすぞ」

そう言いながら、アトリエから出ようとしたその時。

—ギツ…

「「「「…」「」」」

…不吉な音がした。発生源は…レントの足元？

「…レント」

「…おう」

「足を上げて、もう一度床を踏んでくれ」

—ギツ…

「「「「…」「」」」

「…これは、アレか。コロッサルエッジが重いからいつもより床に負担がかかって、限界がきて悲鳴を上げ始めたのか」

「あんまり、音は大きくないけど…」

「こういうの、あんまり長く続くと、いつかは…」

「…マジか、どうするんだよコレ」

「…今日の冒険が終わったら考えるわ」

…ちょっとした不安を胸に、俺達は水没坑道の探索をした。とは言つても、俺とライザの2人でああも楽だつたんだから、フルメンバー且つ全員装備更新済みのこの状況では苦戦する要素など微塵も無く。あの大型のゴーレムもヘルンの集中砲火で安全圏から封殺できた。…そのせいで、暴れてスッキリできなかつたとでもいうか、終わつた後も「どうしようアレ…」みたいな空気が漂う状況に陥つてしまつたが。

「…うーん」

今日の冒険が終わつてから、私はアトリエをどうしたらいいか考えていた。このままあそこで鍊金を続けていたら、最悪床が抜けちゃうかもしれない。それなら他の場所に移せばいい…けど、どこにすれば

いいんだろう。

「どうかしたのか、クラウ」

悩んでいる私にお父さんが声をかけてきた。…そうだ、お父さんに相談してみよう。

「えっと、ライザのアトリエについてなんだけど…」

そうして、お父さんに相談したら…：

「あの鍊金術というもののが凄まじいものがある。…もしかしたら、小屋の1つや2つくらいは容易に建てられるかもしだれん」

「でも、ライザは鍊金術を始めてそんなに経つてないし、流石にそこまでは難しいんじゃないかな」

「それなら、廃屋など何かしら元となるものを利用するのもいいかもしけんな。ある程度形が残っている必要があるが…」

「そんな都合の良いもの、島にあるかな…」

「ふむ…島の中に拘る必要は無いんじゃないかな？」

「え？」

「お前達は島の外で冒険をしているんだろう。なら、そのための拠点としても利用できるように、アトリエも島の外に作る…というのも、選択肢として悪くはないと思うが」

島の、外。…ある。少し開けてて、使われてない小屋があつて、船着き場まである場所…！」

「…小妖精の森の、あの広場」

「心当たりがあるようだな。明日、教えてあげなさい」

「うん！有難う、お父さん！」

「彼女たちには、お前が世話になつていいからな。知恵の1つや2つでその分が返せるなら、願つても無い事だ」

明日、みんなはなんて言つてくれるかな。凄く楽しみ！

築き始める、信頼とアトリエ

「ふーつ、疲れたー」

あたしは今日、島中を駆け回っていた。理由はまあ…気分転換と、ついでに人助けって言うか。クラウディアからアトリエ移設のアイデアを貰い、そのために必要なレシピをアンペルさんに相談してみたら、「家そのものを調合の結果として考えてみろ」って言われた。それでまあなんとなくは思いついたけど、もう少しアイデアを固めたかつたら頭のリフレッシュも兼ねてちょっと散歩してた。

そしたら、便利屋のロルフさんが何か悩んでるみたいだつたから話を聞いてみたんだけど、なんでも最近仕事が無くて困つてるらしくて、ちょっと評判とか依頼とか聞いてきてほしいって頼まれた。あたしも自分が頼られなかつた時のこと想像してみたけど…もう本当に凄く嫌というか寂しかつた。で、ロルフさんは今実際そういう思いをしてる。だからこう、ちょっとくらい力になれないかなと思つて、頼みを聞いた。…結果は「良い人だけ頼みたいことは特に…」つて感じだつた。まあ、誰かに頼りたくなるような用事なんていきなり言われても無いよね…：

まあ、とりあえず頼みを聞いてくれたからつてことでお礼をくれた。その内容は…：

「魚油リキッドは兎も角…ミックスオイル 固形燃料のレシピなんて貰えちゃうんだもんなあ」

思わぬところで鍊金の幅が広がつてビックリした。お父さんが「誰かを助けた分、自分に返つてくる」つてこの前言つてた気がするけど、こういうことなのかな。

そして、あたしは思いついた。島中の困つてる人を助けたら、またレシピがもらえるかも!?つて。…これ思い返すとロルフさんの仕事取つちやつてる気がする。

まあその時のあたしはそんなこと考えもしてなかつたから、色々人助けの為に動き回つた。お医者さんをしてるエドワードさん、行商人のロミイさん、他にもいろんな人たちの頼みを聞いて回つて解決し

た。：旅好きのダニエルさんはお話をしただけだし、ヨンナさんはアルムとのことを羨ましがられたけど。：：やつぱりそういう風に見えるのかな、あたし達。ちょっと嬉しい。

…ま、まあそれは置いといて、人助けの成果だけど。

「普通の紙のレシピに…なんかアクセサリーまで貰っちゃった」

レシピも嬉しいけど、なんかこのアクセサリー、ちょっと不思議な力を感じるって言うか。冒険に何かしら役立ちそうな感じがする。鍊金で同じの作れないかな？ちょっと試してみよう。

後は…あ、そうだ。あの軟膏、バーバラさんの足腰にも効いたみたいだし、ウエインさんにも作つて渡してあげよう。後、鍊金纖維とかクロースを活用すれば腰巻も作れそうかな？最近「そろそろ庇いきれなくなってきたかもしかん」って言つてたもんなあ。…よし、レシピも思い浮かんだし早速鍊金だ！

で、作つて渡しに行つたんだけど…

「アルムに言つておくわね。ライザちゃんみたいな子そういうないから絶対に逃がすなって」

「うえつ!?いや、えつと、その」

「心配しなくともこの子は逃げんだろう。ああ、これは大事に使わせてもらう。有難うな」

「え、あ、はい、ど、どういたしまして」

「ふつふつふ、本当にお姉ちゃんになる日が楽しみですなあ」

「どこで教えてもらつたのそんな喋り方…っていうか、あたしだけお姉ちゃんつてつけてるの、そういう理由だつたの!?」

え、これ外堀を埋めちゃつたの？埋められたの？両方？多分明日ウエインさん経由でお父さんにも伝わりそうだし…うわあ凄く恥ずかしい思いしそう。久しぶりにサボろうかな、畑。

：：まあ朝一で必ずアルムに会える時間だからサボれるわけなかつたんだけど。案の定お父さんに伝わつて、案の定褒めちぎられて、お母さんは感動までしてた。え、そこまで…？

「これから自分の親にももつと孝行してやれ」

「…うん」

多少は変わった気でいたんだけど、やつぱりお母さんの中ではまだまだ不良娘だつたんだなああたし。否定できないけど…まあ、それならこれからどんどん良い事して、安心して見ていられるつて言われるようになきやね！

…まあ今日と明日はアトリエを作るんだけど。このままだと孝行どころかとんでもない迷惑をかけかねないし。

「というわけで、まずこれらを作ろうと思います！」

そういってみんなに渡したのは簡易建材、簡易石材、海草土のレシピ。これだけあればあの小屋を建て直して、あたしたちのアトリエにできる！…かもしれない！

「今ある素材じや足りないのか？」

「どうせだしちよつと厳選しようかなって。できるだけいいもの作りたいじやない？」

「なるほど、それは確かに」

もしかしたら、長い間お世話になるかもしれないんだからね。

「どこで調合するんだ？ここじゃ床が危ないだろ」

「だからつて屋外でやるもの集中しにくいのよね。…危ないところを避けて、バケツリレーみたいに運ぶ感じでお願いするわ」

「…落とさねえように気を付けねえとな」

ちょっと重いかもだけど…うん、アルムとレントなら大丈夫でしょう。

「建築関係の知識とか技術とか大丈夫なの？」

「…その辺りもレシピと一緒になんか浮かんできたのよね。こうすればいい感じになる、とか」

「どうなつてるの鍊金術つて…いや、それが出来るから鍊金術士になれるのかな」

物だけじやなくて、知識もいきなり出てくる感じが偶にするのよね

…鍊金術、すごいわ。

「力仕事、私に手伝えるかな…」

「クラウディアはそこまで無理しなくていいわよ。代わりつて言つた

らなんだけど、明日のお昼の準備とかお願ひして良い?」

「うん、わかった」

力仕事だけが仕事じゃないしね。なんならあたしもそのときは指示出しに専念するつもりだし。

「弁当の準備くらいなら俺とレントも出来るが…」

「アルム君とレント君つてお料理できるの?」

「俺は朝母さんを手伝うことがあるからな」

「俺のところは母ちゃんが逃げたし、親父はやらねえつつーかできねえからな…」

「…、ごめんねレント君…」

「そもそも2人は力仕事で頑張つてもらうんだから、そこはクラウディアに甘えときなさい」

最近気づいたけど、こういう時結構色々したがるのよね、アルムつて。

「さーて、じゃあ素材を探りに行くわよみんな!」

「ああ」「おう!」「うん!」

さーて、今日一日でどれだけいい素材が集まるかな!

「えっと、この草で良いの?」

「そうよー。…あ、右の奴の方が良いからそつちもお願ひね」

「僕に斧で木を斬り倒せるわけないだろ!?ライザ代わつてよ!」

「何言つてんのよタオ!二人を見なさい!」

「変に力を入れ過ぎない方がいいぞ。こうやつて…ふつ!」

「よつ!お、やってみると結構楽なもんだな」

「ね?コツがあるのよコツが」

「…解つたよお」

「後で私もやつてみて良い?」

「いいけど、キツかつたらすぐ言うのよ?」

「よいしょつ!」

「ふつ!」

「そらよつ！」

「おりやつ！」

「…」

「待て待て待てフルートで何する気だ!?」

「そういう道具じやないでしょそれ！いくらあたしが鍊金したものだからつて限度があるからね!?」

「だつてみんな、自分の武器で採集できるから…」

「魔力をぶつければいいんじやないか？」

「…あつ」

「変なところで抜けてるよね、クラウディア」

「…みんなと同じように、やつてみたかつたの…」

「つていうかこつちは普通にやるのねタオ」

「こつちは叩けばいいだけだからね。伐採は力加減とか結構キツいし

…

「こういう砂とか水も、鍊金術の素材になるんだな」

「何が使えないのかを探す方が早いかもしないくらいだな。少なくとも虫や魚は使えるから、生物も大抵は対象内かもしないな」

「二人とも、よくそんなに、余裕で、運べるね」

「す、砂とか水つて、集まると、こんなに重い、んだね…」

「クラウディア、無理しない無理しない！手伝うわよ！」

「ライザも、大概、だね…」

「戦闘と採集を続けてると自然と力も体力もつくぞ」

「…女の子としてはちょっとどうかと思つてるけどね、最近」

「でも、そういうの、ちょっと、羨ましい、な。私も、ライザ、みたいに、頼もしい、女の子に、なつてみたい」

「…それは構わないが、腹筋が割れたり力こぶが出来たりするところまではいかないでくれよ？」

「ルベルトさんがどんな顔するか分かんねーな、そうなつたら…」

そんな感じで、みんなで1日中採集して回った。

「お疲れ様、大分集まつたわ！」

「つ、疲れた…」

「帰つたら、すぐお風呂に入ろう…」

「俺達じや素材の厳選はできねえし、どうする？」

「ああ、俺は少し雑貨屋に寄る。お菓子作りの基礎、みたいな本を見かけてな。エルが挑戦したがつていたし、買っておこうかと」

「あ、それ後で借りていい？ 錬金術に活かせるかも」

アンペルさんも言つてたつけ、「錬金術は菓子も作れる」つて。何か試してみよう。…そういえばあの時、アンペルさんがなんか色々話し始めて、リラさんが途中で止めてたけど、止めなかつたらどうなつてたんだろう。

「よし、それじやあ明日、アトリエを建てに行くわよ！ おーっ！」

「応！」「おうっ！」「おー…」「おー！」

いよいよ明日！ ふふつ、どんなアトリエができるかな！ すぐ楽しみ！

完成したアトリエ、出現した悪魔

「ふう、運び終わったな」

「お疲れ様！さて、ちょっと休憩したら始めるわよ！」

小屋の修理用の素材を調合して、広場まで運び終わった。…アルムとレントが腰を結構気にしてた。床に気を使って落とさないようにゆっくり運んでたら痛くなつてきたりしい。アルムの「親父は日頃こんな痛みと戦ってるんだな…」なんてつぶやきが印象的だつた。…ごめんね？

それで、改めて今から建て直す小屋を確認。…うん、思つた通り、これだけ素材があれば完璧に修理しきれそう。

「しかし、まさか家の建て直しなんて経験するとは思わなかつたぜ」「ホントだよね…肉体労働とか、僕には向いてないのに」

「あれだけ採集を手伝つておいて、それは今更だと思うがな」

「大丈夫だよタオ君、いざとなつたら私も手伝うから！」

「…クラウディアにそんなこと言われたら頑張るしかないじやん、はあ…」

…絶対あたしが同じこと言つてもそんな反応しないわよね。まああたしもクラウディアにそんなこと言われたら同じ反応すると思うけど。

「それで、ライザは全体の指示出しをするんだつたか」

「そうよ。だつて完成図はあたしの頭の中にしかないから、全体を見て指示を出せるのはあたしだけだもん」

「そうだな。…しかし、どうにも新鮮だな」

「何が？」

「お前の指示で動くことが。いつもは大体俺から言い出すか、偶に偶然足並みが揃うかだつたしな」

「…そうね、アルムに指示出しどか、初めてするかも」

まあでも、レントとタオより素直に聞いてくれそだだから、大丈夫だと思うけど。

「俺達には大体指示出しまくりだけどな」

「振り回されまくりともいうよね」

「アンタ達はあたしにツツコミ入れなきや気が済まないの!?」

「済まない」

「ふふふつ」

あーもう、クラウディアに笑われちゃったじやん!

「よし! もう休憩終わり! 早く始めるわよ!」

「ああ」「へいへい」「う、藪蛇だつたかな…」

「皆、お昼の用意はしておくね!」

さあ、アトリエ建築、始まりだ!

「さーて、まずは土台を補強するわよ」

「これを怠つて作業中に崩れましたは笑えないからな」

「ある意味そこから始まつたもんね、この計画」

「おー怖え:じやあ、しつかり固めるとするか」

「壁に建材を貼り付けて固定して、海草土を塗るのか」

「コイツで丈夫な壁が出来上がるなんて、想像つかねえな」

「あ、塗るのは僕がやるよ。力とかあんまりいらなさそうだし」

「じゃあアルム、次はこつちの壁お願ひね!」

「みんなー、お昼できたよー!」

「よし、休憩だ!」

「どれどれ:お、紅茶とサンドイッチか。いただきます」

「美味しいな。:ん、バターが塗つてあるのか」

「な、なんか凝つてる感じがする:あたしももつと勉強しないと…」

「次は中か:こつちは結構綺麗に残つてるのが幸いだな」

「流石に一部張り替えた方が良いところはあるけどね」

「鍊金釜はあそこに置くから、あの辺りは特に強くするわよ!」

「火も焚くしな。この周りは石材だけで作る方が良さそうか」

「火事になつちやうといけないもんね」

「後は…屋根ね。アルム、お願ひ」

「ああ。…よつ、と。レント、材料をくれ」

「…ひとつ飛びで上に乗れるんだ」

「体は大きいのに身軽だね、アルム君…」

「こつからはアルム任せだな…」

「つと。これで終わり、か？」

屋根の作業を終わらせて降りてきたアルムがそう聞いてきた。…
うん、これで完成！

「できたーっ！」

「ははっ、マジか！家一軒直しちまつたぜ俺達！」

「なんていうか…想像と現実って、意外と近かつたんだなって思った
よ。…本当に、できちゃったんだ…！」

「ああ。…本当に、鍊金術は凄いな」

「うん。こんなことまで出来ちやうんだね…！」

みんな、完成したアトリエを見て感動してる。目に見えてハツキリ
わかる、あしたちの成果だもんね。

「あ、そうだ。名前つてあたしが決めていい？」

「いいぜ。お前の鍊金術で直したようなもんだからな」

「それで、どんな名前にするんだ？…いや、もう解り切つてるか」

アルムはもう解つてるみたいだけど…勿論、言うのはあたしの口か
ら！

「…」は…「ライザのアトリエ」だよ！」

「さて、折角アトリエを建てたから、それを記念して1つ誓いを立てた
いと思います！」

完成したアトリエの中に入つて、ライザがそんな事を言い出した。
「どんな内容だ？」

「勿論、鍊金術士としてもつと上達することよ！誰にも負けないくらい凄い鍊金術士になる！」

「…成程」

すゞく「らしい」誓いだ。

「なら、俺も改めて…俺はあの塔を制覇して、冒険者として名を上げてやる！」

「僕は、家の書庫の本を全て読破したい。その知識に触れて、更に先へ行きたい！」

「私は、いつかお父さんの前でも、フルートを演奏する…！」

ライザが誓いを立てたのを皮切りに、他のみんなも各自の誓いを口にする。次は俺か。そうだな、これくらいは明かしてもいいだろう。

「俺は…そうだな。方向性としてはタオと似ていると思う」

「タオと？」

「ああ。…クーケン島には、みんなが知らない大きな秘密がある」「秘密？」

「俺がそれを知ったのは最近だし、切っ掛けも偶然みたいなものだ。…そして、その秘密は、俺が島の外に出ようと思つた動機なんだ。まあ、いきなりアンペルさんに出会えたから、当初の目的はほぼ達成したようなものだが」

本当、あの人とここまで早く会えたのは幸運もいいところだと思う。

「ただ、それでも秘密が解明されたわけではないし、タオの本にその全てが載つているとも限らない。だから、この冒険の間になにか核心に迫れる情報を見つけたいと思つてing」

「つまり、アルムの誓いは…」

「クーケン島の秘密の全てを知ることだな。…そうだな、まず目指したいのはあの【流星の古城】だな。あれも確かにクリント王国の遺跡だからな、何かしらの繋がりが見つかるかもしれない」

アンペルさんとタオとで共有している情報も、あくまで推測の域を出ないからな。ああいつた大きな遺跡なら、何かしらの痕跡はありそ

うだ。

「それに…」

「それに？」

「単純に冒険とか、そういうのが好きなんだよ。自分が知らないものをこの目で、この脚で見つけられることがな」

この冒険が終わって、クーケン島の事も一段落ついて、その上でエルが大きくなつたら：世界を色々見て回るのもいいかもな。できるなら、ライザも一緒に。

さて、アトリエも完成して、もう日も落ち始めた。そろそろ島に戻るべきだな。

「しかし…完成はしたが、まだ足りないものは色々あるな」

「ま、そういうのは思いついたら色々持つてくれればいいでしょ」

「小物とかも色々持ってきて飾つてみるね」

「俺も何か持ち込んでみるか…ん？」

「どうしたのさ、レント？」

「…何だ、この感じは？」

「…アルム」

「ああ。…森の空気がざわついている」

今までとは何かが明らかに違う。…何か、不味い事が起つてている
ような…

「…どうする？」

「…放つておいたら不味い氣がするな。見に行くぞ」

「だ、大丈夫なの？」

「それを確めに行くんだよ」

「…ついて行くわよ。戦力は多い方が良いでしょ」

「わ、私も！」

「駄目…と言つても聞かないだろうな。いざとなつたら逃げる準備は
しておいてくれ」

さて、この嫌な感じは…森の奥か。

物陰に隠れながら、前を慎重に確認して、ゆっくりと森の奥に進んでいく。…どんどん嫌な気配が濃くなっていくな。

「…あたしにも分かるようになつてきただわ。なんか、濶んだ感じがする」

「うん…なんか、音が無くなつていく感じ…」

「…もう、すぐ近くにいるな」

「な、何があるんだよー…」

「リラさんはまた違う、威圧感みてえのがあるな。…正体は何なんだ？」

…どこだ、どこにいる？目を凝らして注意深くあたりを見渡すが、まだ何も見えてこない。どこに…

「——っ！アレか…!？」

「見つけたのか！」

森の奥、まだ小さいが、確かに見えた。間違いなく見たことのない、白い何か。…だが、遠すぎてよく解らない。どうする…

「…近づくぞ」

「…大丈夫か？」

「このままじゃ何を伝えればいいのかすら解らねえだろ。…いざとなりやフランムかなんかで隙を作つて逃げりやいい」

「…みんな、コアクリスタルの準備をしておいてくれ。近づいてきたら集中砲火を仕掛ける」

出来るだけ音を立てず、ゆっくり近づいていく。…少しずつその威容が見えてきた。赤いラインが入つた白い胴体に、背中と尾の先から宝石なようなものが生えている。頭部には角のような突起がある。

…間違いなく、強い。見ただけで解る。だが、それ以上に…

(…「おかしい」)

違和感、いや異物感というべきか。明らかにこの場に、下手したら世界そのものにそぐわないものを持っている「ナニカ」。…これは、魔物というよりは…

(【悪魔】…!)

そうとしか、思えなかつた。

「……なんだよ、アレ…」

「……ふ、震えが、止まらない…！」

「……は…あつ…！」

……タオとライザが恐怖に震えている。クラウディアは呼吸すら詰まり出している。……外見的特徴は掴めた。もう退くべきだな。

「……動けるか、みんな？早く戻るぞ」

「ああ、アガーテ姉さんとアンペルさん達に早く伝えねえと」

「う、うん」

「ク、クラウディア、動ける？」

「つ…う、ん。なんと、か…」

頼むから、こつちに気づいてくれるなよ…？」

「……追いかけてきてねえな？」

「……大丈夫そうだな。あの嫌な感じも薄れた」

「よ、良かつた…」

正直、まだ手が震えている。もしあそこで気づかれたら…勝てたとして、俺たち全員無事では済まなかつただろう。……最悪、誰かの命が危なかつたかもしれない。

「クラウディア、ゆっくり息をして。もう大丈夫だから」

「……すー、はー…」

ライザがクラウディアを落ち着かせている。……お前も怖かつただろうに。強いたな、お前は。

「クラウディアが完全に落ち着き次第戻つて、アガーテさんとアンペルさん達にアレの事を話そう。特にアンペルさん達は調査とかでありますそこに立ち入ることもあるだろうしな」

折角アトリエが完成した日だって言うのに…全く、それどころでは無くなつてしまつたな。

浮上する脅威、沈みゆく危惧

「…そうか、「奴ら」を見たか」

あの化け物を発見し、すぐに島に戻つてアンペルさんにそのことを話したらリラさんがそんなことを言い出した。奴ら…もしかして、あんなのがたくさんいるつてのか？ 考えたくなえ…

「知つて いるんですか？」

「ああ。…聞き込みで成果が無かつたから無関係だと思つていたが、まさか現れるとはな」

「聞き込み…？ あいつらは、2人の目的に関係あるのか？」

「奴…いや。奴らは一体、何なんですか？ まるで、この世界のものとは思えなかつた」

「詳しい事はまだ話せん、迂闊に明かせる情報では無くてな。…そうだな、今からアトリエまで案内してもらえるだろうか」

「今から？…日が落ちるまでに戻れるかな」

「ああ、それまでには戻れと言われているんだつたな。…どうする」

「アトリエを建てて、奴らの気配に充てられて体に疲労もたまつている筈だ。調査は急ぎたいが、こいつらにあまり無理をさせるのもな」「ふむ、なら明日の朝だな」

俺は野垂れ死にしてなきやいいつて感じだから門限みたいのは無えも同然なんだが…どうせならライザも自分で成果を見せたいだろうからな。ここは黙つとくか。

「お前達、特にクラウディア。体をゆっくり休めろよ。それと…」「それと…？」

「よくやつた。奴らの存在を見つけ、その上で無理をせず無事に帰つて来た…その事実はそれだけ大きい」

「よくやつた、か。へへつ、やっぱ認められるのは嬉しいもんだな。「アトリエの案内ついでに、万が一逃げられない状況で奴らと遭遇した時の対処法も聞いておきたいのですが」

「当然だ。今回は慎重に立ち回っていたようだが、それがいつも通用するとは限らんからな」

またいつ出会うか分からねえからな。自力でどうにかできるようになるならそれに越したことはねえ。

「よし、なら今日は解散だな。…念のためだ、明日も冒険は休みにしよう」

「アトリエも、安全が確認できるまで使えないもんね。せっかく建てたのにな……」

「あいつ等に関する情報が載つた本とか無いか、調べてみるよ」

「お父さんに心配とかされないかな…」

「ヘタに隠さない方が良いと思うぜ。隠される方がかえつて心配になる…らしいからな」

俺には経験ねえから分からねえけどな。さて、もう帰つて休むとするか。

「これが、あたしたちが作つた【ライザのアトリエ】だよ！」

「ほう、良いものを作つたな。…さて」

自信満々にアトリエを紹介するライザと感心するアンペルさん。ちゃんと褒めるあたりやっぱ良い人だよなあ。

「どうだ？」

「この辺りに痕跡は無いな。…森の中の、詳しい再調査が必要だろう」

「そうか…ライザ」

「何？」

「私達をここに住まわせてくれないか？…無粹なのは解つてているが、奴らの見張りがしたい」

「うん、むしろこっちからお願ひしたいくらいだよ！」

「2人がいてくれるなら、ここも安心して使えるね」

いざつて時は鍊金術のアドバイスもくれそうだしな。つまり、どちらにも得しかねえわけだ。

「さて、それでは奴らの対処法についても聞きたいんですけど」

「ああ。…といつても、中型の種は今のお前達でも対処はし得る。だから大型の種の対策を重点的に教えるぞ」

「よし、きつちり頭に叩き込んでやるぜ」

動きは重いがその分パワーがあるから正面からぶつかるのは拙くて、炎が有効…フラムがある内はいいが、切れたたらアルムの負荷がデカくなりそうだな。見た目相応にタフらしいから、一瞬で片を付けることより守りを固めることを意識した方が良い…そこは俺の出番か？受け流す技術をもつと高めた方が良さそうか。

…アルムの動きを見たわけじゃねえから、まだまだ倒せるイメージは湧かねえな。今はとにかく単純な実力をつける方が良さそうだ。

「しかし、昨日はホント大変だったよね」

「うん。あんな魔物が出てくるなんて…」

案内が終わつた後、あたしはクラウディアの家に遊びに行つた。レントはいつも通りで特訓で、タオは血眼になつてあいつ等に関する資料を探そうとしてて、アルムはそれの手伝いをしてる。何でも、普段の解読は任せきりだからこういうことくらいは手を貸したいつて。タオは気にしてないと思うけどなー。

「アルムなんか大変だつたらしいわよ？すごく心配されたらしくて」

「エルちゃんに心配されたら…すつごく心が痛くなりそうだね」

「泣きそうな顔をされたから、こつちまで泣きそうになつたつて。アルムつてこういうの結構隠すの得意そうに見えたけど、駄目だつたみたい」

エルちゃんが絡むとその辺りかなり脆くなるんだよね、アルム。因みにあたしは…多分誤魔化せてないだろうなあ。気づいて無い振りされてると思う。タオとクラウディアもすぐ寝て休むよう言われたみたいだし、やっぱり家族つて解つちやうのかな、そういうの。：レントからはそういう話全くないけど。ザムエルさんはこういう時何か言つたりしないのかなあ。

「…よし！暗い話はやめてそろそろ楽しい話題にしよう！」

「言い出したのはライザだけどね…あ、じゃあ一つ聞きたいんだけど」

「え、何々？」

「アルム君を好きになつたのつて、何時から？」

「へっ！」

こ、ここで恋バナ!? っていうかクラウディアの前でそんなあからざまな態度取つたつけあたし!?

「2人きりで素材集めの為に対岸に渡つてるつて聞いたよ? 一応デートつて名目で」

「だ、誰から?」

「みんな。…あの時私を帰したのつて、そういう理由もあつたんだね?」

「し、心配したのも本当だからね!?!」

「ふふ、大丈夫だよ。心配してくれてたのは分かるし、そういう理由なら仕方ないかなつて思つてるから。…それで、何時から?」

「これちやんと言うまで引いてくれないやつだ…! 恥ずかしいけど、言うしかないなあ…」

「——じゃあ、ライザの初恋は10年以上も続いてるんだね」

「そう言わると死ぬほど恥ずかしいなあ…」

切つ掛けから最近のあれこれに至るまで、全部話すことになつた。周りから指摘されるよりもっと恥ずかしいよ、コレ…

「でも、隣に立ちたいくつていうのはちょっと意外だつたかな。ライザつて結構前に出るタイプだと思つてたから、アルム君の事も引っ張つていきたつて感じなかなつて」

「あー…なんていうか。アルムには基本助けられっぱなしになつて意識持つてたから、そういう考えが浮かばなくて」

「そうなの?」

「10年前に助けて貰つた分も返せてないつて思つてるからね。だから、鍊金術でようやくその分返せそうかなつて。実際結構頼つてくれることも増えたしね」

「そうなんだ…」

「まあ、それはそれとして今でも助けて貰つたりするのは嬉しいし、頼れる人でもあつてほしいんだけどね」

「だからまあ、お互い助け合つて頼りあつて。そういう「対等」が今1番欲しいアルムとの関係なんだ。」

「…うん、私も、そう思えるような人を見つけられると良いな」「ああ。どんな間柄であろうとも、持ちつ持たれつが最も長続きするからな」

「ルベルトさん？」

態々部屋に入ってきて、どうしたんだろう。

「話が一段落ついたと思ったから入つたが…違つたかな？」

「あ、大丈夫です」

「なら良かつた。…それでライザ君、今アトリエは大丈夫かな？」

「大丈夫だと思いますけど…」

何か頼み事でもあるのかな？

「最近地震があつただろう？それ以降、地下で水漏れが起きていてね。知恵を借りれないかと」

「あー、それなら実際に見た方が解ると思います」

「頼めるかね？」

「勿論！クラウディアのお父さんの頼みですから！」

「私に手伝えることがあるなら言つてね？」

「うん。今回は力仕事も無いと思うしね」

「…」
というわけで、地下室を見に行つたけど…これ水漏れどころの騒ぎじやないような。最早浸水つていうか。えーっと、漏れてるのはここからで、だとすると…うん、イメージできた。素材も足りてる。

「これならいけます！」

「そうか。頼む」

「このあたしにお任せあれ、つてね！早速作りに行こう！」

「よーし、じゃあアトリエに…つて、誰に船漕いでもらおう

「えつと」

「よし、どうにかしてアルムにお願いするわよ！」

「…」
今絶対「私が漕ぐ」つて言おうとしたでしょ！あんな力仕事、クラウディアに頼むわけにはいかないわ！そんなことさせんくらいならあたしが漕ぐ！

「…まあ今回はアルムを頼るんだけど。OKしてくれるかな…？」

「えーと、今は多分アルムの家にいると思うから…」

「いや、ここにいるぞ」

「えつ!?」

あれ、何で!?しかもタオもいるし。資料探ししてたんじゃ…

「気晴らしも兼ねて散歩してたんだが、最近の地震で瓦礫とかが崩れてきて、いたらしくてな」

「折角立ち寄ったし処分するのを手伝おうかつて話になつて、さつき終わつたんだよ。…でも、1か所に固めてフランでドン、は流石に難じやないかな」

「だからって蹴りやハンマーで1つ1つ碎くのも手間だろう。あれが最適解だつたと思うぞ」

なんかアルム達もアルム達で人助けしてたみたい。こんな偶然あるんだね：

「それで、アトリエに行くんだつたか?手を貸すぞ。タオはどうする?」

「僕は解説を進めるよ。鍊金術に関しては何も手伝えないし」

「分かった。じやあ行くか、2人とも」

「う、うん。…相変わらずこう、話が早いなあ」

いやまあ、こういうところも頼りになるんだけどさ。

「…しかし、浸水か」

アトリエに行つて、浸水を止める為の【軟式ゴム石】を調合してると、アルムがそんなことを呟いた。

「どうかしたの?」

「いや、ちょっととな…」

…もう、何か知つてそうな口ぶり。凄く気になる。でもあんまりしつこく追及すると嫌われたりしそうだなあ…今は止めとこ。

「…よし、これならいけそうだよ!」

「これは…ゴムか?」

「うん。これを浸水したところに詰めると、ぴつたり塞いだまま固まるの」

「そんなものまで作れちやうんだ…」

「本当、想像力次第では何でも作れそうだな」

「そこまでできるかはあたし次第だけどね！・さあ、早速壁を埋めに行こう！」

そうして、ルベルトさんの屋敷の浸水は止める事ができた。「何かあつたらまた頼らせてもらうかもしない」って…うん、やつぱり頼つてもらえるつて気分が良いな。次も期待に応えられるように、鍊金術の腕をもつと磨かなくちゃ！

（長年かけて水没した住宅街に、今回の地下室の浸水。…今までなら「そういうこともある」で済ませていたかもしれないが…チツ、嫌な予感がしてきたな…！）

少女と少年の、大きな一步

「最近、魚が採れなくなつていてる?」

「ああ、そななんだよ。こんなことは生まれて初めてだ」

昨日一昨日とゆつくり休んで、アンペルさん達からも「今のことろ近くに奴らは居ない」とお墨付きをもらつたので、さあそろそろ行動範囲を広げようかと思つた矢先、アガーテさんから頼みごとをされたので港に向かつた。何でも、この頃不漁が続いているらしく、このまでは漁師さん達が干上がつてしまふ、とのことだ。

「そういうわけで、ライザの鍊金術を頼りたいんだが：いいか？」

「まつかせて姉さん！…つて言つても、今あたしにできるのは強力な餌を用意する」とくらいだけど

「何か原因があるなら、それを取り除く方法も考えなければいけないが…」

「ん…：鍊金しに行くついでに、アンペルさんに知恵を借りに行く？心当たりがないか、つて」

「そうするか。…しかし、本当に切羽詰まつているんですね、漁師さんたちは。まだライザの鍊金術に対して、そこまで信用はしていられないんでしょう？」

「ああ。溺れる者は…つていうけど、まさにそんな心境だよ」

まあ、そうだろう。島の人達からは、「少し大人しくなつたとはいえ、島の悪ガキの筆頭格が怪しげな術を覚え始めた」とかそんな印象でしかないだろうし、実際不漁になつてからライザを頼るまで数日かかるつてている。余程悩んだのだろう。…逆に言えば。

「つまりこの問題を解決できれば、あたし達は島の人達に認められるつてことだよね？」

「そうだろうな。最近いろんな人達の悩みや頼みを聞いてるらしいし、ここで一つ大きな問題を解決すれば、信用は高まるだろうな」「よーし、やつてやるぞー！」

そういうて気合を入れるライザ。やる気になるのはいいが、アンペルさんに話を聞くのを忘れるなよ？…いや、俺がやればいいのか、そ

れは。

「出来たよ！」

「これは…撒き餌か？だが、エリップス湖は深いから効き目がな…」

「そう言うと思って、結構強力に作ったよ！」

アトリエに行つてすぐに漁師さんたちに渡す【おいしい練り餌】を調合。戻ってきて早速渡した。…この練り餌、素材にクミネの実とう、強くはないとはいえ毒がある物を素材として使っていた。まあ、とりあえず大丈夫なのは俺達の方で検証したので問題は無いと思うが。因みにかなり美味かつた。

後、アンペルさんから聞いた事も伝えておかないとな。

「それと、潮目が変わると外海の魔物がエリップス湖に入り込んでくる可能性があるそうです。このエサでも駄目だつたり、暫くは良くても次にまた不漁になつた場合はそちらの可能性も考えた方が良いと思ひます」

「そんなことがあるのか…わかつた、覚えとくよ」

もし原因が入り込んだ魔物だとしたら…船の上から探して討伐、は現実的じやない気がするな。…どうにかしておびき寄せるか？それこそ鍊金術の出番になりそうだな。

「しかし、な

「どうしたの姉さん？」

「少し感動していたところだ。島の悪ガキが、ずいぶんと成長したな、と」

「酷くない！」

「鍊金術という本気で打ち込めるものを見つけたんです。成長もしますよ」

「それだけじゃあないと思うがな？」

「…何故俺を見るんですか？」

「さあ、何故だろうな」

絶対今遠回しに揶揄つてきてたなこの人…そういうことをあなたにされると、何も言い返せない相手だから困るんですよ。はあ…

「まあ、兎に角…応援してるのでライザ。鍊金術士としてのお前をな」「…つーうん！有難う、姉さん！」

やはりアガーテさんからの激励は格別なんだろうな、満面の笑みだ。

…さて、今日は後どうするかな。エサはまず上手く行くだろうし、新しい場所に行くなら出来るだけ時間を長くとりたいし…ふむ。

「それでね、アガーテ姉さんが「応援してる」って言つてくれて！」

「ふふ、良かつたね、ライザ」

餌を調合し、漁師に渡しに行つたライザがアトリエに戻つて来た。認められて随分とはしやいでいるようだ。ふふ、これだから鍊金術士という奴は…：

「それはいいが、魔物が入り込んでいる可能性は伝えたか？」

「あ、それはアルムがやつてくれてたよ」

「なら良いが、お前自身もそれを忘れるなよ」

浮かれる弟子を引き締めることを忘れない、か。最初は「先生などできない」などと言つていたが、今のお前は先生そのものだぞアンペル。「鍊金術の」ではないがな。

「――ライザ！」

「タオ？ レント？ どうしたの？」

「喜べライザ。あのエサ、効果覗面だつたつてよ！」

「ホント!?」

「うん！ みんな言つてたよ、もつと作つてほしいつて！」

「うつ！」

「凄いよ、ライザ！」

「ふふ、大したものじゃないか、鍊金術士ライザリン・シユタウト？」

「ふふふ、そうでしょ そうでしょ！」

弟子の成長が嬉しいアンペルと褒められて喜ぶライザ。…見ていると、思わず笑みがこぼれてしまうな。

「…くくく」

「どうしたの、リラさん？」

「いや何、鍊金術士というのは、どいつもこいつも可愛いものだな、とな」

「うん、私もそう思う」

「そ、そう言わると照れるなあ…えへへ」

「…揶揄われているだけだ。真に受けるな」

お前のそれが照れ隠しであることくらいもう解るぞ？長い付き合いいだからな。

「アンペルさん、照れてる？」

「違う」

「さつきリラさんが言つた鍊金術士つて、アンペルさんの事も入つてるよね？」

「さて、どうだろうな」

態々言うことでも無いだろう。…しかし、意外と踏み込んでくるな、クラウディア。

「んー…」

「何だ？」

「女の人が男の人に遠慮なく「可愛い」って言えるの、ちょっと珍しいかなつて。凄く気安い関係なんだなつて思つて」

「…ほほーう」

…流れが怪しくなつてきた気がするな。何を言い出すんだクラウディア、それは少し発想を飛躍させ過ぎではないか？…私個人としてはあながち間違いではないのだが。

後、ライザも無駄に目を輝かせるな、お前が期待しているような話はできんぞ。…今は。

「アンペルさん！」

「何だ」

「実際の所どうですか！？」

「何がだ」

「リラさんとの関係というか！」

「…あくまで私の調査の護衛だ。気安さも、単純な付き合いの長さか

らくるものだ。お前たちもその内わかる」

「それはもう解つてるよ。でもほら、あたしはアルムにああも簡単に可愛いなんて言えない訳でね？」

「それはお前さんが過剰に照れているだけだろう」

アンペル、付け入る隙を与えるなよ！こちらの世界のこの年頃の女子はこういう話になると無限に想像力を膨らませる…とアルムの妹から聞いたぞ！」

「でも、実際仲は良いよね？長い付き合ひって言えるくらい一緒にいるんだから」

「どうしてもお前たちが思つてているような関係では無いし、なろうとは思わん。私はコイツの常識知らずの言動に苦労させられ続けているんだぞ」

「…なんだと？」

その言葉は聞き捨てならんな…

「心当たりが無いとは言わせんぞ。息が臭いというだけで酔っ払いと喧嘩したり、気に入つた果樹園を占拠したり…そもそも、私と出会つた時もいきなり襲い掛かつて来ただろう」

「それを言うなら貴様もだ。お節介で騒ぎに首を突つ込み痛い目を見るわ、酷吏の金庫を爆破するわ…私が被つた苦勞も相当だぞ」

「…何か、似た者同士だな？つーか果樹園占拠つて何やつてんだリラさん…」

「喧嘩するほど仲がいい、つて感じだよね」

「それだけ色々あつてもまだ一緒にいるわけだしね」

く、しまつた…！アンペルの一言に乗せられて余計なことを…！

「と、ところでアルムは？こっちにいると思つてたんだけど」

良いぞタオ、助かつた！

「アルム？なんか地図を作りに行くとか言つてたけど」

「ああ、アレか。まあアルムならちやんとしたものを作るだろうし大丈夫かな」

「なんだ、アイツにも上手くいくつて教えたかったのによ」「ライザなら上手くいくつて確信してたみたいだよ？」

「…うう、そういうとこアルムはズルいよお…」

…とりあえず危機は去つたか？全く…」

「それで、もう少し一人の話が聞きたいんだけど…」

「そ、そうだね、アルムが戻つてくるまでもうちよつと時間あると思うし」

去つてはいなかつた。ぐう、ここからどうやつて抜け出す…!?

「流石にそろそろ止めといた方が良いんじやねえの？突きすぎると碌なことにならねえだろそういうの」

「だからあのタイミングで無理やり話を切ろうとしたのに…」

「いやまあそうなんだけど、その、後学の為に？」

「それに、単純に2人が今までどういう旅をしてきたのかも気になるから。…恋愛話も気になるけどね？」

「…旅の話だけならしてやろう」

全く、ようやく収まつたか。…少なくとも、こいつの肩の荷が下りん内はその手の話を私からするつもりは無い。何時になるかは解らんが…こいつ等との出会いが、その切っ掛けになるだろうか。

まあ、今考えることではない。とりあえずはこいつらには旅の話で満足してもらうか…と考えていた、その時だった。

——ドゴォン…

「つ！」

「リラさん？」

「…何か、音がしたような」

気づいたのはレンントだけか。…もしアルムが万が一奴らと出会い、交戦しているのだとしたら…将軍級なら、今のアルムではまだ厳しい。もしもの時の為に、探しに行くか。

「私は音の方を見に行く。レンント、お前はアトリエの護りだ」

「解つたぜ！」

確かこちらの方角だつたな。杞憂であつてくれよ…！

「…これは」

あの音の現場と思われる場所に着いた。…奴らの痕跡は見当たら

ない。その代わり…

「粉々に砕けた岩に…何だ、この大穴は？」

確かにここには、道を塞いでいた岩があつたはず。それが砕けている代わりに、謎の大穴が開いている。隕石でも落ちてきたのか？…いや、それでは焼けた跡は兎も角何かに斬られたような跡があるのは不自然だな。

…火と風の精霊が少し騒めているのも気になる。火と風…まさか？そう思っていると…

「リラさん？どうしてここに？」

道の奥からアルムが歩いてきた。…少し服が汚れているな。

「アトリエに居たら、何かが激突したような音が聞こえてきたからな。奴らでも出てきたのかと思つたんだが…」

「ああ…多分俺のせいですね、その音は」

「…この大穴も、お前が開けたのか？」

「そのつもりはなかつたんですけどね…」

…どういうことだ？

「ちよつと、新技を開発していたというか。あの時の白い奴みたいな大物を一撃で倒すための必殺技みたいなものを」

「…それを、ここにあつた岩に試し打ちした、と」

「ええ。…ただ、予想より威力も速さも出てしまつたので、思い切り地面に突っ込んでしまつたんですよ。這い出てくるのに20秒くらいかかりました」

「…それはまた、随分深いな」

破壊力だけなら、私でも敵わんな…

「なのでまだ実戦投入は無理ですね。もう少し制御ができるようにならないと」

「ああ。敵を倒すための技で味方を巻き込むなどあつてはならないからな。…さて、みんなが心配している。早く戻るぞ」

「そうですね、地図はもう作り終わつたので…それと、驚きの事実も明らかになつたので」

「驚きの事実？」

「それはアトリエに戻つてからで」
察するにあの道の先に関することだろうが…精々楽しみにしてや
ろう。

余談だが、先ほどアトリエでしていた話について聞かされたアルム
は、私とアンペルの関係についてこう言い放つた。

「破れ鍋に綴じ蓋」

…私とアンペル以外の全員が領いていた。

炎が吹き上がる山、不穏に包まれる平原

「——というわけで、俺はこの道が【流星の古城】に通じていることを知ったんだ」

アルムが戻ってきてすぐ、僕たちは驚くべきことを聞いた。まさか、小妖精の森から古城に通じる道があるなんて。確かに、言われてみれば立地的にはおかしな話じゃないけど……実際にこうして見せられるまでは信じられなかつた。

「ここからならアトリエにも近い。調査がしやすいな」

「アレもクリント王国の遺跡の一つだ、何かしらの痕跡が残つてゐるかもしけん。お手柄だぞ、アルム」

「有難うございます。……まあ、偶然なんですが」

アルムも予想外だよね、そりや。新技の試し撃ちしたらこんな道を見つけちゃつたなんて。

「……」から古城まで通じてる道があつたつてのも驚きだ。だけどな

⋮

「何だ？」

「お前、そんな必殺技を考えてたのかよ！しかも結構形になつてゐたいじやねーか！」

「え、そつちの方が重要なの？」

「当たり前だろ！必殺技だぞ！」

イヤごめん、よくわかんない。いざというときの為の一発逆転の一手、つて意味でなら確かに有用かもしれないけど……そこまで興奮するものかなあ。

「浪漫とかそういうものじゃないぞ。必要だと思つたから考えたんだ」

「だとしてもだ！あんな大穴開けるとんでもねえ技を作り出しちまうなんて……くつそ、どこまで俺より先を往くんだお前はよ！」

「まあ確かに、フランムがどれだけ強くなつても開けれそうにない穴だつたけど……」

「あんまり広がらずには真っ直ぐ空いた感じだつたよね。……どんな技

か、解ったかも」

「まあ、小難しい事はしてないからな。…さて、それよりも冒険についてだな」

「冒険について？…もしかして、明日から古城を探索しよう、とか？俺としては、古城よりも先に火山の探索がしたい」

「え、何で？」

「理由は2つ。1つ目は装備だな。火山なら何かしらの鉱石があるだろうから、装備の更新が出来そうだと思つた。少し中を覗いてみたが、古城の魔物は恐らく街道や坑道の魔物とは段違いに強い。装備は整えてから行くべきだろう

「武器とか道具の更新…うん、それは任せて！」

「2つ目は、そろそろルベルトさんからの頼みを果たしておこうと思つてな」

「お父さんからの？…あ、冬用ふにまくら？」

「ああ。火山なら熱いふにがいるだろうと思つてな」

「随分と人気だな、アレは。まあ、気持ちは分かるがな」

「無論私の分も作ってくれるんだろうな？質のいい睡眠は戦士には必須のものだ」

「もつちろん！期待して待つてよ！」

みんなすっかり気に入ってるよね、アレ。まあ僕らも愛用してるけど。

「というわけで、明日は街道を進んで火山まで行こうと思う」

「確かに、ライム平原からは強さは兎も角数が多くなるんだつたよね…不意を打たれないといいなあ」

「そんときや俺が守つてやるよ」

「うん、頼りにしてるねレント君」

「いざとなつたらあたしがまとめて吹き飛ばすわよ！」

「そういえばライザも最近新技作つてたつけ。ちゃんと周り見て撃つてよ？」

「よし、じゃあ明日に備える為に、今日はここで解散だな」

「解ったよりーダー」

「明日も宜しくね、リーダー！」

「頼りにしてるわよリーダー！」

「お前もしつかり休めよリーダー！」

「…おい、タオ」

「ゴメン、あまりにもリーダーみたいな発言だったから。偶には僕も揶揄う側に回つてみたくなるんだよ？」

「あーもう、本当に数が多いなあ！」

次の日冒険に出た僕たちは、平原の魔物の多さに辟易していた。数だけならまだしも、翼竜が多いから本当に厄介だ。

「吹つ飛べ！ブラストノヴァア！」

「難ぎ払う！」

でも、ライザとアルムのお陰でまとめて倒せてはいる。このまま何事もなく終わつてほしいけど…

「つ！クラウディア！」

「きやつ…！」

レントが次の敵の接近に気づいたみたいで、なんとかクラウディアを庇えた。アイツ…他の翼竜より大きい！

「あ、有難うレント君」

「気にすんな！」

「僕が動きを止める！」

縛術・影縫いでワイバーンの動きを止める…いや止めきれない。だけど…！」

「ナイスだ、タオ！」

そういつてアルムが飛び出した。相変わらず凄い速さだ。

「シツ！」

大型のワイバーンの側頭部を右足で蹴り、その勢いのまま後ろ向きに左足で顔面を突くように蹴り、踏み込んで宙返りしながらワイバーンを蹴り上げた。そして。

「アストラルスファイア！」

ライザからの追撃が入り、更にワイバーンの体が浮き上がる。

「レヘルン！」「凍れ！」

更に、2人同時にワイバーンにレヘルンを投げつける。翼が凍つて飛べなくなつたワイバーンは無防備に落ちてくるだけになつた。そしてアルムは炎と風を同時に右脚に纏わせ……

「——碎け散れえッ！」

全力の一撃をワイバーンに叩き込んだ。凍つて抵抗も出来なくなつたワイバーンは、そのまま吹き飛ばされて息絶えた。：もう少しで、ワイバーンの胴体が千切れるところだつたよねアレ。

「ふう……」

「よーし、上手くやれたわねアルム！」

「なんだ今、連携……えげつねえな」

「下手に追い詰めて反撃を許したら敵わないからな。……これで、このあたりの魔物は粗方倒したな」

僕には絶対真似できないな、アレ。まあ役割が違うから真似する必要は無いんだけど。

「次からは上にも気を向ける必要があるな。……火山に着くまではある程度強引に突っ切るか？」

「あんまりまともに相手し続けると時間ばっかりかかるもんね……」

「よーし、火山まで一気に突っ走るわよ！」

「走るのは良いけどよ、タオとクラウディアに合わせろよ？」

「は、走るのはちょっと自信あるから私は大丈夫だよ！」

う、それなら置いて行かれないようにならんと……！」

「よし、なら……強行軍だ。行くぞ！」

アルムのその号令と同時に、僕たちは駆け出した。

「ここが【火山ヴァイスベルク】か……解つてはいたが、流石に暑いな」
分岐路を全力で走り抜けて、私たちは火山にたどり着いた。あれだけ走つてから火山に入るつて、もう汗で凄いことになりそう……
「さて、さつさと熱い鄱にを探して、さつさといい鉱石を見つけて、
さつさと鍊金するわよ！」

「ホントライザは元気だなあ…」

「やつぱり、凄いよライザ…」

「まあ、クタクタになられるよりはよっぽどマシだな」

「早く帰ろうとはしているようだが。ライザでもこの環境は堪えるみたいだな」

それなら、帰つたらライザと一緒にお風呂に入つて汗を流したいな。お父さんも許してくれると思う。アトリエに作つたりしないのかな? 作れるなら、だけど…

「あまり長居したくない環境なのも事実だ。手早く行くぞ」

手伝えることは、全力で手伝うよ!

「いたぞ、赤いふにだ」

「1体や2体じや足りないよね。目安は?」

「まず10体くらいかな」

「結構必要だね…あんまり時間は掛けていられないかな」

「じゃ、サクッとやつちまうか」

「こここの隙間、奥に何かありそうだな」

「横になれば通れそうだな。行くか」

「ハンマーがつつかえないかな…」

「アルムとレントが通れるなら行けるでしょ」

(ライザもつつかえるんじゃないかなって言いそうになつちやつた…

その、アレが)

「あ、こつちに吊り橋があるよ」

「えっと、渡つて大丈夫かな?」

「んく…結構しつかりしてそุดから、行けると思う」

「念の為に俺は跳び越えていくが…レントは?」

「…お前みたいに出来ねえからな。ライザを信じるぜ」

「至る所にお湯が溜まつてゐる所があるな。温泉、だつたか?」

「確かに、マグマで温まつた水が温泉として湧き出たりすることがあるって聞いたことがあるよ」

「大体は掘ると湧き出てくるんだつたよね」

「…ふーん」

「おい、俺を見るな。アルムに頼め」

「ここ、家がいくつかある。人が住んでたのかも」

「そうだと思う。魔物がこんな家を建てるとは考えられないからね」

「どんな人達が住んでたんだろう？」

「わざわざ火山に住んでたつてことは、鉱石に関係あんのか？」

「だとすると、鉱石を加工する職人達が住んでいたのかもな」

「良きげな鉱床発見！2人ともお願ひ！」

「おらよつ！お、見たことねえ鉱石だな」

「はつ！…こつちもだ。どんどん掘つていくぞ」

「…斧と蹴りで鉱床掘つてる」

「普通、ピツケルとかハンマーだよね…」

「…何だ、これは。金属か？」

「明らかに自然にできたものじや無えな」

「…ここ、なんか不思議な感じがする」

「うん。なんて言えばいいのかは分からぬけど…」

「もしかしたら、ここで何かを祀つていたのかな」

そんな感じで火山を一通り探索して、日が暮れ始めたから島に戻ることになつた。平原での戦闘が無かつたら、古城への道も探索できたのにな。

「あの水路らしき道を突破できるようになれば、火山への近道にもなるが…」

「まずは装備だろ？焦つたつて何も良い事ないからな」

「多分だけど、さつき採れた石で採取用のハンマーと新しい武器が作

れると思う」

「なら、今日はもう遅くなりそうだし明日早速作つてみようよ」

「ふふ、楽しみだね」

そう言いながら分岐路までたどり着いた。ここからまた強行軍かなつて思つたんだけど…

「…あれ？」

「…気づいたか、クラウディア」

「うん。音が、しない」

「魔物の気配がねえな。…何があつた？」

さつき殆ど倒さずに来たのに…どこに行つたのかな？

「確かに変だけど、そんなの今考えても解らないでしょ。一つだけ言えるのは…」

「楽に帰れるつてことだよ！さあ、何か起ころる前に急いで帰ろう！」

…帰る時だけなら、タオ君が一番元氣かも。

それからは何事もなく、私達は無事に帰ることができた。だけど、それは本当に運が良かつただけだつたって知つたのは、ちょっとだけ先のお話。この平原に起きていた異変の原因に気づくことなく、私たちは次の冒険に想いを馳せていた。

因みに、ライザを家のお風呂に誘つてみて、OKが出たから一緒に入つたんだけど…

「ふうう、生き返るう…」

「…」

「どうしたの？」

「…浮くんだね、本当に」

「え？」

ライザ、これをあんまり自覚してないつて本当なの…？

轟く竜の咆哮、定まる対策の方針

「成程…それは、少し不味いかもしけん」

「不味い…ですか」

火山の探索をした次の日、アトリエでライザが調合をしている間に昨日の異変についてアンペルさんに相談した。すると、アンペルさんは少し険しい顔になつてその事態を「不味い」と評した。：なんとなく不味いんじゃないかとは俺達も思つてはいたが、どう不味いのだろうか。

「島の漁師たちが最近不漁続きだと嘆いていただろう。あの時、私はその原因の予想としてどういつた可能性を挙げた？」

「外海から魔物が…つて話だつたよな。…まさか、あの平原にヤバい魔物が出てきたつてことか？」

「今日お父さんからも聞いたよ。旅商人が見慣れない大きな魔物を見たらしいから気を付けろつて」

「でも、そんなの見かけなかつたよ」

「偶々視界に入らなかつたか、それともその場から去つた直後だつたかだらうな」

「…昨日の俺達は、運が良かつたつてことになるのか」

平原にとんでもない魔物が現れて、元からいた魔物がそいつに恐れをなしたから逃げたか一時的に隠れていた…というのが、アンペルさんの言いたい可能性らしい。

「その魔物が、アンペルさん達が言う【奴ら】である可能性は？」
「あり得なくはないだろが…クラウディア、その見慣れない大きな魔物の特徴は聞いたか？」

「えつと…赤くて、翼があつたつて。あの魔物とは違うと思う」

「なんだそりや、まるで竜みてえだな。：ん、竜？」

「…村のわらべ歌にあつたよね。「南に下る旅人は、決して街道を外れるな。西は悪魔の野が迫り、東の城には竜が住む」つて」

「…東の城つて、流星の古城の事だよね？」

…話が繋がつてしまつた気がするな。

「つまり、あの時平原には古城に住む龍がいたことになる…？」

「そのわらべ歌が、眞実を歌つているとするとなるならばな」

「…マジで遭遇しなくて良かつたな。かなり疲労してたしよ、俺達」

「なんなら、あの時古城に踏み込んでたら、繩張りを荒らす侵入者とか思われて…」

「…本当に、運が良かつたんだね、私達」

「こういう危険も、冒険には付き物だとは分かっていたが…龍が唐突に現れるかもしないというのは、流石に勘弁してほしいところだ。」

「クラウディア、その旅商人に被害は？」

「えつと、特に無かつたって」

「なら、とりあえずその魔物に関しては下手に刺激しないようにするべきだな。あの時みたいに、気づかれずに姿を確認できるなら最上だが」

「これで人を襲いだしたら…討伐隊なんかが組まれるかもな。その場合、アガーテさん経由で俺達にも声がかかるかもしれない。」

「で、万が一の時の為にあたしの鍊金術があるのよ！」

「そう言いながらライザがこっちに来た。調合が終わつたようだ。

「随分と自信満々だな？」

「勿論よ、皆が信じてくれるからね」

成程、確かにそれは自信に繋がるな。

「じゃあまずはコレ、【ノルデンブランド】！狙つた敵を無数の氷の短剣で攻撃する道具よ！」

「竜相手なら、翼に当てれば飛行能力を封じられるか…？」

「何かえげつないこと言つてる…」

「実際それくらいやらなきゃ勝てねえだろ」

「じゃあ、アルム君が使つた方が良いかもね。他のみんなじゃ近づくの難しそうだし」

あの技はまだ完成していないからな、もし使うなら相手の動きを封じてからにしたい。

「次にコレ、【ブニゼリー】！おいしいだけじゃなくて色々と調子が良くなるわよ！」

「わ、可愛い！」

「わざわざふにに似せなくても良かつたんじやねえか…？」

「調子が良くなる、か…よし、どうだタオ」

「何か力が湧いてくるような…つて、何で僕で試すのさ」

「お前が一番聾眞目無しの意見をくれそだからだ。」

「次はまとめて！【エナジー・ペンダント】、【グナー・デーリング】、【雷嵐の耳飾り】！不思議な力を持つたアクセサリーよ！」

「どれどれ…お、このペンダント、着けるだけで調子が良くなつた気がするな」

「この指輪もだ。多分、実際に力が強くなつてていると思う」

「この耳飾り、魔力を感じるわ。守ってくれるような…」

「自分の役割に合つたものを選ぼう。僕はペンダントと耳飾りかな？」

「それなら、俺はペンドントとリングだろうか。

「更にこれ、採取用のハンマー！これで鉱石が採りやすくなるわ！」

「こ、これ僕が普段使つてるハンマーより重いよ」

「私じゃ、持ち上げるだけで精いっぱいだよ…」

「ライザは結構軽々と持つてきてたけどな…」

「…あの細腕のどこに、あんな力があるんだか」

杖で魔物を殴りに行つている時点で今更ではあるがな…

「で、後は武器！…と言いたいところなんだけど、全員分は流石に足りなかつたわ。だから今日集めるわよ！」

「え、大丈夫なの？」

「隠れながら慎重に行くぞ。途中で見つけたら即撤退…アーツを見つけた時と同じ要領でいいだろう」

「…それでも見つかっちゃつたら？」

「…俺とアルムで殿やりながら撤退するしかねえな」

そこまで近づかなくても、姿は確認できると思うが…いや、こっちの想定より視野が広いかもしれないしな。

「お前達ならそうそう判断を間違えることは無いと思うが、命を落とすような真似だけはするなよ。…お前達には、帰りを待つてゐる者た

ちがいるんだからな」

…そう言うリラさんが、どこか悲しんでいるように見えた。…まさ
カリラさんには、もう…

「よーし、じゃあ火山まで慎重に、行くぞー！」

「慎重に行こうとしてる奴のテンションじゃねえよ…」

…行こうか。勝手を許してもらつている分だけ、心配させ過ぎない
ように、慎重に。

「さて、今日は必要な分だけ採取して引き上げるわよ」

昨日よりも魔物が少なく、旅商人が見たらしい魔物みたいな奴もい
なかつた平原を駆け抜けて火山にたどり着いたら、ライザがそんなこ
とを言い出した。珍しいな、何時ものコイツなら時間かバッグがいつ
ぱいになるまで探索しようとするのによ。

「さつきはああは言つたけど、とんでもない魔物がいるかもしれない
いつて言うなら、やつぱり逃げられるだけの余力は残しといたほうが
良いからね。せめて武器を新調するまではスルーヨ」

「ああ、そうしよう」

「あ、それともう一個。タオ」

「何？」

「…悪いけど、あんたの武器だけもつと強化するための素材がまだ見
つかってないって言うか、だから…」

「ああ、そういうことならいいよ。多分僕が一番武器の必要性低いだ
ろうし」

「見つかり次第強化してあげるわよ。丁度リビルドって言う便利な技
も教えてもらつたからね」

余裕があればその素材も探しに行きたいところだが…今は安全重視
だからな。そこまでの余裕は無さそうだ。

「さてと、狙いは彗星岩よ！あの小屋があるところから降りたあたり
の鉱床で採れるわ！」

「あそこか。採る役は誰がやる？」

「俺がやる。皆はその間の警戒頼むぜ」
さて、新武器の為に張り切つていくか！

「よーし、これで足りるわね！」

「お、マジか。どんな武器になるか楽しみだぜ」

よし、今日はこれで引き上げだな。戦闘もアクセサリーとノルデンブランドのお陰か昨日よりだいぶ楽だつたし、日が上にある内に終わつたぜ。2時くらいか？

…ただ戦闘中、結構衝撃的な出来事があつたな。クラウディアがフルートをブームランみたいに投げて魔物を攻撃するつていう、かなり自分の目を疑いたくなる光景だつた。アルムすら「いや何やってんだお前」みたいな表情してたな：

それについてクラウディアは、「魔力でフルートを強化して、音に乗せた魔力を直接ぶつけるから結構強い技になつたと思う」とか言つたが、聞きたいことはそつちじやねえよ。

「さて、後は例の魔物と遭遇するか否かだな」

「そうなんだよね…うう、何も起こらないでほしいなあ」

「その上で見つけるのが一番いいんだよね。…どこかに隠れて、来るのを待つたりできなかな」

「流石にそれは危ないんじゃねえか？その魔物だけが脅威つてわけじゃねえんだ」

隠れた魔物に後ろから襲われたりとかされかねねえからな。そういう危ない橋は渡らねえに限るぜ。

「だが、もし見かけたらその時は隠れてやり過ごした方がいいだろうな。下手に動く方が見つかる危険性は高い」

「それじゃ、コソコソと帰るわよ！」

だから今からコソコソするやつのテンションじゃねえって、それ。

「…それっぽいの、いる？」

「…今は居なきそうだ」

辺りに気を配りながら、小声で状況確認をしつつゆっくりとアトリ

工に戻る俺達。今のところヤバそうなのは居ないが…あの時と同じ、殆ど魔物を見かけない。何かありそうなもんだが…

「きゅ、急に上から来たりしないよね…」

「…怖いこと言わないで…」

「…居ねえから心配すんな」

翼があるって話だから、上の警戒も緩めちゃいけねえな。突然突っ込んでこられたら対処できるかどうか分からねえし。

「…あと半分だ。気を抜かずに行くぞ」

アルムがそう言つた直後…

ガアアアアアアアアアアアアアツ!!

「「「「ツ!!」」」

なんだこりや、雄たけびか!?いや、咆哮!?

「レント!」

「ああ!」

俺たち全員が隠れられそうなところを探す。…あそこか、ちょっと遠いな…なら!

「すまん、ライザ!」

「うえつ!」

「クラウディア、タオ、悪い!」

「きやつ!」「うわつ!」

アルムがライザを、俺がクラウディアとタオを抱えて物陰に急いで隠れる。…見つかってねえよな?っていうか、咆哮の主はどこにいる!?

「…アレだ」

アルムが指差したのは、廃墟みてえになつてゐる遺跡の上。そこにいたのは…

「…オイオイ、本物の竜じやねえか…!」

「ほ、本当にいたんだ…!」

翼を羽ばたかせ、我が物顔で空を飛ぶ、赤い竜だった。

「なんで、あんなところに？」

「解らねえよ。…原因を探ろうにも、今は近づけねえな」

「…何かを探しているようにも見えるな」

言われてみりや、周囲をキヨロキヨロと見渡してるようにも見えるな。…竜は暫くそれを続けてたが、突然高度を上げた。そして…

ガアアアアアアアアアアアアアツ!!

。

もう一度咆哮し、東…古城の方まで飛び去つて行つた。…見つからずに済んだのか？

「…去つたみたいだな。どうする、奴が留まつていた場所の近くを見ていいくか？」

「それくらいはした方が良さそうだな」

「…誰か、襲われてたりしないよね」

「う…もしそうだつたら…」

。

それで誰かの命が奪われていたとしたら…最悪だな。

「今なら魔物もいない、急いで調査するぞ」

「う、うん」

「誰も襲われてませんように…」

「これ、お父さん達に言つたらなんて思われるだろう…」

「…流石に怒られはしねえと思うから、大丈夫だと思うぜ？まず信じてもらえるかだけどよ」

。

それならそれで、信じてもらうまで説明するだけなんだがな。

特に被害にあつた人がいなかつたことに安堵しながら、俺達はアトリ工に戻つて、鍊金する前にアンペルさん達に事の顛末を話した。すると「早く島の人たちに話すべきだろうな」と言われたから、急いで島に戻つてアガーテ姉さんを始めとした大人たちにこの事を話をした。

流石に最初は疑われたが、俺達があまりに真剣な様子だったから信じてくれたみてえだ。で、当然この話はモリツツさんの耳にも届くん

だが：

「街道にそんな魔物が出るとなると人の行き来に悪影響が出るな。： よし、早急に討伐隊を編成するぞ！」

判断が早えな。まあ、アガーテさんとルベルトさんがこの話を信じてるってのもあるだろうけどよ。が、そこに待ったをかけたのは村の古老だ。

「古城の竜は敬うべき島の守護獣じやぞ！それを討伐などと！」

…アイツ守護獣だつたのか？初めて聞いたんだが。まあこのまま平行線で話が終わりそうだから、一旦アトリエに戻るか。…なんて思っていたんだが。

「人的被害が出る可能性を見過ごすつもりですかな？」

「おぬしが外から人を呼びこまなければいいだけじゃろう！そもそも、あの旅商人や鍊金術士とやらのような怪しい輩がこの島をうろつくから、この頃村は災い続きなのじや！」

…あつ。

「…」

「お、抑えろよアルム？ここでお前が切れても何にもなんねえぞ？」
「解つてる。…だがこの怒り、何にぶつけたらいいと思う？」

「いやんなこと言われても…つて炎が漏れてるぞオイ！」

「今ならあの竜も一撃で打ち抜けそうだ…そうだ、ちょっと行つてくれる」

「ライザ早く来てくれええええ！」

この後、駆け付けたライザが「わー！アルム止まつて！ストップス トップ！」って言いながら真正面から思いつきり抱き着いたらんと 鎮静化した。身内を貶されたりすると沸点が超低くなるのは知つてたが、今回はマジでやばかつたな…。因みに竜は、モリツツさんが討伐する方向で押し切つた。

ところでライザは人前でアルムに抱き着いたことになるが、大丈夫なのかアイツ？

「――つてことがあつてね。何とか止まつてくれて助かつたわ…」

「うん、それは良かつたけど…」

「何、クラウディア？」

「…アルム君を止める為に抱き着いたんだよね？モリツツさん達が見
てるところで」

「…あつ！」

後日、そんな会話があつたらしい。ライザは顔を真っ赤にして突つ
伏したそうだ。やっぱ大丈夫じやなかつたな：

大人達は危急を知り、少年少女は飛竜を目指す

「これが俺の新しい武器か。軽いを通り越して、気を張つていないと勝手に飛びそうな気さえするな」

「多分だけど、アルムの魔力で空を飛べると思うよ。あんまりやりすぎると調子悪くなっちゃうから、そんなに長くは飛べないと思うけど」

「…成程、やつてみるか」

竜を見た次の日、あたしはみんなの新武器を作った。もしかしたら討伐隊に声がかかるかもつてことで、早めに準備をしておきたかったら、畠仕事が終わつてから皆を呼んで即アトリエに直行して調合。今はみんなに感触を確かめてもらつてる。アルムに渡したのは、薄い水色でシャープなデザインのブーツだ。

「…一瞬の魔力の噴出による高速移動。飛行というより跳躍…いや、空を走る感覚だな」

「そなんだ…【エアスプリンター】っていう名前の通りだね」

実際は「それくらい軽いブーツです！」くらいの意味合い何だろうけど、最初に名前つけた人もまさかこれを履いて本当に空を走る人が出てくるとは思わなかつただろうなあ。まあ、戦闘用にちょっとアレンジしてあるから厳密には同じものじやないんだけど。金属仕込んでるし。

「コイツなら、空の敵も叩き落せそうだ。上手くやれば、竜の上も取れるかもな」

「よし、なら成功つてことで良いわね！」

そう言つて、他のみんながどうなつているか見てみる。クラウディアは…うん、全く問題なさそう。【イノセントスノウ】は氷の力を持つ純白のフルートで、手袋を付けて演奏することを想定した物らしくて、キーが滑りにくい。戦つてる最中にフルートを落としたりつて言う危険性が減るから、クラウディアも安心して吹けると思う。

「イニシエーター」は戦場で先陣を切る兵士が好んで使つてた剣みた

いで、出来るだけ軽くなるように作られてる。レントはもうちょっと重さがある方が好みそうかなーなんて思つてたけど、表情を見るかぎりでは気に入つてくれたみたい。

タオは…こつちも出来るだけ重さは削つたんだけど、まだちょっと重そう。【デストルクション】は破壊活動に向いてるハンマーで、要是直接殴る用のハンマーだ。一応、魔力を飛ばすタオの使い方でも以前より威力は出てるみたいだけど…うーん、要改良？まだ完成には素材が足りないからなあ。

「それで、お前自身の武器はどうだ」

「うん、いい感じ。この杖、かなりの魔力を持つてるんだよ」

そしてあたしの武器【グリムクローツ】。本当は一つ一つ手作りしなきやいけないらしいんだけど…その辺は鍊金術でちょっとズルしちやつた感じかな？持つてるだけで凄い魔力を感じる。あたしの魔法をもつと高めてくれる良い杖になつたと思う。

「今日も精が出るな、お前さん達」

「新しい武器の慣らしを積極的にするのは良い事だ。いざというときに感覚がズレて上手く戦えないでは話にならないからな」

「2人とも、今日は島に行つていたんですか？」

「ああ、遺跡だらけ…どころか遺跡そのものと言つてもいいあの島は、いくらでも調査するところがある」

「普通に暮らしてるだけじゃピンとこないけど…やっぱり珍しいんだ？」

「ああ。大都市でもないこんな一地域にここまで密集しているのはな。まあ、あの島に関しては理由は大体解つているんだが」「そうなの？」

「ああ。まだお前さんに教えるのは早いがな」

「むー、そういうことを言わると余計に気になるなー。

「それより気になるのが…その遺跡に関する伝承などがほとんど残つていないことだ」

「その代わりにあるのが、あらゆる行動を制限する禁忌ばかりだ」

「あー…そなんだよね。それだからあたし達窮屈で窮屈で」

「あの竜も定番の脅し文句だつたしな」

「そーそー。まさか本当にいるなんて思つてもみなかつたよ」

つてことは、あれはただの脅し文句じやなくてちゃんとした警告だつたのかも。例えば…

「この分だと、【乾きの悪魔】も本当にいるんじやないかつて思つちやうよね」

「だな。もしかしたら、あの白い奴がそうだつたりするかもしけん」

「あー、まさに悪魔つて感じだつたもんね、あれ」

「…【乾きの悪魔】？」

…？アンペルさん、何が引っ掛けたのかな？

「…お前さんたち、その乾きの悪魔はどういう存在なんだ？」

「え？えつと、乾期を呼ぶつていう、あたしたち農家の天敵だよ」

「奴らは湖を渡つてこれないから、島に入れば安全だ…なんて昔から言われているそうです」

「…湖を？」

「…それは、まさに…」

…え、え？何？

「…ライザ。確かに、乾期がもう近いんだつたな」

「う、うん。カラツカラな日が続いてモリツツさんがいつも以上に威張り出すちょっと勘弁してほしい時期だよ」

「…そうか。リラ」

「…ああ。調査を急がなければな」

…いつも以上に2人が真剣な感じになつてゐる。もしかして、【乾きの悪魔】のこともアンペルさんの目的に関係あるの？

そうだとしたら、クーケン島に残つてる遺跡とか言い伝えとかつて、私たちが想像もつかないくらい重大な何かがあるんじや…？

「…俺達が今考えるべきは、竜の事だ。2人の事はそこからでも遅くはないだろう」

「…うん。分かつた」

優先順位は間違えちゃいけないよね。今は竜をどうするか、あたし達に出来ることはあるか、だ。

「…で、竜の討伐部隊の編成ができた。これはいい」

「ああ」

「その中にアガーテさんがいる。これも当然だろう」

「護り手で一番の使い手だからな」

「…なんでお前達が討伐部隊に入っている？ ボオス、ランバー」「俺は俺なりの考えがあるからだ。何の策も無しに竜を討伐できると思つていてるほど自惚れちゃいない」

「ボ、ボオスさんに付いて行くのが俺の役割だからだ！」

「島に戻つてすぐにボオスに話しかけられて、伝えられた内容に衝撃を受けていた。…いや、お前も護り手の中に混じつても遜色ないくらいに強いのは知つているが、それでもあの竜を倒せるかと言えば：竜が戦つている所は見ていないが、恐らく無理だろう。見ただけでとてつもなく強いと解るからな、アレは。

「アガーテは恐らく、お前達を頼れない」

「…理由は？」

「言わなくとも解るだろう。お前達がいくら強いと言つても、本来ならばアイツにとつてはお前達も守る対象だ」

「…だから、俺達に「戦力」を求めるのは躊躇うかもしれない、と」

「ああ。だから俺も志願した。…アイツがお前達に頼れないなら、俺が頼ればいい」

「…何？」

ボオスが俺達を頼る？…つまり、協力を要請する、ということか？

「志願したとき親父に言つたんだ、「どんな手を使つても竜を討つ」つてな。親父はそれに「その意気だ、それでこそブルネン家の男！」なんて返した。…言質は取れている、ということだ」

不敵な笑みを浮かべ、そう言い放つた。…責任者の許可は得てい
る、と言いたいのか？ 悪い奴。^{わる}人の上に立つのに、必要なことなんだ
ろうけどな。

「で、どうだ？」

「一応、全員に確認はする」

間違いなく満場一致だろうがな。

「…流星の古城に行くんだろう？何で森を抜けていくんだ？」

「まあまあ、それは見てのお楽しみみてヤツよ、姉さん」

竜の討伐部隊として古城に向かう俺達。とりあえず例の道にアガーテさん達を案内することにした。あっちからの方が間違いなく近いし楽だからな。

「ついでだし、俺達で建てたアトリエも見てもらおうぜ」

「寄り道はできないから、本当に見てもらうだけだけね」

「建てた…？ 錬金術は建築もできるのか」

「正確には建て直したんだけど、それでもみんな頑張ったんだよ」「し、信じらんねえ…」

「だろうな。俺も予備知識無しなら信じられないだろう。

「というわけでまずこちら！あたし達で作った「ライザのアトリエ」だよ！」

「こんなものまで作つたのか…」

「…とんでもないな、錬金術つてのは」

「な…あ…」

「因みに2日でやつた」

「「2日!」」

大元が良い感じに残つてたからな。採集1日、調合午前中、立て直し午後、で2日だ。……それでもとんでもない早さだな。

「…何というか、色々置いて行かれる感じがするな」

「…そういえばお前達の武器も錬金術製なんだつたか」

「な、何もありじゃねーか…」

さて、そろそろアトリエ観賞は終わりにして進むとしよう。

「この先に、古城に直接繋がる道があります」

「…そうなのかな。それなら確かに、火山を経由するより格段に早く着くな」

「道中の魔物もこつちの方が弱いからね。竜と戦う前の消耗は避けた

いし

「ただ、色々あつてまだ俺達も入つたことはねえんだよな」「うん。だからどんなところになつてるのが、凄く楽しみ」

「…随分肝が据わつてるな」

「多分僕よりはよっぽど度胸あるよ、クラウディアは」

「お、俺も負けてらんねえ…！」

さて、そろそろだな。

「ここを道沿いに行けば、古城の下層部分と思しき場所に出来ます」

「そうか。…ところで、その大穴は？」

「ちよつと新技を試しまして…かなり深いので落ちないように気を付けて下さい」

「どんな技なんだ一体…」

もしかしたら、今回竜相手に使うことになるかも知れないな。まだ完成はしていないが…

「着きました。ここが流星の古城です」

「ここが…か」

さあ、始めるか…竜退治を。

目の当たりにする、少年少女の成長と鍊金術の産物、
そして古城の飛竜

「オラアツ！」

「はつ！」

古城の中に踏み入れた俺達は、早速魔物の歓迎を受けた。白いオオイタチみたいな奴と、黒いふにだ。だがこの程度、武器も強くなつた俺の敵じやねえ。何の苦も無く蹴散らせるぜ。

アガーテ姉さんもこれくらいは訳無いみたいだな、アツサリ倒してた。流石だぜ。

「ふつ！」

「どとつ・！」

ボオスも今のところは問題ねえな。対人戦の剣しか振るつたことないとか言いながら、良い感じに対応出来てやがる。

…ランバーはちょっと心配だな、なんかちょっと危なつかしい。大丈夫か？

「えいつ！」

「…クラウディア、その技気に入つてるの？」

「投げてからまた演奏に入るまでかなりスマートだな。どれだけ練習したんだか…」

「自分も魔物を直接倒すことに貢献できることが嬉しいんだつてさ。縦投げのパターンとか練習してたよ」

あつちではまたクラウディアがフルートを投げて、それにツツコミを入れながら3人が戦っている。タオも大分こなれてきたよなあ。

「あいつらは、随分と、余裕だなつ！」

「それなりに冒険はしてきたからな。似たような奴と何度も戦つてるし、動きも大体解つてる。苦戦する要素すらねえよ」

「あれでまだかなり抑えているみたいだしな。…お前とアルムは兎も角、いつの間にここまで強くなつていたんだか」

そう言う姉さんは嬉しそうで、少し寂しそうだつた。

「次の奴が来たな。…動く鎧か。森の奥にいた奴と似ているな」

「沢山いるし、大きいのもいるわね。…でも知つてゐるわよ、こいつらは！」

「魔法に弱いんだよね！やろう、ライザ！」

「アレをやるのか。タオ、俺達は時間を稼ぐぞ」

「解つたよ！」

ライザとクラウディアが魔力を溜める時間を、アルムとタオが稼ぐ。鎧の動きに付き合わず、尚且つ少し大きめに動いて注意を引いている。

「準備出来たわよ！」

「私も！」

「よし、頼んだ！」

「貫け、エクリップスジャベリン！」

「凍麗の舞…！」

ライザが作り出した魔力の槍で相手を押し込み、そこにクラウディアが氷の竜巻を起こす。そして今度は相手を包囲するように魔力の槍が展開され、それが敵に直撃すると同時に冷気の爆発が起こる。

これで雑魚は一掃できだが、大物は残つてる。だが…

「結索の楔！」

「穿ち…貫けえツ！」

タオが大鎧を怯ませ、そこにアルムが旋風と炎を纏つた飛び蹴りを食らわせる。大鎧は吹き飛ばされ、そのまま動かなくなつた。

「…やっぱ魔法つてヤベーな、あんだけの数を一度に相手できるんだからよ」

「全くだ。…本当に、私の知らないところでどんでもなく成長してるな」

そう言つて、姉さんは嬉しそうに微笑んだ。ある意味家族以上に俺達を近くで見てきたからな、姉さんは。

「ふーっ…あ、姉さん！こつちは終わつたよ！」

「ああ、見てたぞ。…もう、アタシが守つてやる必要なんてないのかもしれんな、お前たちは」

「ふふふ、じゃあ今度はあたし達が姉さんを助ける番……かもね？」
「ああ、その時が来たら頼りにさせてもらうよ」

「え…う、うん！」

「ふふつ。良かつたね、ライザ」

冗談のつもりで言つたのに本氣でとられたからか、戸惑いつつも嬉しそうだな。姉さんの事だから、解つてやつただろうな。

「そつちはどうだ？ボオス、ランバー」

「ああ、これくらいならまだ大丈夫だ」

「お、俺も、まだまだ！」

「無理はすんなよ？休める時には休むことも大事な戦士の務めなんだからな」

「リラさんの受け売りだよね、それ」

「いいだろうが、実際大事なことなんだからよ。

「さて…向こうから来てくれたおかげで、この辺りの敵は粗方片付いたな。次に進もう」

「何だ、お前が仕切るのかアルム」

「…あ。いつもの癖で、つい」

「いや、構わないぞ。…そうか、癖になるくらいいつも仕切つているのか」

「だからみんな偶にリーダーって呼んでるけど、嫌がるんだよね」

「大方、俺には向いてないなどと言つていいんだろう？・むしろ、お前に外に誰がやるんだと言いたくなる位なんだがな」

「…アガーテさん、勘弁してください。本当に」

お、かなり照れてんな。レアなもん見たぜ。俺らが言うと割と言い返してくるんだけどな。やつぱ姉さんには強く出れないか。

「…早く行きましょう。さつさと済ませるに越したことはないですか
ら」

「ふふ…ああ、そうだな。そうしようか、リーダー」

「…本当に、勘弁してください。本ツ本当に」

姉さんも結構人を揶揄うの好きなのか？いや、普段あまり隙を見せないアルムだからやつてみたくなつただけなのかもな。まあ気持ち

は分かる。

「…照れてるアルム、可愛い」

…その気持ちは微妙に分かんねえわ、ライザ。

「ここが本来の入り口…正門か」

「当たり前だけど、クリント王国の建築様式で建てられてるね」

「争ったような跡がある…どこかの国と戦つてたのかな」

下層から上がってきて、僕達は一旦正門の前に進んだ。ところどころに焦げたような跡が見えるから、多分あの竜が炎とか吐いたんだと思うけど…

「そういう勇ましい伝承、ウチには全然ないのよね」

「この辺りは辺境だから、滅亡時の戦乱にも巻き込まれて無い筈だし…」

〔成程、謎だな〕

〔…いつになく上機嫌だな〕

〔当たり前だろう。謎だぞ？〕

〔そういうの、アンペルさん達が調べたりするんじゃねえのか？〕

〔それはそれとして、自分でも調べてみたいだろう〕

〔…目がキラーンつてしてる。さつきの照れてるところといい、今日はアルムのリアな顔が見られるなあ。それで一番得してるのは間違いないなくライザだけど。〕

まあでも、僕も確かに気になる。これだけ戦いの痕跡があつて、竜が火を吐いたであろう痕跡もある。なら、竜も何かと戦つていたんじゃないかな、なんて仮説が立てられるけど…

〔…アルムの事は十何年も見てきたが、今のアイツが一番子供らしいな〕

〔ふふつ、やっぱリアルム君も男の子なんだね〕

〔誰かといふときは眞面目な感じだけど、本質はああなんだよね、アルムつて〕

ライザの言う通り、僕達といふときは抑えてるけど、割と好奇心の

塊つていうか。今僕達と冒険に出て無かつたとしても、その内唐突に冒険を始めてたと思う。外つていう完全なる未知の世界を知るために。

「…まあそれはいい。それより、途中に上り階段があつたぞ。あそこを進めば恐らく竜の住処に行けるんじやないか？」

「よし、なら行くぞ」

せめて、いきなり出てくるのはやめてよ…なんて、竜に祈つても通じないだろうけど。

「狭い…というか、区切られている感じだな」

「戦いにく이나。あまり力を出し過ぎると、色々崩れて面倒なことになりかねない」

階段を登つた先は、細かくスペースが区切られてる感じの区画だった。どういう意図何だろう？

「つていうか、そもそもこの城が何なのかが解らないわよね」

「戦いの為のものと思つてたけど…違うのかな」

「多分それは合つてると思うのよね。…人じやなくて、魔物相手とか？それこそ竜みたいな」

「それなら、守護獣なんて言われないとと思うがな」

「そうだよね。詳しい伝承は残つてないみたいだけど、村の古老はあの竜を守護獣なんて言つてた。クリント王国の城に攻めてきた魔物ならそんな扱いはされないんじやないかな？」

「…なんだこれは、石板か？」

「何か変な模様ですね、ボオスさん。なんなんでしょうね、これ？」

「ボオスたちが何かを見つけたみたいだ。石板みたいだけど…え？」

「…タオ。これは…」

「…うん。…古文献にあつた、クリント王国の文字だ」

「な…!」

「何でこんなところに？なんか文字も光つてるし…ただの石板じゃないのは間違ひなさそう。」

「タオ、これ読めるの？」

「えつと…うん、大丈夫。まず【炎の翼】…あの竜かな。で、【召喚】…魔物を呼び出す魔術だつけ？で…なんだろうコレ？」

「読めない字なのか？」

「読めるけど意味が解らないんだ。そのまま発音すると【ファイルフサ】ってなるんだけど」

「【ファイルフサ】…聞いたことねえな」

「多分、種族名とか何かなのかな？えーっと、後は…」

「それで、最後に…【殺す】」

「え…」

「【炎の翼】【召喚】【ファイルフサ】【殺す】この4つの単語が繰り返し書かれてるよ」

「つまりあの竜は、【ファイルフサ】とやらを倒すためにこの城に呼ばれた…ということになるのか」

「多分ね」

「あんな竜を呼んでもこんなことになっちゃうなんて、どんな恐ろしい敵だつたんだろう…」

「ちよつと考えたくないわね…」

…僕の脳裏には、その恐ろしい敵の候補が1つ挙がっている。あの時森で見た白い魔物。アレがたくさん攻めてきてたら…竜がいても、こうなってしまう可能性は高いと思う。…本当に、考えたくないけど。

「しかし、この石板…あの竜がこれに呼び寄せられたということは、これは竜を操る程の力を持つていることになる。とんでもない代物だな」

「…どんな技術で作られた物なんだ、一体」

クリント王国は高度な鍊金術で繁栄してたらしいから、多分これも鍊金術で作ったものなんだろうな。

「【ファイルフサ】の方については、後でアンペルさんに聞いてみよう。今は竜が先だ」

「ああ、なんとなく解るぜ。もうすぐ近くだ」

「ま、マジか…！」

「…いよいよ、か」

「氣を引き締めなくては、な」

そうだ、もう龍がすぐ近くにいるんだ。…怖いけど、今更逃げたつてどうしようもない。どうにか、戦わなきや。

「竜退治、とびつきりの冒険譚ね…！」

「うん。街道を通る人たちの安全の為にも…何とかできるように頑張ろう」

「…よし」

勇気を出して。…行こう！

そして、一番奥まで進んだら…そこに、あの日見た龍がいた。僕たちは、構えつつ龍に向かって進んでいく。そして…

「…ついに、ここまで来ちまつたな」

「うん。…今から、龍と戦うんだ」

「怖い…けど、みんなと一緒になら…！」

—グルルルル…：

「無理はするなよ、2人とも」

「解ってるさ。だが、役立たずになるつもりもない…！」

「や、やつてやるぞ…！」

—グオオオ…！

「よーし…行くわよ、みんな！」

「恨みがあるわけじゃないが…蹴り落とさせてもらうぞ…！」

—ガアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

龍との戦いが、始まつた。

賢しき翼竜の戦、穿つ流星の一撃

「——来るぞ！」

咆哮した竜は、まず息を大きく吸つた。今まで他の魔物で何度も見てきた、ブレス攻撃の予兆。だが、コイツのそれは恐らく他とは桁違ひだ。タイミングを見計らつて避けなければ、最悪この一発で終わる……！

——ガアアツ！

竜の口から、丁度俺達を中心を打ち抜くように火球が放たれた。俺達はそれを各自横に跳んで回避、丁度4対4で分かれた。こっちにいるのは……タオ、ボオス、ランバーか。

「さて、どつちを狙つて……！」

考えている途中で、竜が翼を振り上げながらこつちに向かつて来た。俺を爪で引き裂こうというのだろう。

「ハツ！」

俺は、振り下ろされた翼に対し蹴りを合わせた。つ、重いな……だが、ほんの少しだけ隙が出来た！

「セイクリッドコード……！」

「闇夜の帳！」

「コーリングスターっ！」

3人の魔法攻撃が竜に直撃する。それでもほとんど堪えてないようだが……

「アクセルダイブツ！」

「はああっ！」

「おおおツ！」

「お。おりやあああ！」

レント達の剣が竜の体に傷を付ける。傷がつくなら無敵じやない、つまり倒せる相手だということだ！

「無理はするなよ！一撃入れたら即退避、次に備えろ！」

「解ってるぜ姉さん！アイツがこつちに来たら、受けるのは俺がやるぜ！」

「頼りにしてるわよ、レント！」

「でも、無理はしないでね！」

レントがああ言つた以上、向こうは心配しなくていいな。

「アルム、脚は大丈夫？」

「ああ。…とはいえ、あまり何回も続いてほしくは無いな。向こうの限界とどちらが先か…」

「そもそも、こつちに付き合わずにブレスだけしてくる可能性もあるな…」

「そ、 そうなつたらこつちが不利過ぎるんじや…?!」

俺ならいざとなつたら飛びつく手段があるが…その隙にボオス達が狙われたら拙いな。やるなら、奴の狙いがレント達に向いたときか。さて、次の奴の行動は…?

——ゴオオ：

…? 風の流れが…? ツ、 竜巻か!?

——ガアツ！

俺達の中心に竜巻が発生した。こんなこともできるのか…! 再び横に跳んで躲したが…

「…あつ!?

「ちつ、 ボオス！ランバー！」

回避行動を取つた瞬間に、竜がボオスとランバーに突撃した。くそ、間に合うか!

「…うつ、 あ…!」

「…!」

「止まれえ！ レヘルンっ！」

「レヘルン！」

ライザとクラウディアのレヘルンが直撃するが、それでも竜は止まらない。ボオスは迎撃とうとしているみたいだが、いくら何でも無茶…! …ここから、届くか!?

「ノルデングランドッ！」

竜目掛けて、数多の氷の短剣が飛んでいく。が…

——グオオッ！

「うわあああっ！」

「ぐあっ！」

ほんの少し間に合わず、ボオスとランバーは尻尾の一撃で吹き飛ばされた。幸い、下に落ちずに済んだみたいだが……！

「てめえッ！ ブラッドスラスト！」

レントが怒りのままの一撃を振るうが、大きく振られた尻尾に弾かれ、まともに入らなかつた。ノルデンブランドは刺さつたから、翼膜へのダメージは入つたが……！

「2人とも、無事か！」

「ぐ……何とかな……」

「ボ、ボオスさん、俺を庇つて……」

「2人は少し離れたところで休むんだ！ 道中の魔物は一掃してある、襲われる心配はない！」

「……つ、解つた……」

「ボオスさん、俺の肩を……」

そういうつてここから離れていくボオスとランバー。……さつきの動き、明らかに狙つていたな。コイツ、俺達を少しづつ切り取つて確實に数を減らそうとしてきているのか？ だとすると、かなり頭が回る奴だな……

「少し強引にでも、攻めた方が良いかもしれない」

「……方法があるのか？」

「一応は。……ただ、かなり危険ですが」

「なら、余程の状況にならない限りは駄目だ。こちらは6人いる、お前1人が無理をする必要はまだない筈だ」

「……解りました」

……ボオス達がやられて、少し焦つてしまつていたか。確かに、戦況は未だこちらが有利。確実に詰めていく方が良いな。

「さあ……来い！」

少しずつ、お前の力を削いで行く……！

「大分、効いてきてるんじゃねえか…?」

「うん。明らかにスピードも落ちてきてる」

ボオス達が竜に吹き飛ばされてから、竜は何度も同じパターンで攻撃してきた。火球や竜巻で分断して、爪や尻尾で追撃。それに対してもたし達は、こつちに来たらレントが受けて、向こうに行つたらアルムが迎撃。そこにみんなで一斉攻撃を仕掛ける。この繰り返しだ。竜の翼膜は良くそれで飛べるなって言うくらいボロボロだ。

このままこれで勝てればいいけど…この竜は頭が良いみたいだし、流石にそろそろパターン変えてきそうかな。とりあえず、レントは回復しどこう。

「レント、ブニゼリーよ」

「私も回復するね」

「サンキュー。さあ、まだまだ受け止めてやるぜ！」

これでこつちは万全。アルムもタオからブニゼリーや貫つて回復したみたい。さあ、竜は何をしてくるのかしら？

——ゴオオオオオオオオオ…！

…何か、今までより呼吸音が大きいような。しかも、なんか長くない？ 涼く嫌な予感が…

「——ッ！拙い、早く奴を止めるぞ！」

そう姉さんが叫ぶと同時に、もたし達は前に出た。多分、このまま放つて置いたらとんでもない何かが起こる。どうにかして止めないと！

「ノルデンブランドつ！」

「レヘルン！」

「ソリッドブレイクツ！」

「槌術・岩穿ち！」

「碎けろオツ！」

「はああああっ！」

もたし達の全力の一斉攻撃。…だけど、止まらない…!?

「ならもう1回、ノルデンブランドツ！」

アルムもノルデンブランドを使つたけど…間に合わなかつた。竜

が、何かを吐き出した…！

「…！チツ！」

「ツ?!レント?!」

それを見た瞬間、レントがあたし達の前に立つた。まさか、アレを受けるの!?

「レ…！」

無茶よ…そういう間もなく、竜が吐き出した「何か」が炸裂した。

「…情けないな」

竜の一撃で吹き飛ばされた俺達は、安全なところで結果を待つしか無くなっていた。…役立たずにはならないと言つておきながら、この様か。

「…大丈夫なんですかね、アイツら」

「そろそろやられはしないとは思うが…クソツ」

何もできないことが、本当に歯痒い。あいつ等に、全部任せることになるなんてな…

「…もし、やられちまつてたら…」

「…どうにかして引っ張つていくしかないな。アガーテは親父の、他の奴らは俺の無茶に付き合わされてるだけなんだからな」

「そんな、それこそ無茶ですよ！」

「それでもやるんだ！もし死なれでもしたら…」

そこまで言つて…突如、途轍もない轟音が鳴り響き、熱風が吹き荒れた。

「…つ！今のは…!?」

さつきの火球や竜巻とは明らかに違う。これがあいつらの攻撃の余波ならいいが、もし竜の方だったら…！

「ちつ！」

「ボオスさん!？」

最悪な予感に、未だ痛む体が突き動かされる。あいつらは無事なんだろうな!?無事であつてくれ!

「……これは……！」

そして、戦場に戻つて来た俺が見たものは、何かによつて大きく抉れた地面と、しゃがみ込むライザ、アガーテ、タオの3人。そして……

「……無事だな、レント!？」

「ああ、何とかな……助かつたぜ、アルム」

レントの背中に手を当てているアルムと、ボロボロながらも剣を盾のようにして構え立つて居るレントの姿だつた。

「ぼ、僕達、生きてる?」

「あ、ああ。……レント、アルム、お前たちは大丈夫か!?」

「そうだよ！あんなのを正面から……！」

「いや、大丈夫だぜ。アルムの魔法のお陰でな」

「レントに炎と風を纏わせて防御したんです。ギリギリ間に合いました」

「そつか……ありがと、2人とも。つて、竜は!?」

6人が無事だつたことに安堵していたが、そうだ。竜は今どうなつている?!

——グウウウウツ……！

……俺達が離脱したときは比べ物にならないくらい、羽ばたきが弱弱しくなつていて。そして、どこか焦つてゐる様にも、苛立つてゐる様にも見える。さつきの轟音は恐らく、竜が何かしら奥の手と呼べる攻撃を使つたことによるものなんだろう。しかし、それを防がれた。今あの竜は恐らく考えている、どうすればこいつらを排除できるのかと。

「……パターンをいきなり崩してきて、こっちの不意を打つなんてな。だが、それも凌ぎ切つた。そして、そろそろ奴も限界に近い筈」

「じゃあ、ここからはこつちから仕掛ける番ね！」

「うん、ここからなら押し込めそうだつて、僕でも思うよ……！」

「レント君は大丈夫? 苦しいならもう休んでても……」

「いや、やるぜ。もし俺が休んだせいで手が足りなくなつたら笑えねえからな」

「……本当なら、止めなければいけないんだろうけどな。仕方がない、こ

の戦いが終わつたらしばらく大人しくしろよ」

しかし、ここからはアイツらの攻勢だ。竜に反撃の隙を与える間に一

「少し留めがいるからなかなか切

…全力で、行くぞ！」

アルムが脚に炎を纏わせた。その形から徐々に翼を思われる形に変わっていく。レントが気合の雄たけびを上げる。龍のそれにも劣らないと思えるほどのものだ。

●
●
●

逃がさない！縛術・影縫い！

卷之三

3人の魔女攻撃がそ

した。この屋敷が聖なるものだと言ふ人が、音に付けて、二三の隣の町

これで終わらせる！」

「元の元ノ一」

沙子口

レントとアガーテの斬撃が竜の顔面を切り裂き、その上からあり得ない高さと速さで突っ込んできたアルムの蹴りが突き刺さる。

「まだだ!!」ノルテンアーテンドニ

そして、どこからともなく出現した氷の刃のような物が竜の体に傷を付けていく。翼膜もボロボロで、もうまともに飛べないだろう。

「そして…止めだ」

さらに脚に纏わせていた炎をさらに燃え上がらせていく。これなら確かに止めを…

——ゴオオオオオオオオオオ……！

あの竜、何かを溜めている!?まさかあれが奴の奥の手か!?もしあの

ままアレが撃たれたらアルムが直撃を食らう。だが恐らくアルムはまだ溜めが終わつてない……

「……止めなきや！ チューニング！」

「クソ……ソリッドブレイク！」

「操術・絡繰り！ これで……」

「ノルデンブランド！ と、エクリップスジヤベリンつ！」

「これで、止まれつ！」

5人の一斉攻撃が突き刺さるが、それでもまだ竜は止まらない。このままじや間に合わない、なら！

「おおおおおおおッ！」

「ボオス！」

竜に向かつて駆け、剣を抜いて、その勢いのまま投げた。狙うは、奴の口の中！ 間に合えッ！

——グアアアアアアアアアツ！

竜の口内に剣が突き刺さり、中で炎が暴発した。よし、上手く行つた！ 後は……！

「アルム、決めろッ！」

「……ああ、感謝するぞ、ボオス！」

その言葉と共に、アルムの溜めが終わつた。普段赤い筈のアイツの炎が、青くなつていた。

「……行くぞ！」

その一言と共に……竜を全力で蹴り飛ばした。抵抗する力も残つてない竜は、成すすべなく吹き飛ばされる。そして、アルムはとんでもないスピードで上に「飛んだ」。そしてそこから、2回、3回と上に加速して高度を上げている。そして、今度は方向を変え、吹き飛ばした竜がいるところに向けて加速した。

「……これで……！」

アルムは体を回し、右足を振り上げる。そして……

「墮ちろおおおおおッ！」

竜の頭を全力で、踏みつけるように蹴つた。それと同時に、脚から渦を巻いた青い炎が吹き上がり、竜の頭を文字通りに吹き飛ばした。

頭を失った竜の体は、勢いよく古城の門の辺りまで墜落していった。

「やつた…！」

「これで、竜は討伐された。後は…」

「アルムは竜の所に降りたみたい。急いで追いかけるよ！」

「ああ、早く労つてやらなきやな。

古城の門の近く、アルムは竜の死体の近くで腰を下ろしていた。手に持つて居る球のようなものを眺めていたようだが…：

「来たか。…どうにか、やれたぞ」

「うん、見てた。凄かつたよ」

「ああ。本当に、よくやつてくれた」

「どういたしまして。…ところで、一つ頼みがある」

「何だ？」

「…肩を貸してくれ、右脚が限界だ」

「ああ、解った」

「レントだけじやなく、お前もしばらく大人しくすることだな」

「ふふ、エルちゃんに怒られちゃうかもね。無茶し過ぎって」

「無茶しなきや勝てない相手だつたけどね…」

「…」

兎に角、これで竜は討伐した。俺が貢献できたのは最後の最後位だが…少しほは、胸を張つて親父に報告できそうだ。

「そうだボオス、これを」

「なんだ、これは？」

「竜の眼」

「…眼!?」

「何よりの討伐の証拠だろう。ああ、モリツツさんに見せた後は返してくれ、鍊金術に使えそうだしな」

「…いや、それはそうだが。そんなものをいきなりポイと渡すな」

休息をとる少年、続々と来るお見舞い

「おうアルム、脚はどうだ？」

「まだかなり痛むし、力が入れにくいいな。…そういうお前はどうなんだレント。平気な顔して出歩いているが、安静にしろと言われたのはお前もだろう」

竜を討伐して、島に戻った俺達がまずやつたことはエドワードさんに診察してもらうことだった。その結果、レントは軽い火傷と全身打撲で1日、俺は右足の筋肉痛と捻挫で2、3日安静にした方が良い、とのことだった。骨折など、大事には至つてないのは良かつたが：

今は居間で椅子に座っているが、ぷにまくらを置いた別の椅子を持つてきてそこに右脚を乗せている。

「駄目だよレントさん、じつとしててつて言われたんでしょう？」

「そうなんだけどよ、正直動かない方が体に悪い気がしてくるつづーか」

「そうかもしれないがな…俺が我慢しているのに、同じく安静を命じられたお前が平気で出歩いてるところを見るのは少し腹が立つ」

「おいコラ言い方」

「こつちは言われるまでもなく碌に動けないというのに…」

「アルムー、脚は大丈夫ー？…つて、レント！アンタも安静にしろって言われてるんでしょ！なんで出歩いてるのよ！」

「うげ、こんな早く来るのかよ」

「ライザお姉ちゃんが叱る時つて、ミオおばさんに似てる気がする」「親子だからな、似るだろう。ついでに、熱中したら止まらないところはカールさん譲りだろうな」

「え、鍊金術やつてる時のあたし、あそこまで行つてる？」

「心底楽しそうに笑つてるからな」

「ああ、イタズラを計画してた時の何倍も良い笑顔だと思うぜ」「…そうかな。そういうことなら嬉しいな」

退屈を紛らわす為のものと本気で打ち込めるものでは、感情のこもり方が違うだろうからな。後者の方がより良い表情をするのは当た

り前か。…イタズラを計画している時の笑顔は、俺は見たことが無いんだが。

「それでお姉ちゃん、手に持つてるそれは何？」

「あ、これ？軟膏よ。これならアルムの脚にも効くってエドワードさんからのお墨付きも貰ったの」

「そうか。有難うな」

「どういたしまして。…それじゃアルム、脚出して」

「ああ…ん？」

…脚出して？今？ちょっと待てそれはつまり…

「…自分で塗れるんだが」

「何言つてんのよ。できるだけ動かないに越したことはないでしょ

？」

「いや、だがな」

「エルちゃんお願ひ」

「はい裾めくるよー」

「待て行動が早い」

そこでエルに頼むのは卑怯だろうライザ！力づくで止めることもやめろと強く言うこともできないだろうが！

「ありがとエルちゃん。さあ、早速塗つていくわよー」

「…ああもう、頼むからできるだけ早く終わらせてくれ」

抵抗しても無駄だな、これは…しかし、何かよく解らない恥ずかしさがあるぞこれ。

「アルム、脚はどうだ…つて、何をやつてるんだライザは」

「げ」

「…レント？お前も安静にしろと言われている筈だろう？」

「ほら、また怒られてる」

「…解つたよ、こつからは家で大人しくしとく」

「最初からそうしろ。…全く、こういうところはまだ変わらんな」

アガーテさんも見舞いに来てくれたようだ。そして怒られてレントは帰つた。…この状況をこの人に見られるの、かなり恥ずかしいんだが。

「で、この状況は？」

「ライザお姉ちゃんがアルム兄の脚にお薬塗つてるの」

「ほう、随分と甲斐甲斐しいじやないか」

「か…！もう、揶揄わないでよ姉さん！」

「ふふ、顔が赤いぞ？」

「…」つちも恥ずかしいので、止めていただけると有難いんですが
「すまんすまん。お前達を見ているとつい、な」

ああもう、早く終わってくれライザ…

「…ん、良し！これで終わり！じゃあ、レントみたいに出歩かずじつとしてなさいよ！」

「ああ、そうするよ。どの道、この脚じや碌に出歩けないがな」

「いや、アルムなら夜こつそりケンケンしてでも散歩しそうだなつて
「…俺にどんなイメージを持つてるんだ？」

「あー」

「エル？」

何だその「アルム兄ならやりかねない」みたいな顔は。 やらないぞ
？いや、発想としてなかつたわけじやないが。

「ただいまー。あら、ライザちゃんとアガーテちゃん！アルムのお見舞いに来てくれたの？」

「ええ。ライザは薬まで塗りに来たそうで」

「あら、そうなの？ありがとうねライザちゃん！」

「い、いえいえ、それほどでも」

買い物から母さんが返つて來た。：俺の脚の事を聞いたときは「頑張つたのね。でもやつぱり無茶はしてほしくなかつたわ」と言われた。ああするのが一番確実だつたとはいえ：流石に堪えるな、これは。因みにエルには「明日と明後日はわたしがアルム兄を見張る！」と言われ、父さんと母さんがエルに小遣いアップを約束していた。：大人しくせざるを得ないだろう、それは。

「アルム、本当にこんない子逃しちゃ駄目よ？」

「ルーテリアさん！」

「ライザがいるところで言うことじやないだろ…！」

「もどかしいからな、お前らは」

「むーん、どうしたらもつと2人とも素直になるかな」
揃いも揃つて余計なお世話だ、全く……！」

「じゃ、じゃあまた午後にも来るから！またねアルム！」

「……ああ、またな」

ライザは慌てて逃げるよう帰つていった。……ああもう、安静にしている筈なのに疲れた。

「どうした？疲れているみたいだが」

「アガーテさん、解つて言つてるでしよう……」

「さあ、何の事やら。……アルムの脚の無事も確認できだし、アタシも帰るとするよ」

「また来てね、アガーテちゃん」

「今度一緒に遊んでねー！」

アガーテさんも帰つていった。……ちよつと揶揄いに来ただけじゃないか、あの人……」

「ふむ、思つたより元気そうだな。なによりだ」

「ええ。皆が見舞いに来てくれるので、退屈もしていません」

午後になつてから、アンペルさんとリラさんが見舞いに来てくれた。……しかし、アンペルさん。

「……その妙にたくさんある菓子類は一体？」

「見舞いの品だが？」

「こうは言つているが、7割ほどは自分用だぞ」

……有難いことは有難いから、素直に受け取るが。その量から7割つてかなり多いぞ。

「……何日分ですか？」

「そうだな……3日分といったところか」

「今の俺が言うのもなんんですけど、かなり体に悪いのでは……」

「何度も言つているんだがな、改める気配がまるで無い」

「大変だね、リラさん……」

アンペルさんも、天然の氣があるリラさんに苦労させられている側

ではあるが。

「お邪魔します。……って、アンペルさんとリラさん？」

「邪魔するぞ。……何だこの菓子の量は」

続いて、タオとボオスが来た。2人同時に予想外だつたな。偶然か、それとも何かのついでだろうか？

「お前にこいつを返すのを忘れていたからな。見舞いついでに持つてきたぞ」

「それは……竜眼か。また珍しいものを手に入れたな」

「竜の頭は吹き飛んだのに、これは残ったんだよね」

「一説によると、全てを見通す神秘の力を持つているとされる代物だ」

「そんなに凄いものなんだ：」

「とんでもないものを手に入れてしまっていたみたいだな。まあ、後々ライザの鍊金術の素材として活用することになるだろうが。」

「ところでアルム、1つ相談したいことがあるんだが

「何だ？」

「……親父がいつもの3割増しくらいで煩いんだが、どうすればいいと思ふ」

「……恐らく親バカを発揮しているやつだな、それは。慣れるしかないと思うぞ」

竜を討伐して以来……と言つても昨日の話だが。モリツツさんが今まで以上にボオスを自慢するようになつたらしく、結果ボオスがそれに辟易しているという事態になつているそうだ。

因みにボオスが言質を取つて俺達に協力を要請した件については「全くの予想外だつたが、ボオスがそう判断したのならそれが正解だつたのだろう」とのこと。やっぱり偉そうすぎるだけでそれなりに柔軟だよなあの人。

「アルムー、また来たわよー」

「アルム君、お見舞いに來たよ」

午前中の約束通りライザが來た。クラウディアも一緒のようだ。

「ちよつとは痛みは引いた？」

「少しはな。だがこの分だと、言われた通り後2日ほどは大人しくし

ていた方が良さそうだ」

「そうしどきなさい。無茶して怪我が悪化しました、なんて誰も望んでないからね」

レントみたいに、お前やアガーテさんに追加で怒られたくないしな。

「それで、クラウディア。人が多いけど……大丈夫？」

「うん。少しでも早く治つてくれる方が嬉しいから」

「……成程、そういうことか。しかし、こういう怪我にも効くのか？」

「問題は無いだろう。あれは癒しの魔力だ、怪我や負荷の類には余程の物でなければ効果は出る」

「この冒険が終わるころには、僕たち全員クラウディアに頭が上がらなくなつてそうだね……」

「クラウディアさんつて、そんなに凄いんだ」

「ああ、少し同行しただけの俺でも解るぞ。攻撃しながら全体のサポートをするなんて、尋常じやない」

「……」までの逸材だというのは正直予想外だつたな。いるかいないかで旅の快適さが大きく変わるレベルだ

：褒めちぎられて恥ずかしいのか、クラウディアは顔を真っ赤にしている。だがまあ、妥当な評価なんだよな、これは。最初からサポートだけでも有難かつたのに、最近はそれをしながら攻撃にも本格的に参加できるようになつたからな。

「え、えつと、それじゃあ、吹くね？」

「思いつきりやつちやいなさい！……一緒に軟膏塗つたら効果上がつたりしないかな」

「もう一回？」

「何も言われない内から捲るなエル。……というか、そんなに頻繁に塗つて良いものなのかな？」

「臭いくらいしか問題は無いぞ」

「じゃあ良いわね！」

「うわ生き生きとしてる」

「一体何を見せられてるんだ俺達は……」

「新手のイチャイチャ？」

何処でそんな言葉覚えたエル。というか、またあんな恥ずかしい思いしなきやいけないのか…とりあえず、どうにかしてクラウディアの演奏に集中しよう…

「凄く賑やかだつたみたいね、アルム」

「大分恥ずかしい思いもしたけどな…」

夕方になつて皆帰つてから、井戸端会議兼買い物から母さんが帰つて来た。…結局、クラウディアの演奏には集中しきれなかつた。痛みがそれなりに引いたので、効果はあつたが。

「それだけお前は周りから大事に思われているということだ。それを裏切るような真似はするなよ」

「解つてるよ。…とりあえず、もう少し負荷を減らせるように技を改良しないとな」

「お姉ちゃんに頼めないかな、それ？あの靴も鍊金術で作つてるんでしょ？」

「負荷を減らせる造りにしてもらう、か？1つの手ではあるが、そこまで頼りすぎるのもな…」

「あの子なら寧ろ、喜んでやると思うが」

「そうよ。遠慮せず頼つちやいなさい？」

遠慮、か。最近はあまりしているつもりは無かつたんだが…そうだな。結局、俺の方で改良案が思いつかない可能性もある。なら、ライザを頼る方が確実か。

「…明日、そうしてみるよ」

「ふふ、じゃあ話が纏まつたところで、今から晩御飯の準備をするわよ」

「今日はわたしのが手伝う！」

「あらエル、有難う」

「エルの料理か。どれほど上達したか、楽しみだ」

「…いつもなら俺も手伝えるのに、少し歯痒いな」

とりあえず今日の所はしつかり食べてしつかり休んで早く脚を治

そう。またみんなで冒険に行くために、それと家の手伝いをする為に。

おまけ 午前中、軟膏を塗っている時のライザの内心

(よーし、塗るぞー。ただでさえ痛んでるところだから、力を入れずに優しくね。…あたしもこうやって、アルムに何かしてあげられるようになつたんだなあ)

(…うしてみると思つてたより太くないつて言うか。いや十分太いし逞しいんだけど、あんな凄い蹴りを打てるほどには見えないつて言うか。…あ、でもやっぱり触つてみるとがっしりしてる)

(…なんかドキドキ言つてる。もしかしてちょっと恥ずかしがつてる？男の子でも、こういうのやっぱり恥ずかしいんだ)

(もし逆の立場だつたら…駄目だ想像しちゃダメだ。アルムに脚触られるとかもうそれだけで沸騰しそう)

(うー、薬塗つてるだけなのにあたしまで恥ずかしくなつてきた…早く終わらせよう)

——この辺で甲斐甲斐しいと言われる

(姉さん！そういうこと言うのやめて！余計意識しちゃうから！お嫁さんどころかまだ恋人同士ですらないから！)

(うー、もーー…また何か言われる前にさつさと塗り終わっちゃおうー！)

立ち行かなくなる漁師、香り立つ楓の森

「さーて、明日にはアルムも復帰するから、冒険の準備をしておかないと」

そう言つて、あたしは鍊金釜をかき混ぜていた。昨日にはレントが復帰したから、試しにつてことで古城をちょっと探索してたんだけど：単純にあたし達が強くなつたからか、竜の事を気にしなくても良くなつたからは解らないけどかなり楽に動けた。

特にレントがなんか凄まじかった。1日まともに動けなかつただけで結構ストレスだつたみたいで、動きの1つ1つになんかこう：喜びを隠せない感じが出てた。復活してた大鎧を1人で圧倒してたし。まあ、多分あたしも似たようなことになるだろうから、気持ちは解らないでもないけど。：そうなると、3日も動けなかつたアルムが復帰したら凄い動きしそう。エルちゃんも「そろそろアルム兄が限界」つて言つてたしね。

「…よし、こんなもんかな」

まずはフラムやレヘルンとか、今まで作つた道具をより良いものに更新。ノルデンブランドは強いけどクリスタルのエネルギーも結構使うし、ちよつと威力が過剰かなつて思うこともあるから、こういう比較的軽い物もちゃんと用意しておかないとね。

そしてアンペルさんから新しく貰つたレシピから作つた道具。電気の爆弾のプラジグと、風の爆弾のルフト。これで攻撃の幅が広がつたね。もう一つ、せせらぎの薫風つていう癒し効果のある粉もあるんだけど、そつちは材料不足で作れない。どこにあるかは分かるけど、採り方が解らないんだよね：

「明日になつたら何するかなー。まずはアルムとタオの武器の改良ができる素材が何処にあるか探さなきやかな」

古城を探索してた時に見つけた動力炉で武器の強化自体はできるけど：もつと根本的なものつていうか。特にアルムの場合、多分今の武器をどれだけリビルドしても負荷の軽減はできないと思う。多分次の段階の武器を作れるようになつてからの話かな。それまではあ

の技はアルム自身が改良できるまで封印してもらうことになりそう。「あー、あとそうだ。アンペルさん達にファイルサつて何なのかについても聞かなきやね」

古城：クリント王国の遺跡の中に遺されていたものに書かれていた言葉だから、それについて調べてるアンペルさん達なら何か知つてるかもしれないしね。…まあ、なんとなくアレじやないかつて予想はついてるんだけど。

「後考えることは…うーん」

今のこところは…無いかなあ。じゃあ、島の人たちの話でも聞きに行こうかな。お願ひを聞いたり悩みを解決してたりしたら、レシピ以外にも隠されたお宝の情報を貰つたりもしてるから、探索の幅も広がるんだよね。こんなリターンもあるなんて…やっぱりするべきだね、人助け。

「でつかいの！でつかいのが水の中にいたんだ！」

「でつかいの？どうでつかかったのか、教えてくれないか？」

「体と口！」

島を回つていろんな人達の話を聞いてたら、男の子とアルムの声が聞こえてきた。近くにリラさんもいる。体と口が大きい？水の中？…まさか、前にアンペルさんが言つてた外海の魔物？

「そうか。他に何か特徴みたいのはあつたか？」

「えつと、魚みたいなヒレがあつた！」

「…古城に似たような奴がいたな」

「外海の魔物と特徴も合致するな。恐らく湖の魚を食いつくして浮上したのだろう。早急に退治するべきだな」

「ですね。…有難うな、教えてくれて」

「うん！じゃあね、お姉ちゃん、アルム兄ちゃん！」

男の子が走り去つていった。湖の魔物退治かあ…どうするんだろう。ちょっとあたしも話に混ざろう。

「アルム、今の話つて…」

「ライザか。何でも漁師さん達が、また魚が採れなくなつてきたらし

くてな

「波の向きも変わっていたから、今度こそ外海の魔物の仕業かもしないと考えてな、情報収集をしていた。そしたら、先ほどの子供が見たというから話を聞いていたんだ」

「これで原因がほぼ確定したから、まず漁師さん達に注意喚起をしようと思う。…証言をしたのが子供だから、信じてもらえない可能性があるが」

そこだよね…島の大人達って、やたら頭が固い人が多くて話が通じにくいつて言うかさ。

「なら、早く退治して「この魔物が原因でした！」ってみんなに見せるのが一番良いのかな」

「そうだな。だが水中の魔物だから、おびき寄せる方法を考えないといけないな」

「それなら恐らくアンペルが知っているだろう。アイツも島の大人たちに恩を売りたいと思っていたようだし、丁度いい」

「恩を？」

「ドレッペの高台の調査がしたいと頼んだそうだが、突っぱねられたらしくてな」

「ああ、それなら今度は見返りとして調査させろと要求しよう、と」

「そういうことだ」

「…それはまた、何というか」

…なんか、ちょっと汚い大人の話を聞いたやつた気がする。

「まあ、今日は注意喚起とおびき寄せる方法を聞いて、そこからは明日ですね」

「ああ。お前は早く戻つて足を休ませておけ。散歩くらいは許されているとはいえ、一応の療養期間は今日までだろう」

「そうですね、解りました」

「おびき寄せる方法か…アンペルさんが知ってるって言うなら鍊金術で作る何とかかな。今ある物で作れればいいけど」

漁師達の生活に直結する問題だから、出来るだけ早くどうにかしてあげたいしね。

「さて、ようやく自由に動けるな…！」

「喜んでるところ悪いけどよ、今日のところは採取に専念して戦闘は控えた方が良いんじゃねえのか？治りたてなんだしよ」

「エドワードさんから問題は無いと言われている。というか、お前も

復帰したてで大暴れしたと聞いたが」

「お前ほど面倒な怪我じや無かつたからな」

ようやくアルムが戦線復帰して、今向かっているのは【メイプルデルタ】つつう森だ。何でも、全体が強い香りに包まれているそうだ。昨日アンペルさんに湖にいるらしい魔物をおびき寄せる方法を聞いたら、その為の臭いを出す香料があるらしい。で、現状ある素材でも作れるが、そこにある素材を使えばより効果が高まり、成功率が上がるかもしれないって話だ。

「それで、ここが入り口みたいだけど…岩に塞がれてるね」

「何でこんなところに…」

「言つても仕方ないでしょ。ほら、レント」

「へいへい…」

つたく、この岩多分お前でも碎けるぞ？それ言つたら、あんたの方が体力あるとか何とか言つて何が何でも俺にやらせようとしてくるだろうから、面倒くさいことにならないようにさつさとやるけどよ。

「オラア！…よし、碎けたぜ」

「助かる。さて行こうか」

「待つて待つて、早い！いつもより何か倍くらい早い！楽しみなのは分かるけど落ち着いて！」

「そんなに楽しみだつたんだ、アルム君…」

「どつちかつて言うと、3日間大人しくしてた反動かなあ…」

お前は止まつたら死ぬ病気か何かにでも罹つてんのか…？」

「…おおおおー、辺り一面赤い…」

「驚きすぎて面白い顔になつてるぞ？」

「随分と甘い匂いが漂っているな…」

「この辺りの木から出てくる樹液の影響らしいよ」

「あ、虫がたくさん寄ってきてる。この匂いにつられてきたのかな」
初めて入ったメイプルデルタに、驚きを隠さないライザ。確かにまだ夏だったのに、秋みたいな辺り一面真っ赤なこの光景は驚くだろうけどよ、そんな顔をするほどか？

それよりアルムも言つてゐるこの甘い匂いが気になるな。甘い匂いそのものが嫌いってわけじゃねえんだが、流石にずっと嗅ぎ続けるのはちよつとな…

「よーし、じゃあ探索するわよ！」

「とりあえず一通り回つていくか。そこまで広くはなさそудだし、魔物もそこまで強くはなさそуд。余裕はあるだろう」

「準備運動が念入りだね…」

「これ、この辺りの魔物全部倒すつもりだと思うよ…」

「割とすぐ復活するとはいえ、流石にちよつと同情するぜ…」

…結論から言うと、道中の魔物は殆どアルムが飛んで跳ねて薙ぎ倒した。俺の動きも明らかに喜んでいるとかライザが言つてたが、そんなレベルじゃなかつたな…

「何かを誘うような匂い…やっぱりこの木だよね」

「木の皮だけでも何かに使えそうだな。…ん、料理にもいけそうか？」

「この木なら…うん、虫取り網が作れるわよ！」

「え、虫!? ぼ、僕にはやらせないでよ!？」

「俺もバス。多分潰しちまうからな…」

「…焚火か？」

「誰か居たのかな…」

「魔物もいるこんなところで、よくこんなことできるね…」

「骨と皮が残つてるな。魔物を焼いて食つてたみたいだな」

「ん……鍊金術に使えるし、それは貰つておこうかな」

「この宝石みたいのはなんだ?」

「えっと、琥珀だと思う」

「あ、これよ! タオの武器の強化に必要な素材!」

「やつと見つかったんだ: 帰つたら早速お願ひ、ライザ」

「出来るなら塊を一つ持ち帰つてみたいところだな。こういうの、エルが好きそうだからな」

「…よし、釣れた!」

「うん、これだけあればいいわね。ありがと、タオ」

「タオ君つて、釣り上手なんだ」

「集中力なら一番あるからな。本の解説に夢中になりすぎて、いつの間にか朝から夕方まで経つていたことがあるくらいだ」

「逆に俺はできそくに無いな、これ: 見てるだけでじれつたいぜ」

「さーて、色々集まつたわね!」

「まず魔物寄せの香料、次にタオの武器、そして虫取り網。後は…出来る物から順番にだな」

今日も限界まで採集してアトリエで調合。いつものパターンだな。とりあえず、そろそろ甘い匂いがきつくなってきたから有難いぜ。

「あと、フィルフサつて言葉についてもアンペルさんに聞いておきたいよね」

「クリント王国が龍を呼んでまで倒したかつた敵か: どんな奴なんだろうな」

「2人が知つてくれればいいけど…」

2人が知らねえなら、それはそれでアルムの言う「知る楽しみ」つて奴があるけどな。:いや、これに関してはそもそも言つてられねえか? 龍を呼ぶほど国が恐れたバケモノ達なんだろうよ。

「その辺りをハッキリさせるためにも、アトリエに戻るぞ。今は湖にいるであろう魔物退治が最優先だしな」

「うん。あたしは調合するから、その間にちゃんと聞いておいてね」

さて、やっておきたいことは結構あるが: 一つ一つ確実に済ませて

いく
か。

大人達は事情を語り、子供達は偶然を演じる

「…成程、古城に住み着いた竜は、奴ら…フィルフサを倒すためにクリント王国が召喚したものだつたのか」

「そうみたいです。…やはりフィルフサはあの白い奴の事だつたんですね」

ライザに湖の魔物をおびき寄せる香料の調合を任せている間、アルム達が聞いてほしい話があると言つて來たので聞いてみたが…まさか、「フィルフサ」の名を知っていたとはな。古城にあつた石板に書いてあつたそうだが、それが状況や内容からしてクリント王国製の召喚機であることはほぼ確定。同時に…

「あの古城は対フィルフサ用の城塞だつた、ということだろうな。…リラ」

「ああ、アルムとレントだけでなく、全員がもう一人前以上の戦士だ。真実を話して協力を仰いだ方が良いだろう」

「真実…？」

「ああ。全てではないが…フィルフサとクリント王国について、な」そこから私は、アルム達にフィルフサとクリント王国の関係について話した。クリント王国が滅んだ原因は、フィルフサとの戦いによる消耗によるものだということ。フィルフサは元々異界と呼ばれる場所に生息している生物だということ。クリント王国は鍊金術で作った門でこの世界と別の世界を繋ぎ、そこから資源を持ち帰り繁栄したこと。その繁栄を支える為に色々な世界に門を繋げたが、その内の1つからフィルフサまで呼び込んでしまつたこと。そこからあらゆるものを行い荒らされ、鎮圧こそできたものの国力を使い果たし、衰退するしか道が無くなつてしまつたこと。それがたつたの一季節の間に起きたこと。そして…

「嘗てフィルフサ…と、クリント王国に、とある——」「アンペル」

「…すまん、流石にこれはまだ言うには早いな」

ファイルフサと、鍊金術を悪用したクリント王国のせいで、異界…リ

ラの故郷が荒廃しきつてしまつてゐることなんて、な。まだ、こいつらには少し重すぎる。

「…そんな魔物の話、クリント王国の昔話に出てきてねえよな？」

「そんなのあつたら、誰でも覚えてる筈だしね」

「門とファイルフサの事は、滅亡の寸前まで機密として隠されていたそうだ。そして、それらの情報は一切の記録を許されず、殆ど抹消されている」

「…国民にとつては、はた迷惑な話だな」

「うん…生まれた国も、住んでた家も、全部壊されて。それが全部、上の人達の国を榮えさせる行動のせいだつたなんて…」

何かしたわけじやなく、ただ上の巻き添えを食つた市民たちの怒りや絶望はどれほどのものか…想像を絶するな。

「そして、その門を早急に封印し、二度とこちらにファイルフサが来れないようになると。そして、二度と門を使わせないこと。それが私達の旅の目的だ。この森にファイルフサが出た以上、近くに必ず門がある。奴らを通せるほどに機能を保つた門がな」

「…具体的には、どれくらい急ぐ必要がありますか？」

「乾季が訪れるまでに、だな」

「…乾、季？」

「奴らは極端に水気を嫌うからな。逆に言えば、それが無いなら我が物顔で世界を食い荒らす。森に出た個体は、何時からなら侵攻できるかを探るための斥候だろう」

「水気を、嫌う…も、もしかして」

鍊金釜をかき混ぜていたライザが急に手を止め、何かに気づいたようには声を挙げた。…ああ、クーケン島にはそんな話があつたな。

「村に伝わつてゐる【乾きの悪魔】つて…ファイルフサ？」

「恐らくな。少なくとも特徴は合致する」

「あ、あんなのが乾季になつたら沢山出でくるなんて…みんなに話して、門を探す手伝いをしてもらつた方が良いんじや」

「いや、駄目だ」

「え…」

気持ちは解らないでもないし、普通なら提案としては悪くは無い。が、これに関しては流石にな。

「言つただろう、二度と門を使わせないことが目的だと。アレの存在が広まるようなことがあれば、絶対に利用しようとする者が現れる。可能な限り、知る者は少ない方が良い」

「そうですか…ボオスとアガーテさんには、話したほうがいいんじやないかと思つたんですが」

「…あの2人か」

確かに、人格的には問題は無いだろう。が、それでも「起きてしまつたこと」の大きさを考えると…

「いや、やはりやめておいてくれ」

「解りました。…ただ、もしどちらかが本格的にフィルフサ絡みの何かに巻き込まれた場合は、流石に話さざるを得なくなると思います」

「…だろうな。そうなつたなら仕方がない」

「そうそう起きないだろうし、起きてほしくも無いがな。」

「さて、これで今話せることは大方話したが…後は何か聞きたいことは？」

「それなら…ふと思つたんですが、森に出てきたあのフィルフサ。ア

イツはあの時以来姿を見せていませんが…」

「恐らく例の竜が倒したんだろう。元々奴はその目的で召喚されたものなんだからな」

「…成程、言われてみれば確かに」

「他には…もう無さそうだな。さて、これで話は終わりだ。次にするべきは…」

「ライザ、手が止まっているが例の香料は？」

「あ、それはもうできてるよ。序にタオの武器のリビルドも。今作つてたのは虫取り網」

「随分早いな。話もちゃんと聞いていたんだろう？」

「うん。でもこう、なんか意外と同時進行で出来るようになつちやつたつて言うか」

「…そうか」

…本当に、とんでもない才能に出会ったものだ。

「それで、どうするんだっけ？」

「今日、正午過ぎ辺りに仕掛けるそうだ。魔物が港の外れにある海岸に「偶然」上陸したところを俺達が「鍊金術を用いて」討伐する…という手筈になつていてる」

「…改めて聞くとこう、大人の悪いところを知つちやつた気がするなあ」

「…言うな」

畑作業を終えて、ライザの家の屋根裏部屋に居る俺とライザは、湖に入り込んだ魔物の討伐手順を確認して同時にため息を吐いた。成功すればアンペルさんの目的も果たせるだろうし、こつちもより周りをはばからず動くことができるようになる。…が、島にとつての脅威だとより思わせる為に上陸させるというのは中々に賭けというか。

因みに各々がどう動くかも事前に打ち合わせ済み。…クラウディアの「なんかすごく悪い事してる気分…」という言葉が大人2人以外に地味に突き刺さつた。

「バレたらマズいんじゃないかな、これつて」

「だとしても、押し通せる可能性は無くも無いが。アンペルさんが「魔物がいた」という証拠をその魔物の討伐という形で一刻も早く提示して、島民を安心させたかった」とか「龍を討伐した実績がある彼らになら任せられると判断した」とか言えればな」

「…なんか、アルムもちょっと染まってる?」

「…理解が出来るだけだ」

アンペルさんなら多分こういうことを言う。思つていてもいなくとも。…良い人なのにどうにも胡散臭い言動が似合つてしまふのが、なんだかな。

「まあ、準備はちゃんとあるし、後は時間が来るのを待つだけだね」

「そうだな。…折角だ、この時間に解説を進めよう」

「あれ、それってタオがアンペルさんに貰った本?」

「ああ。あいつ、大体もう読み方を覚えたらしいからな。一応アンペルさんに確認を取つて借りている」

「こういうのが後々何かに活けるかもしないし、そうでなくとも新しい事を知れるからな。損は無い。」

「まだ読み始めたばかりだから、碌に内容は解らないんだがな」

「ふーん…」

「そう言いつつ、ライザが俺の隣に移動してきた。」

「…読みたいのか?」

「んーん?」

「なら何故わざわざ隣に…まあ別に構わないんだが。」

「…」

「…」

「…ライザ?」

「なに?」

「…視線を感じるんだが?」

「そりやそーよ、見てるもん」

「前言撤回、少し構う。なんで本を読んでいる俺の横顔なんてわざわざ見てるんだ、なんか恥ずかしいんだが?」

「…楽しいか?」

「うーん、楽しいって言うより飽きないって感じ? アルムの真剣な表情つて結構新鮮だしね」

「…そうか」

「確かに、戦つていない時に気を張ることは殆ど無いが…」

「…」

「…」

「…集中しづらいんだが」

「頑張れ♪」

「…何を言われても止める気が無さそうだと確信したので、時間が来るまで解説を進めることにした。全く、何だそのやたら良い笑顔は…」

「お前達、良い所に！」

「姉さん？どうしたの？」

昼食をとつてから、事前の打ち合わせ通りに噴水の近くをライザと2人で歩いていると、アガーテさんが慌てた様子で走つて來た。：來たか？

「港の近くに見たことのない魔物が現れた！恐らく、お前達が以前言つていた外海からの魔物だ！」

「…！」

やはりか。出来るだけ自然に振る舞い、尚且つ迅速に行動する。：騙しているようで、というか實際騙しているから少し心が痛いが：「アガーテさん、避難誘導は!?それと、港に上がつてきそうですか!?」「誘導は偶々いたリラさんが手伝つてくれている！港に上がつてくるかは解らん！」

「なら、港に向かいます！行くぞライザ！」

「うん！」

實際は外れの海岸に向かうだろうが：いきなりそこに行くのは不自然だしな。

「アルム、ライザ！何があつたの!?」

「タオ！出たわよ、外海の魔物が！」

「えつ…！」

「武器を今すぐ取つてきて、出来たらレントも呼んできてくれ！」
「わ、解つたよ！」

タオとレントはこういう演技に自信が無いらしいので、呼んでくる役と呼ばれてくる役として後で合流する。アガーテさん達との会話で出来るだけボロを出さないようにするためだ。

「お前達、來たか！」

「リラさん、魔物は!?」

「ああ、アンペルの予想通りのヤツ…いや、それよりも大きい！」

「え…！」

それでも竜より強いということは無いだろうが…速攻で沈められるか？大きい奴は大抵タフだからな。

「魔物は港に向かつてありますか!?」

「まだ見える範囲に出てきただけだ、判断が出来ん！だが、奴がどう動いても対処できるように心の準備をしておけ！」

「はい！」

…結構演技上手いな、リラさん。

「みんな！」

「クラウディア！」

「お前も来たか」

「うん、港に大きな魔物が出たつて…」

「港に上がつてくるかもしだいから、いつでも行けるように準備お願いね！」

「うん、解つた！」

そうして港にたどり着き、外海の魔物の姿を確認した。…確かにかなり大きいな。竜ほどではないが…

「あれが…」

「ええ、漁師達を干上がらせてた原因の魔物よ！」

「来るか…？」

「…いや、脇に逸れていくな。あっちには…」

「確かに、小さな海岸が…拙い、そこから上陸してくるか!?」

「直ぐにそつちに向かいます！」

図らずもアガーテさんのお陰で、自然と外れの海岸に向かう理由が出来た。本来ならそのままリラさんが続ける予定だったが…これでより怪しまれなくなるな。

「來たぞ、アルム！」

「タオ、レント！奴は外れの海岸に向かつた、行くぞ！」

「おう！」「うん！」

これで全員が揃つた、後は魔物を倒すだけだ。

「コイツか…確かにデケえな」

海岸に上陸（正確には砂の中だが）していた魔物を見て、レントがそう言う。確かに大きい、が…

「だけど、あの時の竜みたいな怖さは無いかな」

そう言うことだ。油断をするつもりは勿論ないが……あの竜と比べたら、こいつが脅威とは思えない。

「僕はいつどんな魔物でも怖いけどね……でも、やるしかないよね」

「さて、折角上陸してもらつたところ悪いけど……」

「さつさと終わらせるとするか」

先手必勝。最初から大盤振る舞いだ……！

「ルフトツッ！」

「「フラン！」

まず俺がルフトを、タオとクラウディアがフランムを放ち、砂ごと魔物を吹き飛ばす。

「おら、よおツ！」

そこにレントが飛び込み、魔物を剣で全力で斬り上げる。

「あたしからも、ルフトツッ！」

魔物は空中でルフトを食らい、更に体が少し浮き上がつた。そこに仕掛けれる。

「浮かされたところ悪いが……今度は、思い切り、落ちろツ！」

俺が跳びあがつて、踵落として叩き落す。そしてそのまま、追撃を仕掛けれる。

「ノルデンブランドツッ！」

「エクリップスジャベリン！」

四方八方から氷の刃と魔力の槍が突き刺さり、悲鳴を上げる魔物。だが、まだ終わらない！

「最後の一本！」

俺の真下に一際大きな槍が出現する。穂先は勿論魔物に向いている。

「これで、止めだツ！」

俺が魔力の槍を、炎と風を纏わせた蹴りで魔物に飛ばす。それは一直線に魔物の頭に突き刺さり、それが止めとなつたのか完全に動かなくなつた。：討伐、完了だ。

「よーつし、何もさせず倒せたわね！」

「なんつうか、あつけなかつたな」

「そりや、竜と比べたらそうなるよ」

「私達も、ちゃんと強くなつてるんだね」

「そうだな。さて、とりあえずどう報告しようか…」

「お前達！」

アガーテさんが走つて來た。加勢しに來てくれたのだろうか？だが…：

「…もう、倒したのか」

「おうよ、竜と比べたらなんてことなかつたぜ」

「これが鍊金術の力よ！…なーんてね」

「…はは、改めて思うよ。本当に凄いな、鍊金術というのは」

「俺達もそう思つてますよ、常日頃から」

少し前までの俺達なら、竜はおろかこいつでも、今とは逆の結果しか生み出せなかつただろう相手だからな。本当に凄まじいものだ。

「後は、この魔物が不漁の原因でしたつて証明できればいいんだけど…」

「そうだな：腹の中に食いたての魚が残つてないか見てみようか」

「う…その中身、想像するだけでキツそうだよ…」

「腹の中でドロドロに溶かすんだつたか。確かにあまり見たくはねえな…」

「私も…ちょっと目を逸らしておくね」

「俺は少し興味があるな。アガーテさん、お願ひします」

そうして切り開かれた魔物の腹から、溶け始めていた魚の死骸が大量に出てきた。…成程、食べた物は腹の中でこうなるのか。確かに理由が無かつたらあまり見たいものでは無いな。

兎に角これで、コイツ不漁の原因であるという証拠は出てきた。漁師さん達も納得してくれるだろう。

「これで何度目か分からぬが…お手柄だな。お前達」

…普段なら素直に喜べるところなんだが、今回は事情が事情だけに本当に少し心が痛い。しかも、この後いろんな人たちから色々言われるだろうからな…今だけは、褒め言葉が少し憂鬱だ。

疲れた少年、前向きな少女達、焦る少年

「ふー…此処アトリエが一番落ち着くな…」

「アルム君、なんだか疲れてるね」

「ああ…こう、周りからの視線というか、印象というか、そういうのが一気に変わったからな」

湖に入つて來てた魔物を退治した私達は、島の人達からの評判が一気に良くなつた。ライザとかは有名ないたずらっ子だつたつて聞くし、アルム君も評判はそれなりに良かつたけど、それでもまだ子供だからつてことで、そこまで大きなことができるとは思われてなかつたみたい。

だけど、ライザが島の人助けを始めたり、皆で竜退治をしたりしてその評価が変わり始めて、あの外海からの魔物を倒したことで完全にいい方向に傾き切つた。特に外海の魔物は島のいろんな人たちの生活に直結してた問題だし、そう言う意味では島の人達を救つたつて言つても過言じやないもんね。

そういうわけで、今ではみんな島の有名人で人気者…つて感じになつたんだけど、そう言う空気がアルム君にはなんていうか…むず痒いというか、肌に合わない感じみたい。

「…何というか、クーケン島じやない別の場所にいるような気分になつて来てな」

「そういうの結構敏感っていうか、繊細なんだね」

「正確には、変に持ち上げられたくないんだよ。自分に自信が無いとは言わないが、下手したら英雄視されているんじやないかと思える今の感じはな…正直、少し気恥ずかしさと息苦しさがある」

「リーダーって呼んでほしくないのもそういうこと?」

「…そつちはただ単に恥ずかしいだけだ。からかい混じりだと解つているからな」

持ち上げられると恥ずかしいのは、私もそうだから解るな。確かにフルートの練習も冒険のサポートもしつかりやつてるつもりだけど、「クラウディアより上手い人がいるとか想像つかない」とか「いるのと

いないのとじや天と地の差がある」とか、嬉しくない訳じやないけどいくら何でも言い過ぎだよ…

「後、アガーテさんを騙しているようでちよつと申し訳ないつて言ってなかつたつけ」

「それも理由として無くは無いが…俺達にとつても島にとつてもアレが多分最速で最善だつただろうからな。そつちは何とか割り切ることにする」

確かに、島で討伐したから直ぐに証拠としてあの魔物を見せることができたし、それで漁師さん達も直ぐに漁を再開できただからね。まあ、魔物を倒して直ぐだつたからあんまり捕れなかつたみたいだけど、今日の朝ライザがもつと強い匂いの餌を渡してたし、今日はちゃんと捕れるんじやないかな。

「アルム居るー？」

「…ああ。どうかしたか、ライザ？」

「ん…朝から思つてたけど、やつぱりちよつと元気ないね。…よし」

そう言つて、ライザが何かを取り出した。…虫取り網？

「えつと、ライザ、その虫取り網は？」

「これを持つてやることなんて1つでしょ？アルム、気分転換に虫取りに行こう！」

「…虫取り？」

…偏見かもしれないけど、なんだか男の子みたいだよ、ライザ。「ジツとしてるより動いた方が氣も晴れるよ。少なくともアルムはそうでしょ？」

「…そうだな。それに、虫も鍊金術にも使えそうだしな」

「そうそう。あ、クラウディアも一緒に来る？」

「うーん…お邪魔になつちやうといけないから、止めておこうかな？」

「そ、そういう気は遣わなくていいの！」

「お前な…」

「ごめんね？でも、こういうことで揶揄われると慌てるライザと、ちよつと照れるアルム君がなんだか可愛くて、ついこういう言い方しちゃうんだ。

「それに、ちょっと1人でやりたいこともあるし。遠慮なく2人で楽しんできてね」

「…そういうことなら行こうか、ライザ」

「あ、う、うん。じゃあクラウディア、行つてくるね！」

「行つてらっしゃい、2人とも」

こういう時、ライザは結構照れちゃうから押しが弱くて、アルム君が少し照れるけど結構積極的なんだよね。：レント君曰く、ライザはアルム君に膝枕したことがあるらしいけど。それができるなら大抵のことはできると思うな…

「…それじゃあ、新しい曲の練習でもしようかな」

皆に私の演奏を聞いてもらえるのは嬉しいし、褒めてもらえるのも恥ずかしいけどそれ以上にすごく嬉しい。だからもつと楽しんでもらえるように、もつと上手に、もつといろんな曲を吹けるようにならなきや。

「ん、コイツは確か島にもいるな。日が当たる葉の上でジツとしてる奴だ」

「あ、このアリも見たことがあるかも。お尻だけやたら大きいの何でだろう？」

「ああ、そこに蜜を溜めてるんだ。食べるとちゃんと甘いぞ」

「…食べたの？」

「…小さいころに図鑑で見たら、本当か気になつてつい」

虫取り網を片手に小妖精の森で虫取りを始めたあたし達。とりあえず手あたり次第に色々取つてみるとにしてみたけど、意外と島でも見る虫もいた。まあ、場所が近いからいても不思議じやないんだけど。アルムは背中に七つの星模様がある虫を2～3匹手に乗せて眺めてる。虫、結構好きなのかな？

：流石にアリを食べたことがあるつていうのはちょっとビックリした。子供の頃で、甘いって図鑑に載つてたからつて普通食べるかな？…今は兎も角、子供の頃のアルムならやるか。

「因みにこのアリ、最近開発したらしいブティング…だつたか？アレに使つたりとかできるのか？」

「その発想はいらなかつたよ…多分駄目じやないかな、なんかしつくりこない」

多分アレに使う調味料は、ハチミツが最適だと思う。そうじやないならメイプルデルタの木の樹皮かな。このアリを調味料として使うとしたら…うーん、浮かんでこない。根本的にレシピというか、発想が足りりてない感じがする。

「で、コイツは島にはいらないな。…コイツも尾がやたら大きいな」

「ん…なんかちよつと不思議な感じがする。魔石とちよつと似てるような、むしろ真逆なような」

「神秘の力を秘めているということか。だが同じ使い方はまずできない、と」

「そんな感じかな。…その大きな尾は何なんだろうね。調べたら解るかな？」

図鑑とか見て、無かつたらアンペルさんに聞こう。

「それで…コイツだな」

「念のため多めに虫がご持つて来といてよかつたね…絶対危ないよ」

「他の虫を捕食していたからな、肉食なのは間違いない」

そして、捕まえて即座に虫がごに入れられた赤い蜂。凶暴な性格みたいで、ここから出せと言わんばかりにブンブン羽音を鳴らして。蜂だから毒とかあるかもしれないよね…鍊金術の素材としては有用かもしれないけど、それ以外では絶対に近づきたくないなあ。

「で、虫じやないけど…これだね」

「…まさか泡を捕まえて持つて帰る日が来るとは」

そして最後、シャボン草が吐き出してた泡。本体は採つたことがあるけど、今回は浮いてる泡も別に採取した。虫取り網のサイズと硬さが丁度良いんだよね。意外と割れないし。

「この前貰つたレシピの中で唯一作れなかつた【せせらぎの薰風】つていうのがあるんだけど、これが必要な素材だつたんだよね。採れてよかつたよ」

「この泡からどうやつたら薬品が生みだせるんだか…」

「それが鍊金術だつて、もう解つてるでしょ？」

「…それもそうか、深く考えるのは駄目だな」

「奥は物凄く深いのにね」

いつも新しい体験をあたし達にくれる鍊金術。これからその奥の奥まで知ることが出来たらいいな。

「さて、粗方採集は終わつたし、戻るか」

「うん。戻つたら何しよつか」

「…温泉でも掘つてみるか？この前試してみたいと言つてただろう

「あ、じやあレントも呼ぶ？」

「いや、俺一人でいい。良い方法を思いついたし、アЙツは何か目標があるみたいだからな。リラさんとの修行に集中させてやろう

良い方法？ショベルで掘る以外の方法あるのかな…？

「んー、そこまで言うならお願ひしよつかな」

「ああ。上手く行けばすぐに終わる」

温泉、湧いてきたらしいな。

「…よし、上手く行つたな」

「…うん、湧いたよ？湧いたけどさ…」

「何だ？」

「やり方が無茶苦茶過ぎない…？今の、竜を倒した時の技だよね…？」

「うまく調整できるようになつた気がしてな。ついでに試してみた」

「それはいいけど…アトリエにいるクラウディア、凄くビックリした

んじやないかな。凄い音したし…」

「…それは考えてなかつたな。後で謝つておくか」

…相変わらず、時々あたしが想像すらできることをサラッとやるなあ、アルムは。

因みにクラウディアはやっぱり凄くビックリしてたらしくて、アルムに「そういうことはやるならやるつて先に言つて！」って怒つてた。うん、これはあたしでも怒るよ、アルム。

「…ほ、本当に来ちまつた…」

…島のほとんどの人が寝静まつた夜、俺は小舟を無断で使って対岸に来ていた。理由は…強くなるためだ。

あいつ等は竜退治と湖の魔物退治で一躍時の人。…それは、認めるしかない。妬んだりとかそんなレベルを超えてるくらい凄いことやつてるのは、俺にも解る。

アガーテ姉さんは外で訓練を積んで、護り手として島に戻ってきた人だ。竜相手にも一步も引かないくらい力も心も強い。そんなことは前から知ってる。

そして、ボオスさん。外に出て冒険してるあいつ等とか、本格的な訓練をしてきた姉さんに比べれば流石に一步譲るけど、それでも強い人だ。特に竜との戦いで、勝利の最後の一押しになつたのはボオスさんの行動だ。それは、あの場にいた全員が解つてる。

…じやあ、俺は？少なくとも、あの場では何もできなかつた。ボオスさんの側近を名乗つておいて、そのボオスさんにむしろ庇われて、最後まで何もできなかつた。…自分が情けなくて、悔しかつた。

「…強く、なるんだ。素振りとか、手合わせだけじゃ足りない」

だから、俺も魔物と戦つて強くなる。元々強かつたアルムとレントは兎も角、ライザとタオも魔物と戦いだしてから強くなつたんだろ？だつたら、俺も同じように強くなれるはずだ…！

「…やつてやる。今度こそ、胸を張つて、俺はボオスさんの側近だつて、名乗れるようになつてやる…！」

魔物への恐怖を押し殺すように己を奮い立たせ、俺は前に進んだ。

…この行動が、後にあんな結果を招くなんて…この時の俺は、想像もしてなかつた。

力を望んだ少年の、最も望まぬ結果

「昨日からランバーの様子がおかしいんだが…何か心当たりはないか？」

「ランバーの様子…？」

俺は今、アルムの所にランバーの事について相談に来ている。…昨日から、アイツの様子が少しおかしい。明らかにいつもより目を擦るわ、欠伸をするわ、脚が少しふら付くわ…どう考えても寝不足の人間のそれだ。大丈夫かと聞いても、少し焦った様子で心配いらないと言うだけ。夜中に睡眠時間を削つて何かをしてましたと言わんばかりだ。

例えはこう…今日の前にいるコイツの進展してるんだかしてないんだかよく解らん人間関係みたいなプライベートな事情なら構わない。一言言えとは思うが。だが…人に言えないようなことをしているんだとしたら…かなり心配だ。

「…いや、解らない。お前とは兎も角、アイツとはあまり仲が良くない…というか、碌に関りが無いからな。俺がお前と話している時も、近くにいないか黙ってるかのどつちかだろう?」

「…そうか」

アルムに聞いても収穫なしか…だからと言ってランバーにもう一度聞いてもはぐらかされるだろう。人に言えることなら、そもそも隠れてやる必要が無いからな。

「そもそも本当に何かしているのかも分からんんだろう? それなら、ただ単に夢見が悪くて寝不足になつている可能性もある」

「そうかもしれないが…そういうことなら、アイツは別に隠したりはしないぞ」

「…そうか…」

それならそれで、何かしら悩みを抱えていることになりそудが。「それなら…行動じゃなく動機から考えてみるか?」

「…動機か」

成程、それが解ればアイツがしそうな行動も自ずと絞れるな。

「まず考えられるのは…竜退治か？最初にお前と一緒に吹き飛ばされ
て終わりだつただろう」

「確かに、最初に戦線離脱してそれ以降は参加できなかつたが…それ
は俺もほとんど同じだ」

「だが最後には戻つてきて、決定的な一撃を奴に与えた。…アイツにはそれが出来なかつた。その事を気にするくらいはおかしくないだ
ろう」

「自分だけ何もできなかつたことを悔いて、か？確かにあり得なくは
ないだろうが、そこからどう夜更かしに繋がる？」

「…実はアイツ、人目につかないところでこつそり剣の特訓している
んだよ」

「そうなのか？」

「ああ。去年偶然見かけてな。その時は昼頃だつたが…もしかした
ら、夜にも始めたのかもしれない」

「成程、確かにそれならおかしくは無いな。だが…」

「それで睡眠時間を削つて、日常生活に支障をきたすのは拙いだらう
が…」

「まだ想像の域を出ないが…もしこれが正解なら、とりあえずアガーネさんに説教でもしてもらうか」

「ああ。アガーテの説教なら、アイツには覗面に聞く」

「ついでにリラさんも呼んでみつちり扱いてもらうか。あの人の訓
練、最初は俺とレントが碌に動けなくなる位キツいからな」

「…流石にそれは勘弁してやつてくれ」

「お前らでそうなる訓練を、ランバーに施していくわけがないだらう
が。色々折れるぞ、絶対に。」

「さて、多分これが一番太い線だらうが…他に候補はありそうか？」

「…惚れた女に既に男が出来ていた？」

「おい、何でそれを俺の目を見て言つた。嫌な想像をしてしまうだろ
うが…！」

「すまん、お前の顔を見たら思いついた。まあお前に関してはその心
配は微塵も無いから安心しろ」

そもそも、あっただけあからさまな態度で、お前が薄々でも気づいて無いとは思えないがな。まあ、根っこは眞面目なアルムの事だ、告白は身の回りの事が一段落ついてからにする気なんだろう。恐らく、あの鍊金術士の目的絡みで何かあるんだろうな。

…その辺りをほんと話してくれないことには、思うところがあるが。話せない何かがあるんだろうか。

「とりあえず、今日から夜のランバーの動きを探つてみる。何時アイツが動くかは解らないから、すぐに解決できるかは怪しいが…」「今のところはアガーテさんにも気づかれてないくらいだ。動くしたら、まず誰も起きてないくらいの時間だろうな」

「だろうな。…まず、そんな時間に俺が起きていられるかどうかだが」「…ライザに頼んで、とんでもなく苦いグラスビーンズでも作つてもらうか？」

「…口直しの何かも一緒に頼む」

…後でライザから手渡されたグラスビーンズは、途轍もなく苦かつた。確かに眠気は吹き飛ぶが、一緒に渡されたラーゼンプティングが口直しとして機能しないくらいに。

「はつ…はつ…ふう。なんだ、俺も結構やれるじやんか」

外での特訓を始めて3日目。俺は元々魔石の採掘場だつたらしい洞窟で魔物を倒してた。ゴーレムみたいな剣が通りにくい魔物もいたから、そういうのは流石に避けたけど。刃こぼれでバレかねないし

⋮

魔物の格としては、多分古城のよりは弱い。じやなきやここまで倒せてないしな。

「…まだ、行けるよな」

今でも十分特訓にはなつてる。けど、やっぱり少しでも早く上を目指したい。だから、洞窟の奥に進んでいった。時間的にはまだ大丈夫だろうし、無理そななら直ぐに引き返せばいいしな。

「よし、やるぞ…もつとやれるんだ、俺だつて…！」

気合を入れなおして、俺は足を前に進めた。

「……は……？」

洞窟を奥に進んで抜けた先には、不思議な雰囲気の入り江があった。そして、少し奥に進むと…

「これ、遺跡か？」

どう見ても遺跡、この辺にあるから多分クリント王国絡みの奴も見つけた。こんなにデカい遺跡が、古城以外にもあつたなんて…タオとかアルムが知つたら喜びそうだな、あいつ等、こういうの好きらしいし。

…つて、そんなこと考へてる場合じやない。

「…少しだけ、少しだけだ」

どういう遺跡なのか、気になるけど…流石に魔物と戦いながら調べるのはキツいから、こつそり近づいてちょっと見て帰ろう。まだ暗いけど、あんまり長居すると時間ギリギリになりそうだし…。

「……」ういう時に、堂々と正面突破できるくらい強ければなあ

あいつ等ならやれるんだろうな…やっぱり羨ましいな、あいつ等の強さが。

「…すげえ」

隠れながら近づいて、奥にある遺跡が良く見えるところまで来た。
…こんなデカい遺跡が、湖の上に建つてゐる。こういうのって確か、建てる為に基盤つていう土台を作らなきゃいけないって聞いたことがあるけど、どうやつたんだ？

…あのアンペルつていう人なら知つてるかもしれない。けど、そこからいろんな人に勝手に島の外でこんなことしてゐるのバレそうだよなあ…

「…どうしようか」

「まず島に戻るのが一番に決まつてゐるだろう」

「そうですよね…え？」

…誰の声よりも聴きなれた声が聞こえてきて、思わず返事をして、

そして驚いた。

「ボ、ボオスさん…! な、何で…」

「こ…2日、お前の様子がおかしかったからな。…まさか、島の外に出てるとは思わなかつたぞ。一発で突き止められたのは嬉しい誤算だつたな」

「や、やつぱり怪しまれてた…! いやでも、だからって1人でここまで…いや、それよりも…!」

「あの、ボオスさん、俺…!」

「竜退治の時、何もできなかつたから…か?」

「え…」

「こんなことをしている理由だ。…その顔からするに当たりの様だな。全く、俺もまだまだだな…側近の悩みに自分で気づけないなんてな」

「い、いや、ボオスさんが悪い事なんて、何も…」

全部俺が一人で悩んで、勝手にやつたことなのに…:

「まあ、詳しい話は戻つてからだ。ここだと何時魔物が来るか解らないからな。…ついでに、アルム達にこの遺跡の事も伝えるか」

「あ、えつと…」

「心配しなくとも、黙つておいてもらうように頼んでおく。…とか、深夜に無断で外に出てるのは俺も同じだからな。バレてアガーテからの説教を食らうのは御免だ」

「すいませんでした、本当に…」

「そう思うなら、次からはちゃんと相談してくれ。一人で悩むより、そつちの方が解決しやすいだろう」

「解りました…」

…帰つたら、姉さんに相談してみよう。

「さて、帰るぞ…っ!」

「え、何が…」

島に戻ろうと来た道を振り返つたら…よく解らない、デカいネズミのような魔物がたくさん出てきていた。俺がさつき見た時はあんなにいなかつたのに、一体どこから…!?

「くつ……！」

「ボオスさん！…と、うわっ！」

驚いている俺達にお構いなしに、一斉に襲い掛かつてくる謎の魔物。一体一体はそこまで強くないけど、数が多い！

そうして次々と襲つてくる魔物のせいで、俺達は離れ離れになってしまった。俺は洞窟側に行つてたけど、ボオスさんが遺跡の方に追い詰められてる……！

「ボオスさん！…今すぐ——」

「来るな！それよりも、早く助けを呼びに行け！」

「え？！」

無茶だ！いくらボオスさんでも、この状況を1人でなんて！「その方が確実だ！最悪この魔物の情報だけでも伝えないとマズい！」

「だけど！」

「俺の事を気遣うなら、尚更早く助けを呼びに行つてくれ！頼む！」

「……！」

悔しさをどうにかして抑え込み、俺は急いで島に引き返した。…畜生、俺が弱かつたから、こんなことに……！

「…何だかな」

いつもよりやけに早く起きてしまった俺は、外に出て湖を眺めていた。…何故だか解らないが、どうにも嫌な予感がする。

「気のせいであつてほしいが…ん、アレは？」

湖の上で何かが動いている…いや、こちらに近づいているのが見えた。まさか、また魔物じやないだろうな？

そう思つて目を凝らすと…もつと予想外のものが見えた。勢いよく漕がれている小舟、そこに乗つっていたのは…

「…ランバー！？」

「アイツ、島の外に出ていたのか?!いや、だとすると、まさか…！」

「…ボオス…！」

この嫌な予感は、外れていてくれ…！

友を救うため、門の先へ

「何、あの坑道の先に遺跡が？」

「は、はい…」

アルムがいつもの面子とランバーを連れて、朝早くからアトリエに駆け込んできた。何事かと話を聞いてみたら、無断で外に出たランバーをボオスが連れ戻そうとしたところを魔物に襲われて、離れ離れになってしまったらしい。

しかもその場所は、水没坑道の先にある遺跡だという。あそこに奥に繋がる道は無かつたはずだが…いや。

「確かに、一か所あつたな。道のようになつていたが、水没して通れなかつた場所が」

「あそこか。だが、潮の干満程度で引くようなものでは無かつたと思うが…」

「実際に道があつた訳ですから、そこの考察は後で良いでしよう。それより、ボオスは魔物に襲われてどうした？」

「…遺跡の方に逃げて行つた。あそこに、逃げ場とか隠れる場所とかがあればいいけど、もし無かつたら…！」

…急がなければならんな。こんなに早く、こんな形での友との別離など…こいつらには知つてほしくは無い。

「アルムに叩き起こされて何事だと思ったが…眠いとか言つてらんねえな、こりや」

「早く助けに行こう。いくらボオスでも、1人で魔物に追われ続けるのは怖い筈だし」

「うん。それに、みんなの友達だもんね」

「よし、眠気を吹つ飛ばしてから気合い入れて行くわよみんな！」

「ああ。…つと、その前にランバー。お前達を襲つた魔物はどんな奴だつた？」

「えつと、嫌な雰囲気のした、白くてデカいネズミみたいな奴だつた」

「ああ、フィルフサだ。そして、それが遺跡の近くに現れたということ

「それは…！」

「ああ、フィルフサだ。そして、それが遺跡の近くに現れたということ

は…」

恐らく、その遺跡に【門】がある。…まさか、こんなタイミングで見つけてしまうとはな。

「急ぐぞ、お前達。ボオスの事もそうだが、その魔物の事もさつさとどうにかしないと拙い」

「ああ。坊主、お前はアガーテ女史に事情を説明しに行け。そして、危険だから後を追うなども伝えろ」

「…はい」

説教は散々食らうだろうが…事が事だ、仕方がないだろう。

「よし、準備ができ次第すぐに遺跡に向かうぞ」

「ああ。…お前達の成長も、直に見させてもらう」

「元からそのつもりは無かつたとはいえ…気を抜けない理由が増えたな」

「おう。ボオスを助けて、全員無事でここに帰つてこようぜ！」

さあ、調査開始だ。

「…ここだな。確かに以前、水没していた場所だ」

坑道を進むと、水が引いて新たな道が出来ている場所があつた。…
フィルフサは水が苦手だから、この辺りに奴らに関係ある物は無いと無意識下に決めつけてしまっていたんだな。全く、とんだ見落としだ。

「結構広いね。あの斥候も、ここを通つて来たのかな」

「そうだろうな。奴の団体でも、十分に通れる場所だ」

「じゃあ、この先にまたあのフィルフサがいるかもしれないんだよね
…大丈夫かな、ボオス」

「今なら私達でも戦えるんじやないかな。アガーテさん達もいたとは言え、竜だつて倒せたんだから」

確かに、今のこいつらにリラもいるなら将軍クラスでも1～2体くらいは行けるだろうな。

「最初は潜つて先に何があるか見てみようかと思つていたが…やらなくて正解だったな。かなり先が長い」

「普通はまずその発想が浮かばねえよ…」

「今後も絶対に実行はするなよ。大抵の場合自殺行為だからな」

…好奇心が強いのも考え方だな。いや、私が言えたことじやないが。

「さて、ここにも魔物はあるが…ランバーがある程度倒したらしいから、数は少ないな」

「もう少し減らしても良いんじやない？ 帰りはボオスも一緒なんだし」

「アソツも結構やるようになつてんだな…」

「間に合う」と前提なんだね…僕もそうであつてほしいけどさ」

「なら、駆け抜けつつ可能な限り殲滅するぞ。素材は今回は無視だ」

「は、走りながらの演奏、出来るかな…」

素材は勿体ないが、今回は致し方ないな。私は戦闘にも参加できん、我儘は言えない。

…後、それは流石に無茶だろう、クラウディア。

「ちつ、滑りやすいな…！ 皆、足元には気を付けろ！」

「解つてる！ リラさんもいるんだ、コケるなんてダサい真似できねえよ！」

「こ、この速さで走り続けるだけでキツいのに、足元に気を付けながら戦闘までするなんて…！」

「みんな戦つてる…！ うん、よし…！」

「クラウディア!? 本当に走りながら演奏する気!?」

「全く、顔に似合わず無茶をするな…」

「無理はするな！ 私達に任せておけ！」

「ここが、遺跡があつたっていう入り江か。…奥に見えるアレがそつか？」

「島からそう遠くは無いよね。何で今まで見つからなかつたんだろう…」

坑道を全速力で駆け抜け、ランバーから聞いた遺跡のある入り江に

たどり着いた。途中何かの祭壇らしきものがあつたが……それは後だ。
流石に人命より優先するべきものじやない。

「潮の潮流が入り江の手前で巻くせいで、船が近寄れないんだろう。
…しかし」

「ああ。まさかと思つたが……大当たりだ。こここの遺跡に【門】がある
まさか、このタイミングで見つけちまうとはな……」

「門つて……この世界と、フィルフサがいる異界を繋いでるんだつけ？」
「…まさかと思うが、その門の中に入つていらないだろうな、ボオス」
「それなら急がなきや。あんな魔物が沢山いるところなんて、危ない
じやすまないよ」

「…そうだな。その時は早く助けてやらなきやならん。その危なく
「なつてしまつた」世界からな。

「なら、引き続き駆け抜けるぞ。…今回はそれなりに魔物も多い、戦闘
も多くなるだろうな」

「ああ。近づいてくる奴は片つ端から薙ぎ倒してやるぜ！」

「皆が早く進めるように、走りながらでもちゃんとサポートするよ！」

「途中でボオスが見つかればそれで終わりなんだけど……」

「ランバーが言うには、遺跡の奥に行つたらしいからな。それは無い
だろう」

「それなら、本当に門の中まで行つてるかもしれないつてことね」

「…無事でいろよ、ボオス」

「そうして、遺跡の中を進んでいく私達。すると、途中で珍しい物を
見つけた。

「これは…」

採取地を自ら作り出せる、【採取地調合器】とでも言うべき古式秘
具。こんなところにあるとはな…

「コイツの事は、後で話してやるか」

今はボオスの事が優先だからな。そつちが済んでからでもいいだ
ろう。

「アンペルさん、早くー！」

「ああ、すまん」

さて、そろそろ奥に着く頃だな…どうなつていることやら。

「これが、異界に繋がる【門】…！」

「…なんてこつた」

遺跡の最奥にたどり着き、そこにある門を確認したが…封印として働くはずの聖堂が、湖の浸食による崩落で機能を失い、門が起動しちまつてる。

「大きな何かが彼を追つた痕跡が、微かに残つてゐるな」

「…つまり、この門の先にボオスがいるんだろうな。…皆」「行くに決まつてるわよ。ねえ？」

「うん。じやなきやこんなところまで来てないよ」

「今更だよね、止めろとか帰れとか言うには。ね？」

「ああ。…クラウディアもすっかり度胸がついたな。タオ以上なんじやねえか？」

「…否定できない自分がちよつと悔しい」

「…こいつらなりに、覚悟を決めてるみたいだが…」

「冷や水を浴びせるようなこと言つて悪いが…さつきも言つたように、異界にはフィルフサがうろついてる」

「私はアンペルの護衛に専念するから、お前達の手助けはできないぞ」

「うん。自分の事は自分で、でしょ」

「こんなことに関わるなんて、ちよつと前までは考えもしてなかつたよ」

「うん、私も。勿論、後悔なんて全然してないけどね」

「ふふつ…」

そう笑つて、ライザが門を真っ直ぐ見据える。…まさか。

「させる暇なんて、あるわけないでしょ！」

「あ、おいつ!?」

いの一番に飛び込みやがった！それに続き…

「全く。お前らしい物言いだな、ライザ！」

「誰にも言わず、真っ先に飛び込むところもな！おいしいところ持つていきやがつて！」

「早く行つて、早く助けて来よう！」

「うん！皆と一緒になら、怖くないよ！」

他の面子も次々に門の中に。つたく、あいつ等…！」

「手本を見せる暇くらい、作ってくれてもいいだろが！」

「ふふっ…では、行くか！」

リラ、その微笑ましいものを見るような笑いを止めろ！

「ここが、異界…」

「凄く不気味だね。あのファイルフサの本拠地に相応しいって言うか
門を通つた先には…こいつらにとつては初めてだが、私にとつては
忘れられない光景が広がつていた。…朱く、仄暗く、濛み、乾いた…
そんな光景だ。

「タオ、あまり人の故郷を悪く言うもんじやないぞ」

「故郷？え、誰の…」

「いや、いい。私も、同じ立場ならそんな感想を漏らしていただろう」

「…まさか、ここがリラさんの？」

「ああ。…ここは、この森には、もつと違う眺めと名があつた。心を温
める、美しい眺めと名が…」

…取り戻せるのなら、取り戻したい。どれだけの時間がかかるうと
も。

「ごめんなさい…」

「お前は悪くない、気にするな。悪いのは…」

「ファイルフサ…と、クリント王国ですか？以前、そんな話をしていたよ
うな」

「確かにこの世界の現状はファイルフサの特性によるものだが…奴らは
元々遠くの地に住んでいた。クリント王国が何もしなければ、今でも
お互い干渉なく過ごしていただろう」

「…つてことは、殆どクリント王国のせいなんじやねえか」

「多数の避難民を出して、自国を滅ぼしたどころか…異世界にまでこ
んな被害を出していたのか」

改めて列挙されると、奴らの仕出かしたことの大きさが解るな。：
本当に、腹立たしいにも程がある。

「そして、リラたちの一族：オーレン族は、フィルフサとクリント王国に追われ散り散りになつた。そして、リラは門を通りこつちの世界に逃れてきた」

「そして、私はアンペルと出会い、各地の門を閉じる為の旅をしてい
る」

「そうだつたんだ…あれ、ちょっと待つて？」

「ライザ、どうかしたの？」

「いや、なんか…リラさんさ。昔の異界の事とか、実際に見てきたみた
いな言い方してた気がして…」

「ああ、実際に見てきたし、フィルフサとクリント王国の侵攻も体験し
ている」

「…え、じゃありラさんつて今一体いくつなんですか？」

「タオ、女性に年齢を聞くのは失礼だぞ。オーレン族は私達より長生
きなだけだ」

：私にはそこまで気を遣わなくともいいんだが。ライザとクラウ
ディアが「うんうん」といった感じで頷いているし、あの世界だとそ
れが普通の事なんだろう。…というか。

「それを言つたらアンペル。お前もあの世界の基準では相当な若作り
だろう」

「え、 そうなの!？」

「男にも年を聞くな。無粋だろう」

「…えっと、後で秘訣とか聞いてもいいですか？」

「無いぞ」

折角聞かれているんだから答えてやつても…と言いたいところだ
が、コイツは多分その辺りあまり氣を使いそうにないからな。實際無
いんだろう。

「…長生き、か」

「どうしたの、アルム？」

「いや、もし自分の故郷…クーケン島がこうなつてしまつたらという

のを、少し考えていた

「…想像だけでも辛いだろう、それは」

「ええ、そして思つたんです。…リラさんは、想像とは比べ物にならない「実際に喪つた悲しみ」を、ずっと背負い続けているんだな、と」「…そうだな。なんなら、その原因も、オーレン族からしたらかなり理不尽なものだ」

「…もし、昔のこの世界を取り戻せる手段があるなら、俺達も手伝えます。お世話になりましたから」

「おう、リラさんには色々教えて貰つたからな。その分の恩はちゃんと返さなきやな」

「僕とライザはどうちかつて言うとアンペルさんだけど…同じことだよね」

「そーゆ。アンペルさんも、出来るならどうにかしてやりたいって思つてるだろうしね。手伝う一択よ」

「…お前達」

「全く。お人好しだな、お前達は…」

「リラさん、アンペルさん。私ね、クーケン島に来て、ライザ達と出会つて、友達になれて…本当に良かつたつて思つてる。アンペルさん達は？」

「…わざわざ聞くまでも無いだろう？クラウディア」

「これまでの旅で間違ひなく、最高の出会いだよ」

「この出会いは、未来永劫忘れることは無いだろう。そう確信させられるくらいにはな。

「…まあ、話はここまでだ。そろそろ追跡再開とするか」

「うろついているフィルフサとの戦闘は最小限に抑えろ。基本はボオスを探すこと優先だ。行くぞ」

「さあ、こいつらの為にも急ぐとしようか。

「…ん、あそこ、少し明るい…？」

「ホントだ。なんだろう…？」

可能な限りフィルフサを無視し、将軍級もやり過ごしながら進んで

いくと、アルムが何かを見つけたようだ。確かに少し明るいな。それに近づくと、木が燃えているような臭いがする。…つまり。

「…焚火、か？」

「つてことは、誰かいるのか？」

「も、もしかしてボオス!？」

「解らないけど…もし違つたとしても、話が聞けるかも」

「…」の異界に、私達とボオス以外に誰かいるとしたら…

オーレン族の同志…生き残りかもしれないな。もしそうなら、ぜひとも言葉を交わしたいところだ。

「…俺が見えてきます」

「ああ、任せたぞ」

いやというときには、一撃の威力があるアルムの方が良いだろう。不意の一撃で勝負を決められる可能性が一番高いからな。

「…さて、ボオスは居るか…?」

そう言つて、謎の光源がある場所をのぞき込むアルム。少しして…

「…みんな、ボオスがいたぞ」

「いたの!? あいつ、大丈夫だつた!?」

「…まだ判らないが、恐らく寝ている」

寝ている? この世界で? いくらなんでも、そこまで剛毅ないしは馬鹿な人間には見えなかつたが。

「何で寝てるつて思つたの?」

「…なんというか」

少し言いよどんだ後、戸惑いを隠せない声色でこう言い放つた。

「…フードを被つた、恐らくオーレン族の女性が…ボオスに膝枕をしていた」

「「「「「…は?」」」」

…予想できるか、そんなもの。

王国の罪と、それがもたらしたもののは

「…あー、何だ。無事で良かったよ、ボオス」

「…ああ。…ランバーは無事だつたか？」

「特に怪我は無かつた。今は…さつきまでのお前みたいに限界が来て寝ているか、そうでなければ説教でも食らつているだろうな」

オーレン族の女性に膝枕されているボオスを発見し、その無事を確認した俺達は、まずボオスを助けてくれたらしい女性から話を聞くことにした。彼女の名はキロ・シャイナス。オーレン族の靈祈氏族の生まれなのだそうだ。なんでも彼女は、ずっとここに残つてフィルフサと戦い続けているらしい。曰く「自分が信じるもの為に、自分の命をかけるだけ」とのこと。リラさんもその言葉に同意している辺り、オーレン族というのは全体的に戦士というか、誇り高いというか、そういう気質を持つているようだ。

今日もいつものようにここに拠点を置きつつフィルフサと戦つていたら、ボオスがフィルフサに追わされて門を通つてきたので救出。事情を聴くためにいくらか話をした後にボオスが疲労と眠気の限界に来てしまつたので、とりあえず膝を貸すことにしたそうだ。…この時、ボオスの意識は朦朧としていたらしく、自分がどういう状況になつていて解つていなかつたようで、しばらくして来た俺達がボオスの友人だと名乗つたので、キロさんがボオスを起こしたのだが：起きたボオスは、自分がキロさんに膝枕をされていたことを認識した瞬間、顔を赤くして狼狽していた。…気持ちは解る。覚悟を決めて恥ずかしいからな、それは。そんなボオスに俺が出来たことは、ありきたりな無事を喜ぶ言葉をかけることだけだった。

…キロさんの起こし方が「ボオス、起きて」と言いながらボオスの頬をペちペちと叩く、というものだつたことはボオスには伏せておこう。正直、物語の中で見た距離感が近すぎる幼馴染のそれとしか思えなかつた。実際は出会つて3時間経つてゐるか否か位の筈だが。

「それで、その…キロ、何故俺に膝枕を…」

「友の為に危険の中に飛び込んだ勇士に、岩や丸太を枕にして寝ろな

んて扱いは私にはできない。それよりはましな選択だと思つたから膝を貸した」

「……こんな状況で言う」とじゃねえけどよ。全く色気ねえ理由だな」「一応我らの間でも、普通は仲睦まじい間柄でしかやらない行為だという認識ではあるぞ」

「……だから、一瞬迷つた。見られたのは少し恥ずかしい」

その辺りは俺達もオーレン族も変わらないらしい。まあ、異性と体を触れ合わせる行為である以上、そういう認識にもなるだろう。

「しかし、まさか同胞の生き残りにここまで会えるとはな。私は白牙氏族のリラ・ディザイアスだ」

「あの白牙氏族の……私も、会えて嬉しい。ボオスの友人達、君達の名前も聞かせて」

名前を聞かれたので、俺達も名乗ることに。……ライザとアンペルさんは鍊金術士であることも明かしていたが、特にこれと/or>反応は無かつた。この惨状が根本的にはクリント王国のせいだというなら、その王国が用いていた鍊金術にも良くない感情を抱いてもおかしくは無い筈だが……まあ、そこは後で良いか。

「ところでリラ、ここは何処だ？今までの門から入つたところとは明らかに違うが」

「ここは我らの聖域、森を潤す水源地だ。……まさか、ここにこんなにも近い門があつたとはな」

「え、ここが水源？」

「むしろ、カラツカラに干上がつているように見えますけど……」

こうなつた原因は、フィルフサ……ではないよな。ここが水源だつたというなら奴らは絶対にここには近づけない筈だし、近づけないなら何もできない筈だ。だとすると……

「……まさか、クリント王国が何か？」

「察しが良いな。……今から、長くて酷い話をしよう」

そこから始まつた話は、本当に酷い話だった。今から数百年前、クリント王国の人間が門を開いて現れ、この世界に攻めてきた。理由は勿論、自國の繁栄のために資源を持ち帰る為。幾つか門を開き、有用

な資源がある世界を探していったところ、この世界が選ばれてしまつた。その資源とは、魔石とは比較にならない程の純度を持った砂粒程の結晶らしい。

しかし、この世界でそれを採掘をしようとしても、そもそも数がない上に、掘れば掘る程出てくるのは水ばかり。それでは折角の資源が採れない…ということで、クリント王国はとんでもない手段に出る。それは…資源の採掘をしやすくするために、この地の水を全て奪つてしまう、というものだつた。

そしてその結果、水が無くなつたこの地にフィルフサが侵攻。そしてついでと言わんばかりに門の先にあつたクリント王国にも侵攻。その後は一度聞いた通り、この地は荒廃し、オーレン族は散り散りに。リラさんも重傷を負つて、門を通つた先にアンペルさんがいて、以後2人で門を封じる旅に。クリント王国はフィルフサの対処に国力を使い果たし衰退…という結末を迎えた。

…その話を聞いた俺がまず口にしたのは、クリント王国の所業に対する率直な感想だった。

「…イカれてるのか、その発想は」

「同感だ。フィルフサの存在を知らなかつたことを考慮しても一切擁護できない、自国さえよければ他はどうでもいいと言わんばかりの最低最悪な所業だ」

「…うん。水が無くなつた世界がどうなるかなんて、あたしたちでも簡単に解ることなのに」

クーケン島で水源を押さえているブルネン家の発言力が強いのも、それだけ人間にとつて水が大切なものだからだ。それを完全に枯らしてしまうのは…やはり、イカれてるとしか思えない。

「でも、1つの地域の水を完全に奪うなんて、どうやつたんだろう」「私は見てないけど、【渦巻く白と輝く青】に全ての水を吸い込んでしまつたと聞いてる」

「渦巻く白と、輝く青…?…まさか」

「ボオス、どうした?」

「…いや、そうだ。間違いない」

ボオスの様子がおかしいな。…まさか【渦巻く白と輝く青】について、何か知っているのか？

「その青と白つてのは…高度な鍊金術で作られた古式秘具か何かだろうな」

「恐らくそうだ。…あんなもの、今思えば鍊金術で作つたものとしか思えない…！」

「ボ、ボオス？どうしたの？」

「俺は、その【渦巻く白と輝く青】を、家の離れで見たことがある…！」

「え…？」

「どういう、こと？」

…俺達全員が同じ、呆けた表情をした。何故、それがボオスの家の離れに？というか、ちょっと待て…！

「おい、ボオス。まさかと思うが、クーケン島の水源は、その…」「ああ。【渦巻く白と輝く青】だ。…あれからは、どこからともなく常に水が噴き出していた。あの水は…元々、この世界のものだつたんだ。この世界から、奪つたものだつたんだ…！」

…それは、つまり。

「この森に、水を返そうとするなら…」

「クーケン島の次の水源を、どうにかして探すしかないと…？」

「…そういうことになるな」

「…話がデカすぎて、頭が付いて行かねえよ…」

次の…いや、「本来の」水源が何なのかは分かる。だが、どうすればそれを直せるのか。どこに行けば答えがあるのか。現状その取っ掛かりが無い。島のどこかか、クリント王国の遺跡のどこかにあってほしいが…

「キロ、俺は…」

「ボオス、気にしすぎないで。君達が悪いわけじゃない」

「…すまない」

「この地に水を取り戻す為にするべきことは解つた。…リラ、お前の悲願が叶う日が漸く見えてきたぞ」

「ああ。…だが、気負い過ぎるなアンペル。お前一人で背負う必要は

無いんだ」

「異界、フィルフサ、クリント王国、オーレン族。そして島の水源は古式秘具、かあ…なんか、冒険を始めたころからは考えられないくらい凄い話になつて来てるよね…」

「ああ…確かに俺達全員個人的な目的はあつたけどよ、いつの間にか国だの異世界だのつて話に関わつてるからな…」

「…どこもかしこも、重い空気になり始めたな。

「…しようがないけど、みんな凄く考え込んでるね…」

「うん…あたしも、みんなも、自分たちが大きな何かに触れてるような気がして、ちょっと怖くなつてるんだと思う」

「こんなに近くで、こんなことが起きているなんて考えもしなかつたからな」

「そうだよね…よし」

クラウディアが何かを決心したようにフルートを取り出し、演奏を

始めた。：綺麗で、穏やかな曲だな。

「綺麗な音…こんなの、初めて聞いた」

「ああ。：いい曲だ」

「アンペル、お前も心をくつろげて聞いてみたらどうだ？」

「そこまでガチガチになつていたつもりは無いが…いや、そうだな。ゆっくり堪能するとしよう」

「クラウディアのフルートつてさ、聞いてると穏やかな気持ちになるよね」

「ああ。それに、いつでも俺達を助けてくれる、強くて優しい音だ」

クラウディアのおかげで、重苦しい空気もかなり和らいだ。同時に、焦りが消えて落ち着いて考えられるようになつたが…今は曲に集中しなければ、演奏しているクラウディアに失礼だな。

「…凄いなあ、クラウディアは。こういう時、一番に自分から動けるんだもん」

「みんなの手助けがしたい、と常に言つてゐるからな。これもその範疇なんだろう」

「そうかもね。：あ、リラさんとキロさんが立ち上がり…」

「歌い始めたな。：初めて聞くはずなのに、よく合わせられるな」「もー、そういう野暮は言いつこなしだよ」

「…それもそうだな」

「…心地よい時を過ごさせてくれてありがとう。お礼に、せめて門まで送つていく」

「はい、お願ひします」

「ついでだ。この辺りにある素材、持てるだけ持ち帰るぞ。何かの役に立つだろう」

「えつと…いいの？」

「構わない。私では使い道がないし…多分君は、間違えない」

キロさんからのお墨付きも貰つたところで、門に向かいながら採取。見たことのないものがいくつかあつたな、これで鍊金に幅が出るだろう。

「採取ついでに…キロ・シャイナス。君自身の事も含め、もう少しこの地の話を聞かせてもらつていいか？」

「いいけど…語ることは、それほど多くない」

キロさんとリラさんが言うには…菲尔フサの頂点である蝕みの女王は、クリント王国に荒らされてなお精気に満ちたこの地を本拠と定め侵攻。それにより徐々に森が歪み空が濁み、今の「異界」が出来上がつた。生きるための水を奪われたオーレン族は必死に戦つたが、敗北して散り散りに。この辺りにはキロさん以外のオーレン族はもういないそうだ。

「だから、誰かと会うのは本当に久しぶりで、本当に嬉しかつた」

「…リラさんのような、別の世界に逃れて生きているオーレン族の人があいればいいですね。生きてさえいれば、いずれ会うこともあるでしょうから」

「うん。そなうら、もつと嬉しい」

そんな感じで話しながら採取もして、そうして門の前にたどり着い

た。

「ボオス。今度は、体調を万全に整えてからでないと来ては駄目」

「ああ、解つてる」

「それと、手を」
そう言つてボオスが手渡されたものは…宝石？若しくは、何かの紋章か？

「フィルフサを数多く倒したものが稀に得る、戦士の証。生き抜く強さを、心にくれる」

「…キロ、助けて貰つた恩は必ず返す。水をきつとこに戻すから、待つていてくれ」

「うん。君がそう言うなら、信じる」

それは…俺達も気張らなければな。ボオスを嘘つきにしないためにも。

「キロ・シャイナス。心苦しいが、この地で1人勇敢に抗戦を続けるお前に手を貸すことはできない。だからせめて、調査を急ぐつもりだ」「謝らなくていい。あなたのそれも、オーレン族の戦いだから。それに、近くのフィルフサは片づけたから、女王の城から次の群れが来るまで、私は休むつもり」

「女王の、城？」

「クリント王国が本営を置いていた城が北方にある。今はそこが蝕みの女王の巣になつてゐる」

成程。しかし、何故この世界に城を…まさかと思うが。

「クリント王国は、ここを自分たちの統治下に置こうとしてたんじやないだろうな」

「今までの話からすると、普通にやりそうだね…」

「間違いない。資源だけでは足りないと言わんばかりに土地も奪おうとする姿は容易に想像がつく」

「ホント碌でもねえな…」

「…鍊金術士として、たっぷり反面教師にさせてもらうわ。色々と」

「うん。商人の娘としても、色々とね」

話が進むたびに評価が下がるなクリント王国。まあ自業自得だし、

それ故に滅んだわけだが。

「しかし、本拠地が解るならそこを攻めれば…いや、戦力が足りないな」

「焦るなよ。まず先にやることがあるだろう」

「ああ。ボオス少年が証言したものが真にクリント王国の古式秘具なのか、見極めねばな」

「任してくれ。近いうちに機会を作る」

さて、それじゃあ一旦お別れだな。

「キロ。またな」

「うん。君達に、日の加護と月の導きが有らんことを」

そうして、俺達は門を通り、元の世界に戻つて来た。

「暑い、眩しい…けど、これだよね。あたし達の空つて！」

「ああ。ほんのちょっと出かけただけなのに、帰つて來たつて感じがするな」

「やはり、空は青くあるべきだな。…何時か、向こうの世界の本当の空も見てみたいところだ」

大体今は昼くらいか。俺以外は本来まだ寝ている時間に起こされたわけだから、緊張が解けたらどつと眠気が来そうだが…戻るころには、昼寝をするには遅い時間になつていそうだな。

「えつと、フィルフサはこっちに入り込んできてないよね？」

「見渡す限りは大丈夫のようだな」

「この遺跡の調査は…また後日、じっくりとやらせてもらうか」

「それじゃあ早く島に戻つて…ランバー君とモリツツさんを安心させてあげなきやね」

「…そうだな。急ぐとしようか」

モリツツさんの狂乱ぶりも、目に浮かぶことだしな。

「それにしても…大冒険だつたね」

「俺にそのつもりは無かつたがな。…改めて、ランバーには今後悩みはちゃんと相談するように言つておくか」

「そうしておけ。今回は大事無く済んだが、次もこうなるとは限らない

いからな

「確かに、力が無い事を悔やんで焦つちゃつたんだよね、ランバー君」「だったら俺達で鍛えてやるか？アガーテ姉さんとリラさんにも協力してもらつてよ」

「流石にリラさんは止めとこう？」

「何だ、私では拙い事があるのか？」

「お前は実戦形式だとスバルタが過ぎるだろう。いきなり負荷をかけ過ぎるのも良くないぞ」

…とりあえず、今後の特訓でランバーが死なないことを祈るか。
「それと…例の離れだが。俺でも簡単には近づけさせてもらえないから、直ぐ鍵を開けるのは難しい。三日程くればどうにかできると思うが…」

「三日か…解った。覚えておく」

「それじゃ、話もまとまつたところで…島に戻つて、畠サボつてごめんなさいって謝りに行こう！」

「…そういうえばそうだった」

置き手紙くらいは、残しておくべきだつたな…

心配されるのは、子供も大人も同じ

「ボオス！よくぞ戻つて来たああああ！」

「…父さん。気持ちは嬉しいが、流石にみつともないぞ」

ボオスを連れて戻つてきたあたし達を真っ先に迎えてくれたのは、モリツツさんの大声だつた。…うー、仕方ないとはいえ、結構眠くなつてゐるところにこの大声は凄く響くなあ…。他の皆もなんかのけぞつたようなリアクションしてゐるし、アルムなんか耳を塞いでる。

「それで、ランバーは？」

「お前が戻つて來たのを見たら倒れてしまいおつた。安心して緊張の糸が切れたんだろう」

「物凄く気に病んでいたからな、説教なんてとても出来る状態じゃなかつたぞ。こうしてお前が帰つて來たから、心置きなく説教できるが」

「…その時は、あいつのフォロー役として同席させてくれ」

：姉さんの本気説教は本当に凄い。あたしもされたことがあるけど、それはもう本当に。なんならアルムが「小さいころに一回だけ見たことがあるが、こつちも怒られてる気分になつた」なんて言い出すくらいだからね。…アルムが人前だと結構眞面目なのつて、これも理由だつたりするのかな？

「それで、お前達。揃つて急にいなくなるから皆心配してたぞ？まあ今日は事情が事情だから弁護はしてやるが」

「有難うございます。：俺はエルから、ライザはミオおばさんからの説教が飛んでくるかもしだせませんね」

「そうだよね…せめて置手紙の1つでもしておけばつて思つてるよ」

「それが解つてゐなら、次からはちゃんとしておくれよ？」

「そうだよ。お母さんが泣きそうな顔してたよ？アルム兄」

…あ、凄く聞き覚えしかない声が2つ。…うん、よし、やることは

1つ。覚悟は決まつた、今ここで謝ろう！

「えつと…ごめんなさい母さん！」

「すまん、エル！」

「あー…今日は流石に急を要する事態だつたから、大目に見てやつて
ください」

「それは解つてるから怒らないわよ。ただやつぱり…ねえ」

「それでもいきなり居なくなつちやつたらびつくりするし、心配もす
るよ。ね、ルベルトさん？」

「そうだな。ある程度慣れている私でも驚きはしたし、当然心配にも
なつた」

「お、お父さん…」

…の2人がいたんだし、当然いるよね、ルベルトさん。

「他の皆も一緒にいなくなつていると聞いたときは、一体何があつた
のかと思つたが…まさかボオス君がな」

「その…めんなさい、お父さん」

「すみません、あんな時間にクラウディアを連れ出して…」

「いや、君たちの事は信頼しているし、クラウなら連れ出さない方が
「仲間外れにされた」などと言つて落ち込むだらうから、そこは構わな
い。リラさん達も一緒にいたようだからな」

「あー…確かにクラウディアならそうなるかも」

「むしろ後からでも追いかけてきそうだよな」

「そ、そこまでは…しないよ！」

「随分と間があつたな」

「否定したいなら即答するべきだ、クラウディア」

…クラウディアには悪いけど、あたしも凄く想像つくなあ。1人で
対岸に渡ろうとして皆に止められるの。

「ただ…そもそも何故、そんなに遅い…いや、早すぎる時間に起きて外
にいたのかというのは気になるが」

「え、えつと、それは…」

「それは？」

「夜の砂浜で、1人でちょっと踊つてみたくなつたの…」

「…そうか」

…まあ、間違つてはいないよね。フルートを小さい音で吹きながら
踊つてたから。多分今まで偶にこうやつて練習してたんだろう

なあ。

ただルベルトさんのあの感じ、誤魔化してるつてなんとなく気づいてる気がする。：追及とかしてこないよね？

「あれ、クラウディアさんは偶々外にいたから連れて行けたんだよね？ライザお姉ちゃん達もそうだったの？」

そんなことを気にしてると、エルちゃんが疑問を投げかけてきた。
：あー、言われてみたら確かにそこに気になるよね。

「いや、寝ていたな。だからライザとタオは屋根の上に登つて窓をノックして起こした」

「…なんか危ないことやつてない？アルム兄」

「窓を見てみたら逆さまになつたアルムがいたから、何事かと思つたよ…」

「あたしは心臓が止まるかと思つたなあ…」

ベッドのすぐ横に窓があるから、起きて横向いたら逆さまのアルムの顔が近くにあつたんだよね：呼ばなかつたのが奇跡だよ、アレ。

「レントさんは？」

「…コイツの家、ザムエルさんが醉つた拍子にカギを何回か壊しててな。その内直さんくなつたんだよ」

「どうせ誰も来ねえし、この島に夜にわざわざなんかしに来る奴なんざいねえしな」

「…後で鍊金術で直しに行くわ。今のザムエルさんならもうそんなことしないだろうし」

：：：そうだった、最近はちよつと改善されてるから失念してたけど、元々レントのとこつて大分マズイ家庭環境だつた。どうせまた壊すからで家の鍵開け放しは流石にマズいわよ…

「さて、話はそこまででいいだろう？事情はどうあれ家族を心配させたのは事実だ。早く顔を見せて安心させてやれ」

「ああ、お前達は兎も角、家族はもしもを考えたかもしけないからな」「そうですね：親父と母さんになんて謝ろうか」

「ウチのお父さんは全く怒らなさそうで逆に申し訳なくなりそう…」

「今正直、竜退治の時より緊張してるよ：何言われるかなあ…」

それは言い過ぎじゃ……無いかな。あたしもここに母さんがいなかつたら同じ気持ちになつてたと思うし。

「…そういうや親父、飯大丈夫か？あいつ料理欠片も出来ねえどころか、包丁とかぶつ壊しかねないんだよな…」

「ああ、そつちは私達でなんとかしといたわ。それと、「流石に今回は一発ぶん殴る」って言つてたわよ」

「…むーん、今日はちょっと止めにくいかも」

「確かに気持ちは解らんでもないが：確かに彼は元傭兵で、腕力の強さは健在だと聞いているぞ」

「えつと…手加減してあげるように言つておいた方がいいんじゃないかな」

今のレントなら大丈夫だと思うけど…まあ、それが原因で特訓とか冒険に支障が出たら困るからね。

「では、今日はこれで解散だ。眠たいだろうが、昼寝はほどほどにな…なんか先生みたいだよ、アンペルさん。いや、あたしとタオにとつては先生みたいなものだけどさ。

「ふあ…」

「つ…」

あたしとアルムとエルちゃんの3人で家に戻る途中、あたしは欠伸をして、アルムは頭がカクンつてなつた。そろそろ我慢の限界だなあ…：

因みに母さんは、ザムエルさんがやりすぎないように見張つておくつて言つてた。…ザムエルさん、なんかうちの父さんと母さんに弱いんだよね。

「むーん…よし、3人でお昼寝しよう！」

「うえつ!?」

エルちゃん?!いきなり何を言い出すの!?

「…俺が混ざつて良いのか、色々な意味で」

「むしろ来なさい！」

「何处目線の発言だ?…というかライザ、色々ヤバそうだが大丈夫か」

「い、いや、だつて、その…」

寝顔見られるのは、流石に恥ずかしすぎて無理：

「朝2人が急にいなくなつて寂しかつたし、心配もしたんだから、その埋め合わせ位してほしいなー?」

「う、それを言わると…」

「…」うなつたら、もう選択肢は無いも同然だな」

「ふふふ、そーいうことだよ。…ホントに、心配したんだからね?」

「…悪かつた」

「…」めんね」

…姉さんは別の意味で、この子にも敵わないなあ。

この後、あたしは父さんには怒られるどころか労われた。…やつぱり、ちょっとくらい怒つてくれた方が気が楽だなあ。アルムの方は、ウエインさんはちょっと叱りつつも無事を喜んでたけど、ルーテリアさんが安心して泣いちゃつて、アルムが罪悪感で頭抱えてた。うん、次からは緊急事態でもどうにか行先とか伝えられるようにしてよう。

タオは家族に抱きしめられるくらい凄く心配されてて、クラウディアは商会の人達に「友達と一緒に無茶できるのは子供の特権だから今 のうちにやつとけ」みたいなことを言われてルベルトさんに渋い顔をされてたらしい。

レントは…なんか、ザムエルさんが最近ちょっと鍛え直してたらしくて。「今までで一番強烈なのを貰つた」って言つてた。眠気も吹っ飛んだみたい。

…因みに、寝顔はアルムにしつかり見られた。アルム、何でそんなに起きるの早いの…：

「戻つたぞ。…ん、アルムとライザは?」

「ああ、採取地調合器の中だ。入つたばかりだから出てくるまでまだ少し時間があるな」

【門】を見つけた翌日、ランバーの訓練の相談を受けていた私は、一通

り訓練を見てから提案とアドバイスをした。それが終わつたのでアトリエに戻つてきしたが：採取地調合器か。もしかしたら【アレ】が見つかるかもしねないな。

「それで、ランバー少年の訓練は？一応動きだけ見るとは言つてただろう」

「知つているだろ？私は手加減が好きでは無くてな。今彼では、私が施すそれは逆効果だろ？」

あの後、アガーテからこつ酷く説教を食らつたらしいランバーは、訓練と仕置きを兼ねて思いつきり扱かれることになつた。それに関してはランバーも望むところだつたからか、素直に受け入れていたが：私が見に行つたころには汗だくでうつ伏せに倒れていた。内容を聞く限りでは、確かに厳しいものではあるが、私があの2人に施しているそれ程ではない。

アルムとレントなら、やる気以上に体力と実力もあるからこそ疲弊しながらも食らいつき、実りのある特訓になつてゐるが：ランバーは体力がまだ不足している。大した効果も出ずに、疲弊するだけになるだろう。

「それに、レントの父親が何処から聞きつけたか訓練に付き合いだしてな。アガーテもいたし、人数的にも私は現状不要だろ？」

「ん、そうなのか？レントから聞いた話では、奴の父親は人格面で少々難があると聞いたが」

「レントに感化されたのか、少し鍛え直してゐるらしい。今回のそれも、その一環だろ？」

前評判からは信じられんくらいの良い表情をしていたな。居合わせたレントが、「最初からそうしとけつてんだ、たく」なんて言つてたが…少し口角が上がつていたのを、私は見逃さんぞ？

「ところで、タオとクラウディアは何をしているんだ？何やら土を耕していたようだが」

「ああ、鍊金術用の畑を作つてゐるらしい。種も鍊金術で作れば、普通ではありえないものが採れるだろ？な。例えば、鉱石とかな」

「…畑から鉱石？想像がつかんな」

…やはり鍊金術はよく解らないな。だからこそ、アンペルやライザのように深みに嵌る物が出てくるのだろうが。

「それで、アルムとライザに用があるのか？」

「いや、ここにいると思っていたが見当たらなかつたからな。聞いただけだ」

「そうか。まあ、そろそろ出でくると——」

「よーし、探索終わり！」

「これで折角の畠も活かせるな」

「人が調合器から出て來た。目的は果たせたらしい。

「どうだつた、2人とも」

「なんか…凄かつた。本当の世界と空気がほとんど変わらなかつたつて言うか」

「鍊金術のとんでもなさを改めて知れましたね…小さいとはいえ、世界すら作れるとは」

「そうか…ん、アルム。その手に持つている物は？」

アルムの手を見てみると、宝玉のようなものが握られていた。…それは、まさか。

「何か力がありそうだつたので、拾つておきました。何に使えるかは解りませんが」

「うーん、何かの部品かなあ。これだけで何かできる感じじやなさそう」

「…そうか。まあ、そう言う物ほど何か重要な役割を持つていてするものだ。大事に取つておけ」

「うん、そうする。さて、じやあとりあえずみんなの新しい装備と畠に撒く種を調合して、それから…」

「俺は畠を手伝つて来よう」

そう言つて二人は各々動き出した。…アルムが拾つて來たアレがあれば、このレシピに記されている物が作れる。それを使えば、アンペルの腕がもう一度動くようになる。だが…

「ん、どうした？リラ」

「…いや、何でもない」

これはクリント王国の技術だ。奴らの所業に心底怒り、心を痛めて
いるこいつが…これを使いたがるか?…使いたがらないだろうな。
そもそも、私が独断で写しを取つておいているだけで、コイツ自身は
このレシピを見つけた瞬間焼き払つた。恐らく、見たくもないと思つ
ているだろう。仮に今、私がライザに調合を依頼したとして…完成し
たそれを持ち出して、私が口で言うだけではコイツは動かない。

(力ギを握るのは、やはり…)

鍊金術士として成長を続けるライザ。こいつの真っ直ぐさと快活
さなら、アンペルの心を動かせるかも知れない。その時が、このレシ
ピをライザに託す時だ。

(…お前に賭けさせてくれ、ライザ)

何処までも楽しそうに調合を続けるライザの姿に、私は期待してい
た。アンペルが背負っている物を、こいつが下ろさせてくれること
を。

少年と少女の、それぞれの「想い」

「……だ。ブルネン家で【水生みの離れ】と呼んでいるこの小屋に、昔俺が見た【渦巻く白と輝く青】がある」

「……か。モリツツ氏が唯一「……だけはどうしても調査の許可は出せない」と言つていたな」

今朝、ボオスから「ようやく離れの小屋の鍵を開けることができた」つて言われたから、ボオスが見たものが本当にオーレン族の故郷から水を奪った古式秘具なのかみんなで確かめに来てる。……あれから3日経つたけど、やつぱりまだちよつと飲み込み切れないなあ。島の水源が、ある意味曰く付きと言つていい代物だなんて。

「水……生み?」

「見れば解る。……あの球だ」

「球?……あつ」

ボオスにそう言われて見てみると……そこには、水が尽きることなく湧き出てる、光る球があつた。……これが、【渦巻く白と輝く青】……【清水を溢れさせる】渦巻く白と輝く青】……クリント王国の古式秘具か……

「モリツツ氏がこの小屋の調査の許可を出せなかつた理由だな。これが、あの森から奪われた水なんだ」

「これが、俺達が今まで使つて來た水源だつたつてのか? 信じらんねえな……」

僕も信じられないけど……でも、これが真実なんだよね。僕たちの生活は、どこまでも鍊金術に支えられていたんだ。

「そもそも、こんなものどこから持つてきたんだろうな」「え、元々この島にあつた訳じやないの?」

「ああ、コイツがこの離れに据え付けられたのはもつと最近だ。それまでに、島の水源は涸れていた」

「確かに、水が不足してた頃は水路のあちこちを塞いで溜めた水でなんとか凌いでたんだつけ」

「島のすぐ下が岩盤で、碌に井戸も掘れねえしな。ずっと昔には普通

に湧いてたらしいが」

「お父さんも言つてたよ。麦が採れるようになつたのはほんの何代か前で、それまでは乾きに強くて地面から水を集めるクーケンフルーツばかり育ててたつて」

「俺もそれは親父から聞いたな。…で、元から島にあつたならそんな苦労をする必要はない。なら元々はここではないどこかにあつたと考える方が自然だ。そして…」

「成程。その場所に何かあるかもしない、と？」

「ええ。こんなもの、「偶々そこにあつただけ」は無理がありますから」
：確かに、こんな古式秘具をそんな雑な扱いはしないよね、普通は。内容は兎も角、国を挙げての計画の屋台骨みたいな代物だつたなら、管理とか保管とかしつかりやつてなきやおかしいし。

「…うん、あたしもそう思う。ボオス、これが何処にあつたかとかは知らない？」

「いや、数代前のブルネン家がどこかから持ち帰つて來たということだけしか聞いていない。…だが、何か手掛けりが残つているかもしないな。後で調べておく」

「ありがと。：アルムの言う通り、多分その情報が、いろんなことを解決できるようになる手掛けりになると思う」

「物事の繋がりを感じる、か？」

「うん。上手く説明はできないけど」

「そうか。ボオス、出来るだけ早く頼むぞ」

「ああ。早くキロ達オーレン族に、水を返さなきやならないからな。…これは彼女たちの大切なものだ。ブルネン家が権勢を得るための道具であり続けていいわけがない」

何か随分張り切つてるなあ、ボオス。…もしかすると、そういうことなのかなあ？よく解らないけど…

「急いでくれるのは有り難いが、性急に事を運びすぎるのも悪手だ」

「ああ。1つずつ確実に片づけていくぞ」

「うん。クリント王国の鍊金術がやつたことだし、同じ鍊金術士として放つておけないよね！」

「！…ああ。そう、だな…」

「…」

今のライザの言葉に、アンペルさんが面食らつて、リラさんが考え込んでる。それだけ予想外な台詞だったのかな？僕達からしたら凄く「らしい」と思う言葉だけどな。

「さて…今の俺達にできることは、どこに行くとしても問題無いように準備しておくことくらいだな」

「うん。ライザが作ってくれた新しい道具も試したいしね」

「じゃあどこでやる？あんまり魔物が弱いところでやつても実感わきにくいし」

「だからって強い魔物がいるところでやるのも危ないよ。あくまで慣らしなんだからさ」

「そろそろ塔の方角に進もうと思つてたんだが…まあ、焦ることもねえか」

塔、かあ。…正直、この辺りの地理からして、何かあるとしたらもうあそこしか残つてないよね。それが無くとも、レントの冒険の目標だから行くことにはなるけど。…とんでもない魔物と遭遇しないと良いなあ。でもしそうだなあ…

「…タオ」

「何？」

今から塔への旅路に不安を募らせてたら、アルムが小声で話しかけてきた。何だろう？

「あの球が置いてあつた場所が判明したら、あの本と島の事をみんなに話そうと思う」

「…大丈夫？色々とんでもない内容だから、受け止められるか解らないよ？」

「その辺りはどうにかする。それと…」

「それと？」

「受け止められるかどうかの心配は、お前もしておいた方が良い。ま

だお前にも明かしていないことがあるからな」

「…あれ以上、まだ何かあるの？」

もうそれだけで受け止め難いよアルム…

「さて、一旦アトリエに戻るか。…しかし、まさかこんなものが見つかるとはな」

タオに借りた本の解説も一段落ついたので、以前旅好きのダニエルさんから貰った宝の手掛かりを頼りに近場を探索していた。そしたら地図の断片のようなものが見つかったので、それを拾い集めていくと、宝の在りかが記されていた地図だと判明。その場所にあつた宝箱を開けると…予想だにしないものが収められていた。

「コアクリスタル…しかも、今使っている物より高性能だ」

試してみたが…容量が大きい、とでも言えばいいか。エネルギー切れまでが遅くなっている。勿論一度のコンバートで最大まで回復するので、以前より少し道具を使いややすくなつた。これは良いものをつけたな。丁度人数分あるし、早速みんなに渡すか。

「時間があれば、他の手掛けりも辿つてみようか。良いものが見つかるかもしれない」

道具にしろ、レシピにしろ、あつて損は無いからな。ボオスの方の結果が出るまで時間があるかもしれないし、みんなに相談してみるか。

そんなことを考えながらアトリエに戻つてきたら…

「ただいま」

「あ、アルム！ねえ聞いてよ、今アンペルさんがあたしのこと凄く成長していってるつて！」

物凄く上機嫌なライザが出迎えてくれた。…お前の成長、か。

「知つてる。ずっと見てるからな」

「…ふ、ふふふ、そーよね、一番近くで見ててくれるもんね、アルムは…何でそんなにサラッとそういうことが言えるかなあ…」

お前相手に言葉を取り繕うことも無いからな。言えることははつきり言わせてもらうぞ。

「良いタイミングだ、アルム。このままではアンペルの愚痴にライザが毒されて、暗くなつてしまうところだつたぞ」

「せめてそこは嘆きと言つてくれ」

「同じだろう。全くみつともない」

「あはは…相変わらずアンペルさんには容赦ないなあ、リラさん」

「…」

一瞬「夫婦か？」なんて言葉が口から出かけた。そうでなければ…何だろうか、お互いが自分が上だと思つてゐるきょうだい？

「ところでアルム、それ何？」

「ああ、今までのものより高性能なコアクリスタルだ。古城に安置されていた」

「ほう…そんなものが。どうやら、あそこもまだ調査する必要がありそうだな」

「別の【門】の手掛かりでも見つかれば僥倖だな。まあ、流石に高望みだろうが」

「その時は、あたしたちも手伝つていいかな？」

「ああ、むしろこつちから頼みたいくらいだ」

「また別の古式秘具が出るかもしれませんね。…召喚機のような物騒なものは、流石に勘弁してほしいですが」

「そういうことを言うと、得てして眞実になるぞ」

やめて下さい、縁起でもない…

「しかし、これも結構集まつて來たな」

「何が？…あ、ゴールドコインね」

「ああ。だが、あつたところで何に使えばいいのか解らなくてな」

少しあトリエで休憩していると、ふとゴールドコインの事が気になつたから机に並べてみた。ザムエルさん曰く珍しいものであるらしいが…どういうわけか強い魔物を倒すと良く持つていていたりするので、結構まとまつた枚数手元にある。しかし、現状使い道が浮かばない。珍しいなら、誰かとの取引に…ん、取引？

「…待てよ、ルベルトさんならいい案をくれるんじやないか？」

「そつか、商会のリーダーやつてる商人さんだもんね。早速話してみよう…あ、交渉とかあつたら全部任せて良いかな」

「…解ったよ。多分そこまで難しい話にはならないだろうしな」

「…というわけで、バレンツ邸に行つて話をしてみたところ…」

「私も商人の端くれ、価値のある物は手に入れたい」

「はい」

「そして、鍊金術にはレシピと呼ばれるものが必要だと聞いた」

「…つまり？」

「…」にそのレシピと思しき物がある。…そのゴールドコインと交換しようじやないか」

「是非お願ひします」

交渉成立、今ある分は全部貰つておいた。

「因みに、レシピ以外にも珍しいものがあるが…どうかな？」

「素材として使えそうですね…ただ、こちらに關してはライザの意見を聞きたいので、後にしてても？」

「ああ、構わないよ」

今は確かクラウディアと雑談でもしているだろうな…盗み聞きにならないようにさつさと呼ぶか。

「ライザ、少しいいか」

「アルム、どうしたの？」

「ルベルトさんとの取引で少し相談をな。…どうした、クラウディア？」

「…その、お父さんとのお話が終わつたら、私から話したいことがあるの。いいかな…？」

「ああ、いいぞ」「うん、いいわよ」

「ありがとう…」

そして、ライザが「これは！」と思つたものを譲つてもらつてから、改めてクラウディアの話を聞きに行つた。

「それで、話つて言うのは？」

「うん…私のフルートの事なんだけど…」

そこで聞いたのは…クラウディアが隠れて演奏しているのはあくまで自発的なもので、ルベルトさんに反対されているわけでは無いということ。

最初は隠れずに吹いていたが、その内ルベルトさんが悲しい顔をしているのに気が付いたこと。

その理由が恐らく、病弱故に置いて行かざるを得なかつた母を想つて寂しがつているとクラウディアが考えていること。

そして、それがクラウディアがルベルトさんの前でフルートを吹けなくなつた理由だということだった。

「…クラウディア」

「…確かにそれは、演奏もしたくなるだろうな」

「だけど、ここに来て、みんなと出会つて、演奏もたくさん褒めてもらつて…そして、あの異界で、私の演奏が誰かの心を慰めることができるつて解つたの。…だから、何時かお父さんにも私の音を届けて、悲しさを晴らしてあげたい。ううん、晴らして見せる」

「…うん、クラウディアならできるよ、絶対に」

「それができたら…また演奏会をしよう、なんて提案してみるのもいいかもな」

「うん。また3人で一緒に、楽しく演奏会をしたいな」

そう言つて笑顔を浮かべるクラウディア。…やはり、家族を想う気持ちは良いものだな。

鍊金術士の誓い、少年戦士の目標

「どうだアルム、本の解読は？」

「…半分くらいです。流石にタオほど早くはできませんね」

「いや、十分早いぞ。タオが早すぎるだけだ」

ボオス少年に古式秘具の出所を調べてもらっている間、私は調査の準備をしつつアルムの本の解読の様子を見ていた。タオとアルムの学習意欲と習得の速さは目を見張るものがあるな。この短期間でここまでとは…：

リラはライザを表に呼び出し、何かの相談をしているようだ。何かしらの調合の依頼か？

「そういえば、宝の手掛かりとやらはどうなんだ？」

「クーケン島のものは終わらせました。他は、レント達が後で来るそ

うなのでその時に」

「出来るだけ早くした方が良いだろうな。このコアクリスタルのように、有用なものが手に入るかもしだれん」

更に上位のコアクリスタルかもしだれんし、それ以外の何かしらの道具かもしだれん。もしかしたら、レシピの類もあるかもしだれんな。

「しかし、リラはライザと何を話しているんだろうな」

「確かに珍しい組み合わせではあります：女性同士の会話の内容を男の俺達が気にするのは不躾な気がします。聞かれたくないから態々表に出たのでしようし」

「確かにそうだな。あまり気にしないでおくか」

まあ、リラが主導の様だから色気づいた話ではないだろうが。

そんなことを考えていると、2人が戻つて来た。

「アルム、調合器でアルムが拾つて来たあの球、調合に使つていい？」

「ああ、元々調合に使えそうだから拾つて来たものだしな」

「ありがと。よーし、頑張るぞー」

：あの球を何に使うつもりだ？私が知る限りアレの使い道は…いや、だがあのレシピは見つけたその時に燃やしたはず。…まさか、リラ。

「…アンペルさん、どうかしましたか？」

「…いや、何でもない」

…いかんな、顔に出ていたか。あまり心配をさせる訳にもいかん、別の事を考えるか。

「アルム、潮流の変化により結果的に門の封印が弱まり、フィルフサがこちらに来るようになつた、という話はしたな?」

「…? はい」

「ライザはこの潮流の変化も何かの一部だと感じたようだが…お前はどうだ?」

「…それについては、もう少し後でみんなの前で言うつもりです。が、今一言で言うなら…以前話した俺とタオの考察の中に答えがあると見ていてます」

「成程、現状それが一番可能性が高いな。…ボオス少年には、出来るだけ急いでほしいところだな」

クーケン島が浮島であること、その島で起きている地震や浸水、涸れた噴水…そして潮流の変化。これらすべてを繋ぐ結論があるとしたら…

「よし、出来たよりラさん!」

「そうか。…確かに、見事な出来だ」

考えている内にライザの調合が終わつたらしい、完成した品を持つてこちらに来た。…その器具は!

「えっと、アンペルさん。これ…」

「…これは、何かに取り付ける物か?」

「うん。クリント王国の技術で作られた義手なんだつて」

「…リラ、私はあの場でレシピを燃やしたはずだ」

「写しを用意しておいたんだ。いつか、こういつた日が来ると思つてな」

…余計な真似を。

「これを見事に調合してみせたライザの腕前は認める。だが、私はこんなもの使わんぞ」

「…アンペルさん、どうしてそこまでクリント王国の鍊金術を嫌うの

?確かに、大昔に鍊金術で酷い事をしたけど、だからって…」

「アンペルは数十年前まで、この国…ロデスヴァアツサの王宮に仕える高名な鍊金術士だつた」

「つー！リラ！」

声を荒げても、余計なことまで話し出したりラを止めようとするが…コイツにそんなもの通用しない。私に一瞥をくれてから、続きを話し出した。

「しかし、王宮の意向に沿わなかつたことを理由に不興を買い、策謀によつて腕に再起不能の傷を負わされた。その際、その傷の原因である爆薬を仕込んだのは、アンペルが友と信じた同僚の鍊金術士だつた」

「…！」

「そんな…」

「…私の、この体の秘術にたかられた、昔の話だ」

今更、蒸し返すようなことでもない。だというのに、何故リラは…。「そうして王宮を追われたアンペルは、失意のうちに放浪し、やがて【門】から迷い込んできた私と出会つた。…なあ、アンペル」

「…何だ」

「鍊金術士はいつまでも同じことをやつているな」…私からクリント王国の罪業を聞かされたお前が言つた言葉だ

「…ああ」

「それに対し、私が何と返したか覚えているか？」

「…」

「忘れた…などとは言わせんぞ」

「お前自身はどうなんだ、鍊金術士」…だつたな

「そうだ。そして、その言葉を聞いたときお前は誓つたはずだ。「命ある限り、鍊金術士の犯す罪に抗う」と

…漸くお前の真意が理解できたよ、リラ。つまり…：

「そんな誓いを立てたのだから、傍観などせずに自分の手でやれ、と。そう言いたいわけだな」

「ああ。それに、その器具はお前が忌み嫌う薄暗い罪の産物などではない。お前の誓いを明るく照らす、新たな鍊金術士がお前に差し伸べ

た…新たな手だ」

「…そうだな。ライザの作った物が、奴らの欲望のような汚れたものであるはずがなかつたな」

全く、目も頭も曇り切つてしまつていたな…技術はあくまで技術でしかない、好悪はそれを扱う者次第だということを失念してしまつていたよ。

「気が変わつた。有難く使わせてもらうぞ、ライザ」

「…うん！」

器具を腕に取り付け、動きを確認する。…問題なく動かせる。いや、それどころか…

「嘗ての腕よりも動きが軽いようにすら思えてくる。…本当に、とんでもないな」

ライザの才能に感嘆しながら動きを確認していると、ライザが義手を取り付けた右腕に手を添えてきた。

「これでやつと、恩返し出来たかな」

「恩返し？」

「アンペルさんが、鍊金術つて言う素敵な力を教えてくれたから。その分、何か返せないかなつてずつと思つてたの」

「…そうか」

本当に真っすぐで、優しい娘だな…

「有難う、ライザ。こうして鍊金術士と手を取り合う日が来るなんて、考へてもいなかつたよ。しかも、そうさせる腕を鍊金術で作つてしまつた。本当に、大した奴だ」

「お礼を言うのはあたし達の方だよ。二人がここまで旅をしてきてくれて、あたし達と出会つてくれたから、今あたし達があるんだから」「ははっ。すね者のようにさすらつて来た私の旅にも、それなりの意味はあつた訳か」

この旅でライザ達に出会えたのは、今までの人生の中で何よりの幸運だろうな。

「…ふふ」

「笑つているのか、アルム。珍しいな」

「あの光景は、ライザの鍊金術の1つの集大成みたいなものですから」「成程、確かにそれは嬉しくもなるな」

「リラさんも、嬉しそうですね」

「ああ、ようやくアンペルがうじうじすることを止めたからな」

…全く、本当に前はいつだって厳しいな。

「そこは「ようやく肩の荷を下ろす気になつてくれたから」じゃないの、リラさん？「重荷を背負つて彼を助けてあげなきや」つてさつき言つてたじやん」

「記憶を改竄するな！そんな軟弱な物言いはしていない！」

「ははっ：有難うな、リラ、ライザ。やつてみよう、お前達が取り戻してくれた：この手で」

まずは任せきりになつていた魔物との戦闘だな。これからは、存分に暴れてやろうじやないか。

この後宝の手掛かりを辿るようだし、その時に慣らしも兼ねて手伝つてやるとしよう。

「はー、久しぶりにギリギリまで冒険したぜ」

「手当たり次第に手掛かりを辿つてみたが：見つかったのはレシピが二つ、か」

「時間が無くて回り切れなかつたとこもあるからねー。次は辿り着くわよ！」

今日の冒険は宝の手掛かりの捜索つつー、正に冒険！つて感じの奴だつた。俺やライザ、クラウディアは勿論、タオも結構乗り気だつたな。アイツの場合、宝そのものよりそれが何故ここにあるのか、とかの方が興味あつたみたいだけどな。

手に入つたレシピは：【フェザードラフト】つつう中で羽が舞つてよく解んねえ水晶と、【マスター・レザー】つつう特殊な革のものらしい。マスター・レザーはこれで特別な服でも作るのかと思うけどよ、フェザードラフトはそもそもが何なのかよく解んねえから用途も想像つかねえ。ライザ曰く、コレ単品でどうこうつて代物じやないらし

いが。

「アンペルさんも手伝つてくれたけど…とんでもなく強かつたよね」「動きに淀みも迷いも無さすぎるっていうか…本当にブランクがあるのかなって思つちやつたよ」

体中どこにでも目がついてんじやねえかつてくらいい的確な行動、無駄を限りなく省いた魔力操作、有効なアイテムを素早く選べる判断の速さ。全部がすげえと思つた。術師だからリラさん程直接教わることは多くないだろうが…この人にも戦いを教えてもらひてえつて思えたぜ。背後から飛んできたワイバーンをチラ見もせず一撃で撃ち落としたりもしてたしよ。

しかも一通り戦闘を済ませた後の言葉が「ふう、年甲斐もなくはしゃぎ過ぎてしまつたかな」だったから、多分まだ余裕あるんだよな。「で、今日は後どうするよ?俺はもう家まで戻るけどよ」

「雑貨屋に寄つてくれ。もしかしたらレシピに使えそうなものが売つてるかもしれないし」

「特にすることも無いから、ライザの付き添いでもしておく」

「僕ももうこのまま帰るよ」

「私も帰ろうかな。早く汗を流したいし」

「そうか、じゃあ今日はここで…」

「ここにいたか」

解散、と言おうとしたところでボオスが話しかけてきた。…まさか。

【渦巻く白と輝く青】の出所が解つたぞ

「マジか!これでようやく前に進めるぜ!」

「詳しい話は…明日の方が良いか?あの2人も呼んだ方が良いだろ」

「ああ、そうしてくれ」

「それじゃあ、明日はちやつちやと畠仕事終わらせないとね」

ライザのその言葉に、ボオスが少し面食らつたような顔をした。

「…お前が畠仕事に積極的な、未だに慣れねえな」

「サボるの止めてからもう一年くらい経つてるんだけど!?」

「そういうイメージつて中々払拭できないよね」

「ふふつ、これからももつと頑張らないとね、ライザ？」

正直言うと、俺も未だに慣れてねえんだよな。理由は知らねえが、あのライザがあ：

「まあその話は良い。明日、あの2人も呼んで家の門前に来てくれ」

「ああ。有難うな、ボオス」

「ランバーの件の借りもあるし、俺にとつても必要なことだからな。これくらいはさせてくれ」

「ふふ、キロさんの為だもんね」

「…アレはあるの世界から水を奪った、いわば盗品だ。そんなもので権威を得続けるなんて我慢ならない。だから、早く在るべきところに還したい。それだけだ」

素直じやねえな、コイツ。それも本音ではあるんだろうが、クラウディアの言うことも的外れじゃないだろうによ。

「じゃあ、また明日だな、ボオス」

「ああ。すぐ向かうつもりならしつかり休んでおけよ。険しい道になるだろうからな」

険しい道、ね。一体どこから持ってきたんだか。

「来たか。早速だがこれを見てくれ。倉庫の奥に隠されていたものだ」

次の日、全員で集まつてボオスの話を聞きに行つた。なんか紙みてえなものを渡されたが…ん?

「…これは、まさか」

「これ、手描きの地図? つて、これに描かれてるのって…」

「街道の西側の「悪魔の野」じゃねえか!」

「ど、どういうこと!？」

マジか、コイツの…先祖様はそんなとこまで行つてたのか!

「地図というより…旅程を記している物と言つた方が良いな。測量もしつかりしている、やるじやないか」

「確か、村では街道の西側に行くのは禁止されてるんだつたよね?」

「うん、小さいころからずつとそうやって言い聞かされてるんだよ。

だけど…」

「それを踏み越えて冒険に出た者が、何世代も前にいたのだな」

「ああ。そして、その先での球を見つけ、それを離れに据え付け、水不足で困っていたこの島で権威を振るいだした、というわけだ」

「一体なんで禁足地つてことになつてるとここまで踏み込んだんだろうな？水が無さすぎて、どうしてもそれを解消できる何かを見つけてかつたか、そもそもその時は禁足地じやなかつたとかか？」

…そつちは考へても仕方ねえか。それで、目的地は…！」

「この位置、この記号…あの塔か」

「ああ。あの球は、あの塔から発見した物らしい」

「塔つて…晴れた日に、北の空に見えてるあの塔？」

「そんなどこまで冒険してたのね、ボオスのご先祖様は…」

「後何かありそうな場所つて言つたらあそこくらいしかなかつたけど…本当に塔にあつたなんて」

まさか、昔とは言え、島で既に塔までたどり着いてる人がいたとはな…！」

「ボオス、俺は今、お前のご先祖様に嫉妬しちまつてるぜ…！」

「ああ、だろうな」

「目的地が解つたなら、出立の準備をしなければな。同じ旅程を辿るとなると…彼の言う通り、道なき道を行く険しいルートになるな」

「ただの調査で行くには危険だろうし、島の禁忌を犯すことになるが…」

…

「そんなの今更よ。ねえ、レント？」

「ああ、とうとう挑む時が来たんだ。あの塔に…俺の冒険の、目標に」待つてろよ、塔の天辺！絶対にたどり着いてやる！」

「さて…みんな、塔に向かう前に聞いてほしい事がある」

塔に行く準備の為にアトリエに集まっている俺達に、アルムがそんなことを言い出した。…随分と真剣な顔してんな。

「話すのか、アルム」

「はい。塔に何かしらの情報が残されているのなら、何を調べるべき

かをあらかじめ共有しておいた方が良いと思ったので「

「本については僕から言うよ」

「…えっと、あたし達は今から何を聞かされるの?」

俺達を代表してライザがそんな質問をした。それに対して、アルムは：

「下手をすればずっと、水不足どころの騒ぎではなかつたのかもしれ
ない。そんな「危機」の可能性の話だ」

そんな、とんでもないことを言い出した。…まさか、クーケン島の
事か？ 一体、何が起こってるって言うんだよ…

推理と危機感の共有、そしてまさかの遭遇×2

「……これが、タオの本の内容と、クーケン島の真実及び現状についての予想だ」

「…ゴメン、ちょっと整理させて」

「本当なら水不足どころの騒ぎではなかつたのかもしれない」…そんな前置きから始まつたアルムとタオの話は、普通なら信じられないものだつた。

「えーっと、まずクーケン島はクリント王国の鍊金術で造られた人工の島で、湖の上に浮いてるんだよね」

「で、タオの本の内容は島の操作方法とかそういうのが書いてある説明書みたいなもんなんだよな」

「それで、うちの地下室が浸水してたり最近地震が増えてたりするのは、島そのものが拙い事になつてゐる可能性があるつてことで良いんだよね？」

「ああ。まだ殆どが予想でしかないが、可能性は高いと俺は思つている」

こんな話、少なくとも鍊金術を知る前のあたし達だつたら「何言つてんの」で済ませてたかもしれない。…でも、アルムが凄く真剣な顔してゐるんだよね。だから、本氣でマズいと思つてるのは伝わつてくる。

「…ダメだ、最近『デカい話ばつかだつたから耐性付いたかと思つてたが、今までで一番飲み込み難いぞコレ…』

「レント君達にとつては、生活に直結する話だもんね…」

「もしかして、これがアルムが冒険に出ようと思つた本当の理由だつたりする?」

「ああ。予想が当たつてゐるか確かめたかつたのと、当たつていた時の対処法を探したかつたからな。だから、いきなりアンペルさん達に出会えたのは幸運も幸運だつた」

実は、アンペルさん達と出会えて一番喜んだのはアルムだつたりするのかな?

「…とりあえず聞きたいんだけどよ、この話を今したのは何でだ？」

「今まで話さなかつた理由という意味でなら、かなり突拍子の無い話だから信じてもらえ無さそうだったのと、対処法を探すための取っ掛かりすら無かつたからだ。

で、今話した理由は、小さいながら兆候が出たことと、塔が対処法…もつと言えば「希望」の取っ掛かりになりそうだと思つたからだな」「…うん、あたしもなんとなくそう思う。塔にどうにかするための鍵があるんじやないかなって」

「見つかってほしいな…綺麗な島だし、みんないい人達だつたから」
もし塔に無いなら、どうにかして色々駆けまわつて探すしかなければ…出来るだけ早くどうにかしたいし、あつてほしいなあ。

「それと、ボオスには話さないの？」

「まだ確定情報ではないし、対処法も見つかっていないからな。流石に、誰が見てもマズい兆候が見え始めたら未確定でも話さざるを得ないだろうが…そこまでいつたらもう手遅れになつている可能性もある」

「今のところ、大きな兆しは潮の流れの変化くらいみたいだけど…もつと大きなことが急に起きる可能性もあるもんね」

「ふむ、ならできるだけ早く行動しようか。塔まですぐにたどり着けるとも限らないからな」

「ああ。だからタオ、そうしている時間も惜しいから早く立ち直れ」

「あ、そういうえばさつきからタオが全然喋つてない。どうしたんだろう？」

「…うわああああ…」

…頭を抱えて物凄く悩んでた。え、大丈夫…？

「あの、えつと、タオ君？」

「…あ、ゴメン…今まで壊れて水源が機能していないだけとか、それくらいの予想しかしてなかつたんだけど…浮島だつて聞いた途端今までのあれこれがイヤな繋がり方したから…」

「あー、だからそこはタオにも黙つてたのね、アルムは」

タオはそういうの絶対すぐ顔に出るだろうから皆に怪しまれそう

だし、最悪気にし過ぎで体調崩したりしそうだしね：

「…とにかく、今俺達がやることは一つだ。一日でも早くあの塔にたどり着いて、さつさと手掛かりを見つけようぜ！」

「ああ。今日の内に準備を済ませて、明日から向かうぞ」

「それならリハビリも兼ねて、私も調合を手伝おう。ライザ一人では負担が大きいからな」

「え、いいの!? ジャあついでに色々教えてほしいな！」

「ふふつ。ライザ、すごく嬉しそうだね。…私達は、何をすればいいかな？」

「連携の確認をするぞ。どんな障害が発生するか解らん以上、連携を密にしておくに越したことはない」

「はい。…何が出てきても、怖がってなんかいられなさそうだなあ。…よし」

…明日から遂に塔に向かうんだ、あたし達。なんていうか、最初に思つてたより凄く早かつたなあ。それも、こんな大事な目的で。こんなに話が大きくなるなんてなー。

…と、今はそんなこと考えてる時間も惜しいや。バリバリ調合しつつ、アンペルさんの技とか知識を出来るだけ教えてもらおう！

「…ところで、今思つたんだが」

「え、何？」

大方の準備が終わつて、アルムとタオの3人で家に帰る途中でアルムが急に口を開いた。…もしかして、またとんでもない事を言い出さんじや…

「少し違つたとはいえファイルフサの情報が言い伝えで残されていて、それに対抗する手段として呼び寄せられた竜の事も語られていた。それも、守護獣として。ファイルフサはそもそも情報が碌にないだろうし、竜に関しても対ファイルフサ用に鍊金術で呼び寄せられたと知つていなければ、守護獣なんて思われないだろう」

「…？ それが、どうしたの？」

「これらの情報を遺した人達は、当然だがそれを知れる立場及び状況

だつたことになる。そしてその情報が残されているこの島は、クリント王国の鍊金術で造られている可能性が極めて高い」

「それって…」

「…なんとなく、アルムの言いたいことが解っちゃった。つまり…：「その情報を知つてた人達は、何らかの理由でこの島に住むことになつた…いや、住まざるを得なかつた」

「ファイルフサつて脅威から逃げなきやいけなかつたから。ここなら、ファイルフサが絶対に追つてこれないから。…つてことだよね」

「ああ。…そこまで分かつたなら、俺が言いたいことも解るな」

「うん。あたし達のご先祖様は…」

「ファイルフサから逃げてきた、クリント王国の生き残り」

「その可能性が極めて高い、ということだ」

「なんか、昼とは違うベクトルですごい話だなあ。

「…それが事実なら、他にも考察できることがあるよ。なんでそんなに都合よく、ファイルフサが入つてこれない島を造つてたのか、とか。

…ただ、さ」

「なんだ？」

「なんでこんな時間にそんな推理を披露しちゃつたのさ。気になつて眠れなくなりそくなんだけど？」

「…すまん、つい。明日にすればよかつたな」

「…お願いだから我慢してちゃんと寝てよ？ タオ」

翌日、タオが起きてきたのは集合時間ギリギリだった。…遅刻しないからセーフだけど、髪も服もあんまり整つてないあたり、やっぱり我慢できなかつたのね。

「この遺跡、変わつた形だね。なんだろう…」

「何かの祭壇のように見えるな。今となつては用途は解らないが」

準備を終え、塔へ向かう道を行く私達は、途中で遺跡のような建物を見つけた。アンペルの言う通り、確かに祭壇のような形をしている。一体此処で何を祀り上げていたのやら。

「この辺はかなりボロボロになつてゐるな。しかも、壊されたような跡
まである。つてことは…」

「ああ。フィルフサはここにも攻め込んでいたのだろうな」

「つてことは、この先にある塔も攻め込まれてるかも知れないよね…」
「…大丈夫かな。手掛かりになる物とか、壊されたりしてなければい
いけど…」

「何にせよ早く辿り着いた方が良い、道を探すぞ。魔物は…これくら
いなら、わざわざ倒していく必要も無さそうだ」

下手に魔物を刺激して時間を取られるのは良くないからな。なる
べく近づかずに行くか。

「…周りはかなり壊されてるけど、この祭壇みたいな建物はほとんど
無傷だね」

「奴らはこういつたものには微塵も興味を示さない。あるのは他の生
命を侵す本能だけだ」

「資料などが失われている心配は少ないが…その分、あまり見たくな
いものを見てしまうかもな」

「つ…。そうだよね、フィルフサと戦つて、ここまで荒らされちゃつて
るつてことは…」

「…鎧とかそういう物には、近づかない方が良さそうだな。何が残つ
てるかわからねえし」

何百年と時間が経つていてるから、殆ど風化しているだろうが…なん
だかんだ言つてまだ子供だ。多少でも形が残つてゐる物が見つかれば、こいつらでもショックは受けてしまうだろうな。

「じゃあ、そう言うところにも気を付けるとして…この遺跡の中通つ
たら、魔物に見つからず行けそうじゃない?」

「どうだろうな、まだ中央が見えていないから、何かがいる可能性が一

ー

アルムがそう言いかけた時、重たい足音のような音が聞こえた。…
建物の中心からだな。一体何が出てくる…?

「ふに」

…現れたのは、金色の大型のふに…確か、シャイニングふにだつた

か。それが、同族同様の気が抜けような笑顔を浮かべながらこちらを窺っていた。

「ふに？」

「…えつと、どうしたの？」

「ふに！」

「…どうしよう、何言つてゐるのか全然分かんないよ」

「だろうな、そりや」

「襲い掛かつてはこないみたいだが…」

…魔物にしては好戦性が無いな。この状況では有り難いが。

「…とりあえずハニーアントと甘露の実でも渡しておくか」

「…それで食いつくかなあ？つて言うかなんで持つてるのそれ」

「ふに！」

「多分、喜んでる？」

「だと思うよ。凄く夢中になつて食いついてるし…」

「じゃあ何かされる前にさつさと行こうぜ」

「戦闘になれば奴は相応に手強いからな。それが賢明だ」

「では行こうか。なるべく振り向かずに、急いでな」

そうして、私たちは足早にその場を後にした。：後ろから奴の嬉しそうな鳴き声が聞こえてきた気がした。まさかと思うが、懐かれていないだろうな…？

「ここが『リーゼ峡谷』…あの塔に続く道なんだね」

「奥に塔も見えるな。…ここをまつすぐ行けば辿り着けるつてことだ。ようやく、ここまで来れたぜ」

「道が狭いし、見るからに足場が悪い。多分落石の危険もあるな。出来る限り真ん中を通りたい…んだが」「岩で塞がれちゃってるね。左にある道を通つていくしかなさそうかな？」

禁足地とされていた場所と、遺跡のあつた丘を抜けた先にあつたのは、ボオスの言う通り道無き道というに相応しい場所だつた。ファイルフサとの戦闘の後に何百年も放置されれば、こうもなるだろうな。

「魔物との戦闘も、恐らく避けられないだろうな。今まで以上に地形が我々の敵になりやすい、油断するなよ」

「そうね、タオとクラウディア、それとアンペルさんは特に気を付けてよ?」

「ん、私もか?」

「その服装でこんな道を歩いて行くんだよ? 危ないに決まってるじゃん」

「ああ、そういうことか。心配しなくともこの服で悪路を歩き回るのは慣れているさ」

「お前が思っているよりは身軽だぞ、アンペルは」
だからこそ、下手な子供以上に目が離せない時があつたりするがな。

「むしろ一番気を付けるべきなのはお前だ、ライザ」「え、あたし?」

「そうだよ。ライザが一番薄着なんだから、転んじやつて怪我したら大変だよ? 傷跡とか残っちゃうかも…」「う…確かにそれは嫌だ…」

「後、珍しい素材を見つたらすぐさま飛びつきそうだしな」

「お、怒りたいのに否定できない…!」

「でもそういうことなら、アルムが近くで見ておけばいいんじゃないかな。ストッパーとして」

「…まあ、そうなるか」

「えーっと、じゃあアルム」

「ああ」

「…あたし多分自分じや止まれないから、危ないって思つたらちやんと止めてね?」

「…勿論そのつもりだが、自制する気は無いのか?」

「鍊金術士というのはそういうものだ、善惡問わずな」

「…コメントは控えさせてもらおう」

奴らと違い、お前やライザのそれは微笑ましさすらあるがな。

「しかし、なんつうかこここの遺跡・谷の壁にへばりついてるみたいな形だな」

崖際の道を進んでいく途中、レントがそんなことを呟いた。ふむ：「恐らく、地形を利用して造られた城塞の類だと思うが…どう思う、アンペル」

「それで正しいだろうな。襲つてくる大軍を、この狭い谷にまとめて迎え撃つんだろう」

「つまりこの辺りに散らばつてる残骸は、クリント王国の軍隊の物：ということですね」

「これだけのものを造れるくらい凄かつたのに、フィルフサの大侵攻でボロボロにされちゃつたんだね…」

「ああ、奴らは雑兵でも馬鹿にならない力を持つていてる上に兎に角数が多い。頭を潰さない限りは物量で磨り潰されるだろうな」

逆に言えば、奴らの頭を潰すことさえできれば食い止められるということだが：迎え撃つという対応をした時点で、限りなく無理に近かつたんだろうな。

「朝聞いた話だと、クーケン島の人達がフィルフサから逃げきれた生き残りかもつて話だつたけど…またこつちに渡つてきて、この近くに隠れ里みたいなのを作つて暮らしてた人達とかつていてたりするのかな？」

「流石にいないんじゃないかな。フィルフサがいなくなるタイミングが解らないし、いなくなつてもまた来るかもしれないからね。しかも近くにドラゴンもいて、そつちに襲われる可能性まである。じゃあ島に籠つてた方がよっぽどいいやつてなつてもおかしくないと思うよ」「事情を知れば知る程、勝手に外に出ることが禁忌だと言わっていた理由がよくわかるな。正確に内容が伝わつていたなら、外に出る許可を得ることは難しかつただろうな」

「それでも我慢できずに出て行きそうだけどな、お前とライザは」

…確かにその2人はそうだろうな。だが：

「それはアンタもでしょ、レント」「それをお前が言うか、レント」「2人の事言えないでしょ、レント」

「3人同時にツツコむことねえだろ!？」

「うーん、私も3人に同意するかなあ」

「お前もそつち側かクラウディアア!」

「で、否定できるのか?」

「…いや、無理です、ハイ」

「棚上げはあまり関心しないな、レント」

お前が言うか、アンペル?…と言おうと思ったが「お前よりはまだ」等と返されそうだから止めておくか。私も思わず言い返したくなるから、余計な時間を食う羽目になる。

「まあ、その話はいいとして…何にせよ、この先の塔で何かが得られる気はして来たな」

「その何かが良いものだつたらいいんだけどね…」

「…信じるしかないだろうな」

さて、そろそろ本格的に魔物とも遭遇するだろう。気を引き締め直して行くか。

「くつそ、ゴーレムが多いな…相変わらず剣で倒すのは骨が折れるぜ」「魔法とかアイテムならちよつとは楽だけど、アンタどつちも苦手だもんね」

魔物を倒しながら、塔への道を進んでいたが…確かにここはゴーレム種が多い。私なら精靈の力を借りれば、幾分かは楽に倒せるだろうが…それでも少々手間取つてしまふな。

だがまあ、それならそれでやりようはある。

「アルム、合わせろ!ぶつけるぞ!」

「…成程!」

アルムと私で2体のゴーレムを挟むように動き…

「はあっ!」

「オ…ラアッ!」

真っ直ぐに蹴り飛ばして、ゴーレム同士をぶつけた。これなら奴らの硬さを利用し、その身を碎くことも可能だ。そして…

「そこだな」

アンペルが魔力のレーザーを打ち込み、2体のゴーレムは同時に動かなくなつた。全く、こういう時はやたらと気が利く。

「とまあ、やり方次第である程度はカバー可能だ。お前なら剣の腹で叩けば似たようなことはできるだろう」

「わ、解りました。：今、打ち合わせとかしてないんだよな？」

「ああ。…これはいろんな相手に有効だな。色々試してみるか」

「蹴つた魔物をぶつけて、そこにアイテムでドーン、とか？」

「発想がえげつないなあ…」

「えげつない発想ということは、大抵の場合効果的であるということだ。余程の手段でない限りは積極的に用いるべきだろうよ」

まあ、コイツ等がその余程の手段を用いる可能性は皆無に等しいだろうがな。

「ところでアルム、脚は大丈夫？さつきから結構ゴーレム蹴つてるので

「ああ、特に痛みとかは無いな。お前が作つてくれたコイツ：「エタニティダンサー」のおかげだ」

「そつか、良かつた。…えへへ」

「エタニティダンサー」は、素材と構造の両面で足への負荷を極限まで減らすブーツで、以前アルムが技の反動で足を挫いたことへの対策として作られた物だ。私もアルム程ではないが蹴りを多用するから、出来るなら欲しい代物だな。後で頼んでみるか。

「とりあえず、これでこの辺りの魔物は倒したね。先に…あれ？」

「どうした、クラウディア？」

「向こうに見えるあの石板みたいなの、どこかで見たような…」

向こうの石板…あれは、まさか。

「まさかアレ、古城にあつた召喚機じやねえだろうな？」

「確かになんか似てる気はするけど…」

「ここでフィルフサとの戦闘があつたなら、同じものが設置されてもおかしくはないだろうな」

「つてことは、また龍が出るの？」

「アレが本当に召喚機で、起動もしていて、近くに龍がいればな」

「近くにいれば？」

「ああ、特定の魔物を呼び寄せる波長を放出しているんだ。だから、近くに対象となる魔物がいないならアレは無意味なオブジェだ」

「ああ、何もいなければそうだな。…何も、いなければ。

「じゃ、じゃあ、大丈夫だよね？ 古城にもいたんだし、島の近くのこんな狭い範囲に2頭目の龍なんて普通いないと思うし…」

「…俺も、そう思いたかつたがな。アレを見る」

そういうつてアルムが指差した先には…青い鱗で身を包んだ龍がいた。なんとなく、気配は察知していたが…やはり龍のものだつたか。「龍が住み着いた古城、フィルフサが這い出てくる異界の門ときて、遂には2頭目の龍か」

「…そう聞くとなんだ魔境だな、この辺り

「…戦うしかないのかな」

「そうしないと塔まで行けないでしょ。それに、あの時と違つてアガーテ姉さんたちは居ないけど、代わりにいるのがアンペルさんとリラさんだし、前より楽に戦えると思うわよ」

「いやでも、あの龍が古城にいた竜より強いつて可能性もあるよ？」

「その可能性を挙げるとキリが無いが…さて、どう戦うか」

「ふむ…どう戦う、か。いや…」

…? アンペルは何を考えているんだ?

「1ついい案がある。上手く行けば楽勝、失敗してもまあ普通に戦えばいいだけ。…そんな案だが、どうだ？」

そう言いつつにやりと笑うアンペル。…コイツがこんな笑い方をするときは、大抵敵対者が碌な目に合わない時だ。一体どんな案を出してくるのやら…。

彼らと遭遇した竜は、どうも碌な目に合わない

(さて、全員配置についたか)

召喚機に誘われて飛來した青い竜。それを討伐するための策を成すために私はタイミングを見計らつていた。：策と言つても、二重三重の罠を張るとか、策だけでどう転んでも確定勝利とか、そんな大層なものではないがな。

私は召喚機の西側にある程度形が残つている建物があつたので、その中で待機している。折角こんな都合の良い位置に残つてゐるんだ、有り難く使わせてもらおう。：途中の道が崩れていたので、流石にリラに運んでもらうことにはなつたが。

同様に、ライザ達にも召喚機の南側に残つている建物を利用させている。そつちは中には入らず、陰に隠れているだけだが。

(普通に戦つたところで負けることは無さそうだが：消耗は減らすに限るからな)

戦闘に於いて特に消耗するのは、相手の攻撃に対応するときだ。避けるにしろ受けるにしろ、攻める時以上に一度の失敗が致命傷になりかねないからだ。だからより神経を尖らせる必要があり、結果的に肉体、精神両面で大きく疲労が溜まる。

そしてそれは、我々人間だけでなく、奴ら竜にとつても同じことだろう。そこを衝く。

(それでも不確定要素は少なくは無いが…まあ、そうなつたら一番危険なのは奴に真っ先に仕掛ける私だ)

私が魔法で奴に攻撃する。それが作戦開始の合図だ。その時、少しの間奴の注目は私に向けられることになる。というより、こちらに注目するまで攻撃を続けると言つた方が正しいな。

(…さて、奴が高度を下げた。そろそろ仕掛けるか)

この辺りに奴を脅かすような魔物は居ない。だから、奴はほぼ無警戒で休憩の為に地上に降りてくる。：だが、それが命取りだ。行くぞ

！
「時よ、巻き戻れ！」

クロノリバース

まずは奴の時に干渉し、その力を削ぐ。…恐らく殆どダメージは入つていないうだろう。竜がこちらを睨みつけてきたが、「何かしたか？」とでも言いたげな表情だつた。なら…

「もう少し何かさせてもらおうじゃないか。…少し止まつていろ！」
バインド シュート

先ほど施した時への干渉を長続きさせる為に追撃を行う。…少し表情が変わつたな。己の異変に気付いたか？

——ガアアアアアアアアアアアアアツ!!

私に向かつて竜が咆哮する。狙い通り、私に意識を集中させることができたな。

(さて、ライザ達は…良し、出てきたな)

このまま待つてもいいが、私の安全確保とライザ達がより接近できるようにするためにもう一手打たせてもらう。

「雷を食らえ！」

コアにセツトしたアイテム「雷の呼び鈴」の力で呼び寄せられた雷が竜に直撃する。これは流石に効いたようで、苦しそうな呻き声をあげた。そして…

「よーし、射程圏内！行くわよ二人とも、せーのっ！」

「「ローゼフラム！」」

立て続けにライザ、クラウディア、タオの3人が同時にフラムの強化版である「ローゼフラム」を叩き込む。

「まだまだ、畳み掛けるわよ！」

「「うん！」」

そして間髪入れずに3人が魔力で弾幕を張る。ローゼフラムなどと比べれば威力は無いだろうが、消耗した奴にとつては鬱陶しいことこの上ないだろうな。今すぐこの場を離脱したいだろうが…

「せんよ。もう一度止まつていてもらおうか！」
バインド シュート

再び干渉を延長させ、奴の動きをより鈍らせる。奴は時への干渉とダメージによる疲労で中々飛び立てずにはいる。

「うおおおおおおつ！」

そこに、弾幕の中を駆け抜けたレントが肉薄。大剣の一撃で右の脇腹の辺りに傷を負わせた。…ここまで完璧だ。次は…?

——グ、オオオオオオオオオオツ！

竜は無理矢理捻り出したような咆哮と共に、強引に飛び立つた。そしてある程度高度を稼ぐと、翼を大きく広げ、大きく息を吸うような体制をとつた。

「あれは、古城の竜と同じ……」

「大技の準備体勢だ！」

「……成程、アレがか」

大方、まともな攻撃が届かない高度まで上がり、広範囲の一撃で全員纏めて吹き飛ばすつもりなんだろう。たが、竜よ。

「我々は、5人でここまで来たわけではないぞ？」

そう私が言うと同時に、崖から竜の上目掛けて黒い人影：リラが飛び出し、竜がそれに気づく。咄嗟に標的を飛び出したりラに変えようと体制を少し変えたが：次の瞬間。

——ドゴオオン！

——ガアアアアアアアツ！？

轟音と共に、先ほどレンントが傷を受けた竜の脇腹に巨大な青い矢——アルムの蹴りが突き刺さり、竜は悲鳴を上げる。

「その一人に気づけなかつたのは、不運だつたな」

私は勝利を確信しながら、そう口にした。

『竜の完全封殺…ですか』

『ああ。それも、消耗を可能な限り少なくして、だ』

アンペルさんから提案された策、それは「不意打ちから相手の動きをコントロールし、何もさせないまま殺しきる」というものだつた。……このメンバーとはいえ、竜相手にそれができるだろうか？

『まず私が仕掛けて注意を引き付け、そこにライザ達が間髪入れず追撃し、更にレントが一撃。恐らくここまででは倒しきれないだろうから、飛びたそうならわざと飛ばせる。そうでないなら、まあそのままでいい。

もし飛んだなら、単に逃げるか、それともお前達が言つていた大技

が飛んでくるか、どちらかだろう。そして恐らく、大技を撃つてくる可能性の方が高い。古城の竜の物と似たようなものであるならば、だがな。

そして、そんな大技の準備となれば、大抵は隙だらけなものだ。：そんな時に全力なら竜の頭すら吹き飛ばす男の一撃が不意に入れれば、奴とてひとたまりもないだろう』

：要するに、アンペルさんが言いたいことは。

『俺はこの崖を登つて、竜が大技を出してくるのを待て…ですか』

『ああ。…ところで、我々人間と比べた時に竜が持つ最大の強みは何だと思います？』

竜が持つ最大の強み…恐らくは。

『空を飛べること…ですか？』

『ああ、空を飛ばれれば普通は我々には成す術がない。だがお前はある程度空戦に対応できるだろう。だから大技の隙を突いた後、奴の翼をへし折つて地面に叩き落してほしい。ただ、一人ではアルムでも厳しいだろうから…』

『私も崖上に行け、ということか』

『ああ。お前の爪で事前に傷でもつけて、尚且つ片翼はお前が担当すればより確実だろう。お前なら、あの崖から跳べば届くだろうからな。それと、先にお前が跳んで竜の意識を向けさせることが出来たら、それだけアルムの不意打ちが決まりやすくなるな』

…本当にえげつないというか、殺意しかないというか。

『傷か…そう言うことなら、俺の一撃はアルムが突っ込むところに入れといった方が良いんじやねえか？』

『そうだな、その方がより効くだろう』

『あたし達の追撃つて、まずどうすればいいかな』
『ローゼフランで良いんじやない？アレ、威力凄いし』

『その後はレント君が前に出やすいような形で追い打ち…かな？』

『ああ。それで私達が奴を空から引きずり落としたら一斉攻撃で止めだ』

『ふむ、それなんだが。止めはレンントに任せてみようと思う』

『俺に？』

レンントが止め役…ああ、成程。

『確かに前、ようやく必殺技の案がまとまつたと言つていただろう？ついでだ、ここで形にしてみるといい』

『ぶつつけ本番ですか…いやまあ、確かにそこで俺がミスつたところで勝ち負けは変わらねえけどよ』

『まあ、お前なら上手く行くだろう。むしろ、俺がミスをしてレンントの邪魔をしてしまうことを気付けた方が良いくらいだ』

『…お前にそこまで言われちゃ、絶対やるしかねえじやねえか。やつてやるぜ…！』

後氣にすることは…ああ、これは聞いておかなければな。

『もし、そもそも飛ばなかつた場合は？』

『それはそれでお前達が上から奇襲できるだろう。狙いは少し付けにくいだらうが』

考えてみれば、飛んでいない時点で相手は最大の有利を自分で潰していることになるから、それはそれでいいのか。

『さて、他に質問は？…無いようだな。では、各自持ち場についてくれ』

さて、俺の役目が恐らく一番重要だ。気合を入れて行くか。

『あアリラ、私の持ち場だけ途中の道が崩れているから運んでくれ。流石にあれは通れん』

『…仕方のない奴だ』

そう言いつつ、リラさんがアンペルさんを持ち上げた。…俗にお姫様抱つこと呼ばれるやり方で。

『…なあ、アレ…』

『凄く自然にやつてたね…』

『絵面のシユールさが酷いよ…』

『アンペルさんは何とも思わないのかな、あれ…』

『…あの2人の距離感がよく解らん』

何というか、微妙に締らないな…

(→)まで、上手く行くとはな…！

竜の脇腹に蹴りを叩き込みながら、俺は内心驚いていた。ここまで
は、完璧にアンペルさんが書いた筋書き通りだ。

(どこまで読み切つてゐるんだ、あの人は)

あの人が良い鍛金術士で本当に良かっただけ
もし悪党の類たつがいる
想像もしたくないな、二つの意味で。

ハセ

そんなことを考へている内に、レミアが竜の背に乗り翼への傷付けを終えたようだ。俺は軽く魔力を噴射して上昇し、竜の翼膜を掴んで背中に乗る。

「せー！」

龍は傷の痛みと疲労で碌に動けないようだ。
これら、思い切りや
れる。俺とリラさんは同時に軽く跳躍し…

翼の付け根に、全力の踵落としを叩き込む。…感触で分かる、確実

——グアアアアアアアアアアアアアアツ!!

悲鳴を上げながら竜が墜落する。ここまで行けばもう負ける要素はないだろうな。

「リテさん 着地は?」

「解りました。なら後は…」

レントがしつかり、この作戦のメをやつてくれる。それを見ていれ

「…決めてやるぜ！」

レントは剣を真っ直ぐに構え、気合いと集中力を極限まで高めていた。そのせいか、体から赤いオーラのようなものが噴き出している。……間違いない、今からとんでもない「一撃」が放たれる！
「――うおおおおおおおおおおおおおお！」

雄たけびを上げながら、剣を思い切り振り上げる。タイミングも完璧。なら後は！

「決める、レントッ!!」

親友俺とリラ師匠さんが外から気合を入れてやれば、アイツは応えてくれる！

「おおおおりやあああああああっ!!!」

そうして放たれた、レントの必殺技は…

「…竜が」

「真つ二つに…」

傷ついてなお屈強な竜の体を、頭から尾にかけて両断していた。更に…

「それどころか、届いていない筈の地面まで斬っているな。竜を叩き斬つて尚、これほどの余波が発生したのか」

「凄い…」

「ふ、流石私の弟子だ」

「我が親友ながら、とんでもないな」

止めを刺せると信じてはいたが、予想をはるかに超えられてしまつたな。…流石だよ、親友。

「えつと…それで、レント君は…」

「ぜひー…ぜひー…」

「…満身創痍だね」

「ホントに全部注ぎ込んだのね…まあ、あれだけすごい一撃ならどうなつちやうか」

「…一旦休憩にするか。時間的にもそろそろ昼飯時だしな」魔物もちらほらいるが…竜を倒した相手にわざわざ近づくこともしないだろうな。

「しかし…こう言つては何だが、お前達と戦う竜は碌な死に方をしな

いな

「ああ、今回は頭から尾まで真つ二つで、古城の竜は頭部が消し飛んだ
んだつたな」

「……これぐらいやらないと不味い相手ですしね」

真つ二つになつた竜から素材を拝借している間、アンペルさんとリラさんからそんなことを言われた。……だつたら、次また竜にあつたら今度はどんなことになるやら。

「それで、あつちは大丈夫なのか？」

「……そうですね」

「疲れすぎて、飯が碌に喉を通らねえ……」

「だつたらまずこれ飲む？」

「え、何その……どどめ色つて言うの？なんか凄い色した液体……」

「鍊金術で作つた薬をさらに色々混ぜてみたわ！」

「だ、大丈夫なの？聞くだけで色々凄そうだけど……」

「……アルムが言うには『気絶できるならその方が幸せ』だそうよ」

「これ飲んだのアルム！」

「私は一口にした方が良いつて言つたんだけどね。こう、グイっと……」

「……アルム君つて、時々よく解らないわ……」

「……それは俺達もよく思つてる。本当に時々変なことするんだよアイツ……」

「まあでも効果は確かみたいだから、疲れも吹つ飛ぶわよ！さあ、アルムみたいに思いつきりグイっと！」

「イヤちよつと待て！今の話聞いてそんな思い切り行けるわけねえだろ！」

「えー……じゃあクラウディア、これ持つて！」

「え、私？」

「何させるつもりだよ……」

「クラウディアみたいな可愛い子がちょっとずつ飲ませてくれるなら少しさはマシになるでしょ！」

「そういう問題じやないと思うよ、これ」

「そうだよ！私よりライザの方が可愛いよ！」

「反論するところぞしてるぞクラウディア!?」

「絶対にクラウディアの方が可愛いわよ！ねえ、そう思うでしょタオ
！」

「僕にそういう話振らないでよ！何の参考にもならないよ!?」

「くつそれ収集つかねえぞ！早く来てくれアルム！」

「呼ばれたので、そちらはお任せします」

「ああ。行つてこい」

とりあえず、薬はさつさとレントの口に突っ込んで、「個人的にはライザが一番可愛い」と言つておいた。レントは5分程気絶して、ライザは10分程真っ赤になつていた。…言う方もそれなりに恥ずかしいな、これ。

新たなる道具と友？を得て、夢と希望の聖塔へ

「うおおおおおあああああああ！」

「…レント君、凄いね」

「凄い事になつてる理由は凄くアレだけどね…」

休憩を済ませて改めて塔に向かつている途中、僕たちは道中の魔物の対処を…してない。レントが一人で暴れまわつて、それでどうにかなつちやつてるからだ。

さつきまで竜がいたから、まだ大人しくして魔物もいるのもあるだろうけど…にしたつて凄い暴れっぷりだよ。

「…薬の後味が悪すぎて口の中が気持ち悪いのに、それに反して体の調子は凄く良いから、違和感が凄くてイライラしてるんだつけ」

「暴れて吹つ飛ぶようなタイプのイライラじゃないと思うけどなあ。口の中に残つてるし」

「猛烈に甘い菓子の1つでもつまんだ方がまだ効果的だな。言えば少しくらいは融通してやつたのだが」

「途轍もない甘味狂いであるお前から、融通してもらえるとは思わなかつたんじやないか？」

：レントには悪いけど、多分その発想が無かつただけだと思うなあ。

「…流石に無理矢理飲ませるのは良くなかったな」

「それもだけど、まず味をどうにかしないとねー。何か案ある？」

「ハチミツでも混ぜてみるか？昔母さんがエルに薬を飲ませる時にやつてた覚えがある」

「じゃあそれで」

「…その話し合い、もつと早くやつておくべきだつたんじやないかな」「まさか使うことになるとは思わなくてな」

「その内レシピ変化とかでもつといいのが浮かぶだろうし良いかなつて」

「変なところで見通しが雑だよ…つていうか使わずに済んでたらどうするつもりだつたのさ」

「飲んでたな」

「サラツと言うことじゃないよね？」

いや、確かにその辺に捨てたら何が起こるか解らないからそうした方が安全なんだろうけどさあ…自分で言つてたじやん、気絶した方がマシな味つて。

「アンペル、良いレシピの1つや2つくらい教えてやつても良いんじゃないのか？」

「それを自分で閃いたり探したりするのが一流の鍊金術士というものだ。今回は特に火急の用でもなかつたようだし、わざわざ教える必要はなかつただろう」

「そういうものか」

「ああ。…まあ、私が知るレシピではそもそも素材が足りないからあつたところで作れんがな」

「…つまり、レントはどの道アルムにアレを飲まされる運命だつたつてことになるんじや…」

「…そういうことだな」

…多分今まで一番レントに同情してるよ僕。今後誰かにこれ以上同情することなんて、そろそろないんじゃないかなつてくらいには。

「あ▣ー…」

「あ、戻つて來た。…ホントに1人で粗方片付けちゃつたんだ」

「お疲れ様、レント君。…どう？」

「ちよつとはスッキリしたけど後味が全然消えねえ…いつまで続くんだコレ」

「最低でも4～5時間程だな」

「うつげ…どうすりやいいんだよ」

「やはり上書きした方が早そうだな。ほら、ドーナツを分けてやる」

「あざつす。…死ぬほど甘つたるいのに、今はこれが丁度いいと思えてくるぜ…」

「そこまで言われると、逆に気になつてきちゃうな…」

「飲むなよ。絶対に飲むなよ」

「少なくとも味の改善ができるまでは絶対にダメだからね！」

「う、うん、解った」

うん、クラウディアが飲むとか言い出したら僕も全力で止めるよ。

「ああ、それとちょっとアンペルさんに見て欲しいものがあるんだけどよ」

「ん、私に？」

「あつちに釜みたいのが転がってたんだよ。ただの釜がこんなところにあるとは思えなくてな」

「ふむ、釜のような物か…それならば「アレ」の可能性があるな」

「アレ、つて？」

「便利な代物だ。レント、案内してくれ」

アンペルさんには心当たりがあるみたいだ。つてなると多分古式秘具か何かだと思うけど…なんだろう？

「えーっと、この辺りに…お、これだ」

「何これ？ 錬金釜のような、そうでないような…」

『複製釜』だ。調合品に限つて複製して量産ができる古式秘具でな、錬金術士なら1つは持つておきたい代物だ。コアクリスタル同様、割とあちこちで見つかっているぞ

「調合品の複製…つまり、限界まで品質を高めたものを一つでも作つておけば…」

「最高品質のものを大量に増やすことができる、ということだ」

…異界と繋がる門とか召喚機みたいのがあるからちよつと麻痺しかかつてたけど、十分とんでもない道具だよねコレ。しかも量産されてたつて、一体どうやつたらこんなものが造れるんだろう…

「…コレの存在をモリツツさんとルベルトさんと、後口ミイさんが知つたら何と言つだらうな」

「…ライザ、これで増やしたもの無暗に流通させたら駄目だよ」「え？うん、錬金術で使う分だけにするつもりだけど…」

「あんまり派手にやりすぎると物の価値が滅茶苦茶になつて、商人と職人が商売あがつたりになりかねないな」

「要するにルベルトさんと口ミイさんには迷惑をかけるつてこと

か

「流石に無いと思うけど、モリツツさんが変な」と言つてきてもしつかり断らないと駄目だね…」

まあ、そもそも存在をバラさなければいいんだけど。…それにしても、使い方次第で経済もどうにかしてしまいかねないなんて、古式秘具つて本当にとんでもないなあ。

「それで、どうするんだ？ 担いだまま塔の探索をするわけにもいかないし、だからと言つて今からアトリエまで戻るのも手間だぞ」「そうですね…見た目からしてそう軽いものではないでしようし、もう暫くここに置いておいて帰りに持ち帰るしかないでしようね」「まあ何百年も野ざらしにされてたみたいだし、後数時間そのままでも変わんないでしょ」

「忘れちゃわないようにだけしなきやね。どこか見えやすい所に置いておく?」

「そうだな…ん？ 何だ？」

「…足音？」

複製釜をどうするか考えてると、何か重たそうな足音のような音が聞こえてきた。…アレ、ついさっきもこんなことがあったような…？「…なあ、嫌な予感がするんだけどよ」

「…まさか、だよな？」

うん、いや、まさか、無いよね？あの時のアイツがまさか追いかけてきてるなんて――

「ふに」

「「「「「…」」」」

追いかけてきてた。え、何で!? まさかと思うけどアルムに懷いた!? 虫と木の実で!?

「ふにー。」

「あー、ああ。さつきぶり、だな」

「ふに…」

「え、何かあたし達をジロジロ見てる?」

「…ふにー！」

「笑つてゐる…よく解らないけど、安心してゐるのかな？」

安心してゐる？つまり僕達を心配してたつてこと？何で…あ、もしかして。

「…レントの必殺技？」

「は、俺！」

「いや、アレ凄い音したでしょ？あの時の音、多分このふににも聞こえてたんだと思う。で、僕らがその音がする方向に向かつてるところは見てたはずだから…」

「ご飯くれた良い人…アルムが心配だから様子を見に来た？」

「ふに！」

「合つてるみたいだよ」

「…何と言うか、な」

あ、珍しくアルムが本氣で困惑してる。まあ、こんなことになつたら大抵の人はそうなるだろうけどさ。

「あ、そうだ。この子に頼めばいいんじやない？」

「まさか、複製釜の見張りをか？」

「うん。アルムが心配でここまで来てくれるくらいには良い子みたいだし、アルムが頼めばやつてくれそういうじゃないかな？リラさんが強いつて言うくらいだから、何かあつても守れそうだしね」

「どうする、アルム？」

「…頼んでみます。…あー、俺達が戻つてくるまでそいつを守つてくれないか？今そいつを持ち運ぶのはちょっと無理があつてな…」

「ふにっ！」

「任せろ！つて言つてゐるのかな？」

「つていうか、ホントにあれで懐いたんだね…」

「いいじゃねえか、結果的にそれで助かつてゐんだからよ」

赤ふにとかは寒い所に行く旅人とかが持つていくつて話は聞いたことがあるし、もしかしたら種族全体がある程度人に慣れてるところがあるのかもしれないけど…にしたつてこれは流石にレアケースだろうなあ。

「さて、懸念事項も解決した。後は塔まで向かうだけだな」

「おう。これまで色々あつたが、ようやくだぜ……」

「……で絶対、手掛かりを見つけなきや……！」

「……そうだつたな、何時までも戸惑つてゐる場合じやない。行こう、皆」

……いよいよ塔かあ。冒険に出るまで、いや出てからも暫くはここまで来るとは思つてもみなかつたなあ。一体どんな新しい知識が眠つてゐるんだろう……！

「……やつと！遂に！俺はやつたぞおおおおおつ！」

「レント君、すごく嬉しそうだね」

「アーツの長年の夢だつたからな、あなるのも当然だ」

「ずーつと言つてたからね、俺は絶対に塔までたどり着くんだーつて」「これで、レントは夢を一つ叶えたんだよね。……僕も、あと少しだ」複製釜をシャイニングふにちゃんと任せて、私たちは峡谷を進んだ。その先に待つていたのは……島からも見えてた、あの塔。みんなが目指してたところに、やつとたどり着いた。

凄く喜んでるレント君を見て、他の皆も嬉しそうにしてるし、私も嬉しい。だつて、友達の夢を手伝うことができたんだもん。

「気持ちは解るが、程々にな。……地形からして、ここが最後の砦のようだな」

「峡谷を突破され、ここまで追い込まれた訳か。……この荒れ具合、撃退できたように思えんな」

「それじゃあ、ここにいた人たちは……」

「それは中に入つて詳しく調べなければ解らんな。……想像通りだろうが、な」

「ですね……ん、タオ？なんだそれは？」

「ちよつと碑文のようなものを見つけたんだ。えーっと……『聖なる塔ピオニール、暴虐の魔物フイルフサを、誘いて滅ぼすべし』かな」

「『ピオニール聖塔』か。随分と背負つた名前だが……誘いて、とはどういうことだろうな」

うーん、やり方は竜みたいに召喚機とかを使つたんだと思つうけど、わざわざこんなところにファイルフサをおびき寄せる必要があつたのかつてことだよね…

「他の所に行つて欲しくなかつたんじやない？ そうじやなきや誘導なんてする必要ないし、やるにしてもこっちに来させないでしょ」

「だつたらまず考えられるのが…滅ぼすべしなんて書いてるし、ここ

でならファイルフサを倒しきれる自信があつたのかな」

「どうだらうな。少なくとも、ここが防衛に向いた地形であることは確かではあるが」

「それ以外に理由があるとしたら…避難民を逃がす為でしょか？」

「あり得るな。此処に奴らを集中させればそれだけ他が安全になる」

自分達の国の施設に誘導して、国民たちは逃がした。本当にそれが目的なら…

「王国の偉い人達は、自分達のしたことに責任を感じて、出来るだけ他に迷惑が掛からぬように対処しようとしたのかな…」

「だらうな。まあ、だからと言つて奴らの行いは到底許される物ではない。大人が自分の行動の責任を取るのは当然の事だ」

「それに、末端の兵士などはギリギリまで事情を知らされていなかつただらうからな。クリント王国だけで見ても責任が無い者を巻き込んでいいわけでは無い」

「そして、巻き込まれた結果がこれだけの惨状を作り出した戦いに参加する羽目に…ですか。考えなしに動くと周りに迷惑がかかるものですが、これはその最たる例ですね」

…私も、気を付けないと。そういうの、自分でも気づかぬうちにやつちやつてることつてあるかも知れないし。

「…で、この惨状を作り出したファイルフサが、もうすぐ門から来るのよね」

「ああ。早急に門を閉じなければ、こちら一体が荒らしに荒らされる」

「閉じるんじゃなくて、壊すのは駄目なのかな？ ファイルフサは出てこれなくなるだらうし、万が一再利用されるのも防げると思うんだけど

「それが出来れば一番良いのだが…異なる世界を繋ぎ留めるためには莫大な力が要る。そこに下手に大きな衝撃を加えてしまうと…その力が解放されてえらいことになる」

「だからと言つてそのまま放置してしまえば、フィルフサの大侵攻が始まリ…島だけ無事で、それ以外のこころ一帯は荒らしつくされる、か」

「で、だからって異界に水だけでも返そうとして球を壊しちまうと島の水が無くなる…今んところは八方塞がりだな」「…どうすれば、みんな無事で済ませられるのかな」

リラさんとキロさんの世界に水を戻してあげたいし、本当にクーケン島が危ないのならそれもどうにかしたい。そして、皆で冒険してきた場所…思い出をフィルフサに荒らされたくない。でも、どうすればいいのか解らない。どうすれば…

「その方法を見つける為に、皆でここまで来たんだよ。あたしはそう思つてる」

「ああ。どれだけ時間がかかるても、見つかるまで探し続けるだけだ」「…そつか。うん、そうだよね」

目の前に可能性があるなら、悩むより先に動いた方が良いに決まつてるよね。「どうしよう」なんて言うのは、何も見つからなかつた時だけでいいんだよね。

「資料を読み取れるのは私とタオだけだ。何か見つけたらどちらかに報告してくれ」

「責任重大だなあ…でも、だからこそかな。凄くやる気が出てくるよ」「俺は邪魔が入らないように、周りの警戒とかしてる方が良さそうだな。そういうの探すの苦手だしよ」

「ああ、だが手が空いたら私達も手伝うぞ。人手が多いに越したことはないからな」

「後は、余裕があつたら塔の周りの探索と…あ、塔の下の方にも入口がありそうじゃない?」

「なら、先にそつちを見た方が良さそうだな。…さて、行こうか。『答え合わせ』をするために」

「うん。皆、頑張ろう！」

どうかここで、全て上手く行く方法が見つかりますように。

王国の絶望、覚悟、後悔、未練、そして最期の成果を 知る

「これ、貯水池かな？もうすっかり涸れちゃつてるけど」

「こんな山奥で軍隊規模の人間が活動するんだからな。常に大量の水が必要だつただろう」

塔に着いた俺達は、まず橋の下にある方の入り口の所から探索することにした。：あの位置から見えるような入り口じやなかつたように思えるんだが、ライザ曰く「見た感じなんかあるような気がした」らしい。鍊金術士つてのはそこまで勘が鋭くなるもんなのか？

で、入つてみたら貯水池みたいな溝があつた。どつからどう見ても完全に涸れてるが…

「大量の水が常に必要、だがどこかから水を引いていたような痕跡もない。それに…」

「うん。この台座…あの離れにあつたのとそつくりだ」

「つてことは、あの球はここに置いてあつたつてことか？」

「そうなるな。：つまりあの古式秘具は、籠城戦の為にここに持ち込まれたことになるな」

：リラさん、怒つてねえだらうな？

「成程、我らの聖地から奪つた水をどこまでも利用しつくしていきたと
いうわけか。：ああ、心底見上げた心がけだな、本当に…！」

「ちよ、怒るのは解るけど落ち着いてくれリラさん！」

「私は、冷静だ…！」

「はい！分かりました！」

めっちゃ怖え…どつからどう見てもキレてるぞリラさん…！

「…戦いから数百年経つた後にボオス君のご先祖様が此処にたどり着いて、あの球を見つけたんだね」

「そういうことだね。：当時の人達には、凄いお宝に見えただろうな」
「実際それで助かつた訳だしな。だからつてそれを利用して威張り出
したのは頂けねえけどよ」

「個人として悪い印象は特に無いが、モリツツさんにはそろそろ別の事で威張れるようになつてもらわないとな」

「なんだかんだ上手くやりそうだけどね、モリツツさんだし」

だからまあ、水源の問題さえ解決したら遠慮なく異界に水を返せるわけだ。モリツツさん以外誰も困らねーし。

「なんにせよ、これであの古式秘具の出処も確定したな。ここにはもうめぼしいものは無さそうだし、次は上を見に行くぞ」

「はい。…さて、何が見つかるかな。楽しみだ」

…俺が知る限りで今までで一番いい笑顔してんな、アルム。

「何だ、このでけえ骨は…竜か？」

「大きさは確かに同じくらいだね。…でもどうやつてここまで入れたんだろう、ここに入り口は流石にちょっと狭い気がするし」

「確かにさつき楽しみとは言つたが、入つていきなりこれが。色々期待できそうだな」

塔の調査をしつつ天辺を目指す為に扉を開けた俺達の前に最初に現れたのは、かなりデカい…多分竜か何かの骨だつた。塔の周りとかなら兎も角、どうやつてここまで運んだんだろうな？タオが言うように、どつかから入れれそうな感じもねえしよ。

「『門』の技術を応用すれば、入れるだけなら不可能ではないだろうな」「別の世界と繋げられるなら同じ世界でも行けるでしょうって事?…それはそうかも」

「そう聞くと本当に凄いね、クリント王国の鍊金術つて」

「それならそれで、何故々中に入れたのかという話になるがな。防衛が目的なら、動きが制限される塔の中より思い切り暴れさせられる外に配置した方が間違이なく良い」

つてことは防衛目的じやなさそうか？でも、他にこんなことする理由も無いよな…

「まあ、今考えて答えが出ないなら先に進んだ方がいいな。新しい情報があればそれだけ考察も捲る」

「そうですね、行きましょう。…しかし、予想はしてましたが酷い荒れ

具合ですね

「ホントだよ、階段もちょっと崩れてるし。…崩れないよね？」

「流石に心配性が過ぎるわよ、タオ。むしろファイルフサとの戦いでこれくらいしか崩れてないんだから、それだけ丈夫だつてことになるんじゃない?」

「でも、何百年も前の建物なんだよね、ここつて。…私もちよつと不安になつてきちゃつたかな」

「もしそうなつたら、上に行けるのリラさんとアルムしかいなくなるよな…」

「心配する気持ちも解るが、奴らの技術力は本物だ。暴れ過ぎなれば滅多なことは起きないだろう」

：思いつきり剣を振り下ろすのは止めた方が良いな。つーか今思いつきり「は」を強調してたなりラさん。

「えーっと、この部屋には…巨大なボウガン?」

「えつと、確かバリスタつて言うんだよね、これ。ここからファイルフサを撃つてたのかな」

「防衛用の設備か。…威力はありそなだが、奴らの数の前には焼け石に水だな」

「あの時異界で見たのとは比べ物にならねえくらいいうじやうじやいたんだよな…あんまり想像したくねえな」

1体だけでも、見た目と雰囲気だけで何か嫌な感じがしちまうしな、アイツら。

「ん?この紙は…」

「何か見つけたのか、アルム」

「ええ。…此処で戦つてた兵士の手記みたいですが、俺では解読しきれませんね。タオ、頼む」

「うん。えつと…」

——「もう時間が無い。あの恐ろしい魔物との戦いは、あつという間に始まり、終わろうとしている」——

——「俺は街道を警備する一兵卒でしかない。なのに混乱の中、戦えるからと駆り出されてしまった」——

——「何処の悪党がどんな大罪を犯せば、あんな光景を引き起こせるんだ。全てが奴らに踏みにじられた」——

——「黄金の麦畠も、緑の丘も、白い石畠も、全て。その踏みにじる足が今、この塔に届きつつある」——

——「神よ、せめて避難の為別れた妻と娘に、ご加護を」——
「……」で、終わつてゐる

「…聞いてるだけで、キツくなつてくるな」

「予想はしていたが…本当に絶望的な戦いだつたみたいだな」

「そして、少なくともこの兵士は事の真相を知らなかつたようだな。確かに、告げてしまえば逃げられてもおかしくない内容ではあるが」

「…この人も、多分ここで最期まで戦つて…」

「…だろうな。内容からして、自身の生存を諦めている」

「…せめて、奥さんと子供はちゃんと逃げ延びれたと思いたいわね」

そうじやねえと、本当に救いがねえからな…」

「他にも、こういつた内容の手記があるかもしけんな。何か重要なことが書かれているかもしけん、探してみるぞ」

似たような内容のものがまだあるかもしちゃないってのか。もう気が滅入つて來たぜ…」

「さて……」までで見つかつたのは、それなりに高位の騎士と貴族の陣中日記だな」

塔を登りつつ調査をしていたら、二つの手記が見つかつた。片方は先が破られてて、もう片方は書いてる途中で力尽きちまつたみたいだから、本当はまだ続きをあつたかもしぬねえが…気にして仕方ねえな。

で、その内容は…：

——「遂に、リーゼ峡谷の関門が破られてしまつた。我々に残されたのは、このピオニール聖塔のみ」——

——「もう竜は来ない。東の城で戦力を浪費し過ぎた。撤退に次ぐ撤退の末、ここに追い詰められたが」——

——「逆転は可能だ。我々が戦つてゐるのは『女王』率いる敵の主

力だ。頭さえ潰せば群れは瓦解する」——

——「それに、敵主力をこの塔に引き付けることで領民の避難する時間と隙を作ることができる」——

——「これぞ騎士の本懐、剣の献身だ。この上は、一匹でも多く敵を倒して見せよう」——

——「異界で息子が、腕の中で妻が、そして今、私も。我が由緒ある家系が途絶えるは、無念……いや」——

——「領地が街が領民が、魔物に踏みにじられるのを眺めただけの無能な領主には似合いの最期か」——

——「王家の命とはいえ、奇怪な「門」を領内に建造し一時の繁栄におぼれた挙げ句、全てを失いながら」——

——「救いの手立てを、また鍊金術に頼るしかないとは。なんと、惨めで滑稽な」——

「この先に何が書いてあつたか、書こうとしていたかは想像もつかんが……」

「……の高さまで来て、この内容の手記があるってことは、撃退はできなかつたつてことだよね」

「じゃあ、ここで戦つてた人達は……」

……本当、キツいぜ。こんなことが大昔とは言え本当に起きてたのかよ……

「……の人達は、最期に鍊金術をどう思つたのかな」

「……解らないな。だが、どう思つていたとしても、悪いのはその力の使い方を誤つたクリント王国の王家だ。鍊金術そのものは何も悪くない」

「……うん、そうだね」

力の使い方か：規模とか事情は兎も角、親父も間違えた結果がああだからな。俺も同じにならねえように気を付けねえとな。

「さて……後はこの上か。恐らくここが一番重要な情報が遺されている可能性が高い」

「うん。みんな、行こう！」

塔の天辺。俺がガキの頃からずつと目指してた場所。：一体、どう

なつてるんだろうな。

「この巨大な結晶は…魔石か？」

「そうだな。恐らくこの魔石の力で召喚などを行い、ファイルフサに对抗していたんだろう」

「村から時折キラキラ光つて見えてたけど…これが理由だつたんだね」

遂に塔の頂上にたどり着いた俺達を出迎えたのは、あまりに巨大な結晶だつた。恐らく、何かしらの用途で運び込まれた魔石だと思うが…どうやってここまで運んだんだろうか。

それと時折光つていたのは、単に光の反射によるものか、若しくは何らかの力を発揮した時に光つたのか…この構造的に前者では無さそうか？調査すれば解るだろうか。

「レント、頂上までたどり着いたけど…感慨深い？」

「ん…まあ、そう言う気持ちもあるにはあるけどよ」

「何だ？子供の頃からの夢だつたんだろう、さつきのようにはしゃいだところで私達は咎めんぞ」

「あー、なんていうか…ここから見下ろした先が全部ファイルフサの大群だつたつて風景、ここで戦つてた人達は見たんだよな」

「…ああ、だろうな」

「その時の絶望つて、どれだけ大きかつたんだろうな…つて考えちまつたんだ。そして、俺達が間に合わなかつたら、それがもう一度起きるんだよな」

…確かにそれは、はしゃぐ気分にはなれないな。だが…

「だからこそ、是が非でも間に合わせる。その為の調査だ」

「そんなこと、絶対に繰り返させない。まずそれを心に決めて、全力で頑張ろう！」

「…そう、だな。よし、まずは張り切つて調査と行くぞ！」

さあ、一体何が見つかる…？

「何だ、この鳥の像?」

「ふむ、何か書いてあるな…賢者像、か。恐らく、クリント王国における賢者の象徴がこの鳥なのだろう」

「実際には、賢者と程遠い事をしてくれたわけだがな」「凄い形の木…それに、枝の所に何かはまつてる?」

「これは…トラベルボトルのようだな。恐らくここで採取をし、研究や調査を行つていたんだろう」

「つまり、ここは本来鍊金術の研究所だったのか?となると、下のあの骨も研究対象として運び込まれたのか?」

「どうやつたら木をこんな形にできるのかも気になるけどね。…あ、こつちにもトラベルボトルがあつた。貰つていこつと」

「凄い…こんな大きな本があるんだ!」

「ここまで大きくする意味はよく解んねーけどな…」

「内容は…ふむ、興味深いが、今は関係なさそうな内容だな。後にした方が良さそうだ」

「なんだろう、この輪つかみみたいな道具…かな?宙に浮いてる…」

「これは浮遊天球と呼ばれる物だな。鍊金術において重要な要素の一つである星の運行を調べる為にある」

「星の…言われてみたら確かに星に見えるかも」

「…誰もいなくなつたこんなところで、何百年も経つて、まだ回り続けているのか」

「…」の辺りも、ファイルフサに踏み荒らされたみたいだね。跡が残つてゐる

「じゃあやつぱり、ここにいた人たちは…」

「ああ、全滅…だろうな」

「陥落した城塞跡、それも相手がファイルフサならば当たり前のことだ」一通り見て回つたが…興味を惹かれるものはいくつもあつたが、今欲しいものじやなかつたな。直接的な手掛かりが、そうでなくとも何かしらの『鍵』があればいいんだが：

「…ん?」

「どうした、ライザ？」

「瓦礫の下にこんなものがあつたんだけど…」

そう言つてライザが見せてきたのは…宝石のようなものが付いた3つの輪つかが1つになつてゐる、不思議な物だつた。恐らくこれも何かしらの道具だらうが…

「これは…鍵だな。クリント王国の遺跡で稀に使われる形式のものだ。ライザ、解るか？」

「うん、高度な鍊金術で作られてるのが解るよ。凄い力を感じる…！」

「鍵つて…」の形でか？」

「うん。「中に入る仕掛け」つて刻んであるし、僕らが知つてる鍵と違つて、どこかにはめ込む物だと思うよ」

…まさか鍵そのものが見つかるとはな。だが…

「随分ボロボロだな。このままだと使えない可能性があるぞ」

「修理しなきやいけないかもつてこと？…うーん、確かにそんな感じがする」

「何処で使うのかも調べなきやいけないしね。…ここまで流れだと、クーケン島のどこかっぽい感じはするけど」

「言われてみれば、そんな挿絵があの本にあつた氣がするな。最初の方だつたか…？」

「ん、もう一つ何かあるぞ…封書か。…む、この紋章は…！」

「紋章がどうかしたの？アンペルさん」

「ああ、こいつはクリント王国の高位鍊金術士だけが用いるものだ」「じゃあ、その封書には…」

「ああ。これまで一番重要なことが書かれているかもしだ。署名は「南フルーケスター管区長」の役職名だけか。これら一帯を取り仕切つてた鍊金術士のようだな」

「文書の内容は？」

「そう急くな、今から読む。どれ…」

——「本書は、未練の遺言なり」——！

「「「！」」」

「…遺言…！」

「…」

未練、か。一体、何が語られるんだ：

「——「胡散臭い呪いと侮られた我らが鍊金術は、長き時をかけ、王国の中心となる地位を得た」——

——「我らは王国の力となり、光となり、糧となつた。王国の誇りに、叡智に、剣に、鎧に、そして」——

——「死を呼ぶ病となつた」——

「……つ」

鍊金術への認識を良くしたまでは、良かつたのにな…

「——「我らは、異界より資源を得、各地に「門」を築き、王国に大いなる繁栄をもたらした」——

——「我らはその為に、自らの良心を眠らせた。友人らの森から水を奪い、軍勢を引き入れた」——

「……つ！」

オーレン族を友人と呼べる程度に友好的な関係ではあつたのか？
……だとしたら、尚更許されることじやないな。

「——「彼らの聖地から資源を奪い続けた我らに、やがて天罰が下つた。一面の涸れた地平から」——

——「『蝕みの女王』がファイルフサを引き連れ、來た。我らはたちまち異界を追われ国を食い荒らされた」——

——「我らにできたのは、研究施設だつた塔を用い、ファイルフサを誘き寄せる波長を放射することで」——

——「領民が避難する時間を稼ぐ、ただそれだけ。この一地域だけの抗いが、せいぜいの力」——

確かに、この鍊金術士達に対しては天罰というのがふさわしいだろうが…それに巻き込まれた領民は、本当に氣の毒でしかない。

「——「あれほどに満ちていた力も、光も、糧も、全て消え失せた。誇りも剣も鎧も叡智も、いつしか」——

——「王国と民衆、そして我ら自身に降りかかる死の病となり果てた。全ては、我らの罪」——

「……つ！何を、何を勝手なことをつ…!!」

「リラさん…」

…因果応報、自業自得。そうとしか思えないな。自分達の行いがどういうものなのか、気付くのが余りにも遅すぎるだろうが…

「――「この遺言を読む誰かに、せめて未練を託したい。我らの、せめてもの抗いが成就したかどうかを」――」

…そうだ、これは「未練の遺言」だつたな。一体どんな未練が――

「――「この地より南方の汽水湖上に、我らの建造した人工島がある。偶然、緊急避難の役に立つた」――」

「あ…」

「ここから、南方の汽水湖…」

「そこにある、人工島…ってことは、さ」

「もう、答えは1つしかないな」

「――「その名を『クーケン』という」――」

…これで、推理の答え合わせが1つできた訳か。

「――「どうか、ここを訪れて欲しい。未だここに住まう人があれば、訪ねて欲しい。息災か、と――」

「…せめて、最後に命を懸けた分だけでも救えたか…」

「それがこの鍊金術士の未練、ってことね…」

「…何つーか、遣る瀬無えな」

最期の最期に、この鍊金術士は逃げずに自分の命を懸けた。なら…

「…「息災か」、か。そうだな」

「アルム?」

「――言われるまでもなく息災だよ、大昔の鍊金術士。特に俺達4人は、あんた達の過ちを何百年越しに清算してやろうとするくらいにな」

その分くらいは、応えておいてやるか。又聞きでなく、島民本人の言葉でな。

真実への扉が、遂に開く

「さて、とりあえずここまで情報を探してみるぞ」

塔の調査を終えてアトリエに戻ってきたあたし達は、ここまで情報を探を一旦まとめて改めて見てみようつてことになつた。そうしたほうが次どうすればいいか決めやすいし（まあ一択だとは思うけど）、事前に予想として聞かされてたとはいえ、とんでもない話なことに変わりはないから、混乱しないように落ち着いて現状を見れるように頭も気持ちも整理した方がいいしね。

「まず、クーケン島はクリント王国が造った人造の浮島で、住人はクリント王国からの避難民の子孫だということは確定したな」

「逆にまだ解つてないのは、造られた理由と、どうすれば古式秘具に頼らず水源を確保できるか、だね。…造られた理由は、今は別にいいかな」

「クリント王国が滅んだのは、リラさんの故郷から水を奪つたせいでファイルフサが自由に動けるようになつて、『門』を越えて国を侵攻されたからで…」

「そのファイルフサへの対処法は今のところ、「蝕みの女王」っていうのを倒すこと以外無い、んだよね」

「…改めてこう聞くとまだまだ糸口は見えてこないわねー。『鍵』で入つた先でもうちよつと何か解ればいいんだけど」

その為にも、まずこのボロボロの『鍵』が使えるかどうか調べないとだしね。先に入口を見つけてからの方がどう修理すればいいか解りやすいし。

「しつかし、俺達の先祖がクリント王国の人間つてのはな…オーレン族の人達にしたことを考えると、どうもな」

「気にするな、お前達には何の罪もない。むしろ、その事情を知る前から私達に協力してくれているだろう？そのことに感謝したいくらいだ」

「そうだな、私も同意見だ。…しかし、住んでいる島にあれだけクリント王国の遺跡があるので、今までその可能性に至つた者はいなかつた

のか？何かしらの関連性くらいは見出しそうなものだが」

「うーん…確かに不思議だなとは思つてたけど、そこで止まっちゃつてたかなあ。大昔の話だし、クリント王国の事は何も知らなかつたし」

「その手の資料も全くありませんでしたからね。それこそ、タオの本と例の古式秘具くらいしか手掛かりになりそうなものは無かつたと思ひます」

「ふむ…成程な。確かにそれでは繋がりを見出すことはできんか。…いや、成程」

「え、何か気付いたの？」

「クーケン島は、恐れる物や決まり事ばかり多いのに、具体的な伝承がほぼ無いだろう。そのことをずっと奇妙に思つていたんだが…」

「理由が分かつたの？」

「あくまで推測だがな。…クリント王国は滅亡の瞬間まで「門」や「大侵攻」に関する情報を抹消して回つていた、という話はしたな」

「あー、そういうえば。…そういう秘密を消した後に、巻き返す日でも夢見てたのかね。往生際の悪い」

「…そうか。情報を消しても襲われた恐怖は残る。逆に、襲われた恐怖は残つてもそれに対する具体的な情報が残らない」

「それがいつしか実体のない恐怖になつて残り続けた結果が、何が何でも外に出るなつていう決まり事なんだね」

「そういうことだらうな」

「…そこまで言われると、ようやく今と繋がる実感が湧いてきたかな。正直、ちょっと嫌な気分だけど」

「レントも言つてたけど、やつたことがやつたことだしね…あたし達のご先祖様が何の関わりも無かつたとしても、それはそれで国に巻き込まれた被害者つてことだし。

「まあ、クーケン島を造つていた分だけでも感謝していいんじやないか？それが無ければご先祖様は助からなかつた可能性があるわけだからな」

「それだつて、自業自得の自作自演だと思うけどねー。そもそもご先

祖様が避難しなきやならなくなつた理由が理由だし…」

「なんなら最後の最後に情報を消したせいで、子孫たちに窮屈な思いさせてるしな」

「確かに情報が残つてたら、どう危ないのかも解つてたから今より決まりことは緩かつたかもね」

まあ、それでも理由も無く外に出るのは駄目つてなつてただろうけど：姉さんとかに頼めば、もうちよつと早くに外を見れたりしてたかな？

「えーっと、ライザ。次はあの鍵を使える場所を調べるんだよね？」

「そうだけど…もしかして、心当たりがあるの？」

「うん。あの本にそれらしい絵が描いてあつたのを思い出したんだ。今直ぐにでも調べられると思うよ」

「なら、今日はそこまでやつておいた方が良さそうだな。修理の必要があるかもしれないなら、早めに確かめた方が良い」

「じゃあ、お願ひねタオ」

素材の為に、ちょっと遠くまで行かなきやいけないかもしれないしね。今日の内にできることはやつちやおう。

「さて、では後は…奴か」

そう言つてアンペルさんがアトリエの入り口に目を向けた。：

あー、うん…

「ふに！」

…あたし達に懷いちゃつたシャイニングふに。塔の調査中複製釜を見張つてくれてたのまではいいんだけど、あたし達に釜を渡した後にしれつと付いて来てて…今アトリエの中まで入つて来てる。

なんかもう、敵意が無いどころか完全に友達とか仲間として認識されてるよね、これ。

「…どうするよ、実際？」

「どうする、つて言われても…」

「私達と仲良くなりたがつてるんじゃないかな、とは思うけど…」

「ならそうした方が良いだろうな。下手に機嫌を損ねて暴れられでもしたら、アトリエが無事では済まない」

「ですね。…まさか魔物と友達になるとは、今まで考えもしてなかつたな」

「じゃあ、これからよろしくね」

「ふに！」

「こうしてあたし達のアトリエに、不思議な友達兼居候が来た。…おやつとか、作つてあげた方が良いよね？」

「ここだよ。本には、ここが鍵を使う場所つて書いてあつたんだ」

「こいつは…記念碑か？思つた以上に大きいな」

「中に入るための目印つて事なら、こんなに大きなものを建てるのも納得出来るね」

島に戻つすぐ、タオが本から鍵の使い道を調べ上げ、今全員でその場所に集まつて。トレッペの高台にある、古式秘具が安置されてゐる離れから更に奥に行つたところにある記念碑…ここに、鍵をはめ込むための窪みがあるらしい。

何やら文字も書いてあるが：何てことはない、土地の安寧と豊穣を祈るお定まりの銘文だな。まあ、こうも目立つように秘密の入り口ですなんて書くほど馬鹿では無かつただろうし、当たり前か。

「それでタオ、鍵はどう使うんだ？」

「えーっと…あつた。こここの窪みにはめ込むんだよ」

「ここ…確かに大きさも形もそれっぽいわね。じゃあ…」

ライザが窪みに鍵をはめ込んでみると：何も起こらない。本にわざわざ間違つたことを書くとは思えんし、はめ方が間違つているようにも見えん。となれば：

「うーん、やっぱり鍵が壊れてるのかなあ」

「鍵穴の方の問題かもしれないな。何百年も手が加わつていないだろうし、形が合わなくなつていてたりするかもしれない」

「マジか、どうすんだよ？」

今のライザでも、この鍵穴の方をどうこう出来はしないだろう。となれば、やはり鍵の方に集中するしかないが…

「壊れてるのなら、直すしかないよね」

「確かにそれが道理だが……クリント王国の鍊金術でも最高レベルの道具だ。修復出来るのか？」

「ん……修復っていうより、改良？ 力は残ってるみたいだし、それを石碑に伝えられるようにするの」

「成程、良い発想だ」

それなら、新品同様に作り直すよりは難易度も低いだろう。もし力も残っていないのなら、流石に厳しかつただろうが……

「それなら、明日はその為の採集からするの？」

「えーっと……うん、そうだね」

「何が必要で、それが何処にあるかは解るか？」

「塔の周りにある樹の葉っぱ……かな。さつきは調査優先で殆ど採取しなかつたから」

「また塔まで行かなきやいけないんだ……ついでに何か探つておけば良かつたかな」

「まあ、竜もいねえし道も覚えたから今日よりはずつと楽だろ。ついでに何か良いもの見つかるかもしねえしな」

元々研究施設だった塔の中なら、何かしらの残骸や放置されている容器などから色々採れるだろうからな。所有権が云々など考える必要も無い、有り難く頂戴しようか。

「あ、後ついでに枝も欲しいかな。新しい採取道具が欲しいし」

「え、まだ何かあるの？ もう粗方作り終わつたと思つてたんだけど」

「フラムロッドと言う、火の力で採取する道具があるな」

「火の…発破でもするんですか？」

「ああ。岩を碎いて鉱石を取り出したり、木を焼いて木炭にしたりするぞ。一応魔物に向けて攻撃も出来るが、爆発までに少し時間があるから少し扱いづらいな。あと、反動が少々大きいからあまり多用はない方が良いな」

王国に仕えていた時に使つたことがあるが……採集に熱中し過ぎて肩を痛めたことがある。まあ、その後威力をそのままに反動を抑えた改良版を開発したがな。

「……これで今話すべきことは話したか、今日はこれで解散だな。明日に備えて、早めに休もう」

「うん！さーて、明日も忙しくなるぞー」

「塔まで行つたつて言つたら、親父もちよつとは驚くだろうな」

「……もうすぐで、本に書いてあつたことが全部解るんだね」

「全部解決できるように、最後まで頑張らなきや！」

さて、私達も早めに戻つて休息をとるとしよう。流石に少々疲れたしな。

「——いよいよ、だね」

「ああ。これでようやく、答え合わせが終わる」

翌日、鍵の改良を終えた私達は再び記念碑の前に来ていた。：正直、年甲斐も無く気が昂つてゐる。理由は二つ。

一つ目は、クリント王国の鍊金術の粹を集めた代物であろうこの島の内部に入れること。この大きさの島を造り、湖に浮かべ、それを何百年と保たせる島を造つた技術。こんなもの、一鍊金術士として興奮しない筈もない。

そして二つ目は、ライザの成長速度だ。鍵の改良に使つた代物：聖なる雪。神に祝福された聖なる水と呼ばれる代物だが、普通ならたつた一夏でたどり着けるような代物ではない。まず年単位はかかるだろうな。

（ハツキリ言つて、純粹な技術のみなら既に追いつかれているのかもしれん。ともすれば…）

近い内に、『賢者の石』にすら手が届くかもしれんな。

「じゃあ…行くよ？」

そう言つてライザが窪みに鍵をはめ込むと…

「…光つた！反応したのか!?」

「ととつ、これ離れた方が良いよね！」

そう言つてライザが離れた直後に、記念碑が動き出した。そこに

あつたのは…階段。この島の内部に続く道だ。

「これ、地下に続く階段…だよね」

「うん。これが、人工島『クーケン』の入り口だよ！」

「この下にあるんだな。俺達が住んでる島の本当の姿つて奴が」「ああ。…さて、俺達はこのまま下に行くが。どうする？」

アルムが振り返りながら、誰かに語り掛けるように話す。私達も同じように振り向くと…

「…記念碑が、動いた？」

「こんな何もないところで何をするのかと後をつけてみたら…とんでもねえことになつてるな」

「…すつごい」

アガーテとボオス…それに、エルか。

「2人は気配で解つていたが、エルまでいたか。…大丈夫なのか、アルム？」

「正直、悩みますか：「お前にまだ話せないから帰れ」なんて言われて引き下がるような性格をしていないんですね」

「というか、僕らの考察を一番最初に聞いたのはエルちゃんだから…ある意味一番話さなきやいけない相手なんじやないかなつて」

まあ、それはそうかもしかんが…

「で、どうするんだ。話すのか、話さないのか」

「…エル、今から俺達が言うことと知ることは、あの時の本の内容についての事だ」

「…うん」

「正直、かなり信じ難い内容になると思うが…それでも、知りたいか？」

「…うん。みんなが今何をしてるのか、あの時の2人の推理が当たつてるのか、今すぐ知りたい」

「…そうか。そう言うと思つたよ」

…やれやれ、仕方がないか。

「で、俺達には当然話してくれるんだろうな？」

「ああ、お前とは元々そういう約束だつたし、姉さんにも話しておいた方が良いと思つていたからな」

「アタシにもか？」

「まあ、色々と理由がね。もしかしたらちよつと頼る」とになるかも
しないし」

「…今から何を聞かされて、後々何を頼まれるのか想像もつかないな
だろうな。…さて、話はまとまつたな。では…」

「行こう、みんな！」

「『眞実』を、知りに行くぞ」

何が見られるのか、楽しみで仕方ないな…！」

おまけ 採取中の一幕（嵌り過ぎには）用心（

「あ、綺麗なちようちよ…」

「ん、そいつは…ラピス・パピヨンか」

「ホントに綺麗だね、宝石みたいだよ」

「実際、羽根の青い部分にはガラスや宝石のような成分が含まれてい
るな」

「あー、だから何か飛び方がぎこちなかつたのか」

「え、何々？何見つけたの：あ、ちようちよ！」

「うん、すぐ綺麗だよね！」

「うんうん、すつぐく綺麗！あ、ところでアンペルさん」

「ん、何だ？」

「この子はどういう調合で使うの？」

「え？」

「…」

「…後でまた、こつそり聞きに来るようにな」

「え、あ、うん」

「…ライザ」

「あ、えと、何かゴメン…」

「…鍊金術に嵌り過ぎるあまり、思考がかなり染まっているな。今後
またこういうことが起こるかもしね。その時はお前がフォローし
てやれ、アルム」

「解りました。：元々宝石の類にはあまり価値を見出してなかつたとは言え、これは流石にな…」

やるべきことが解つたのなら、後は

「…これは」

「なに、これ…」

「こいつは…」

記念碑が動いたことで出てきた階段。そいつを降りた先に広がっていた空間は…今までの俺達の常識からはあり得ない物だつた。床、柱、橋、何もかもが一目見ただけで人工物だと解る。しかも照明まで設置されているから、地下にもかかわらずそれなりに明るい。

…確かにさつきクーケン島が人工島だの何だの言つていたのが聞こえたが…これを見たら疑う余地なんぞ微塵も無いな。

「これが、あたし達がなんてことなく過ごしてたクーケン島の本当の姿…」

「俺でも解るぜ、こんなのが自然にできるわけねえってな。…本当に、人工島だつたんだな」

「す…凄い、凄いよ！これが全部、人工物だなんて！」

「こんな大きなもの、本当に人の手で…？」

「ああ、出来たんだ。クリント王国時代の鍊金術ならな」

「え…？」

「は…？」

…待て、クリント王国だと？

「…その辺りの説明は後で一度にしましよう。歩きながらでいきなり聞けるような話ではありませんし

「そうだよ！それに奥にもつと凄いものがあるかもしれないし、早く進んでみよう！」

「タオさん、すつごい元気だね」

「ああ、間違いなく今まで一番テンション高いぜ」

「ある意味ここも遺跡だからな。それも、何気なく過ごしていただところの地下にこんな規模のものがあつたんだ。興奮くらいするだろう」

「そういうお前はどうなんだ？こういうの、お前も好きだろう」

「…」の一件が一段落ついたら、隅々までじっくり見て回つてやりま

すよ、ええ

…よく見ると口角が僅かに吊り上がってるな。本当、ぱつと見じや
感情が解りにくい奴だ。

「ああ、それと…エル」

「なに？」

「さつき本の内容について話すと言つたが…その過程で、お前にはまだ話せないような内容のものが出てくる可能性がある」

…オーレン族と異界周りの話か、確かにエルにはまだ話せねえな。
コイツの歳での話は重すぎる。

「だからその話題が出そうになつた時は…全力で話を量す」

「…絶対に言わない、とかじゃないんだ？」

「それくらいはしないと説明できることもあるしな…」

「んー…解つた。でも、いつかはちゃんと教えてね？」

本当、まだ12とは思えねえくらい物分かりが良い奴だな。

「さて、ではタオが大分先に進んでしまつているし、私達も行くか

「そうですね。…タオー、落ち着けー。遺跡は逃げないぞー」

…タオがこういうポジションなのはかなり珍しいな。いつもはむ
しろライザヒレントに言う側だろうに。

「この部屋は…確か、本に」

「うん！ 「中核」「重要」「制御」 そう書かれてた部屋だよ！」

「そうか。それが本当なら、これがクーケン島の機能を制御する中枢
だな」

先行したタオの後を追つて進んだ先にあつたのは…宙に浮いてい
る赤い球体と、そいつを中心に回つてている輪だつた。…一目見ただけ
じゃ、何がなんだか解らねえな。

「…これも、鍊金術で…？」

「どうやつて浮かせてるのかな…鍊金術って不思議だなー」

不思議、で済ませて良いレベルじゃねえ氣もするが…まあいい。

「ええつと、開け、見せろ、次、見せろ…」

…タオがこつちに集中し出したし、今の内に姉さん達に大方説明し

ちやう？」

「そうするか。少し長くなりそうだしな」

「…いよいよか」

「理解できる話か心配だな…」

「…よし、気合い入れて聞こう。むんつ」

お前らが抱えてる事情、たっぷり聞かせてもらおうか。

「…クーケン島を造ったのは、クリント王国で？」

「この島の住人は、クリント王国の末裔で？」

「クーケン島は、湖に浮いてる？…え？」

「…そういう反応になるだろうな。無理もない」

「あたし達も最初に聞いたときは混乱したしね…」

…予想以上にとんでもねえ話だった。大昔に滅んだ国が、島1つ造れるだけの力を持つてたこと。その国の住人が、俺達の先祖だということ。そして、クーケン島がエリップス湖に「浮かんでいる」島だということ。

歴史的にはとんでもねえ大発見だろこれは。…どうも、そんなこと言つてる場合じゃねえ事態みてえだが。

「湖に浮いてるつてのは、本当なのか？」

「ああ、この目で見たからな」

「わざわざ潜ったのかお前…」

「何か見つかるかと思つてな。…初めて見た時は、俺も目を疑つたよ」
「…だろうな。…しかし、確かにここに作るなら浮島になるだろうな。エリップス湖の深さを考えると、いくら鍊金術がとんでもない代物だとしても、こんなところに普通の島を造ろうなんて考えたら想像もつかないくらい金も時間もかかるだろう。」

それはそれで、どうやつてこんなものを湖に浮かべているのか、という疑問は残るが…こんなものを造れるんだ、少なくとも今の俺の理解の範疇の外にある話だろうな。

「…こんなこと、どこで調べたんだ？」

「塔に色々残されてたから、そこで。あの塔は元々クリント王国の鍊

金術の研究所だつたんだつてさ」

「あれもクリント王国に関係してたのか…」

「この辺りのあの手の建物は、大抵クリント王国が関わっているんじゃないかな」

少なくとも、古城とあの門があつた神殿のような建物はクリント王国が造つたものだからな。その可能性はあるだろう。

「…」んなに凄い事が出来たのに、どうしてクリント王国は無くなつちやつたのかな」

「…何て言えばいいか。物語とか読んでも偶に出てくるだろう？欲をかきすぎて自滅する権力者とか」

「うん。…クリント王国もそうなつちやつたつてことなの？」

「ああ、そんなところだ。そしてその結果他所からの攻撃を受け、国は壊滅。その際にこの島に避難してきた人達が俺達のご先祖様だ」

：嘘はついてねえな、嘘は。その手の物語だと、恨みを買い過ぎたりデカい不正の証拠を掴まれたりで周辺国から袋叩きにされるとかが理由になるが…実際は、な。

「えーっと、因みにクーケン島が造られた理由は残つてなかつたね。本当は別の目的で造られてたらしいけど、偶々避難の役に立つただけみたい」

「まあ、こんなもんすぐ造れつて言われて造れるようなもんでもねえだろうからな。そこは驚かねえ」

「むーん、だつたら何で造つたんだろ…」

「それはこの件が無事に済んでからゆつくり調べるつもりだ。…なんなら今予想してみるか？当たつてるかもしねいぞ」

「え？…えーっと、じゃあ…クーケン島は湖に浮かんでるんだよね？」

「ああ」

「…本当はお空に浮かべたかつた、とか？」

…空に島を？

「…流石にそれは、鍊金術でも出来ないんじやねえか？」

「ライザ、どう思う？」

「うーん、出来ないとははつきり言えないけど…今のあたしには

ちよつと想像つかないかな

「えつと…リラさん達はそういうの見たこと無いですか？」

「いや、痕跡すら見た覚えは無いな。存在していたなら、アンペルが知っている可能性は否定できんが」

「むーん、じゃあ違うかなあ」

「少なくとも今は資料も何もないから何とも言えないな。…とはい
え、お前はクーケン島が浮島だと偶然言い当てたからな」

「一体どこからそんな発想が出たんだ…」

まさかと思うが、エルが頻りに勧めてくるあの小説か？本に影響を受
けすぎるのも良くねえと思うんだが。

「そつちの話は終わつたか」

「あ、うん。事情は大体説明したよ」

「そうか。こつちも終わつた…というか、ようやく事態の全貌が判明
した」

遂に、か。正直嫌な予感しかしねえが…

「…どうだつたんだ、タオ？」

「…この前、僕たちが予想した通りの事になつてた」

「あ…」

「…クソ、やつぱりか」

…顔を見ただけで解る、よっぽどマズい状況らしいな。

「…どんな状況なんだ？アタシ達はその予想とやらは聞いてないんだ
が」

「…簡単に言うと、クーケン島は今ほんの少しづつ流されながら沈み
始めて います」

「…はあ！」

流され…いや、それどころか沈む、だと？

「あそこにある核がこの島を浮かせるための動力になつてたんだけど
…そのエネルギーが足りなくなつてるんだよ」

「地震が増えていたり突然不漁になつたりしたのは、島が流されてい
たのが原因です」

「…確かに今まで無かつたことだから不思議に思つてたが。そんな理

由が…」

「ついでに言うと、淡水化装置も壊れているな。そこに有る3つの大きな装置だ」

「そうだ。これが、本来の島の水源だ」

「なら噴水から水が出なくなつたのは、装置が壊れたからだと?」

「ああ、経年劣化でな」

…なんだそれは、どうして今の今までそんな状態で放置されていた!?何故クリント王国の人間はそういう情報伝達、共有をしていなかつた!…ちょっと待て、なら…!

「…アルム、お前達さつき記念碑に何かをはめ込んでいたな?」

「ああ、ここに入る為の鍵だ」

「鍵…ならタオ、その鍵と似たような物を島で一度でも見たことがあるか?」

「え…無いけど…」

「…そうか。…つてことは、だ」

「何が言いたいのよ、ボオス?」

「こここの操作をするための手引書があるのに肝心の鍵が島に無い。そしてそもそも手引書の読み方を誰も知らねえし残つてねえ。更にはこの島が人工島だつて事すら塔に行かなきや解らねえ。

…つまり、この島はちゃんとした管理が必要なもんだつてのに、そのことを誰も知らねえまま何百年もほつたらかしだつたつてことになる」

「…もつと早くに…うなつていても不思議じやなかつた、か」

クリント王国の鍊金術がどれほどかは知らねえが…今こうなつて以上、完全なもんじやねえ。それこそ俺達が生まれる前に限界が来てもおかしくなかつたはずだ。

…そう考えると、兆候が出だしたタイミングでの2人が此処に来たのはとんでもなく運が良かつたんだな。

「そう言われてみると、何やつてんだクリント王国つて改めて思うぜ…」

「今」うやつて手遅れになる前に知れたのも、偶然に偶然が重なったからだしね。…そういうの、あたし達はちゃんと残しておかなくちゃ」

「そうだね…あ、ライザ。今の内に装置と核を見ておいて欲しいんだ」「そうね、まずそれを見なきゃ修理も何も無いものね。任せなさい！」

「事情が事情だ、今回は私も全面的に口を出すぞ」

「うん、お願ひねアンペルさん！」

事前に知つてたとは言え、意外と冷静つつうか：前向きだな。

「俺達はどうするよ、アルム？」

「そうだな…とりあえず、淡水化装置はあの3人ならどうとでもなるだろうな。仮に部品の1つや2つで済むなら、明後日までには直るだろう」

「…そこまでできるようになつてると、ライザとタオは。全く、アタシが想像つかないくらい成長してるんだな」

「ふふつ、はい。凄いですよ、みんな」

正直そこは俺も驚いている。あのイタズラ三昧で真面目さの欠片も見えなかつたライザがそこまでできるようになつてるなんてな。本気になれるものがあれば、誰しも成長できるつてわけか。

…そうなると、農作業をサボらなくなつた理由も何かありそうだな？あいつが鍊金術以外に本気になるもの…ああ、成程な。

「単純で解りやすい奴だつてことは、変わつて無さそうだけどな」

「正直で真つ直ぐだと言つてやれ。というか、聞こえてたら後でどうされるぞ」

「ああ、悪い悪い」

おつと、つい口から出ちまつてたか。

「それで、たんすいかそーち？つていうのは大丈夫みたいだけど、あの赤いのはどうするの？あれが一番大事なんでしょう？」

「そうだな…島1つ浮かせ続けられるエネルギーを産み出すものだからな。まず素材が見つかるかどうかの話になる」

「心当たりは無いのか？」

「…今のところは」

エネルギーを産み出す核を作るためのもの、か。

「竜眼じやダメなのか？アレも持つただけでかなりの力を感じる代物だつたが」

「…足りないだろうな、恐らく。出来たとしても一時しのぎくらいだらう」

「えつと、それってお見舞いの時に持つてきてた玉の事？」

「ああ。あれは古城にいたドラゴンの目玉だ」

「…凄いの取つてきてたんだね」

「あんなことが無かつたら、一生お目にかかれなかつた代物だらうな。

「むーん、ドラゴンでも足りないってことは、もつと凄い魔物から取れる物じやないと駄目つて事？」

「ま、魔物に限定しなくてもいいんじゃないかな…」

「まあ、そうだつたとしても倒しに行くだけなんだけどよ…そこまでやらなくていいならそれに越したことはねえよな」

まあ、危険はできるだけ排除した方がいいからな。そもそも、アレより上の魔物なんぞそういう見つからねえだろうし…いや、待てよ？（キロが言つていた『蝕みの女王』…そいつはどうなんだ？）

少なくとも国を一つ滅ぼすところまで持つていく奴らの頭だ、そいつ自身も相当な力を持つているだろう。…だが。

（…蝕みの女王までたどり着くのにあのフィルフサの群れを突破しなきやならねえだろうし、できたとしても消耗した状態でそんなバケモノと戦わなきやいけない）

…少なくとも、今の俺の感覚じや死に行くのと何も変わらねえ。そんな提案をこいつらにするのは…流石に無理だな。

「終わつたよー！」

「そうか。で、どうだ？」

「淡水化装置は今すぐにでもどうにかできるよ、素材も多分揃つてるし。で、核は…」

「方法は無い事も無い。…続きはアトリエでだな」

もう終わつたのか。というか本当に装置の方はすぐどうにかでき

るのか。まあ、あの世界に早く水を返せるのならそれに越したことはないんだが。

：核の方は、此処で出来ない話なのか。つまり、異界絡み…そういうことか。

（クリント王国みてえに無理やり搾取しようってわけじやねえから、事情を話せばコイツ等には快く渡してくれるだろうが…）

遣る瀬ねえっちゃ、遣る瀬ねえな…。

「エル、今日の話は他の人達にはしないでくれ。親父と母さんにもな」

「ん、解つた。…どうにかできるんだよね？」

「…やるさ。絶対にな」

「うん。絶対に、あたし達で島を救つてみせるよ」

：本当なら俺も何か出来るならそうしたいが、こういうことはコイツ等に任せっきりになつちまうのは歯痒いな。

「…ああ、ボオス。後でアガーテさんに異界絡みの事情説明だけ頼んでいいか？」

「いいが…さつきも思つたが、本当に必要なのか？」

「かもしれない、とだけ言つておく」

…まあ、それくらいなら頼まれてやるが。

「――結論から言つと、俺達は『蝕みの女王』を倒しに行くことになつた」

「…はあ!!」

翌日、アルムが俺とアガーテにこんなことを言いに来た。…いやちょっと待て、話が急すぎるだろ!?

理由は有る、決意もした、準備はこれから

「さて、まず淡水化装置についてだが……これはもう必要な物は解つて
いる。そうだな、タオ？」

「うん。えーっと……あつたあつた。この「超鋼ギア」っていうのを3つ
揃えれば直せるよ」

「ん……うん、思つた通りの素材で作れそう。数も三つ分あつたはず
だし、これで淡水化装置の方はOKね」

クーケン島の地下を調査してすぐに、私達はアトリエで現状の確認
をした。まず島の水源の淡水化装置は今からでも直せるみたいだか
ら、そこは一安心だね。

…というかタオ君、もしかして本の内容全部記憶してるの？そ
うじやなかつたらそんなすぐにこれが必要つて解らないと思うけど…
なんていうか、凄くない人が一人もいないなあ、私の友達。
「で、次は核の方だが……リラ」

「構わん、こいつ等の為だ。それに、私達が何も言わなくともそこにた
どり着いていただろうからな」

「……だろうな」

えつと、核の為に必要な物を教えるのに何でリラさんに…あつ。
「お前達、覚えてるな？何のためにクリント王国がいくつもの『門』
を開いたのか」

「…鍊金術の為の、資源が欲しかつたから」

確かに、クリント王国があんなことをしてまで欲しがつたものなら
核を造れるかもしれないけど、でも…

「でも、それだとクリント王国の奴らと同じことをすることになる
じゃねえか！」

「お前達の故郷を救うためだ。そこに拘つている場合ではない」

…強いなあ、リラさん。強くて優しい、凄い人。

「でも、それならそれでフィルフサが周囲に居る状況で探さなきやい
けないんだよね…あの時みたいに、フィルフサだけをおびき寄せる道
具とか作れたりしないかな」

「…解らんな、私も奴らの全てを知つてゐるわけでは無い。ただ、そう言つた臭いに釣られるような話は聞いたことは無いな」「うーん、ダメかあ。それなら…」

「もつと直接的に、ファイルフサを黙らせるしかないな」

…アルム君？えっと、直接的ってことは…

「…『蝕みの女王』を倒す、と言うことか？」

「ええ。それをすればファイルフサの侵攻を止められますし、資源も余裕をもつて探せます」

「確かにそうだが…」

オーレン族の人達もクリント王国もほとんど壊滅させたファイルフサの、一番強い個体が『蝕みの女王』なんだよね？戦つて、勝てるかなあ…

「それと、もう一つ理由が。侵攻が始まるのは乾季に入つてかららしいが…それがタイミング的にかなりマズくてな」

「どうマズいの？」

「…クラウディア、この辺りが乾季に入るまであと1～2週間程なんだが、その頃には何がある？」

「え？えつと…」

「私に聞くつてことは、私に関することなんだよね？その頃には確かに…あ！」

「…そうだ、このままじゃ…！」

「ちよ、ちよつとちよつと。何か凄く焦つてるけど、一体何があるのよ？」

「…お父さんが中央に販路の申請を出してて、それが通るかもしけないって言うのが丁度1～2週間後くらいらしいの」

「…えーっと、つまり…どういうこと？」

「…バレンツ商会は、乾季に入る頃に中央に商売しに行くつてことだよ」

「うん…だから、皆ともう少しでお別れしなきゃいけないの」

「そう、なんだ」

「いけない、んだけど…」

ライザ、凄く寂しそうな顔してる。レント君もタオ君も、アルム君も。…私も、今から寂しくなっちゃうな。

でも、今アルム君が言おうとしてることはそれどころじゃないって話。だつて…

「…つて、ちよつと待つて!? ジャあこのままファイルフサを放つておくと…」

「ああ。…ファイルフサの侵攻と、バレンツ商会が島を発つタイミングが被りかねない」

「…なんだそりや、最悪じゃねーか…！」

「商会にも護衛の人達は居るだろうけど、流石に対処はできなさそうだよね…」

確かにタオ君の言う通り腕のいい護衛の人を雇つてはいるけど…ファイルフサの大群に襲われたらどうしようもないよ。

「…確かに、それは寂しがつている場合では無いな」

「私達も、彼らにはこの島に来る上で世話になつた。奴らに躊躇されかねないのを見過ごす訳にはいかん」

「ええ。それに、あまりボオスやキロさんを待たせるのも申し訳ないですから」

…うん、蝕みの女王を倒したい理由、倒さなきやいけない理由は沢山ある。じゃあ、何としてもやるしかない…よね。

「よつし…じゃあ、色々準備しないとね。まず最初に装置の部品は作つておくとして、武器とか道具はもつと強くしたいけど…」

「道具なら、レシピに使えそうなものをルベルトさんから貰つておいた。『月の魔力』に『^{エルナーランプ}大地の怒り』だな」

「どれどれ…これは、凄いものを手に入れたな。クラウディア、彼は一

体どこでこんなものを?」

「えつと…いろんなところに伝手があるのは間違いないんですけど、ちよつと解らないです…」

アンペルさんが唸るくらい凄いものが載つてたの…? 本当にどんなルートでお父さんの所に渡つて来たのかな…

「そういうやまだ見つけてねえお宝があつたよな…また何かのレシピが

あつたりしねえか？」

「どうせなら道具、そのものにあつてほしいけどね、もつと良いコアクリストアルとかさ」

「ふむ、ならばそちらの調査もするぞ。今までの傾向を見るに、損はないさ」そうだからな」

…そうやつて、皆と冒険できるのもあと少しなんだね。うん、だつたら最後まで楽しまなきや。楽しんで、頑張つて、勝つて…：

「よ一つし！じやあ、島の為と、クラウディア達が安全に旅立てるよう

に！」

「『蝕みの女王』討伐の為に、全力を尽くそう」

「おう！」「うん！」「ああ」

「またね」つて言つて、笑顔でお別れしたいな。

「――そういう理由があつて、俺達は蝕みの女王の討伐を決めた」「…成程、話は理解した。確かにそれはさつさとどうにかしねえと不味いな」
乾季が近いからまさかと思つてたが…本当、偶然にしてもひどいタイミングだな」

いきなりの報告に面食らつていた2人に、俺は昨日の話し合いの内容を話した。とりあえず、事の深刻さを伝えることはできたみたいだから何よりだ。

「で、勝つ算段はあるのか？」

「その為の準備をこれからする。道具に武器に作戦に…それら全てをギリギリまで詰める」

「…行けるのか？正直、そこまで時間は無いだろ」

…そうだ。確かに、国1つ落としかねない怪物共を7人で相手にするなんて、普通は無茶もいいところだ。だが…：

「やらなければこの辺りの土地は何もかも破壊し尽くされる。それに、被害がそれだけで済むという保証も無い」

「…そうか。クリント王国は一応追い返しはしたが、そういう抵抗が

無ければ奴らはこの世界に留まるかもしれないのか

「そしてここから地続きの土地をどんどん侵攻していつて…か。仮にどこかで止められたとしても、被害は出るだろうな」

ファイルフサ達にはこっちの世界の環境が合わないから時期が来たら帰る…なんて可能性もあるだろうが、そんなものに賭けられるほど呑気な話じやない。

「本当なら死ぬほど止めたいんだが…言つても聞かないよな。それで、確かアタシに何か頼むかもしれないって言つてたな？」

「ええ。蝕みの女王を倒しても雑兵がこっちに漏れ出てこないとは限らないので、その辺りの確認が取れるまで島の人達が外に出ようとしないか見張つっていて欲しいんですが…」

「ああ、任せろ。…止められないなら、せめて直接手を貸したいんだがな」

「…特に何も無い筈なのにアガーテさんを島の中で見かけないなんて気づかれたら、何かあると思われてしまいかねないですから。あくまで俺達の冒険の延長の出来事として、誰にも何も知られず済ませたいんです」

極力話を広めて欲しくないというアンペルさん達との約束もあるが：俺自身、この島の日常にこんな話は必要ないと思つてる。皆の中では、「乾きの悪魔」は言い伝えだけの存在。万が一にも、実在することを知つてほしくは無い。

…それに、知られたうえで上手く行つたら「島を救つた」なんて周りから囁かれかねないしな。そういうのは、別に要らない。窮屈になるだけだ。

「…」ういう時、待つ事しかできねえのは歯痒いな

「お前にはその後に任せることがあるからな。…さて、淡水化装置の方は上手く行つたみたいだな」

話が大方終わつたタイミングでライザ達が地下から上がつて來た。
…特に何事も無さそうだな。これまで一つクリアだ。

「こつちは上手く行つたよ。で、そつちは話し終わつた？」

「ああ、丁度な」

「では、早速蝕みの女王討伐の準備に移ろうか。時間は有限だ、可能な限り効率良くやるぞ」

「ならまずチーム分けした方が良いか？探索と調合のよ」

「調合はライザとアンペルさんだけでいいんじや？」

「いや、鍊金術士2人は調合に集中させた方が良いだろう。大掛かりな調合は大きく体力を消耗するからな」

「じゃあ、そつちはアルム君に居てもらつた方がいいかな？2人以外なら一番道具を使うのが上手だし」

「…俺か」

俺も探索側に回りたかつたが…まあ、そういう理由があるなら仕方が無いな。

「それにほら、ライザってこういう時無茶しそうだから、いざつて時のストップパーが出来そうなのは誰かなつて思つたら…」

「ああ、それはアルムしかいねえ」

「僕らだと押し切られるかもしれないからね。ちょっと情けない話になるけど…」

「いや、あたしだつてそれくらいは自分で」

「いつもより目を光させておく」

「アルム！」

「ふむ、まあ私が何か言うよりは手っ取り早そうだな」

「お前も熱中し過ぎて倒れるなよ、アンペル。今のお前はそうなりそうな雰囲気がある」

そもそも鍊金術そのものに熱中している所に「頑張らなければいけない理由」がつけ足されるわけだからな…今のライザなら本当に倒れるまで無茶をしかねない。

しかもアンペルさんも割とそのクチらしい。…ライザは兎も角、俺にアンペルさんまで止められるか…？

「アルム、もし無理そうだと感じたなら遠慮なく蹴り飛ばせ。私が許可する」

「おいやめろ。アルムの遠慮ない蹴りなぞ食らえば即座に地獄が見えるぞ」

「…やりませんから安心してください」

余程の事が無い限り人に向けたら拙い威力しての自覚はあるんですけど、これでも、レントは…まあ蹴るとしたら模擬戦だしセーフで良いか。人並外れて頑丈だしな。

「…こんな時でもいつも通りか。全くお前らは…」

「もはや安心感すら覚えるよ、本当に」

「褒められたのか呆れられたのか…まあ、前者だろうな。

「さて…じゃあ、準備に取り掛かるか」

「まず新しい道具の調合と、次に今使つての道具の改良と…」

「その前に素材の確認だな。畑で採れる分と奴^{ぶに}が持ち込んでくる分もあるから、色々試せるぞ」

「んじや、こつちはまず宝の地図の確認だな」

「えっと…今残つてるのはあと2つだけ?」

「何か役に立つものが見つかれば良いけど…」

「そつちに気を取られ過ぎて採取を怠る真似はするなよ。どれだけ優れた鍊金術士も、素材が無いのでは何もできんからな」

「そうやつて全員で話し合いながらこの場を後にしようとすると…」

「…お前等」

「どうした? ボオス」

ボオスが声をかけてきた。何か言いたいことがあるのか?

「…絶対に、帰つてこい。全員無事で、だ」

「…ああ、確かに。何を言つても、結局それが一番大事なことだな。

「ああ。当然だ」

絶対に蝕みの女王を倒し、またここに帰つて来よう。絶対にな。

お互に準備完了、決戦の時は近い

「さて、では始めていくか」

「うん。えーっと必要な物はこれと、これと、これと…」

「なんだ、事前に作つてあつたのか」

「鍊金術が楽しくて、思いついたのは片つ端から色々作つてたの。あ、ついでにアレも作れるかな…」

蝕みの女王を討つため、早速私達は調合を始めたことにした。今回アルムが譲つてもらつたレシピ…ルナーランプとエターンセルファアの作成を最優先に行う。

ただ、その際別の調合品が必要になるのだが…そつちは既にライザが作つていた。これらも相応に難易度の高い調合の筈なのだが…好きこそもの、とは良く言つたものだな。

「ところでアルムは？」

「あたし達のおやつ作つてる」

「ほう」

料理ができるのは知つているが…成程、楽しみだ。

「あ、「アンペルさんは今後あまり無理をし過ぎたらお預け」だつてさ」「…気を付けよう」

…私の事もよく理解している。自己管理を怠り、倒れるような真似だけは避けねばな。

しかし、その口ぶりだとライザは無条件で菓子にありつけるのではないか？好意を抱いている相手とは言え少々贔屓が過ぎるぞ、アルムよ。

「じゃあ、どつちから始める？」

「ルナーランプからで行こうか、こちらの方が難易度はまだマシレベルだが低い。…方が一の時の被害もこちらの方が小さいしな」

「怖いこと言わないでよ！いや、確かにそれくらい凄いもの作らなきゃ勝てないかもしないけど！」

「ランプならまだ私達2人が長めに苦しむだけで済むが…セルフイアの場合、下手すれば一撃で私達諸共アトリエが何もかも吹っ飛ぶ」

「と、とんでもないねそれ…」

「そういう事だから、急ぎつつ無理せざるぞ、と言う話だ」

「う、うん。：なんか凄いところまで辿り着いたやつた感じがするなあ。まだ鍊金術始めて2か月経つての怪しいくらいなのに」

私が鍊金術を始めて2ヶ月くらいの頃は…どうだつただろうか。少なくとも、ライザ程純粹に鍊金術を楽しむことはできていなかつたような気もするが…

…やはりあまり年は取りたくないな、細かいことを思い出せなくなる。

「では、調合を始めるぞ」

「うん…さーて、良いの出来るかな？」

お前と私なら、これ以上無いものが作れるさ。

「ふーつ、これでようやく1個…じゃなくて、3つだね」

「…なんとも、まあ」

調合開始から1時間、漸くルナー・ランプが完成した。：いや、漸くと言うのは誤りか。これほどのものの調合は本来2時間ほどかかる筈なのだが。しかも調合に使つたものの中に質の良いものが混じつていたらしく、一度に3つも調合できた。しかもその口ぶりだと、最初から3つ出来ると確信していたようにも聞こえる。

全く…どこまで私を驚かせてくれるんだ、お前の才能は？

「…流石にいつもより時間がかかるつていたな。一旦休憩したほうがいいんじゃないいか？」

「あ、アルム。…もしかして、ずっとそこに？」

「ああ。おやつの方は冷やす時間が必要だし、本の解説もまだ終わつてなかつたからな」

「ふむ、食べる前に冷やすもの…？」

「もう十分冷えていると思いますし、休憩ついでに今食べますか？」

「では頂こうか」

「うわ即答。まああたしも食べたいけどさ」

「さあ、どんなものが出てくるんだ？」

「じゃあ…ラーゼンブティングです」

「ほう…」

「わ、アルムこれ作れるんだ！」

出てきたのは以前ライザが島の住人の依頼で開発した菓子、ラーゼンブティングだ。あの食感、香り、甘味…自他ともに認めるスイーツ好きである私を唸らせる逸品。

しかし鍊金術なら兎も角、手作りとなるとそれはそれで手間がかかること物だと思うが…

「以前エルに『アルム兄の手作りで食べてみたい』とせがまれたことがあってな。練習していた」

「エルちゃんそういうのアルムに頼むよね。ルートリアさんじやなくて」
「まあ、母さんは普段から家事で忙しいからな。俺の方が頼みやすいんだろう」

「子供なのだから、もう少し遠慮なく甘えてもいいと思うが」

「…そこは多分、俺の影響かと。結構早いうちから親の手伝いを始めてましたから」

「あー…そういえばルー・テリアさん言つてたかも。「アルムはあんまり甘えてくれないからちょっと寂しい」って」

「ああ、良い子過ぎて逆に心配という奴か」

…親からの心配、か。私は、どうだつただろうか。

「つと、そろそろ頂こうか。こうも芳醇な香りを嗅がされ続けては、もう我慢の限界だ」

「そうだね。じゃあ、頂きまーす」

スプーンで一口分掬い、口に運ぶ。…ああ、舌の上に乗せているだけで溶けてしまうんじやないかと思う程の柔らかい食感、ミルクとハチミツがベースの濃厚だがしつこすぎない甘味に卵のコクと風味、そしてそこにカラメルの苦みがアクセントとなつて…至福としか言いようが無い。よくもまあこれほどのものを…

…クラウディアには内緒にしておいた方がいいかな。いやでも、あたしだけがこれを味わうのもよつと…」

「どうせ近い内に食べさせるつもりだから構わないぞ。：しかし、好評なようで何よりだ。素材も良いものを使つたから当然と言えば当然だが」

「ふむ、何を使つたんだ？」

「ライザが調合したハチミツとかエルツ糖とか、あとぶにが拾つて来た卵とヤギミルクですかね」

「あー、あの子が拾つてくるものつて妙に品質良いんだよね」

奴にもそういう嗅覚が備わつてているのか、それとも偶然か…いずれにせよ奴も、ライザの鍊金術士としての人生の助けになつてくれそうだな。

「さて…じゃあ、そのルナーランプを試してみたいんですけど」

「ん、そうだな。それなら良いものを用意してある。これだ」

「え、何これ。オオイタチ？」

「ラムローストくん2号だ」

「…ラム、ロースト？」

「…何処がラムで、どうローストしてあって、何故くん付け？しかも2号？」

「私も知らん」

命名者があまりにも独特なセンスの持ち主だつた…としか言いようが無い。私も最初に聞いたときは困惑したものだ。

「まあ、名前と性能は関係ない。そいつはお前の全力でも壊れないくらいには頑丈だからな、遠慮なくぶつけると良い」

「解りました。…アトリエの近くでやるのは危ないな、開けたところまで持つていくか」

「あまり離れすぎるなよ。そいつは使うと体力を持つていかれるからな」

「気を付けます」

まあ、効果範囲を狭めればその心配も必要無いが：相手にするのが蝕みの女王だけとは限らない以上、できるだけ広い範囲に対処できるようにしておいた方が良いからな。

「さて、じゃあ今之内に次の準備しよつか」

「ああ。エターンセルフイアは上手く行けば女王相手にも切り札に成り得る程に強力な代物だ。確實にやるぞ」

私でも、数えるほどしか作つたことのない代物だが……さて、どこまで質を高められるか。

「いやー、良い物見つけたな」

「そうだね。：冗談のつもりだったのにまさか本当に見つかるなんて」

地図に残されていた手掛けかりを辿つてお宝を見つけ、採取も一通り済ませた僕たちはアトリエに戻つて来た。今回見つけたものは、今までの中でも特に有用な物だつた。何せ：

「今までのものより更に質のいいコアクリスタルだ。これにより道具を使いやすくなる」

「ふふっ、ライザ達が見たらすごく喜びそうですね」

更に容量の増えたコアクリスタル。ライザ達が強力な道具を作つている時にこれが見つかったのは運がいいよね。

「そつちもそうだけどよ、俺にとつてはこつちの方が重要だぜ」

『ゴルドテリオン』に『エルドロコード』……なんか、凄いものが出来そうだよね」

『鍊金術の神髄』なんて大仰な名前がついてるレシピだしね。：今よリ凄い武器か、アルムやレントがそんなの身に着けたらどうなつちやうんだろう。

「さて、アイツらは無理せずやつていただろうか」

「そうですね、倒れてないと良いけど……みんな、ただいま」

クラウディアが扉を開けて中に入ると…

「すー…すー…」

ベッドの上でぷにまくらを抱きながら寝息を立てているライザ。まあこれは良いや。

「ん、ああ。戻つたか」

ドーナツを食べながらコーヒーブレイクしているアンペルさん。

うん、これも別に良い。問題は…

「……」

やたら大きいپにまくら（つていうかクツショーン…？）の上で無言でぐつたりしているアルム。…えつと…

「…何でお前が一番疲れてんだよアルム!?」

うん、正にそれ。

「そうだな、まずどこから説明するか…まあ元々予定していたものと、追加で1つ作れるものがあつたからそれを調合したんだが、その辺りでアルムが『そろそろ休め。火にかけた釜を立ちっぱなしで何時間もかき混せてて疲れない筈が無いだろう』とライザに言つてな

「あー、言われて見りや結構大変な事してたんだな鍊金術つて…」

「ライザとアンペルさんは2人でやつてたからまだしも、1人だと相当キツイよね」

「ふにまくらを押し付けてから横抱きでベッドまで持つて行つて無理矢理寝かしつけた」

「…横抱きつて何だ？」

「えつと、ライザにするのなら所謂お姫様抱っこだね…」

「絶対顔真つ赤だつたよねライザ…」

「フレスベリーもビッククリの赤さだつたな。まあ今は御覧の通りだが」

…ホント、ちょっと前までは全く表に出して無かつたのに今じやもう本人にも全然隠す気無いよね。

「で、アルムの奴はなんであんなつてる？」

「…私とライザが作った道具が、余りにも効果が強すぎたというか

「な。何を作ったんですか…？」

「これだ」

そう言つて出てきたものは…時計？

『时空の天文時計』だ。星の動きを見て時の流れを置き換える力を持つ

「と、時の流れを置き換える？」

「簡単に言えば高速移動が可能になる。まるで1人だけ時が速く流れ

ているように、だ

「め、メチャクチャだよ…」

もうここまでくると下手な魔法とは比べ物にならないことして
るよ、錬金術…
「えっと…でも、それとアルム君がぐつたりしてることと何の関係が
…？」

「一言で言うと、酔ったんだ」

「酔った？」

「ライザが寝た後にアルムがこれを試したんだが…自分だけ加速した
状態から急にいつもの速さに戻ったから、その反動が来てああなつ
た。しかもライザが張り切りに張り切ったおかげで、効果がかなり強
くなつてな」

「成程。元が速い上に加速幅も大きいから、その分反動も大きくなつ
たのか」

「曰く『脳がひきつけを起こしたような感じ』だそうだ。慣れればこん
なことは無くなるだろうが」

「体験したくねえ…」

…うん、強いは強いけど、相応のリスクがあるってことだね。

「因みにこのルナーランプとエターンセルフイアも試してもらつた。
ランプの方は『簡単に言うとものすごく強い目潰し。強いのは間違
ないが使うだけでどつと疲れる』だそうだ」

「セルフイアは?」

「これは絶対その辺の魔物に向けてはいけない。下手したら地形が
変わる。蝕みの女王を倒したら封印した方が良いかもしねない』と
言つていたな」

「どんだけヤバいんだそれ…」

「本当に、どうやつてそんなもののレシピ手に入れたのお父さん…」
「まあ、そこまでの代物になつたのはライザの努力と才能の賜物だが」
聞いてたら絶対「ふふん、どうよ」って感じで誇らしげにしてきて
うだなあ…

「…えへへ♪」

と思つたらライザから嬉しそうな寝言が。：：実は起きてたりしない？それとも偶然似たようなこと言われた夢でも見てる？

「さて、休憩のつもりだつたが…2人がこんな状態だ、今日はもうお開きにした方が良いと思うが、どうだ？」

「そうだな、特にアルムは早めに休ませた方が良いだろう」「その前にアイツ動けるのか…？おーい、アルム！」

「…歩く程度なら、何とか：」

「相当弱つてんな…お前酒に限らず『酔う』のに死ぬほど弱いんだな」「…アレとは、また、別だ：」

「…今日は僕がオール漕ぐよ。アルムはゆっくりしてて」
流石に、こんなことになつてるアルムに力仕事させちゃダメだよね。まあ僕は僕でほとんど漕いだことないからちゃんとできるか不安なんだけど…。

「えつと、ライザはどうしよう？」

「…クラウディア」

「え、何？アルム君」

「…出来るだけ、低い声で、『ライザ、早く起きな』と、怒鳴るように、

言うと、多分起きる」

「ミオさんの真似じやねーか」

「まあこの上なく効くよね、それは」

「え、えつと、じゃあ、やってみるね。…んんつ」

クラウディアが軽く咳払いをして…

「ライザ、早く起きな!!」

「ひやあっ！」

叫んだら、跳びあがるようにライザが起きた。…あんな声出せるんだね、クラウディア。

「え、ちょ、え、お母さん!?なんでここに…あれ？」

「えつと、ごめんねライザ。今の私なんだ」

「…へ？クラウディア？」

「すげー迫力だつたな、今の」

「普段見せない姿だつたからな。ギャップも大きいだろうよ」

「あ、あはは…人前で大声出すのって、結構恥ずかしいね…」

「うん、僕もあんまり人前で大声は出したくないかな。そもそもそんなに声出ないけど…」

「あー、ビックリしたあ…ってあれ、アルム!? 大丈夫!?」

「…時間差に、酔っただけだ」

「ちよつと天文時計を試したらこうなつてな。明日には大方和らいでいると思うぞ」

「そ、そなんだ…ゴメンね?」

「…気にするな」

…アルムがこうなるつてホント相当だよね。高速移動はちよつとしてみたいけど、こうなるつて知っちゃうとなあ…

「さて、先ほども言つたが今日のところはこれでお開きだ。しつかり休めよ、特にアルム」

「はい…」

ぐつたりしたアルムを抱えながら、僕達は島に戻つた。：アルムを中心配するエルちゃんを宥めるのがちよつと大変だつた。

そんな感じで、僕達は準備を進めていつた。

「ゴルドテリオン…これ、凄いよ…！今まで一番すごい武器作れるかも！」

「おう、頼むぜ。道具も良いけどよ、やつぱり俺は剣で戦いてえしな」「これでフルートも凄くなるつて不思議だよね…」

「まあ鍊金術だしな。…ところでライザ、俺の武器に関しては一つ注文がある」

「え、なになに？」

「性能の方向性についてなんだが…」

「ふむ、やはり基本的に足を止めて戦うのなら反動も然程ないな」

「その代わり、珍しくリラさんがグロッキーになつてるけど…」

「…これは、アルムがああもなるわけだ」

「リラさんでもそうなるのか…俺はそこまで速くねえから大丈夫そう

だけどよ」

「以前、毒キノコをどうにかして食えないかと苦心した時に、空腹に限界が来てそのまま食つてしまつた時以来の苦しみだ…」

「いや何やつてんすか!?」

「そういうところ変に思い切りが良いって言うが、なんて言うか…」

「あ、そうそうアルム! 実はあたしとクラウディアも必殺技的な考
えてみたの!」

「2人がか?」

「うん。やっぱりいざつていう時の奥の手はあつた方が良いよね思つ
たから」

「ただ、どつちも女王だけに向けるつてなるとねー。群れとかに撃つ
ならいいんだけど」

「いや…女王の近くに多くのフィルフサが控えている可能性もあるか
らな、そういう時の対抗策があるのは有り難い」

「じゃあ、どうしてもフィルフサが沢山いるところを通らなきゃいけ
ない時に使えばいいの?」

「ああ。勿論、温存できるなら女王に使つてほしいが」

「ライザ達も必殺技を考えたのなら、僕もやつた方がいいのかな」

「ふむ、どういう技をイメージしているんだ?」

「うーん、こう…一撃必殺! みたいな」

「モロにアルムとレントの影響を受けているな」

「んー、なら丁度いいイメージがあるだろ。見た目だけならそれっぽ
いのが」

「え?…あ、ハンマー?」

「ふむ…それなら魔力で巨大なハンマーを作つてそのままズドンにな
るな」

「成程、シンプルゆえに強力なものになりそうだな」

「あー、そんな単純でいいんだ…ありがと、何とか形にしてみるよ」

「おう。…でよ、ちよつと3人に相談があるんだが」

「ん、何だ？」

「…実は、俺の必殺技、まだ名前が決まってねえんだ」

「…それこそシンプルでいいんじゃないかな？」

「存外技名は大事だぞ。どう使うのかを解りやすくできるからな」「何にせよ早く決めろよ。そんな事で悩んでいたら不意を打たれて…など笑えもしない」

「…うす、早く決めます」

そして…

「…よし、新武器の慣らしも大体できたな。後は…」

「——お前達！来たぞ！『空読み』だ！」

「…遂に来たわね！」

『門』からファイルフサが出てきた。以前アンペルさんから聞いたけど、まず偵察として『空読み』が来て、乾季が近いと確認出来たらいいよいよ侵攻が始まるらしい。つまり…

「もうすぐ決戦の時、つてことだな！」

「ああ。まずは前哨戦、景気よく勝つて次に繋げるぞ」「うん。皆との思い出の場所、絶対に壊させない…！」

「僕も、覚悟を決めなきや…！」

まだまだ、この世界には知りたいことが沢山ある。ここで終わつてしまわないとためにも…頑張ろう！

決戦前日、思い思ひに過ごす戦士たち

「…もうすぐ、あの島にも別れを告げる時か」

「勝つにせよ、負けるにせよな」

「縁起でもないことを言うな」

そう話しながら、私達は小舟を漕いでクーケン島に向かつてゐる。先日、門から「空読み」が這い出てきたことで決戦の時が近いと悟つた私達は最後にやるべきことを子供等に告げた。

それは、奴らが守りたい「なんてことない日常」を見直すこと。要是、今日1日は冒険のことは一旦横に置いておいて島で過ごせということだ。

「だが、何かあればこの身を投げ出すくらいはしなければならないだろうな。奴ら自身もあの島の「なんて事の無い日常」の一部なのだからな」

「それはそうだが、恐らく奴らの中では私達すらその一部だと思うぞ？」

「…そうだな、奴らならば迷いなくそう言うだろう」

「無論、私はどうにかして全員生き延びる為に努力するぞ。…奴らに、永遠の別離はまだ早い」

「…ああ」

あいつ等には、失つてほしく無い。私達の悲願に手を貸してくれれるあの優しい子等に、あんな想いをしてほしくはない。

「…ふふ、まさかここまであいつ等に入れ込むことになるとはな」

「こんなことはアンペル以来だが…ああ、やはり悪くない気分だ。」

「む、私はどうなんだ？」

「今更言う必要は無いだろう？」

「…そうか」

…本当に解つてゐるのか？

「さて、もうすぐ港に着くな」

「あそこからなら…ボオスかクラウディアの所が近いな。さて、私達の言いつけ通りにしているか、見てやろうじゃないか」

全く、親のような物言いだな。気持ちは解るが、な。

「おや、今日も夫婦で来てくれたのかい？」

「夫婦じやない」

港に舟を泊め上陸すると、近くにいた老婆が声をかけてきた。⋮2
人で上陸するたびに言われているが、その度にこう、気が気じやない
とでも言うか、何と言うか⋮

「いやあ、でも二人があいつ等を見る目がなんか親っぽい感じがする
からなあ。そういうふうに見えても不思議じやねえよ」
「あくまで弟子とかそういうののつもりなんだがな」

「⋮」

「リラ？」

「…ん、ああ、すまん」

⋮いかん、あらぬ想像をしてしまつた。全く、余計なことを言つて
くれるな、若い漁師よ。

「で、誰に用があるんだい？アルムならここでちょっと待てば来るけ
どよ」

「そうなのか？」

「おう。畠仕事が終わると大抵いの一番にここに来て魚を買いに来る
んだよ」

「そうか、なら好都合だ。ついでに少しの間物色でもするか」
「甘味は買い過ぎるなよ？」

「言われなくとも解つている

「そういうとこが夫婦っぽいんだぜ、お一人さんよ」

これくらいのやり取りは今まで訪れたところでもしていたんだが
⋮まさか、その度にそう思っていたのか私達は？いかん、急に恥ず
かしくなってきたぞ⋮

「すいません、今日も魚を…ん、リラさんとアンペルさん？」

「あれ、アトリエでゆつくりしてるんじやなかつたの？」

「ああ。ちよつと様子を見に来たぞ」

暫くすると、ライザと共に本当にアルムが来た。二人共買い物かごにしては少々大きいというか、機械じみてるというか：どうみても鍊金術製の箱を持っていた。

「ん、冷蔵籠か。何かの役に立つと思いライザにレシピを教えたが、早く活用してくれているようだな」

「デザートの保存にも使えるから便利ですね。臭いもライザが改良して付かないようにしてくれていますし」

「成程、臭い消しか。確かにそれは魚を多く食す環境なら確かに必要だろうな」

「後、冷凍保存も出来るようにしたよ。2人の分も作つてあるから、後であげるね」

「ああ、旅先で使わせてもらおう」

魚の保存ができるようになるのか。今まで獲つたらすぐ焼いて食うか、せいぜい干物にするか位だつたからな。かなり有り難いぞ。

「それで、今日はどういう用事で？」

「ああ、ちゃんと言いつけを守れているかどうかを見にな。まあ、お前達は大丈夫そうだな」

「心配しなくとも、皆大丈夫だと思いますよ。因みに俺は買い物が終わつたら週に3回くらいはご飯時以外は島中を見て回っています」

「ん、自主的なパトロールか？必要なさそ豆だが」

「いえ、人間観察です」

…何というか、予想外の言葉が出てきたな。

「ふむ、何故そんなことを？」

…現状のこの島で一番「変化」に期待できるのは、人間関係とかそういうのなので。あいつとあいつが最近いい雰囲気だ、とか

「何だ、お前もそういう話が好きなのか？」

「嫌いでは無いですよ。まあ、知りたくはあつても、軽々しく首を突っ込む気までは無いですが」

「そうだな、余程親しくない限りはその方がいい。しかし…」

「それは、1人でやつているのか？」

「以前はそうでしたが、最近はライザと一緒にやつてますね」

「鍊金術の気分転換と人助けも兼ねてね。なんて言うか、いつも通り過ごしてゐるだけに見えて、みんな結構色々悩みとか抱えてるんだなーって解ったよ」

「そういう気付きは大事だな。…しかし、定期的に2人でいると、もうそういう関係だと島中で噂されていそうだな？」

「ちよ、アンペルさん！あんまりそういうこと言わないでよ！」

「ええ、もう慣れました」

「そうか」

「アルム！」

この2人でそう言われるなら、各地を2人で回つている私とアンペルも…いや、あの老婆と漁師の反応が答えか。

「え、ちょっと待つて、そんなに島中で言われてるの!?」

「狭いからな、この島。そういう話が広まるのは早いぞ」

「いやそれは知つてるけど！え、つていうか、その」

「何だ？」

「…アルムはその話について、どう思つてるの？」

…随分踏み込んだことを聞くな。さて、アルムはどう返す？

「…そうだな」

そう言つてライザの耳に口を近づけ…

「嬉しいに決まってるだろ」

「くくく！」

小声でそう言つた。…ライザの頭でフラムにも劣らない爆発が起きたな。

「何を言つたのかは聞き取れなかつたが、なんとも解りやすい反応だな」

「あまり弄つてやるなよ」

「流石にそんな大人げない真似をするつもりは無いぞ。それで、2人はこの後どうする？」

「日課のついで程度にですが、俺達も皆を見に行こうかと」

「そうか。…とりあえずその前に、ライザをどうにかしてやつた方が良いぞ」

「…あうう…」

「…正直に言い過ぎたか」

だろうな。…しかし、常日頃から思うが、本当に意中の異性からあ
あ言われただけでああもなつてしまふものなんだろうか。流石にラ
イザが弱すぎるだけか?ふむ…

『ん、お前と夫婦扱いされて嬉しいか、だと?今更何を聞くかと思えば
…当たり前だろう』

(…………いや、無いな)

こいつはそんなこと絶対に言わん。

「——よし、こういうときはクラウディアの演奏を聴いて落ち着くに
限る!」

買い物を終え、家に戻る過程で多少落ち着きを取り戻したライザ
は、バレンツ邸の前で拳を上に挙げてそう叫んだ。まあ、確かにそう
いう曲をリクエストすれば落ち着けはするだろう。が…

「事情を知れば、むしろ揶揄つてくると思うが」

「以前私達もやられたな、そういうえば」

「間違いなく俺達の中で一番そういう話に興味ありますよね、クラウ
ディア」

「…あれ、もしかして一番危ないとこ選んじゃった?」

漸く気付いたか。まあ、どうせ全部見て回る予定だつたから、順番
が違うだけなのだが。

「というか、そもそも吹いてくれるのか?まだ父親の前で吹けるかど
うか解らないだろう」

「…あ、そつか」

「ゆっくりしている所を無理に連れ出すわけにもいかないしな。ま
あ、聞ければ御の字くらいの気持ちで言つた方が良さそうだ」

少なくとも、勇気や度胸の類はもう十二分に備わつてはいる筈だか
ら、後はどう話を切り出すかだけだろうがな。

「さて、では…」

「あれ、みんな?」

いざバレンツ邸に入ろうとしたその瞬間、フルートのケースを抱えたクラウディアが出てきた。

「あ、クラウディア！今から練習？」

「えつと、今日はお願ひしたいことがあるつて…」

「え、なになに？あたしにできることなら何でも聞くよ！」

「ありがとう。実はね…」

クラウディアの「お願ひ」の内容を聞いた私達は、それを直ぐに了承し、早速実行に移した。

実のところ、詳しい事情は知らないが…クラウディアが父親に向かって一步踏み出す勇気を出したことは十分に伝わってきた。私達の存在がその助けとなるなら、頬くらいはいくらでも貸してやろうじゃないか。

「ふむ、アルム君とライザ君は兎も角、お二人が来るのは少々珍しいな」

「今日は偶々居合わせてな。まあ、付き添いみたいなものだ」

早速私達はクラウディアの父親を呼び出した。次の販路の許可の返事待ちをしている段階だからか時間があつたのだろう、直ぐに応じてくれた。

「実際には、ルベルトさんに用事があるのはクラウディアですね」

「クラウが私に？…それは、フルートか？」

「…今まで、隠しててごめんなさい。私ね、これを練習する為に今まで何度も商隊を抜け出してたの」

「何…？しかし、初めの頃は…」

「私がお父さんの前でフルートを吹く度に、とても悲しい顔をしてたから、それが辛くて…」

「私が、そんな顔を…」

クラウディアがいつから商隊について來ているのかは知らないが、優しい娘だからな。自分のしたことで父親が悲しんでいると知ればそうなるか。

「でも、練習を続けてもつと上手くなればいつか喜んでもらえるん

じゃないかって思つて、それでずつと隠れて練習してて……」

「……今まで商隊を抜け出していたのは、そのフルートで私を悲しませない為だつたのか」

「うん。……でも、結局また悲しませるんじやないかって思つて、中々お父さんの前で吹く勇気が出なかつたの。でも……」

「……彼ら、か」

「うん。ライザやアルム君達と出会つて、私の演奏を褒めてくれて、これが人の心を慰められるものだつて知つて……それで漸く、お父さんにこれを聞いてもらう勇気が出たの」

「アルムなんか、初めて聴いたときにアンコールしてたくらいですから。ね？」

「……ええ、まあ」

「……それはまた、クラウが恥ずかしがつただろうな」

「あはは……うん、凄く恥ずかしかつた」

「そんなことをしていたのか、アルム。まあ気持ちは解るが……割と思い付きと衝動で動くことが多いな、アルムは。

「でも、今は違うよ。私はもう、これでお父さんを笑顔にできるかもしれないって、そう感じることが出来たの。だから……」

「……ああ、分かつた。クラウ、お前の演奏……聞かせてくれ」

クラウディアが目を閉じ、大きく息を吸い、フルートを吹き始めた

「……フルートの演奏会は、数年おきに旅に出る私と、母さんとクラウの、とても楽しい思い出だつた」

父親の前で行われたクラウディアのフルートの演奏は、今まで一番と言つていゝものだつた。恐らく、クラウディアの中から迷いが無くなつたからだろう。淀みなく、美しく、力強かつた。

そしてそれが終わつた時、クラウディアの父親がぽつりぽつりと言葉を紡ぎ始めた。

「だから、母さんのそばを離れ、私と旅に出たお前がフルートを吹く姿に……私は、この子は母さんの元に帰りたがつてゐるのではないかと、

思つてしまつたのだろう

：成程、確かにそれは悲しい表情の1つも浮かべてしまうだろうな。こちらの子供は、父親より母親に懐く傾向が多いそうだしな。「確かに、その気持ちが全然無かつたわけじやないけど…でも、私は父さんの娘だよ？」

旅は私にいろんなものをくれた。綺麗な景色、いろんな食べ物、知識、経験：それに、大切な友達。

だから私、旅は好きだよ。すっごく、大好き

「…そう、か」

クラウディアは今回の旅で、かけがえのない友との出会いと、己を肯定する切つ掛けを得た。これは、更に旅を好きになるだろうな。「…一度、母さんの下に帰ろうか。お前の素晴らしい上達ぶり…三人の演奏会で聞かせてあげよう」

「…うん！」

「アルム君、ライザ君。君達がクラウの友達になつてくれたこと…本当に感謝している」

「いえいえ、こちらこそ！クラウディアには助けられることも多いので！」

「持ちつ持たれつ、というやつです」

「そうか。…ふふ、君達との出会いは、私達にとつて実に大きな幸運となつたな」

その意見には、全面的に同意だな。

「あれ、タオとボオス？珍しい組み合わせじゃん」

「あ、ライザ。…とアルムと、アンペルさん達？」

「2人もこつちに来てたのか。こいつらの様子でも見に来たのか？」

噴水広場に来た私達は、タオとボオスが話している所に遭遇した。よく見るとボオスが紙を持つていて、メモ書きか何かか？

「そんなところだな。それで、2人は何をしている？」

「ええっと、もしもの時の為の準備っていうか…」

「こいつは、クーケン島の制御装置の動かし方が書かれたメモだ」「…そういうことか」

確かに、最悪の時の為の備えは必要だったな。私達が帰つてこれなかつたら、誰もあの本を読めなくなり、この島の調整を行える者がいなくなる。

「正直ビックリしたぞ？ タオが真剣な顔でいきなりこんなものを寄越してきたんだ」

「…国を滅ぼすような化け物の親玉を倒しに行くわけだしさ。事情を知つてて、こつちに残る誰かにこの情報は渡しておかないとつて思つたんだ」

「確かにそれならボオスが適任だな。エルには異界の事は話していくないし、それ以前に『俺達は死ぬかもしれない』なんて言えない。アガーテさんは…多分こういうのは苦手だろうしな」

「あー、確かに。絶対途中でわけわかんなくなつてタオに助けを求めてそう」

「…うん、僕もその光景が凄く目に浮かんだ」

「聞かれていたら怒られるぞ？ 正直俺もそう思うが」

：姉弟分達にそんなイメージを持たれているアガーテに少し同情した。まあ確かに不器用そうではあるが…

「とは言え、こつちとしちゃお前らが帰つてくる可能性以外考えたくないがな。友人に死んでほしくないのは当然として、それを抜きにしてもまず島民達に事情の説明をしなきやならんし、島をどうにかできるレベルの鍊金術士を探さなきやならんし、見つかつたところでそいつの性根が良いとも限らない」

「うわ、考えただけで立ち眩みするレベルで大変そう…」

「なんなら、俺はもう既に胃が痛い」

「…今丁度コアクリスタルにエリキシル剤を入れてるが、使うか？」
「贅沢な使い方だなあ…」

性根だけならともかく、才能もとなると…島どころか、ボオスの寿命が尽きるまでに見つかるかどうかだろうな。このレベルの鍊金術を単独で扱える者は希少だ。

「まあ、そのことに関しては信じてくれとしか言いようがないな。出来る限りの準備はしたつもりだ」

「…本当だな？」

「乱発すると地形を変えかねない爆弾のような物とか、自分の周りだけ時空を捻じ曲げる時計とかな」

「おい何だその聞くだけでヤバそうな道具は。別の意味で不安になるぞ」

「うん、あたしもそう思う。自分で作つといてなんだけど」

「なんならリビルトまでやつて出来る限り性能を高めたからな。アルムが言つていたように、余程の事が無い限り封印推奨な代物だろう。

「まあ、そこまでやつてるんなら俺からは何も言えねえな。…勝てよ」

「「ああ」「うん」」

この約束を違えさせないよう、私も死力を尽くすか。

「さて、後はレントか」

「この時間なら、いつもなら家の前で日課の素振りをしていると思いませんが…」

「レントの様子を見に行くために、私達はレントの家まで向かう。「ん…：素人考えだけど、あれだけ強いと今更素振りつて意味あるのかなって思っちゃうんだけどどうなの？」

「その発言は鍊金術上で言うと「今更中和剤なんて作らなくていいんじゃないか?」とほぼ同義だ」

「成程、すつごい大事だわ素振り」

「我が弟子ながら、鍊金術で例えると即座に理解してくれるのは有り難い。基礎は何より大切だぞ、ライザ?」

「まあ、素振り中ならそれで構わん。あくまで様子を見に来ただけだからな」

「それなら、態々素振りが終わるまで待つ事も無いですね。少しだけ様子を見て——ん?」

「アルム、どうしたの?」

「…金属がぶつかり合う音だ」

私にはよく聞こえなかつたが…金属がぶつかり合う音だと?

「え、もしかしてザムエルさん…?」

「状況的にほぼ確定だろうな。…ということは、剣を持ち出しているのか?」

「関係は徐々に修復されていると聞いたが…」

「…今更滅多なことにはならないと思うが、一応急ぐぞ」

流石にこんなところで血生臭い事になるとは思えんが…やはり弟子が心配なのだろう、真っ先にリラが駆け出した。

「…言い争うような声も聞こえてきたな」

「え、それホントに大丈夫なの…!」

「いざとなつたら無理矢理止めるぞ」

「ああ。…着いたぞ。レント、大丈夫——」

レントの家にたどり着いたとき、目に入つたのは――

「あ▣あ▣クッソ!! ホントに最近までブランクあつた元飲んだくれかよ!! 馬鹿力は健在どころか磨きがかかってんじやねーか!!」

「はつ、何ヶ月もかけてじっくり錆を落としやあこんなもんよ!! それと技でも負けるつもりはねえぞ!!」

「もつと早くそんな感じでマトモになつてりや母ちゃんも逃げたりしなかつただろうによ!!」

「それについては返す言葉もねえ!!」

「つーかエルにあそこまで言われて何も言い返せなくなつてんの今思うとホント情けねえな!!」

「マジでそれは言うな!! 今でも会うとなんか氣い遣われるんだぞ!? 挫折した息子を心配する母ちゃんか何かアイツは!! あの年で!!」

「いいじやねえか!! 最近島の子供から怖がられる」とも無くなつてきてんだろう!!」

「大半が山登りの山扱いしてくるがな!! アルムのが背高えんだからそつちに頼みやいいのによあいつ等!!」

「親父のがゴツいから登りがいがあるんだよ!!」

「ガキどもの癖に変なこだわり持つてんなオイ!!」

…何と言ったか、親子の口喧嘩と高度な戦士の戦いを両立していた光景だった。しかし、少し前まで島でも有名な酒に溺れた乱暴者だったらしい大男を遊具にするとは、この島の子供はどうも肝が据わつているようだ。

「——だ な

「えーっと、何あれ。ケンカ?」

「というより、じやれあいと言つてもその的外れではなさそうだな」「それでいて打ち合い自体は結構高度と言うか…お、そのタイミングで蹴りを入れられるのか。こういうところは流石だなザムエルさん」「なんかアルムが観戦モード入つてる…」

「…今のは無理に打ち合わせに受け流して拳で一撃入れるべきだったな。まだまだ相手の動きを読む技術が甘いぞ、レント」

「…リラも師匠モードだな。やれやれ、2人が止まるまで待つとしようか」

この喧嘩のような、じやれあいのような、決闘のような打ち合いは30分程続いた。勝者は…

「ハツ、ハツ、っしゃああああっ!!」

「くつそ、スタミナまでは、誤魔化せねえか…!」

「そりや、こつちは、親父が、飲んだくれてる、間も、特訓、してた、からな!!」

レントだった。体を鍛え、かつ冒険に出て魔物を相手にしているレントと最近まで酒に溺れていた父親ではスタミナに差がついて当然。とはいって、その前に力で押し切られる可能性もあつたように思えるな。正直、私の目には互角に見えた。

「で、どうだよ？ 親父」

「ハツ、ここまで、やれるんなら、心配は、いらねえな。…行つてこいよ、お前も、外の——」

「レント、ザムエルさん」

「アルム？ お前、見てたのか」

「ああ。…いい勝負だつたな」

「…だろ？」

「で、それはそれとして…リラさんがなんと言つかな」

「全くだ」

「…げ」

リラは軽く怒つて いるな。…そんなバツの悪 そうな顔を しても、リラは許して くれないぞ？

「お前にとつてはいつか必要なことだつたのだろうが…そこまで体力を使い果たすとはな。明日に響いたらどうする」

「…すんませんでした」

「とりあえずエリキシル剤を使つて…今日はもう大人しくしておけ。こつちはお前に倒れられるとかなり困るからな」

「おう、ありがとよ」

「何だ、明日大事な要件でもあんのか」

「まあ、そんな感じかな。ところでザムエルさん、なんでまた急にこんなことを？」

ふむ、確かにそこは気になるな。事情を知らないこちらからしたらいきさか唐突にも思える行動だからな。

「あー…おいレント、これはお前が言う事だろ」

「解つてるよ。…実はよ、近い内に島を出て行こうと思つてんだよ、俺」

「…えつ」

「…そ うか」

「塔の天辺に行くつて夢は叶えた。だから、次は武者修行をしながらいろんな世界を見て回りてえつて、そう思つたんだよ」

「だからまあ、俺がやつたのは腕試しみてえなもんだ。最近まで飲んだくれてた俺に勝てねえようじややつていけねえぞつてな」

「それはちょっとハードル高くないかな…？今見ても凄く強かつたけど」

「お前等最近竜と戦つただろ？ああいうのが本当に突然来ることも偶にあんだよ。つつても気を付けててもどうしようもねえときは本当にどうしようもねえ。だからせめて真っ向勝負くらいはしつかりやつてくれねえとな」

「ほう、要するにこれはつまり…」

「ザムエルさんなりの親心…というやつですか？」

「…あー、まあ、そんなんだな」

「荒っぽいって言うか、不器用だな…」

「ホントだよ全く…ま、有り難く受け取つとくぜ」

「お前も微妙に素直じやないな、レント」

：親心、か。私は母の最期の願いを、蔑ろにせずにやつていけるだろうか。

「さて、全員見て回つたことだし、私達はアトリエに戻るか」

「あたしたちはどうしよつか、アルム」

「とりあえず、そろそろ昼食だから一旦家に戻ろうか」

「ああ、だつたらアルム。ついでにこいつをカールのどこに返しといってくれねえか。流石に少し休みてえし、どうせお前アイツの家に寄るだろ」

「え、ザムエルさんの剣？なんでお父さんに？」

「…万が一の時の為に、こいつで暴れまわつたりしねえように預かつて貰つてたんだよ」

「今はもう心配いらぬと思ひますが…」

「言つただろうが、万が一があるつてよ。…ああ、ライザ」

「え、何？」

「ミオが『アルムがいるから大丈夫だとは思うけど、どこで何してのか解らないのは正直不安だから、鍊金術とやらであの子を直ぐに呼び出せる呼び鈴が欲しい』つつつて愚痴つてたぞ」

「…今日はちょっと家で大人しくしといた方が良いかも」

「そうしどけ、ああ見えて心配性だからなアイツ」

：母親とは、どんなに強く見えても案外そんなものなのかもしけないな。

「じゃあレント、アンペルさん、リラさん、また明日」

「ああ。そつちもしつかり体を休めろよ」

「おう。きつちり万全にしておくぜ」

：いよいよ明日か。さあ、勝ちに行くか。

戻りたい空を眼に、戻したい空を心に

「——さて、遂にこの日が来たな」

『蝕みの女王』討伐決行の日、俺達はアトリエで最後の作戦会議をしている。ここでやることは突入後の動きの最終確認、それが終わつたら後は目的達成まで全力で進むだけ。

…まあ、動きそのものは言うだけなら簡単な物なんだけどよ。

「基本的には雑魚は相手にせず、女王一点狙いで行くぞ」

「どうしても邪魔なら、セルフファイアで無理矢理吹っ飛ばしちゃつていいんだよね？」

「数が多いならな。少ないなら俺達前衛組がどうにかする」

「アイテム無しで少數の雑魚に手こずるようじや、女王は倒せねえだろうしな」

「私とライザの必殺技も基本的に温存、でいいんだよね？」

「女王と戦つてる時に雑兵が湧いて出てこないとも限らないからねろうしな」

⋮

⋮流石にそれはぞつとするな。後衛組がいるどこにそいつらがなだれ込んだらそのまま前衛の俺達まで巻き込まれて全員お陀仏だ。だからその場でも対応できるようにするか、乱入されねえように対策するかしなきやマズいな。

「で、後は…あのふににも何かやらせるのか？」

「坑道の入り口付近に陣取つて貰います。万が一にも坑道に入ろうとするとする旅人への威圧と、女王と戦つている間に門を潜つたフィルフサがいた時の対処を頼もうかと」

⋮何というか、奴の事も自然と戦力に数えてしまつてゐるな

「凄く強いもんねー、あの子。仲良くなれて良かつたよ」

「模擬戦とかしても、リラさんの動きに対応出来てたりアルム君の蹴りが押し負けそうになつたりしてたもんね」

「体当たりでレントが吹き飛ばされたときは何事かと思つたよ…ふつてあそこまで強くなれるんだね」

「あんときは油断しちまつてたからなあ…アツ、下手したら古城の

竜より強いかもしけねえぞ」

あの時偶然餌付けしたアルムには感謝しかねえな、ホント。なんか貴重な素材も持ってきてくれてるみたいだしよ。

「まあ、アイツの話はここまでにして…後氣を付けることは？」

「侵攻が始まる直前だからな、向こうもこちらに渡ろうとしてくる。つまり、門を通つたすぐ目の前にフィルフサがいる可能性があるぞ」「最悪なドッキリだ…」

門を潜るのは剣を構えながらにした方が良いな…

「それと、キロさんの様子も見に行つた方が良いかな？」

「そうだな、奴なら問題ないだろうが…どの道アイツが野営している所を通ることにはなるからな」

「そこで一旦一息ついてから、一気に女王のところまでつて感じだな」「後は…もう無いかな？」

「…いや、1つだけ」

そう言つてアルムが手を挙げた。：何かまだあつたか？

「ライザ、複製釜で道具を増やすのに時間はかかるないよな？」

「え？うん。物と数にもよるけど、5分もあれば」

「なら、一番いいローゼフラムを10個程増やしてほしい」

「何に使うつもりだ？それだけ作つてもコアクリスタルには入らないぞ」

「ああ、これは直接投げます。出来るだけクリスタルのエネルギーは蝕みの女王に回したいですし、ちよつと思いついたことがあるので」「ん…まあアルムの頼みならしようがない、ちやつちやと増やしてくるね」

「ああ、頼んだ」

ローゼフラムを10個、ねえ。コイツの事だから無駄なことはそう

そうしねえだろうが…何をする気なんだか。

「さて、ではローゼフラムの複製が終わつたらいよいよ突入だ。武器と心の準備を最後まで怠るなよ」

さて、いよいよ師匠に恩返しするときだ。死ぬ氣で気合入れてくか。

「…んー」

「どうした、ライザ」

「いやー、ちょっと空を見てたつていうか」

門の前まで来ていざ突入つて時に、ライザがそんなことを言い出した。空、ねえ。見上げたところでいつもの青空が広がってるだけだとと思うが。：いや、今から向かう異界の空はそうじやないんだよな。「正直、さ。今まではこの乾期の空…特に太陽が凄く鬱陶しくてさ。いいからさつさと曇れーとか思つてたりしたこともよくあつたんだよね」

「そ、そ、そ、う、そ、う。家中でゆつくり本を読んでても暑くて暑くて集中できなかつたことあるし」

「ほつとくと剣が熱くなつて素振りどころじゃなくなつたりな」

「その辺り、俺は風の魔力で誤魔化しているけどな。風を軽く纏うだけでも体感の温度はかなり変わつてくる」

「それホントズルいわよねー、やり方聞いたけど真似できなかつたし」

そもそも出来たとしても、日中ずっとなんて普通魔力が続かないだろうけどな。

「まあとにかく、そんな鬱陶しかつた空だけど…そんなこの青空が、あたし達の世界の空。あたし達が帰つてくるべき場所の空なんだ」

「…うん、そうだね。だからちゃんと戻つてきて、皆でもう一度この空を見上げよう」

「ああ。そして、叶うならいつか、異界の元の空も眺めたいところだ」「あそこまで荒れた自然が元に戻るのって凄く時間がかかりそうだから…生きてるかな、僕達」

「こつちから手伝えることがあればいいんだけどな…どこもあんな感じになつてるなら、水だけ戻してほつとくだけでなんとかなるとは思えないしよ」

方法が思いつくわけじやねえから、頼まれても何もできねえけどな…旅先で良さそうな何かが見つかれば良いんだけどな。

「気持ちは有り難いが、そういう話は蝕みの女王を倒してからだ。ま

「ああ、今は奴に集中するぞ。我々がやられてしまえばフィルフサ以外の誰にとつても悪い結末にしかならんからな」

「つと、それもそうだな。先の事を考えすぎて目の前の敵を疎かにして、それで負けて死にましたなんて笑い話にもならねえ。」

「じゃあ…行こう、みんな」

「全員で勝つて、生きてここに帰るぞ」

ライザとアルムの言葉に全員が頷いて、異界への門に突入した。さあ、いよいよ決戦だぜフィルフサ。

「つ、と……やはりいたか！」

「よつ…と、マジでいやがるとはな!!」

「とつ…ツ!!」

門を潜つて異界に来た私達の目の前に、いきなりフィルフサがいた。「空読み」と一緒のサソリ型と坑道にもいたネズミ型、そして将軍級つて言われてる大型の3種類。だけど、前衛の3人がすぐに対応してくれた。

「はあつ!!」

リラさんは一瞬でネズミ型との距離を詰めて、首のあたりを引き裂いた。ネズミ型は何もできずにその場に倒れた。

「とつ…おらああつ!!」

レント君はサソリ型の尻尾の攻撃を弾いて、そのまま剣を振り下ろした。サソリ型の胴体が真つ二つになった。

「沈めつ！」

アルム君は將軍級が動く前に頭を思い切り踏みつけた。將軍級の頭が本当に地面に沈んで、角みたいな部分が砕けて、前半分くらいの外殻が鱗割れた。

「…はつや」

「やれやれ、揃いも揃つて頼もしいな」「驚く暇も無かつたよ…」

うん、私もタオ君と同じ気持ちだよ。いるつて気が付いたときにはもう倒されてたから。

「…おいアルム、何だその威力」

「ああ、こいつのおかげだな。ライザが新しい武器を作る時に「フィルフサの外殻を砕きやすくするため」に、可能な限り重く硬くしてくれと頼んだんだよ」

「本当にそれだけか？流石にこれは尋常ではないぞ」

「…可能な限り重くしたうえで魔力が伝わる効率を極限まで高めようとして、畠で採れた火と風のエレメントコアをいくつか組み込んだらいいんですよ。お陰で出力が尋常じやないことになります」

「…本当なら多分メチャクチヤ贅沢な使い方してるよな、それ」

「力の結晶だから武具に使うのは間違っていいが…そもそも畠から取れるものではないからな」

「マジで何なんですかね、あの畠」

「畠も、俺が見てすぐに解るくらいには良い物が栽培されるからな…」

⋮

あれは種が特殊なんだと思うけど…というか、リラさんから見ても今のアルム君の攻撃つて凄いんだ。一瞬で急所を突いたリラさんも、一撃で真っ二つにしちゃったレント君も凄いと思うけど。

「私とライザが全力で調合した種だ、それくらいやってもらわねば困る」

「それくらい」のハードルが高すぎますよアンペルさん…」

「まーまー。今こうして役に立つてるんだし、細かい事は言いつこなしよ」

畠から木材どころか畠石とか炭とか砂が採れたりするのを細かいで済ませるのは…もしかして、それが出来ないと鍊金術士として大成できないのかな…？」

「まあ、この一瞬でこれだけの威力が出せるなら蝕みの女王にも有効そうだな」

「デイザスター^炎_厄ブレイカー」だったつけか。最初に意味聞いたときは流石にと思ったけど、破壊力は全然名前負けしてねえな」

「その分重量が嵩み過ぎて、アルム以外まともに使える代物では無さ
うだが」

「ライザは「あたしは歩くのも無理!」と言つていたな。俺でも、魔力
による補助がないとただ走るのも一苦労なくらいには重い」

「しかもそれをやろうとしたらして、調整ミスするとあらぬ方向に
吹つ飛んでいきかねないじやじや馬なのよね」

「何でそんなもの履いて平氣で戦えるの?」

「吹つ飛ばない調整の仕方さえわかれば、後はもう『大体これくらい』
で良い感じにやれる」

「そういうとこホント雑だなお前?」

⋮アルム君が強い理由つて、意外とこういうアバウトなところに
あつたりして?」

「しかし、この一瞬で将軍を討伐できたのは大きいな。これでこいつ
を核とした一群の集結を妨害できる」

「单なる上位種の通称とかじやなくて、本当に将軍みたいな役割があ
る奴なんすね」

「成程。⋮用意したローゼフラムも、思つていたより有効に働きそ
だ」

アルム君はローゼフラムをどうやつて使うつもりなんだろ?敵
の集団に投げ込むつてところまでは想像がつくけど⋮

「さて、話はそこまでにしてキロ・シャイナスと合流するぞ」

「うん。無事かどうか確認したいし、今の状況も聞きたいしね」

「こつちからも話したいことは色々あるしね、古式秘具の事とか」

「後、蝕みの女王を倒しに来た⋮つてことも、だね」

流石に驚くだろうなあ、キロさん。

「えーっと、確かこの辺⋮あ、キロさん!!」

「大侵攻の予兆があつたから、きっと様子を見に来ると思つてた。⋮
君達と再会てきて、嬉しい」

「私達も、キロさんが無事で嬉しいです」

聖地にいるキロさんを探そうとしたら、直ぐに見つかってくれた。

良かった、無事みたい。

「この感じ…どうやら聖地は襲われていないようだな」

「奴らは門を真っ直ぐに目指すから、そこから外れている聖地には目もくれない。寧ろ、周りの群れが駆り出されているせいで静かなくらい」

「それってつまり、女王の城の周囲にはうじやうじや居るつて事だよね」

「うわあ、想像したくない…」

「余計な壁が増えたとみるか、纏めて吹き飛ばす好機とみるか…」

「以前から思っていたが、魔物相手だと随分荒っぽくて物騒だなアルム」

「手加減も容赦も必要無いので。特にファイルフサはこっちの生活もかかつてますし」

「…纏めて吹き飛ばす？」

「あーっと、じゃあまず情報交換しましようか」

（斯く斯く然然）

「…そう。古式秘具は、やはりそちらに。ボオスは気に病んでいた?」「だろうな。ぱっと見は落ち着いてたが…多分内心切れてたと思うぜ」

「恐らく、今すぐにでもあの球を壊したくてたまらないでしょうね。知らなかつたことはいえ、自分の家が盗品を勝手に使つて権勢を揮つている状態な訳ですから」

「その様子は目に浮かぶ、ボオスは眞面目で氣位が高いから。…古式秘具のありかが解つたのなら、その事で彼が怒つてくれているというのなら、まずはそれでいい」

改めて聞くと凄い状態で維持されてるんだよね、クーケン島の生活つて：

「そしてそつちは…本当にやるの? 腸みの女王を倒して大侵攻を止めるなんて」

「色々考えた結果、これしかないという結論になりました」

「心情的にもタイミング的にも、止めないとマズいんです」

「一応、出来得る限りの準備はしてきたが……なるべく消耗を抑えたい。女王の城に至るまでの情報が欲しいのだが」

「やっぱり、本気なんだ：解った、君たちの勇気と闘争心に応える。私の助力は？」

「聖地を守るお前を、私たちの戦いに巻き込むわけにはいかない。お前はここでお前の戦いの為に残っていてくれ」

「分かった。……ちらは故郷を荒らされ、ちらは尻拭い。お互、クリント王国のせいで苦労をさせられるな」

「……ああ、本当にな」

「……あんまりこういうことは言いたくないけど、今回塔で発覚したこと以外にもまだ何かしてそうって思っちゃうなあ。」

「女王の城は、奥の封鎖してある道の先にあるはず。君達の無事を祈る」

「有難うございます、キロさん」

絶対にみんなで、無事に帰ってきます。

おまけ キロ「いくら何でもその出処はおかしい」アルム「ですよね」「ところでアルム、君の履物だけど

「ん、何か気になるところが？」

「途轍もなく強い力を感じる。もしかして、エレメントコアが組み込まれてる？」

「ええ。よく解りましたね」

「エレメントコアは大精霊様が持つ力の結晶だから、精霊の力を借りる私達には解りやすい。もしかして、大精霊様に会った？」

「いえ、特には」

「なら、どうやって？偶然で手に入るものではないはずだけど」

「……農作物です」

「……？」

「鍊金術で作った種を畑に植えたら、なんかこう、鎮座していくまして」

「……
？」

「……大丈夫ですか？」

「……数百年単位で信じてきた自分の常識を、

粉微塵に破壊された気分

といえば伝わる？」

「……何か、すいません」

侵略者に侵掠すること、爆炎の如し

「この石碑は…？」

「共生…記念…で、合つてるか、タオ」

「うん。…友好の証、とかそんなことが書いてあるね」

「おこがましいつつーかなんつーか…」

「最初は本当に、そのつもりだつたのかもしれないけど…」

キロさんが道を塞ぐために置いた岩を碎いて異界を進んでいた俺達は、ぽつんと置かれた石碑を見つけた。そいつはどうもクリント王国とオーレン族の友好を記念して造られたモンらしい。

：例の手記に友人とか書かれてたから、クラウディアの言う通り最初は本当に友好関係を続ける氣でいたのかもしれないが…結局あんな事してんだから擁護はできねえな。

「…ハツキリ言つて、余裕があるならついでに壊していきたい代物だ」「それができるならキロが既にやつていそうだが…この材質と造りでは、恐らくお前やアルムが全力をぶつけても破壊はできんだろう」

リラさんやアルムの全力で壊せねえとかとんでもねえ硬さだな…俺の必殺技でもぶつた斬れねえどころか逆に腕が折れるかもな。

「ならそれについては考えないことにして…どつちに進みますか？」

「どつち、だと？ 道は左側にしかないが」

「いえ、ここから降りれば近道になるんじゃないかと。フィルフサも小型が数匹いるだけですし」

そう言つてアルムが指差した先を見ると、真ん中に結晶が生えてる広場があつた。…イヤ結構高いぞコレ。

「ふむ、良い案だ。では行くぞアルム、アレくらいなら私とお前ですぐに片付く」

「了解です」

そう言つて2人は躊躇いなく降りた。多分30秒もからねえだろうから早く降りれそこ見つけねえと…

「全く、ショートカットは良いがまさか2人で往復して私達を下に降ろすつもりなのかな？」

「流石にそれは大変ですよね…いざつて時の為にあんまりあの2人に疲れは溜めて欲しくないです」

「レント君、どうにかできないかな?」

「今それを探して…お」

丁度右側に良い段差があつたぜ、あそこからなら俺ならタオ1人くらいはおぶつて降りられるな。

「よし、俺はあつちから降りる。タオ、おぶつてやるから一緒に来い」

「え、僕?…あんまり揺らさないでよ?」

「心配すんな、やたら飛んだり跳ねたりするあの2人よりは怖くねえはずだ」

「比較対象がさあ…」

「言うなよ、言つてて自分でも苦しいって解つてんだから。

「ふむ、私達はどうする?」

「アレくらいなら1人で降りられると思うから、あたしはあつちから行くね」

「じゃあ、私はリラさん、アンペルさんはアルム君にお願いすればいいかな」

「…安全運転を注文しておこうか」

で、俺達が下りたのと入れ替わりでアルムとリラさんが2人を下ろすために上に戻つたが…降りてきた時、クラウディアはお姫様抱っこだつたが、アンペルさんは俵担ぎだつた。いやまあ確かにそれ持ちやすいし動きやすいけどよ、アンペルさんが大分息荒くしてたぞ、アルム。

後クラウディア、「空を飛んでるみたいで楽しかった」つて…今更だけどお前肝据わりすぎだろ。

「さて、次は…なんだありや」
「うつわ、将軍級が固まつてるじやん」

少し進んで門を潜つた先に居たのは、4体で固まつてる将軍級のファイルフサ。1体ずつならもうそう苦労はしねえけど、あれだけ一氣につてなると流石にキツイな…どうするか。

「あそこ抜けないといけないの？他に道は…」

「無いな、ここ以外に道と言えるようなものは無い」

「アレを抜けるか、道なき道を抜けるか：か」

正直どつちも勘弁だが…できるだけ早く大侵攻を止めたいからな、あそこを抜けるしかなさそうだ。

「…あ、そうだ。アルム君、ローゼフランム」

「そうだな、ここが使い時だ」

…ローゼフランム？いや、それでどうにかなるかアレ？

「確かに10個もあれば突破はできるだろうが…」

「いえ、ちょっと一手間を加えれば…よし、良い感じに固まってるな」
そう言いつつローゼフランムを1つ取り出して…顔の近くまで持つてきて見つめ始めた。意識を集中させてるつづうか、何かを込めてるのか？

「…よし、これでいいな」

「アルム、何したの？」

「コイツに俺の魔力を込めた。炎で威力を高め風で圧縮するようにな」

「威力はともかく…圧縮？」

「熱とか爆風が広がりすぎるところにも被害が出るかもしけないからな。ついでに局所的な破壊力も高まってる筈だ」

「爆弾に炎の魔力なんて込めて危なくねえのかよ？」

「着火するならそうだが、これは言つてしまえば爆薬を外付けで追加しているだけだからな。問題ない」

…まあ実際大丈夫みたいだし納得しどくか。つまりそのローゼフランムはアルム特性の爆弾になつてゐるわけだな。

「さて、まだ固まつてくれてゐる内にさつさと投げ込むか。…食らえ」
アルムがファイルフサの集団に向かつて投げたローゼフランムは、綺麗にその真ん中に飛んで行き…

ボガアアアアンッ!!

長めの爆音を出しながら炸裂した。あんま強烈な音じゃなかつたから、ホントに威力が出たのかちよつと心配になつたが：

「…よし、成功だな」

「…全員ひつくり返つて、動かなくなつちまつてるな」

「うーわ、音の割にえげつない威力…」

「…あのファイルフサ、頭吹き飛んでない？」

「ほ、ほんとだ…」

寧ろやり過ぎなくらいの威力だつた。大型のファイルフサ4体を一撃つて尋常じやねえぞ…

「なんというか、今朝思いついたばかりの策にしては破格の成果だな」「お前達が鍊金術を悪用する人間じやないことに、心底安心しているよ」

完全に同感つす…

「…ところでアルム君、ローゼフラムつて10個持つてきてるんだよね？」

「ああ」

「じゃあ、こんなに凄い爆弾が後9回使えるつて事？」

「そうなるな」

「…どうしよう、ファイルフサにちよつとだけ同情しちゃつた」

「向こうからしたら、これと言つて因縁も無い相手からこんな破壊兵器が飛んでくるわけだからね…」

「私が真似できたら、蝕みの女王に嬉々として放り投げてやるのだが」「まあそれはアルムが代わりにやつてくれるだろう。…ところでアルム、ローゼフラムを1つ私にくれ。私の魔力なら面白いことが出来そうだ」

「解りました」

アンペルさんが考えるファイルフサ相手の面白い事…えげつねえことになる気がするぜ。

「それにしても、なんだか異界っぽくない建物が増えてきたわね」

「それだけ女王に近づいている証拠だ、より一層気を引き締めろよ」「爆弾で崩れたりするかもしれませんのが、構いませんよね？」

「ああ、むしろ思い切りやれ。あんなもの、いざれ全て解体してやらねばならんからな」

「クリント王国の建築様式を知る上で貴重な資料ではあるが：オーレン族の感情より優先されるものではないしな」

「了解です。」…今之内に2,3個準備しておくか

「そこを突つ切つて一気に女王のところまで、だな
様に、さぬは群れを瓦解させられるがもしれない」

「では、全員：覚悟を決めろよ」

「何が何でも、勝つて帰るぞ」

「「「「せいいツ!!」」」

ふ二倒してやるセ 飢みの女王

— 1 —

『略奪者の大石塔』：そう呼ばれる場所で、フィルフサの頭である蝕みの女王は今か今かと待ちわびていた。

嘗てこの地から、自分達が何より嫌

げ、しかし食い止められ穴は閉じた。

その穴が最近になつて再び開いた。つまり、女王にとつてはチャンスである。純粹なファイルフサとしての本能を満たすと同時に、進行を阻止されたことに対するリベンジを果たす為の。

あの世界も我らの物にしてやる。そう思い、自分自身も侵攻の準備を始めようとしたその時…

ドオン

— 1 —

遠くから聞こえた音。少なくとも、女王には聞き覚えの無いものだつた。それ故に、何が起きているのか見当もつかない。

一瞬だけ気になったものの、大したことではないだろうと結論付けて意識の外に追いやろうとした。が…

ドォン

!?

同じ音。短い間隔で、しかしながら近づいている。流石に異変を感じ取り、警戒態勢に入る。

――ナニカ――
考えども考えども、女王の中で結論は出ない。そして…
ドオン！

! . . .

3度目。かなり近い。恐らく、音の発生源はもうすぐそばに来ていて、女王の警戒心がさらに高まる。

卷之六

そして、両腕を構え臨戦体勢に入る。そして次の瞬間……

女王の目の前に、4つの赤いナニカが飛来した。女王が反応できない程の速さで。

ドドドガアアアン!!!

二三一

あまりに強い衝撃を受けた女王は大きくなってしまい、甲殻にもヒビを入れられる。そして凄まじい熱量によりジリジリと体力を削られる。

続いて飛んできたのは、魔力による攻撃。複数の魔力球に魔力の刃、そしてレーザー。1つ1つの威力は大きくは無いが、無視できるほどでもない。そして…

オラアツ!!

弾幕に紛れて迫つて来た「赤」に、頭部の甲殻を斬りつけられる。女王は己に肉薄してきた「赤」を両腕の鎌で切り裂こうとするが…
ドゴォンツ!!

振りかぶつた瞬間、腹部に「青」が突き刺さる。先ほどの爆発にも

劣らない衝撃が女王を襲い、大きく後ずさつた。

「蝕みの女王ツッ!!」

そして「黒」：且つてファイルフサによつてこの世界から追われた戦士が一瞬で距離を詰め、その女王の首を挟み込むように切り裂きながら宣言する。

「我らの世界を取り戻す為に、お前は私達がここで始末する。…覚悟しろ」

怒りと使命感から成る、排除意思を。

オマケ アルム「因みにこの抱え方を『お米様抱っこ』と呼ぶ人達もいるとか」アンペル「無駄に上手いのが腹立たしいな…」

「こちらは終わつたぞ」

「そうか、では頼むぞ」

「私はリラさんにお願いしていいですか？アルム君が私を運ぶのはライザにちょっと悪いと思いますから…」

「そうだな、クラウディアは私が運ぼう。ではアルム、アンペルは任せたぞ」

「はい。…よつと」

「おいアルム、何だこの抱え方は」

「儀担ぎですが」

「それは知つてゐる。そうではなくてだな」

「ダメですよアンペルさん！アルム君はライザ以外をお姫様抱っこしちゃダメなんですから！」

「いやそれを要求するつもりも無いが、だとしてももう少しだな」

「これが安定性と絵面的に一番マシなもので」

「おい安定性は兎も角絵面的にとはどういうことだアルム」

「いいじやないか、安定性があるのなら。…くくっ」

「おい戦場で笑うなりラ、戦士だろう」

「お前のそんな姿を見ることになるとは思わなかつたからな。それに今は周りに敵の気配はないから問題は無い」

「さて、じゃあそろそろ降りましょう」

「ああ。クラウディア、しつかり捕まつていろよ」

「はい！」

「動かないでくださいね、アンペルさん」

「おい、頼むから安全運転で頼むぞ？この体制では普段のそれより頭が地面が近くなる分落下に対する危機感がだな——」

「行くぞアルム、1、2の」

「ハツ!!」

「…っ!!」「うおおおおおお!?」

「2人ともお疲れ様ー。大丈夫だつた、クラウディア？」

「空を飛んでるみたいで楽しかったよ。私も飛べるようにならなか
なあ」

「ホント、肝が据わつてるよな前…」

「飛ぶのは難しいが、風の魔力が使えるなら滞空時間を少し延ばすべ
らいはできるぞ」

「えつと、それでアンペルさんは大丈夫ですか…？」

「…これが終わつたら、時間操作の応用で自力でゆつくり降りる為の
魔法を作る」

「そうか。：お前を抱えていくのは、嫌いではないのだが」

常闇の崩御

「アンペル！ライザ！」

「任せろ。行け、ルナーランプ！」

「最初から全開で行くよ！エターンセルファイア！」

女王からリラさんが飛び退くと同時に、アンペルさんとライザが道具を使用する。ルナーランプで視界を完全に潰しつつエターンセルファイアで足場も潰してその体を焼き焦がす。

これだけでも奴の体に大きな負荷がかかっていることだろう。だが：

「ついでにこれも食らつていけ。私特性の爆弾だ」

先程俺が渡したローゼフラムが女王の頭部で爆ぜた。アンペルさんはアレに何か仕込んだらしいが…？

「私の魔力を始めたローゼフラムなら熱と痛みが引くのが遅くなるし、頭に叩き込まれれば脳の動きが鈍る」

：時間操作の魔法を爆風と一緒に叩き込んだのか。相手が相手だから仕方ないが、本当にえげつない。

「さあ、今の内だ。あの時同様、何もさせずに仕留めきるぞ」

そう、今回も俺達はあの青い竜と同じように、蝕みの女王に何もさせず殺しきるプランを取っている。理由は簡単、リラさんが「奴にまともに動かされたらまず死人が出るだろう」と言つたため、じゃあ何もさせない以外選択肢が無いなと全会一致で決まったからだ。

ここなら女王は数の利を活かせず、逆にこちらがそれを活かし7対1で挑める上に鍊金術で作つた強力な道具がある。十分に可能性はある筈だ。

（まずは…アレを狙う！）

視界を奪つた相手に対し警戒するべきは、ヤケクソの攻撃が意識外からクリーンヒットしてしまうこと。だからまずその可能性を減らすためにあの大鎌のような腕を落とす。

奴はセルファイアの破壊力とアンペルさんのフラムのお陰で完全に怯んでいる、俺の速さと力ならその間に行ける！

「千切…」

女王の腕の付け根の位置まで移動し、足を振り上げ…

「れろッ!!」

つま先から魔力を吹き出して加速した踵落としを叩き込む。メキメキ、と女王の腕が軋み、そして耐えきれなくなつて千切れた。流石に腕が千切れれば激痛が走るらしい、悲鳴のような絶叫を上げ苦しんでいる。

「レント、ここだ！」

「おらああっ!!」

2人も同じことを考えていたらしい、反対側の腕をやつてくれていた。リラさんの爪で抉つた所にレントが一撃が叩き込み、断ち切つた。

ここまで一気にダメージを受けたせいか、蝕みの女王は息も絶え絶えと言つた様子だ。

「…ほう、これならば…ライザ、ここで一気に決めるぞ」

「うん……お願い、天文時計！」

ライザが時空の天文時計の力を解放、対象はアンペルさんと…タオだ。

「やるぞ、タオ」

「はい！」

2人が精神を集中させている。…念のためだ、俺達も合わせるか。「レント、準備しておくぞ」

「そうだな、徹底的にやつとくに越したことはねえ!!」

こちらも時計の力を解放、必殺技の準備に入る。

「…！女王が動くぞ！」

「私が止めます！クライトレヘルン、からの凍冷の舞…！」

あれだけのダメージを一気に受けてなお動こうとするのか…流石にタフだな。

だが控えていたクラウディアが身体を凍らせて動きを鈍らせた、こ

れならアンペルさんが間に合う。

「念のためだ…沈め！」

そしてリラさんが頭に全力の踵落としを叩き込む。女王はなんとか堪えたようだが…

「では、私の全力を見せてやろう」

アンペルさんが魔力を一気に解放。すると女王が縮み、箱のようない物に閉じ込められる。時間操るとは、それと密接に関係する空間も操ることが出来る…と言う事だそうだが、つまり女王を空間ごと圧縮したのか。

「閉じ込めてやろう…遡^リる時の流れの中にな!!」

リワインドフロー…アンペルさんの必殺技。時の逆流の中に対象を閉じ込める技らしい。具体的には、魔力の爆発での攻撃と同時に一時的に相手の脳を機能不全に陥れ、何もできない状態にするそうだ。実際、箱が割れて出てきた女王は何か動きそうな気配が無い。つまり…

「2人とも、徹底的に叩くよ！」

「ああ！」「おうつ！」

俺達3人の必殺技を、反撃を氣にせず叩き込めるということだ！

「これだけ大きければ…女王でも！」

タオが作り出した魔法陣から巨大なハンマーが出てくる。これを叩き付ければ、女王だろうと一溜りも無い筈だ！

「思いつきり！潰^ロれろおーっ!!!」

バギヤアツ！ビキビキビキビキ…

無防備などころに特大の一撃を叩き込まれた女王は、全身に大きなヒビが入り、そしてまだ動けない。次は…俺だ！

「風穴を開けてやる…!!」

全力で飛んで真上に加速し、そして急降下。ありつけの魔力と脚力を込めた一撃を、流星のように!!

「でええええいやあッ!!

ズドオオオオオオオオンッ!!!

女王の胴体に大きな穴が開いた。だがまだだ、俺達にとつては未知のバケモノ、これでもまだ生きている可能性がある。だから…

「最後は…俺だッ！」

徹底的に止めを刺す。此処から更に、レントが真っ二つにする！

「おおおおおおおおおッ！食らええッ！」

裂帛の気合と共に放つ、『大敵を断ち切る』為の大上段からの一撃…
それがあいつの必殺技！

「タイラント！ デイバイダアーッ!! ガアアンッ!!

…女王の顔面に真っ直ぐ入ったその一撃は、ボロボロになっていた
あの巨体を完全に両断していた。

「…」

「どう、だ？」

…動かない、か？一応、まだライザ達が控えているから動かれても
対処はできるだろうが…これで動いたら、生き物かどうかすら怪しく
なつてくるぞ…

「…！待て、今何か動いた！」

「ええ!? これだけやつたのに!?」

「…あ、あそこ！ 体の左側だよ！」

左側…何だ？ 何が潜んでいる？ そう思つて注目していると、そこから…

ズチュツ：

ナニカが、這い出てきた。

「…なんだ、こいつは

「人型の、ファイルフサ？」

レントが両断した女王の半身から這い出てきた謎の人型は、ファイル
フサらしさを残しつつ、両刃の剣を携えた全身鎧の騎士のようにも見える姿をしていた。…まさか、女王の本体なのか？

右腕が無く、それ以外も全身どころどころ欠けているようだが…
…ちつ、折角みんなの必殺技を全力で叩き込んだつてのに…！」

「いや…無駄にはなつていない筈だ。少なくともあの腕はお前の一撃…
によるものだろう」

男連中の全力の連撃はあの巨体の中にあつた人型にも多大なダメージを負わせていたようだな。切断された右腕からは血のような液体が流れているし、体も何もしていないのに少しずつ崩れている。それに、よく見ると足がふらついている。余裕が無いどころか、限界が近いようにすら見える。

（それでも…あの女王の、恐らく隠し玉だ。油断すれば、あそこからでも1人の命くらいは持つていきかねない）

私自身を含め、誰一人として欠けさせるわけにはいかん。改めて意識を奴に集中させ、構える。すると、それに呼応するかのように女王は左手の両刃の剣を構えた。そして…

ドツ

一瞬で私との距離を詰め、斬りかかって来た。

（速い…ッ！）

この状態からまだそこまで動けるか、やはり埒外だな。事前にここまで弱らせていなければ危なかつたぞ…！

（だが、予想より遙かに軽い…！）

片腕に加え、見た目だけでなく中身もボロボロなのだろう。圧力が無いし、踏ん張りもきいていない。それでも相応の重さはあるが…これくらいならば！

「弾き返すのは、そう苦ではない！」

剣を上に弾いて体勢を崩し、腹に蹴りをお見舞いする。見かけにして随分と重い感触がしたが…女王は堪えきれずに吹き飛んだ。その衝撃で更に体が崩れる。

「…やはり、もう限界の様だな」

生命体としてはもはやほとんど死んでいるも同然の状態だろう。それでも立ち上がりこちらに刃を向けんとするのは…菲尔フサとしての本能か。

再びこちらに向かつてくるが、先ほどよりも速さも重さも落ちた一撃だ。これならば受けるより…

ガガツ！

「捕まえたぞ。今だ！アルム、レント！」

鉤爪を左腕と右肩に突き刺して拘束し、その間に2人に攻撃させた方が良い！

「レント、脚だ！」

「解つてる！オラアツ！」

アルムの蹴りとレントの大剣が女王の脚を膝の裏から破壊する。これでもうまともに動けまい。

「止めを刺してやろう、女王！」

そう宣言し爪を引き抜いた瞬間、武器をその場に落として私の肩を掴み、腕の力だけで私達の後ろに無理矢理跳んだ。あれだけの傷で、まだそんなことが…！

「ちつ、逃がさん！」

奴が飛んだ先…階段の下を見ると、そこには…ッ！

「な、なにさこのファイルフサの数!?」

「一体何時こんなに集まつてやがった!?」

そこらの大地を埋め尽くさんばかりのファイルフサの群れがいた。戦闘音か、先ほどの女王の悲鳴に呼び寄せられたか？

女王は…ちつ、将軍の背に乗っている。このままこいつらを捨て駒に離脱を図るつもりか！

「アンペルさん、女王だけ狙い撃つことは!?」

「届きはするが、止めを刺せるかどうか…！」

「…強引に突っ込んででも、仕留めるしかないか…！」

女王を仕留めなければここまで来た意味が無い、無茶をしてでも止めを刺しに行かなければ…！

「…やーっと、見せ場が来たわねクラウディア」

「うん、私達の必殺技でまとめて倒そう！」

そう言いながらライザとクラウディアが前に出る。お前達の必殺技…そうか、それならば！

「…後は、女性陣に任せるとしようか」

「ええ。…3人共、これで」

そう言つてアルムが時計を使う。対象はライザ、クラウディア、そして私。

「よーし、パワー全開！一氣に行くわよ！」

「うん！…私が奏でる一番強い旋律おと…今、ここに！」

「魔法陣展開！中心は勿論女王！」

2人から膨大な魔力があふれ出る。これなら、厄介な取り巻きを全て吹き飛ばせる！

「あの世界は、私達の世界…！私達が今まで奏でてきた、思い出の音…！何一つ、貴方達に壊させたりしない!!」

「あたしが思いつくありつたけ！全部アンタたちの真上から降り注がせてやるんだから！」

クラウディアの魔力は青い鳳を象り、フィルフサの群れ目掛けて突撃する。ライザの作り出した魔法陣からは、おもちゃやぬいぐるみ：を象った魔力の爆弾がフィルフサに降り注ぐ。

「これが、貴方達が最後に聞く音…ソングオブフィナーレ！」

「最後に一発でつかいの！落ちてこい、ヘブンズクエーサーつ！」

ズツ…ドオオオオオオオオオン!!

鳳と隕石が女王がいた場所に落ち、魔力の大爆発が発生する。…土煙が大量に上がり、その跡がどうなっているかは見えない。だが、解るぞ。お前はまだ息があるだろう、飲みの女王よ！

「これで…止めを刺す！」

体に宿していた精霊の力を全て解放する。これで一時的に身体能力を爆発的に強化できる。この土煙の中にいる女王も、ここから補足できる。

「ハアッ!!

一瞬で女王の元まで辿り着き、駆け抜けながら全身を切り刻む。

「まだだ、まだ終わらん！」

女王を空中に蹴り飛ばし、更に全方位から切り刻む。もはや悲鳴を上げる事すらまらないだろう。だが、完全に貴様の息の根を止めるまで、私も止まらんぞ！

「お前達ファイルフサに討たれた我らが同胞の無念…今こそ晴らす!!」

女王の真上に飛び、最後の一撃を叩き込む！これが、我ら白牙氏族に伝わる秘儀…

「アインツエルカンプツ!!!」

これで…止めだ!!!

「…」

最後の一撃は、完璧に女王の頭に入った。虫は頭を潰しても動くことがある、ファイルフサも女王ともなればそういう事もあるかも知れないと警戒するが：

「…動かない、か」

頭部が完全に消し飛び、全身から体液が流れ出している。：：ファイルフサも生命体だ、生きているのならば精霊を通して私にも感知できる。どうだ：

「…死んで、いる。仕留めた」

蝕みの女王は、ここで完全に死を迎えた。

「ああ、漸くだ」

クリント王国の侵略から、どれほど経つたか。

「永かつた」

皆がファイルフサに蹂躪されてから、どれだけの時を重ねたか。

「随分と、待たせてしまったな」

その時間を、漸く清算できた。

「…終わつたぞ、みんな」

…久しぶりに、泣けた気がするな。

短編とか番外編とか色々
オリキヤラ紹介

アルムレウス・レーゼン
イメージ絵

年齢 17歳（「アルムとレント」まで）→18歳（「アルムとタオ」以降）

身長 184cm（「アルムとライザ」時点）→188cm（原作開始時）

好き ライザ 家族 友人 親しい人間の手伝い 謎を知ること
何でも良いから動くこと

嫌い 閉塞感 身内を馬鹿にされること 酒の匂い

一人称 僕

愛称 アルム

・今作主人公。ラーゼンボーデン村に住む農家、レーゼン家の長男。
後ろで纏めた青く真っ直ぐな長髪と長身が特徴。感情は人並みに動くが、基本的に無表情。

・ライザ、タオの家はかなり近所。徒歩30秒もかからない。
・普段は真面目な部類だが、時々自覚した上で変なことをする。單純で子供っぽい一面も。

・ライザ程じやないが結構器用。防刃ブーツを戦闘用にちょっと改造してたりする。

・「何かに対する付与」限定で炎と風の魔法を使える。出力そのものは非常に高い。

・ライザに対して異性としての好意を持つている。切つ掛けは至近距離で何回も笑顔の直撃を食らったから。

・酒に死ぬほど弱い。酒そのものどころか、酔っ払いの匂いだけで酔う。もし飲んだとしたら、少し呷つただけで足元が覚束なくなる位。口調も乱暴なものになる。

- ・戦闘になると気が昂り、叫ぶようになる。コアクリスタル無しだと蹴りのみで戦う。戦い方は結構荒っぽく、殆ど防御を考えない。
- ・ライザ達にいたずらに誘われなかつたことをちよつと寂しがつている。

武器一覧

防刃ブーツ 農作業用のブーツにアルムが独自に手を加えたもの。アルムの動きとの相性は実はあまり良くない。

頑丈な造り：受けるダメージが減少する

フリーウォーカー 軽く動きやすいため、どんなところでも歩けると言われるブーツ。冒険家たちの間で評判が良い。

自由な動き：WTが減少する

エアスプリンター その履き心地と走り心地から、まるで空を走っているようだと評された一品。あまりに走り心地が良い為、辞め時が見つかりにくいのが欠点とすら言わされることも。

空を駆ける：回避率が上昇する 翼竜及びワイバーンに与えるダメージが上昇する

エタニティダンサー 衝撃を吸収する素材と分散させる構造で、极限まで足にかかる負荷を抑えることに成功したブーツ。医療用ギップとしての機能を持つブーツを元に開発された。

永遠の舞：アクティブラックスキルとクイックアクションのAP消費を1減らす、行動後、確率でAPを1上昇させる

デイザスタークリッパー その昔、怪力無双の闘士が愛用した超重の戦靴。数多の魔物を打ち倒し多くの人々を救つたことからその名が付けられた。

災い碎き：アクティブラックスキルの消費APが増える代わりに、攻撃力とブレイク値が大きく増加する。一段階ごとに消費AP+1、攻撃力とブレイク値+25%

アクティブラックスキル一覧

蹴撃→背脚→転撃 ミドルキック→バックキック (TL v2以上)
↓サマーソルトキック(TL v3以上)の連撃(サマーソルトは2ヒツ

ト)

通常攻撃 敵単体に無属性物理ダメージを与える 当てるとAP回復

業火の槌 敵を蹴り上げ、ジャンプして追いかけ踵落として叩き落す↓直地後、踏み付けで追撃 (TLv3以上)

初期習得 AP消費3 無属性物理ダメージと炎属性魔法ダメージを与える TLv3以上でブレイク値上昇、TLv5で高確率で火傷付与

烈風の牙 右足で風を纏つた百裂蹴り→左足で蹴り上げ、飛び回し蹴りで追撃 (TLv2以上) →両脚で挟むように蹴る (TLv3以上)
初期習得 AP4 無属性物理ダメージと風属性魔法ダメージを与える TLv2以上で中確率で裂傷付与 TLv5でクリティカルダメージ上昇

旋紅の一矢 旋風と炎を纏い、敵に全力の跳び蹴りを放つ

レベル25で習得 AP消費5 無属性物理ダメージと炎属性と風属性の魔法ダメージを与える 低確率で裂傷と火傷付与 ノックバックが大きい TLv3以上でさらにノックバック増大 TLv4で裂傷と火傷の付与確率上昇

炎鳳の大翼 脚に翼を象った炎を纏わせる

レベル40で習得 AP消費10 一定時間アクティブラスキルのWT減少、威力、クリティカル率、クリティカルダメージ上昇(全て別枠) TLv3以上で強化量上昇 TLv5で効果時間延長

紅蓮の槍 一瞬で距離を詰めて全力で踏み込み、右足でサイドキック→体を回して左足でサイドキック→ドロップキック

初期習得 アクションオーダー達成時に発動 無属性物理ダメージと炎属性魔法ダメージを与える ブレイク値が高い

旋風の扇 風を纏い、敵を薙ぎ払うように蹴る

LV30で習得 アクションオーダー達成時に発動 敵全体に無属性物理と風属性魔法ダメージを与える 中確率で裂傷付与

爆風の剛斧 爆炎と烈風を脚に纏い、全力で蹴り抜く

エクストラオーダー達成時に発動 敵単体に無属性物理ダメージ

と火属性＆風属性の魔法ダメージを与える 良性変化を多く受けているほど威力上昇

青の流星 炎と風の出力を最大にし、敵を全力で蹴り飛ばし、相手の上まで飛んでから急降下。全力で相手を蹴り落とすと同時に圧縮した炎と風が噴出し、攻撃した部位を文字通り吹き飛ばし、地面に叩き付ける

フェイタルドライブ 単体攻撃 無属性物理ダメージと炎属性と風属性の魔法ダメージを与える 良性変化を多く受けているほどダメージが上昇

朱嵐の衣 対象に赤い竜巻を纏わせ、身を護る

初期習得 ノーマルオーダー達成時に使用 味方1人の被ダメージ減少、炎耐性と風耐性上昇

パツシブスキル一覧

強鞠 攻撃力が上昇する (Lv3まで)

虎視 クリティカル率が上昇する (Lv2まで)

疾風 素早さが上昇する (Lv2まで)

共に隣に ライザがPTにいると、お互いの与えるダメージが上昇
比翼の友 レントがPTにいると、お互いの与えるダメージが上昇
真実の追及、知識の探求 タオがPTにいると、お互いのWTを短縮

縮

フリーハンド アクティブスキルの次にコアアイテムを使用するとき、またはコアアイテムの次にアクティブスキルを使用するとき、WTがかなり減少する

超速攻 戦闘開始時、即座に行動できる

ヒートアップ 戰闘時間が長いほど、攻撃力が上昇

単純明快な戦法 TLv3以上で、与えるダメージが上昇

キラーステップ TLv5で、アクティブスキルのクリティカルダメージと回避率が上昇

徹底追い打ち ブレイク中の敵に対し、与えるダメージが上昇
オーダードライブ オーダースキルを発動することに攻撃力上昇

樽を調べた時の台詞

「樽か」

「樽だな」

「小さい頃は、かくれんぼで良く世話になつたな
たーる。⋮似合わんな」

エルマリア・レーゼン
イメージ絵

年齢 11歳（「アルムとレント」まで）→12歳（「アルムとタオ」
以降）
身長 138cm（「アルムとライザ」時点）→142cm（原作開
始時）

好き 家族 友達（特にライザ） 物語系の本 甘いもの
嫌い 怪我（自他問わず） サボリ ムカデ

一人称 わたし

愛称 エル

・アルムの妹。濃い目の水色のショートヘアで、同年代の子と比べ
ても小柄。

・ちよつとお転婆だが天真爛漫で、家の手伝いを積極的にしようと
したりする良い子。

・人見知りを全くしない上に行動力もある。1人でアンペルの所を
訪ねたことも。

・他人は基本さん付で呼ぶが、ライザのみお姉ちゃんと呼ぶ。理由
は本当にそうなつてほしいから。

・最近「むーん」が口癖になつて來た。

・ムカデは駄目だが虫は平氣。Gも平氣。蛇とかミミズも平氣。本
当にムカデだけが駄目。

ウエイン・レーゼン

年齢 46歳（「アルムとレント」時点）→47歳（「アルムとタオ」

以降)

身長 192cm

好き 家族 農業 酒 子供の成長を見ること
嫌い 雑な仕事 腰の痛み

一人称 私

・アルムの父親。アルムを超える長身とツンツンした黒っぽい藍色の髪が特徴。

・農業の先生というか、師匠みたいな扱いを受けている。一番弟子（ということになつて）いるはライザの父カール。

・本人的にはそのつもりは無いが、農場の事実上のリーダーになつていて、

- ・家事能力は壊滅的。手伝わないことが一番の手伝いなレベル。
- ・腰を少し悪くしている。

ルーテリア・レーゼン

年齢 41歳（「アルムとレント」時点）→42歳（「アルムとタオ」以降）

身長 149cm

好き 家族 料理 甘いもの 恋愛話

嫌い 虫（特にG）ジメジメした空気

一人称 私

・アルムの母親。水色の真っ直ぐな長髪と垂れ目、そして小柄な体格が特徴。

・明るく優しい性格で、いつも笑顔。その上で母性も持ち合わせている。

・ライザがアルムに惚れてるといち早く気づいた人。なんならライザ本人が自覚するより早かつた。

・虫は嫌いだが、怖がるのではなく積極的に追い出そうとする方。数少ない彼女が笑顔じやなくなる場面。

旅立ちよりも前の時期の、ちよつとしたお話

1、遊びの記憶（レンント視点）

「だーるーまーさーんーがーこーろーんーだ！」

ある日、俺は島のチビ達がだるさんが転んで遊んでいるのを見かけた。

（俺達もああやつて遊んでたな、そういうや）

アルムと仲良くなつて半年くらいの時だつたか。大分お互いのことが解つてきたあたりだつた気がする。その時、最初に鬼をやつたのは俺だつた。

『だるさんが…転んだ！』

そういつて振り返つた俺が見たのは…真剣な表情で、半身の状態で右脚の膝を前に向けるように曲げて片足立ち、右手を真つ直ぐこつちに突き出し、左腕を少し曲げながら上に擧げる、そんなポーズをとつていたアルムだつた。今思うと何かの武術の構えみたいだつたな…つていうかあの時片足立ちしてたのに体に一切ブレが無かつたな。何なんだアイツ。

『！』

そしてそれを後ろで見ていたライザが「思いついた！」と言わんばかりの表情をしてた。タオとボオスはただビックリしてたな。

で、もう一度『だるさんが転んだ』して振り返つたんだが…
『…』

『ふんすつ』

さつきと左右逆のポーズをとつたアルムの左で、ライザが腕を組み足を広げ自信満々の表情で立つていた。タオとボオスはもつとビックリしていた。

「…いや既に相性良かつたなアイツら!?」

当時は「何やつてんだコイツら…」なんて思つてたが、何か今思ふと両想いになるの必然だつたんじやねえか？鬼ごつこの時も、2人揃つて木に登つてたりしたしよ。

（他にはなんかあつたつけか？）

ちよつとタオとボオスにも聞いてみるが。

「確か、かくれんぼの時に2人とも樽に隠れてたことあつたよね」

「高鬼の時に、2人とも灯台の上に登ろうとしてたな」

「あー、あつたな」

意外とあいつら、思考回路似てんのか？

「まあ…」

「だが…」

「何だよ？」

「あの2人がこういう事するのつて、決まつてレントが鬼の時だつた気がする」

「確かに、他が鬼の時はこういう事はしなかつたな」

「…」

：俺、ライザは鬼も角アルムにそういう事して良い奴だつて認識されてたのか？それも半年で？…なんか腹立つてきた。次の手合わせはぜつてえ勝つてやる…！

2、ランバーの秘密の特訓（アルム視点）

「ふつ！ふつ！」

七色葡萄の林の辺りを散歩をしていたら、剣が風を切る音と掛け声が聞こえた。気になつて覗いてみたが：

（ランバーか）

こんなところで1人で特訓してたのか。：相手がいる方が効果があるだろうし、ボオスなら付き合いそうなものなんだがな。（…少し見していくか）

ついでだし俺も鍛えておこう。…よし、そこの崖で懸垂でもやるか。蹴りは下半身だけで打つものじやないからな。つと、その前に水

分補給の用意をするか。

「ふう…」

結構長くやつてたな。2時間くらいか？：間に碌な休憩もはさんでいなかつたな。ちょっと不味いんじやないか、それは。「よし、じゃあ帰るか…つてうわあ！？」

「ん、気づかれたか」

まあ、別に見つかったところで何の問題も無いんだが。

「な、な、何で！：い、いつから！？」

「2時間くらい前に偶然見つけたから、触発されてちょっと懸垂を」「懸垂！：崖で！」

自分でも変な行動だとは思うが、思い立つたのだから仕方がない。「とりあえず、特訓をするなら濡れタオルと水分を用意して、時々休憩を挟む方がいいぞ」

「うぐ…」

言われて不味いと気づいたらしい。：理由は解らないが、ちょっと焦つてたんじゃないのか？

「な、何かお前ボオスさんに一目置かれてるみたいだけど！絶対負けないからな！」

そういうて走り去つていった。：アソツに一目置かれていたのか、俺？初耳なんだが。というかそうだとしても俺とお前じや求められている物が違うと思うんだが。

さて、思いがけず時間を潰せたが、まだ帰るには早いな。どうするか：

「…」の木の上を飛び移り続けてみるか

いざというときに逃げる訓練だ。やっておいて損はないだろう。

ちなみに後日、ボオスが俺に一目置いてるらしいという話について本人に聞いてみたら…

「10年前のあの事故で、あの年齢での対応ができる男を一目置かない訳がないだろ」

と言われた。…」もつともで。

3、仲直りの切っ掛け？（エル視点）

「♪♪

何時ものようにお使いして、何時ものようにまけてもらつちやつて、何時ものようにそれをお小遣いにして、普段のお小遣いと合わせて新刊の分がようやく貯まつた！よーし、早速買つてさつそく読むぞー！

つてうきうき気分で歩いてたら、向こうから誰か来た。…あ、ザムエルさんだ。今日はあんまりお酒臭くない。

「ザムエルさん、こんにちはー！」

「う、お、おう」

「いや、まあ、ああ
むーん、あの日以来、ちょっと避けられてる気がする。
「もうレントさんいじめてない？」

「いや、まあ、ああ

「なら良かつた！あ、でも全くお話ししないのも駄目だつて聞いたことあるよ？なんでもいいから話しかけたりしてる？」

「…今更、何話せつてんだ」

「だから、なんでもいいんだよー。今日は早く起きた！とか、そういうこと小っちゃな事でも誰かに話すのって楽しいしね！
但し嬉しいことに限る！だけどね。

「そうかよ。…エル」

「何ー？」

「…ありがとよ」

「どーいたしまして！」

これから、ちょっとずつでも仲直りできると良いな！

「ところでエル、今日レントがザムエルさんに怒鳴つてたぞ」

「え、何で!?」

「家事が出来ないのでやろうとしてやらかしかけたらしい。…レントを手伝おうとしたみたいだが、逆効果になつてしまつたみたいだな」

「…むーん」

仲直りって、難しいね…：

「…因みに内容は「お前それ最悪指が飛ぶところだつたぞ!?!」「だつたな」

「家のお父さんみたいなこと言われてる…」

「…」

「…」

これと言つて取り留めのない、アトリエでの話

1、髪に触れる（ライザ観点）

「ねえレント、ちょっと髪の毛触らせて？」

「何でだよ？」

「いいから、ちょっとだけ」

「…解つたよ」

皆でアトリエに集まつてたある日、あたしはふと気になつたことがあつてちょっとみんなの髪の毛を触らせてもらうことにした。…レントは、うん。

「思つた通りちょっと硬いつていうか、ゴワゴワしてる」

「そりや元々こんな髪質だし、そんなに気を遣つてるわけじやねえしな」

「じゃあ、次はタオ、良い？」

「良いけど、僕もそこまで気にしてるわけじやないから、手触りはあまりよくないと思うよ？」

「それを確かめたいの。…うん、可もなく不可もなくつて感じだわ」

「…一番返答に困るコメントだなあ」

やつぱり、普通はこんなもんなのよね、普通は。

「えつと、私のも触る？」

「うん、触る触る。…わあ、凄くサラサラしてる」

「ありがとう。…なんか、ちょっと恥ずかしいな」

うんうん、やつぱり裕福なところのお嬢様だからすぐ手入れされてるのが解るなあ。あたしも一応気を遣つてるつもりだけど、ここまでもじやないもん。…で。

「…えつと、アルム」

「俺のものか？別にいいが」

「うん。…やつぱり」

「どうした？」

…見た目で、なんとなく解つてたけど。

「…クラウディアのと同じくらい、サラツサラ」

「そうなのか？確かに、最低限気を遣つていたつもりではあるが」「いや、これはちよつと最低限じゃすまないとと思う…」

アルムの場合、髪が荒れそうな行動をよくしてゐるから手入れはむしろ大変な氣がするけど…

「最低限つて…どうやつてるの？」

「髪を洗つた後、早く乾かさないと痛むらしいからな。髪の毛を洗つた後に、炎と風を付与して即水氣を飛ばしてゐる」

「…そんなことできるんだ」

「俺以外にやると、即髪が燃えるだらうがな」

えつと、つまり…

「炎と風で水氣とか汚れが飛んで行くから、髪が痛まないつてこと？」「だらうな。：母さんも髪が綺麗だから、それが遺伝した可能性もあるが」

「あー、それもありそう」

ルーテリアさんもエルちゃんも真つすぐで綺麗な髪だもんね。

「で、どうしたいきなり？」

「あー、えつと。アルムの髪つて妙に綺麗に見えたからちよつと確かめてみたくて、できればコツとか聞いてみたいなつて。ついでに、他の皆の髪もちよつと比べてみようかなつて」

「…クラウディアに聞けばいいんじやないか、そこは」

「それは勿論聞くけど、出来るだけ多くの意見が欲しいつて言うか」「そういうものか」

色々聞いた方が参考になるし、そこからあたしに合つた方法が見つかるかもしれないしね。

「…」

「えつと、アルム？」

アルムがこつちに手を伸ばして…あたしの髪を撫でた。…え、あれ、えつと？

「あの、えつと、アル、ム？」

「…柔らかいな」

「え、あ、そ、そうかな」

「それに…今のままで、十分綺麗だと思うぞ」

「ふえ」

「え、あ、きれつ…!?

「どうした、ライザ」

「…そ、その…流石に、恥ずかしくなってきたから…」

「ん、そうか。悪かつた」

…ダメだ、これ。今日一日は恥ずかしすぎて何もできそうに無いよ。髪の話だって解つても、いきなり綺麗だなんて言われたら、うう…

「…アイツ、俺達が見てるところでなにやつてんだ」

「なんか感覺狂いそうだよね、あの2人を見てると」

「…その、本で読んだことあるんだけど、男性が撫でるように女性の髪に触れるのは、好意を持つている証なんだって」

「今更だな、そりや」

「それで、触られた女性が元々その男性に好意を持つてたら、もつと好きになるんだって」

「うん、まさに実例を今日にしてるね、僕達」

3人が何か話してるみたいだけど、全然頭に入つてこない。…そうだよ今のアレみんな見てたんじやん。うう、アルムのバカあ…

2、睨み合い（レント視点）

「…」
「…」

ある晴れた昼下がり、俺とタオは1つの戦いを見守っていた。相対しているのはライザとクラウディア。お互い本気で睨みあっている。この戦い、敗者である俺達には介入する権利なんて有りはしない。ただ、勝敗が決まるのを待つだけだ。

「…っ！」
「…っ！」

両者一步も譲らない、実力伯仲と言つてもいい状態。このまま膠着状態が続きそうだ。裏返せば、切つ掛け1つでどつちに転んでもおか

しくないということ。

固唾をのんで俺達は見守っていた。勝利の女神は、果たしてどちらに微笑むのか。

「ぐ！」

しかし、例えどちらに軍配が上がるとも、俺達は勝者と敗者を区別せず讚えよう。それが真剣勝負を戦い抜いた二人への――

「「ふはあつ！」」

お、同時に息を吐いたか。引き分けだな。

「はあ…はあ…レント、アンタねえ…」

「どうだ、中々いい語りだつたろ？」

「たかがにらめつこに仰々しいのよ！笑う笑わないより恥ずかしくなつてくるわよあんなの！」

「ズルいよ、レント君…」

「何かアルムの影響受けてない？レント」

「いや、あいつはこういうの普通に見守ると思うぜ？」

影響が無いつつたら嘘になるけどな。

「しかし、結構長えな。そろそろ来てもおかしくないんだが…」

「すまん、遅くなつた。ちょっとランバーの特訓に熱が入りすぎてな」「全員で外に出ていたのか。特訓をしていたわけでは無さそうだが…」

⋮

「その割には、ライザとクラウディアが疲れているな」

お、丁度いいタイミングできたな。

「えーっと、今みんなでにらめつこしてたんだよ」

「…にらめつことは何だ？」

「子供の遊びだな。自分の表情を崩しながら相手と睨み合い、笑わせるか目を逸らさせるかしたら勝ちというルールだ」

「クラウディアが、こういう遊びができる相手が今までいなかつたらやつてみたかつたんだって」

「成程。そういうことなら俺も参加した方が良さそうだな」

「コイツ強いんだよなあ、変顔じや碌に笑わねえし。」

「私は止めておこう。表情を崩すと言われても、どうやればいいのか解らん」

「私も遠慮しておこうか。子供の遊びに混ざれるほど若くは無いからな」

「じじむさいぞ、アンペル」

「わきまえていると言つてくれ」

相変わらず、仲のよろしい事で。

「ところで、今までどういう組み合わせでやつていたんだ？」

「えつと、僕とライザでやつてライザが勝つた」

「で、俺とクラウディアでクラウディアが勝つたな」

「決まり手は？」

「渾身の変顔。多分僕らの前じやないと絶対に出せないレベルだよアレ」

「…普通に負けた。あれはちょっと勝てねえ」

思いつきり頬を膨らましたクラウディアにこつちをじつと見られたら、そりや負けるだろ…アレはなんか無理だ。

ライザの変顔は…まあ、女がしちゃいけない顔とか言われそそう、言われなさそうな、何かギリギリのレベルの奴だつたな。

「なら、俺はライザとクラウディアとやればいいのか」

「えつと、じゃあ私からでいいかな？」

お、まずはクラウディアか。さあ、どつちが勝つ？

「じゃあ行くよ…あっぷっぷ！」

その瞬間、アルムが口と目を思いつきりすぼめた。メチャクチャ酸っぱい顔つて感じの表情だ。

遠くで見てた俺達ですら笑いを抑えきれないくらいの表情。なら、間近で見てるクラウディアは…

「〜〜〜〜〜！」

顔を真っ赤にしてメチャクチャ震えながら堪えてるが…もう長くねえな。

「…ああいう表情もできるんだな、アルムは」

「遊びにも全力で、ということだろうな。にしても、普段との差があま

りにも大きいが

「しかし、これは一種の忍耐の訓練になるかもしれん。いつか取り入れてみるか?」

「誰とやるつもりかはわからんが、付き合わされる側の身にもなるべきだな」

「リラさんの変顔とか死んでも見たくねえ。なんか、あまりにもイメージとかけ離れてるつづうか…」

「…んふつ、も、もう無理…!」

「アルムの勝ち!…いや、アレはちょっと反則じやないかな」

「あと「釣り針が引っ掛けた顔」とか「突風に晒され続けてる顔」とかがあるが」

「態々バリエーション考えてんのかよ」

全力すぎんだろ、にらめっこに。

「さて、次はライザか」

「えつ、あ、あたしともやるの!?」

「そりや、後残つてんのお前だけだしな」

「ライザ、頑張つて!」

「いやその、流石にちょっと自信無いって言うか」

「いやまあそうだろうけどよ、だからって不戦敗はちょっと、なあ?「まあ、それならそれであつさり笑つて終わりで良いんじゃないかな」「えつと、そういうことじゃなくて、その」「じゃあ、どういうことなの?」

「…うー。解つた、やるだけやつてみるわよ」

「それじやあ…あっぷつぶー!」

ライザは普通に頬を膨らませるだけで、アルムは…ほぼ真顔だけど目力すげえな。

「…」

「…やっぱ無理…」

あ、アイツ照れて目逸らしがつた。

「アルムの勝ち!…つてライザ、アルム特に変な顔してなかつたけど」

「…だつて、真正面からアルムにジツと見られてるつてだけでもう凄く恥ずかしくて…」

「お前、アルムが絡むとホント弱くなるな…」

惚れた弱み…つてのとはまた違うか？

「アルム君は恥ずかしくないの？」

「いや、むしろずっと見ていられるが」

「成程、つまりライザは負けるべくして負けたというわけだ」

「そういうものか。：しかし、やはり忍耐というか、羞恥心に耐える訓練として有効そうだな」

：明日から、マジで取り入れてきたりしないだろうな、リラさん。